

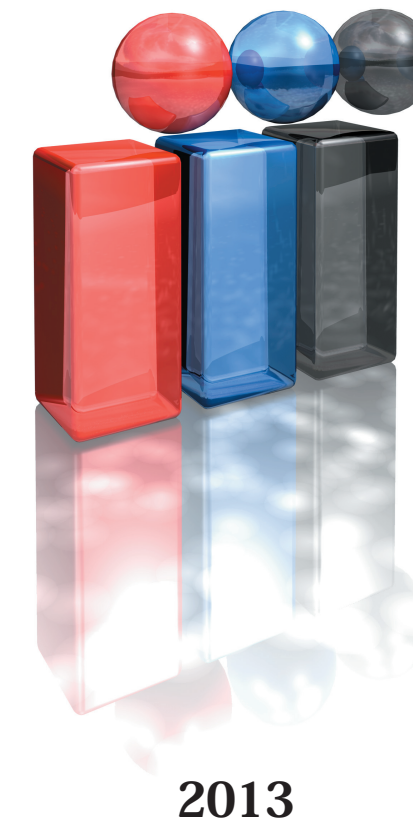
東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

第9号

(通巻41号)

Interfaculty Initiative in Information Studies
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies
The University of Tokyo



東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

二〇一三年度

第九号(通巻四十一号)

東京大学大学院情報学環・学際情報学府



東京大学大学院情報学環・学際情報学府

I. 現状と課題	1
1 組織説明	1
1.1 概要	1
1.2 理念と沿革	3
1.3 行動シナリオ	6
1.4 教職員組織	7
1.4.1 教職員数	7
1.4.2 昇任・採用（教授昇任人事）	8
1.5 財務	10
1.6 運営	14
1.6.1 情報学環教授会	14
1.6.2 学府委員会	14
1.6.2.1 社会情報学コース	15
1.6.2.2 文化・人間情報学コース	15
1.6.2.3 先端表現情報学コース	15
1.6.2.4 総合分析情報学コース	16
1.6.2.5 アジア情報社会コース	16
1.6.3 教務委員会	16
1.6.4 予算委員会	19
1.6.5 将来計画委員会	19
1.6.6 入試・カリキュラム制度検討委員会	19
1.6.7 施設整備委員会	19
1.6.8 福武ホール管理運営委員会	20
1.6.9 情報セキュリティ委員会	21
1.6.10 情報ネットワーク委員会	21
1.6.11 情報倫理審査会	22
1.6.12 業績評価委員会	22
1.6.13 ヒトを対象とした実験研究および調査研究に関する倫理審査委員会	22
1.6.14 企画広報委員会	22
1.6.15 図書・出版委員会	23
1.6.16 国際活動委員会	24
1.6.17 産学連携委員会	24
1.6.18 知的財産室	24
1.6.19 利益相反アドバイザー	24
1.6.20 ハラスメント予防担当者	25
1.6.21 社会情報研究資料センター	25

1.6.20.1	情報学環メディア・コンテンツ研究機構	25
1.6.22	総合防災情報研究センター運営委員会	26
1.6.23	ユビキタス情報社会基盤研究センター	27
1.6.24	現代韓国研究センター	27
1.6.25	駒場カリキュラム連携運営委員会	27
1.6.26	学生・留学生委員会	28
1.6.27	教育部委員会	28
1.7	事務組織	30
2	教育活動	31
2.1	概況	31
2.2	教育カリキュラム	31
2.3	カリキュラム支援体制	32
2.3.1	主指導教員・副指導教員の配置	32
2.3.2	修士・博士 研究計画書の作成	32
2.3.3	修士課程研究構想発表会	33
2.3.4	修士論文中間発表会	33
2.3.5	博士課程コロキウム	33
2.3.6	E-learning 授業 (iii online)	33
2.3.6.1	iii online の目標	33
2.3.6.2	iii online の概要	34
2.4	学際情報学府への進学	36
2.5	修士論文及び博士論文の執筆	37
2.6	学際情報学府からの就職・進学動向	42
2.7	学際情報学府以外の教育活動	38
2.7.1	教育部	43
2.7.2	学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」	44
2.7.3	大学院横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」	45
2.7.4	ベネッセ先端教育技術学講座（寄付講座）	45
2.7.5	「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座	46
2.7.6	「アジア・グローバルイゼーション・スタディズ」若手研究者育成プログラム	47
3	研究活動	49
3.1	概況	49
3.1.1	文理の相互作用と連携	49
3.1.2	流動教員制度	49
3.2	大型研究プロジェクト（1,000万円以上規模）	50
3.3	附属センターの役割	52
3.3.1	社会情報研究資料センター	52
3.3.1.1	情報学環メディア・コンテンツ研究機構	53

3.3.2	総合防災情報研究センター	54
3.3.2.1	災害情報の生産—伝達—受容過程の解明	54
3.3.2.2	首都直下地震災害の全体像の把握	54
3.3.2.3	大学 SCM モデルの開発	54
3.3.2.4	防災制度の設計と運用に関する研究	55
3.3.2.5	災害情報教育の実施とプログラム開発	55
3.3.2.6	東日本大震災への対応	55
3.3.3	ユビキタス情報社会基盤研究センター	55
3.3.4	現代韓国研究センター	55
4	社会との交流	56
4.1	国際的委員会	56
4.2	政府・自治体委員会	58
4.3	学協会活動	60
4.3	他組織役職	65
4.5	セミナー・研究会・公開講座	67
4.6	出版活動	71
4.6.1	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』	72
4.6.2	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』	73
4.6.3	『英文紀要』	73
4.7	定期刊行物・ホームページ	74
4.7.1	定期刊行物	74
4.7.2	ホームページ	74
4.8	国際交流	75
II.	資料	77
1	沿革	77
2	学環の教員（定員）	78
3	学府の学生数	79
4	教育部	81
5	予算	82
6	土地・建物面積	83
7	入試定数と受入数	83
8	年度別入試データ詳細	83
9	修了者数の推移	90
10	学生支援機構（旧育英会）奨学生数	91
11	日本学術振興会特別研究員数	91
12	リサーチアシスタント数	91
13	就職状況	92
14	研究員（客員）等	97

15	学会賞など受賞者リスト	97
16	論文数	98
17	特許出願・公開数	98
18	国際団体役員・委員数	99
19	政府関係委員会委員数	99
20	地方公共団体関係委員会委員数	100
21	ジャーナル編集・会議運営	100
22	定期刊行物一覧	100
23	留学生数の推移	101
24	留学生国籍別一覧	102
Ⅲ. 個人業績編		104
Ⅳ. 外部資金獲得状況		233

I. 現状と課題

1 組織説明

1.1 概要

東京大学大学院情報学環・学際情報学府は、従来の研究科とは異なる形態の大学院組織として、2000年4月に設置された。この大学院組織は、研究組織（教員が所属）である情報学環と教育組織（学生が所属）である学際情報学府という2つの対をなす機構によって構成されている。大学院の組織モデルとして、研究科が研究と教育の統合モデルであるのに対して、学環・学府は分離モデルだといえる。従来の研究科が専門深化と恒常性を基本的な特質とするのに対して、この大学院組織は、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するのに適した形態として考え出された。

その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にある。すなわち、研究組織である「情報学環」は、固有の基幹教員と、学内既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に教員枠及び身分を異動する多数の流動教員によって構成されている。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合に基づいた研究を推進している。教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員と流動教員が行うが、授業科目の担当は、これらの教員以外に他研究科・研究所等に所属する教員にも委嘱する。また、副指導教員制や副専攻制度の積極的な運用を図ることによって、情報関連の広範な学問分野を覆う幅広い学際的教育を目指している。

研究組織である大学院情報学環は、学際情報学圏と社会情報学圏という2つの学圏から構成されている。それぞれの学圏は、次のようにいずれも5つの学域からなっている。

大学院 情報学環

■学際情報学圏

情報生命・思想学域

情報システム・言語学域

情報表現・造形学域

情報環境・認知学域

情報社会・制度学域

■社会情報学圏

ジャーナリズム・メディア学域

情報行動・機能学域

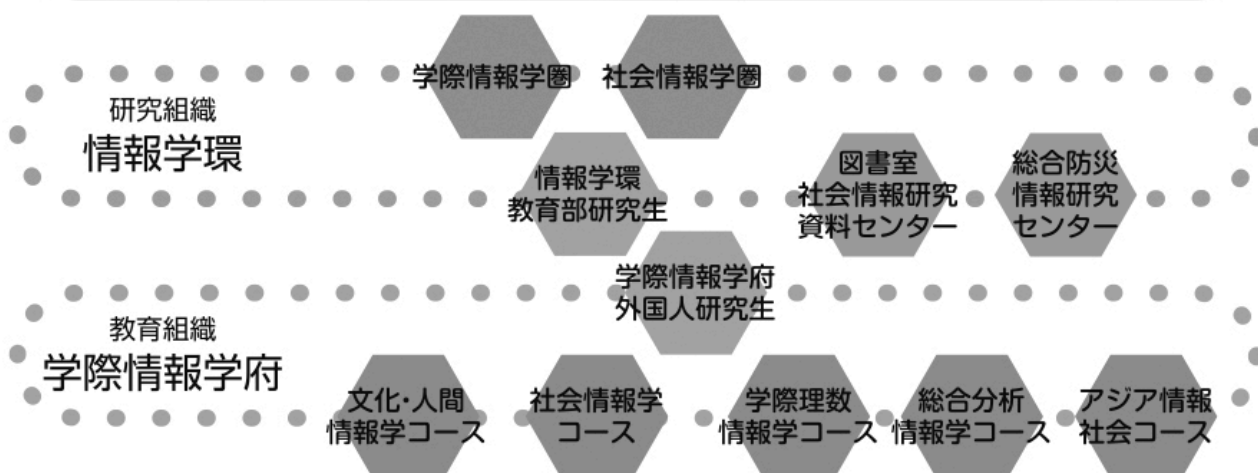
情報法・政策学域

情報経済・産業学域

情報文化・歴史学域

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies & Graduate School of Interdisciplinary Information Studies



教育組織である大学院学際情報学府では、一方では情報現象についての文理を越境する幅広い視野を、他方では社会情報学からコンピュータ科学までの高度な専門的能力を、同時に身につけた人材を持続的に社会に提供していくために、それぞれの自律性と相互の連携をあわせもったカリキュラムを編成し、それを運営する以下のような5つのコースを設置している。このコース制は、教育効果を上げるために学生をコースに振り分けるものであって、教員がコースに帰属するものではない。教員は学環に帰属している。

また、学際情報学府は学際情報学の1専攻という形式をとってはいるが、この「専攻」は従来の研究科における専攻とは異なるものであり、そこに教員が帰属しているわけではない。

社会情報学コース

このコースでは、メディア、コミュニケーション、社会情報に関わる社会現象・文化現象を分析するための学識を養い、専攻分野における研究および応用の能力を培うことを目的とし、社会情報学の発展に貢献できる研究者を養成するとともに、社会人を受け入れて研究手法を身につけさせ、知識の高度化をはかる教育を行っている。

文化・人間情報学コース

このコースでは、情報学の視座から文化・人間科学の諸領域を体系的に再編し、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの21世紀的な諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいくことのできる深い学識と精緻な方法的能力をそなえた研究者や実践者を養成する教育を行っている。

先端表現情報学コース

このコースでは、21 世紀の社会・産業・個人の情報環境の基盤となる専門的な理数情報学の知を深めるとともに、あわせて他分野と協調して学際的に情報学のフロンティアを切り拓いていくための幅広い学識を身につけた研究者及び表現者を養成している。

総合分析情報学コース

このコースでは、センサーから大量のデジタル情報を取得し、それを必要な場所や機器へ通信し、保存・解析したうえで、有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している

アジア情報社会コース

このコースでは、情報通信技術の影響をますます受けつつある現代アジアの諸社会や国際関係に対する分析力や洞察力を養成する為の大学院教育を行っている。講義や指導はすべて英語で行われ、学年は 10 月から始まる。

これらの 5 つのコースそれぞれで、一般の入試と並び、実践的な経験や目的を重視し、社会人を主要な対象とした特別選抜を実施している。

情報学環教育部

また、学部生を対象とした教育カリキュラムとして、情報学環教育部がある。教育部では、大学 2 年次以上の在学者及び大学卒業業者の中から、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズムの諸分野で活動することを志す者、あるいはマス・メディア、コミュニケーション及び社会情報現象、さらには学際的な情報学の学問的研究に関心を持っている者を毎年 50 名程度研究生として受け入れ、一定のカリキュラムのもとに、修業年限 2 年で基礎的な専門教育を実施し、修了に必要な単位を修得した者には修了証書を授与している。

1.2 理念と沿革

* 情報学環・学際情報学府設立の経緯

情報学環・学際情報学府設立の背景には、次のような認識があった。近年にみられる情報技術の急速な発展と利用の拡大によって、「情報」が現代社会において果たす意味は、決定的に重要なものとなってきた。技術的体系だけでなく、人間の行動や意識、社会のさまざまなシステム、文化や芸術、産業や政治・国際関係など、人間社会のあらゆる側面が、「情報」の様式変化のインパクトによって、根本的な変革を促されつつある。21 世紀には、この情報様式のあり方が、地球上の生命や人間、社会の動向を大きく規定する基盤となることは確実だ。こうした状況を背景に、「情報」に関する、より総合的でより高度な教育研究の社会的意義が高まり、それに応えうるような教育研究体制の整備が、喫緊に求められていた。

情報にかかわる教育研究は、今日、きわめて多様な学問領域で行われており、しかも、各個別領

域に固有な対象や方法とも深く結びつきながら発展してきている。こうした実態を有効に生かしながら、相互間の有機的連携を促し、学際的な教育研究をすすめることが、情報学の総合的な発展のためには不可欠だと考えられた。また、情報学は、急速に発展し、変容しつつある学問分野であることから、一方では研究面で、先端的な学融合に就中に取り組みうる緊密な共同体制を設ける必要があると同時に、他方では教育面で、カリキュラム編成や研究指導體制の幅広さと研究内容の進展や時代の要請の変化に即応できる組織的柔軟性を確保する必要があった。こうした特性をもっている情報学の教育研究上の目的を効率的かつ実効的に達成するために、平成12年4月から、学校教育法第66条に定める「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として、東京大学大学院に、「情報学環」及び「学際情報学府」が設置されたのである。

「情報学環」と「学際情報学府」が両者一体となって構成されるこの大学院組織は、専門深化と恒常性を基本的な特質とする従来の研究科とは違って、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するにふさわしい形態をとった。

前述の通り、その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にあり、その組織構造は次のように作られた。研究組織である「情報学環」は、基幹教員と流動教員によって構成された。基幹教員とは情報学環が固有のもつ教育枠で採用される教員であり、流動教員とは既存の研究科・研究所等から3年ないし7年の期間をもって情報学環に定員及び人が移され、それによって情報学環教員となる教員のことである。そこでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合が目指された。

教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員及び教育にも従事する流動教員が行なう。学際情報学府における授業科目の担当は、これらの教員が行うほか、他研究科・研究所等に所属する教員にも兼担当教員として委嘱する。

* 社会情報研究所の合流、新組織設立に至る経緯

このようにして設立された情報学環・学際情報学府は、2004年4月1日、東京大学社会情報研究所と組織統合し、新たな一歩を踏み出した。社会情報研究所は国立大学附置研究所であり、その歴史をたどれば約75年間にわたる伝統をもつ研究機関であった。

1929年10月1日、東京帝国大学文学部に新聞に関する学術研究施設として新聞研究室が設置された。新聞研究室は、帝国大学の法学部、文学部、経済学部からそれぞれ1名の指導教授が横断的に参加し、1名の指導補助、および3名の研究員が置かれるという、規模は小さいが、今日の情報学環のさきがけをなすような仕方で東京帝国大学を横断的につなぐ学際的な研究組織であった。またその運営は、渋沢栄一や阪谷芳郎、本山彦一、徳富蘇峰、杉村廣太郎といった、当時の財界、新聞界の名士たちが協力して募られた寄附金によってまかなわれ、今日の産学連携のさきがけをなす形態をとっていた。設立時の新聞研究室の指導教授としては、法学部から南原繁教授が、文学部から戸田貞三教授が、経済学部から河合栄治郎教授がというように、戦前期日本の法学、社会学、

経済学をまさしく代表する教授 3 名が参画し、指導補助として実質的な研究組織の中核を担った小野秀雄（初代新聞研究所長）を支えていた。

このような前史を経て、戦後の 1949 年に新聞研究所が正式に東京大学附置研究所として発足した。その根拠をなす国立学校設置法（49 年 5 月 31 日公布）には、「新聞及び時事についての出版、放送又は映画に関する研究、並びにこれらの事業に従事し、又は従事しようとする者の指導及び養成」と規定されていた。すなわち、新聞研究所は設立の当初から、狭義の新聞に限らず、雑誌、放送、映画などを含むマス・メディア全般を研究対象とする学際的な研究組織として出発していたわけである。また、「新聞」という言葉そのものも、今日のように狭義の新聞紙だけを指していたわけではなく、ニュースや報道媒体全般をも含みこんだ概念であるという理解がその当時にはあった。

やがて、新聞研究所は 20 世紀後半の放送をはじめとするマス・コミュニケーションの発展を受けて組織の拡充と研究部門の再編を重ねていった。1957 年度からは、基礎部門：マス・コミュニケーション理論、歴史部門：マス・コミュニケーション史、特殊部門 1：コミュニケーション過程、特殊部門 2：マス・コミュニケーション・メディア、特殊部門 3：世論及び宣伝という 5 研究部門の構成となり、63 年度からはこれに放送部門が、さらに 74 年度からは情報社会部門が、80 年度からは社会情報システム部門が加わった。このような部門構成から明らかなように、東京大学新聞研究所は、マス・コミュニケーション研究を基本に据えながら、トータルな社会的コミュニケーション研究をも視野に収めつつ、日本の国立大学では唯一の現代社会の最も中核的な研究課題たる情報の社会的側面に関する学際的、総合的な研究として発展し、高い評価を得た。

そして、このような実績を基盤にして、1992 年 4 月 1 日、「社会情報の総合的研究」を目指して新聞研究所から社会情報研究所への改組が行われた。改組後の社会情報研究所は、情報メディア、情報行動、情報・社会という 3 大部門を置き、旧新聞資料センターを改称した情報メディア研究資料センターを附置するという体制をとって、1992 年から 95 年まで続いた文部省科学研究費重点領域研究「情報化社会と人間」をはじめ、情報化社会に対する学際的な取り組みを本格的かつ先端的に進めた。1996 年には外部評価を実施し、高い評価を得た。そのときの産業界パネルの委員は小池唯夫（毎日新聞社長）、川口幹夫（NHK 会長）、関本忠夫（日本電気会長）、大塚信一（岩波書店社長）、福川伸次（電通総研所長）の方々であった。

高度情報社会の深まりのなかで、東京大学における情報をめぐる教育研究体制の再編が議論になるたびに社会情報研究所は、文系の研究所として、その流れに身を置いてきた。そして、情報学環・学際情報学府の設立構想の際には積極的に関わり、人的リソースの提供において文系部局としては最大の貢献を果たした。社会情報研究所は情報学環・学際情報学府の設立後も密接な関係をもち、学環・学府を支援してきた。そして、国立大学法人化を前にした、国立大学附置研究所の見直し方針のなかで、社会情報研究所は情報学環・学際情報学府との合併を選択し、大学附置研究所から大学院組織へと全面的に移行したのである。それは、文系のなかでの学際的研究から、文理相互浸透のなかでの学際的教育研究へのシフトであり、情報現象を研究対象として組織としてはある意味で必然的な流れであり、新たなスプリングボードであったといえよう。

1.3 行動シナリオ

部局別行動シナリオ「情報学環・学際情報学府」

濱田純一総長のもとで策定された「行動シナリオ FOREST 2015」の部局別行動シナリオ(改訂版)において、情報学環・学際情報学府は各年度に見直しを行い、2013年度は次のような行動シナリオを掲げている。

設立14年目を迎えた大学院情報学環・学際情報学府は、これまでの蓄積を基本的には継承しつつ、次のような課題に積極的に取り組みます。

1 学術研究の深化と卓越性の追求

文理を越えた学際情報学研究の大学院として、世界最先端の総合的な情報学研究を推進し、世界の先端的研究機関と国際的な連携体制を構築する（「ユビキタス情報社会基盤研究拠点」、「メディア・コンテンツ国際研究拠点」、「アジア情報社会国際研究拠点」の推進）。

2 教育の新たな取り組み

1) プログラムⅠ 情報学を基礎にして、情報理工学系研究科をはじめ他研究科と協力し、複雑化する現代社会の様々な課題に取り組む次世代型の国際的リーダーを育成する5年一貫制博士プログラムを実施する。国際的にトップレベルの人材を集められるよう、カリキュラム、教育組織の見直しを行う。同時に産学官連携の強化に取り組み、博士号取得者の活躍の場を拓げるべく努力する。

2) プログラムⅡ 学際情報学を担うとともに、社会でリーダーとして活躍する人材を育成するために、学部前期から博士後期まで学際情報学授業科目群を展開する（「教養学部後期課程学際科学科」への参画、「メディア・コンテンツ」「デジタル・ヒューマニティーズ」「科学技術イノベーション政策の科学」など学部・大学院横断プログラムの充実）。

3) 国際化の推進 海外派遣プログラム・国際インターンシップを推進する。国際連携校との間に授業交換・単位互換および博士共同指導制度を検討する。英語での授業を充実させ外国人教員を積極的に登用する（「国際教育研究拠点ネットワーク」、「メディア・コンテンツ国際研究拠点」の設置、「現代韓国研究センター」の展開）。

4) 院生・ポスドク支援 RA・TA制度を含め、院生・ポスドク支援のための「博士学位取得研究支援プログラム」といった支援枠組みの充実をはかる。

3 社会との連携

1) 組織：大学の社会連携コミュニケーションのための実践的研究機関を設立し「知の共創」イニシアティブを推進する。情報社会基盤の研究開発の産官学の連携と学内ベンチャーの育成のための教育研究プログラムを推進する（「知の共創センター」の設立、「情報社会基盤教育研究・国際戦略プログラム」の設置）。

2) 人：社会連携・産学連携のために外部人材を登用する「学環フェロー」、「学環フォーラム」の制度を発足させる。日常的な交流の場として、学術カフェ「U-Talk」等の社会活動を拡充する。

3) 社会貢献：震災からの復興・再生など、社会の重要課題の解決に学際情報学の立場から積極的に貢献する（「総合防災情報研究センター(CIDIR)」等の社会貢献活動の強化）

4 ガバナンス・コンプライアンスの向上

情報学環の「流動システム」をさらに発展させて組織の流動性を確保し人材の絶えざる活性化を実現する。情報倫理・研究倫理教育の継続的实施により、その定着・浸透をはかる。教員の自己統治能力の向上、透明性とコンプライアンス推進、若手教員の教育能力改善のための「賢いFDプログラム」を導入する。

5 研究基盤・教育施設の整備

新たな教育研究棟の建設、研究・教育施設の整備に全力をあげる。情報学環の先進的な情報基盤技術のノウハウを活かして、21世紀の持続可能社会のモデルとなる「スマート・キャンパス」の実証実験を実現する（「ダイワ・ユビキタス学術研究館」の建設・整備）。社会情報資料研究センターにおけるメディア教育研究資料の保存と利活用推進のために「国際メディア・アーカイブ教育研究コア構想」の実現へ取り組む。

1.4 教職員組織

1.4.1 教職員数

給与の財源が運営費交付金となっている教職員（常勤教職員）の採用枠は75人となっている。内訳は図1-4-1-1のとおり、教授等の常勤教員61人、常勤職員14人となっている。このほか、大学院情報学環は、外部資金に基づく特任教員や研究補助等の非常勤職員から構成される。

また、大学院情報学環の組織の一つとなっている基幹教員と流動教員の内訳について見ると、図1-4-1-2のとおりとなっている。基幹教員の定員数は36名、流動教員の定員数は25名とおおむね同数であり、両方の教員で情報学環の研究教育組織が等しく支えられていることがわかる。

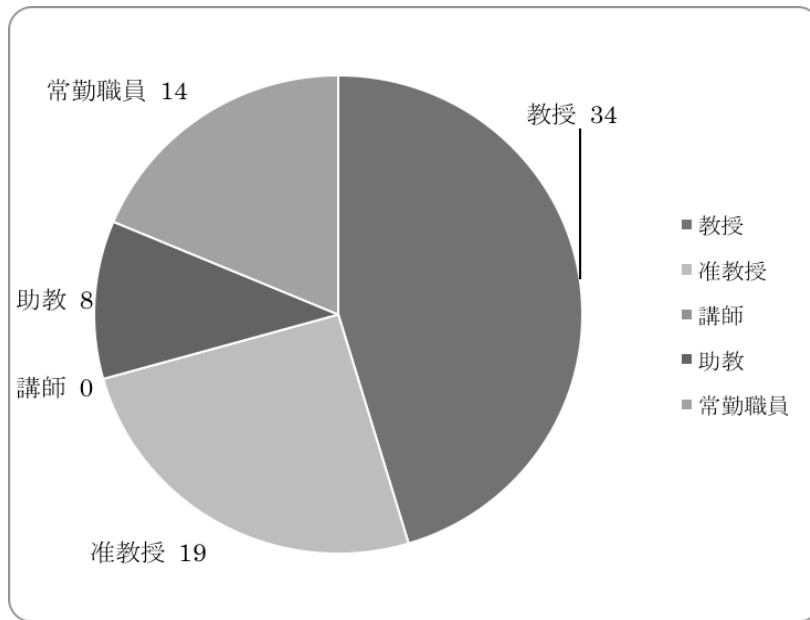


図 1-4-1-1 教職員採用枠（全 75 人）の内訳
（平成 25(2013)年 4 月 1 日現在）

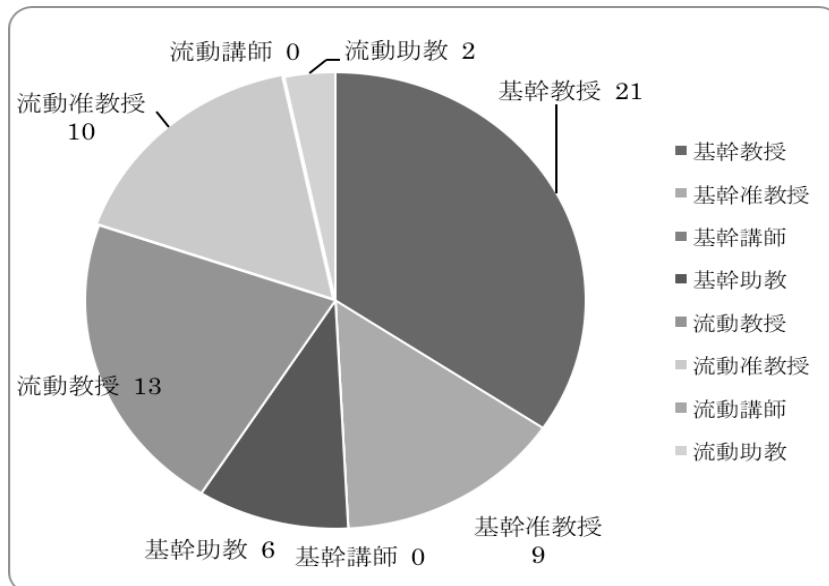


図 1-4-1-2 教職員採用枠（全 61 人）の内訳
（平成 25(2013)年 4 月 1 日現在）

1.4.2 昇任・採用

山口いつ子教授昇進報告(2012年7月4日)

人事選考委員会

田中 秀幸 教授 (委員長)

須藤 修 教授

石崎 雅人 教授

林 香里 教授

長谷部 恭男 教授(法学政治学研究科)

人事選考委員会の構成に当たっては、当該分野に関して高度な専門的知見を有する長谷部教授に選考委員に就任していただき、審査に慎重を期した。

人事選考委員会は、本人から提出された主要業績3点、研究業績リスト等に基づき、審査を行った。

山口いつ子氏は、平成3年3月上智大学文学部新聞学科卒業、同年4月東京大学大学院社会学研究科社会学B(社会情報学)修士課程入学、平成5年3月修了、同年4月同大学院博士課程進学、平成6年6月同課程を中途退学し、同月東京大学社会情報研究所助手に採用され、平成10年4月同助教授に昇任、平成12年4月東京大学大学院情報学環に異動し、現在に至る。平成21年3月に東京大学・博士号(社会情報学)を取得している。

山口いつ子氏の研究内容について、提出された主要業績に沿って説明する。

山口いつ子(2010),『情報法の構造:情報の自由・規制・保護』では、情報に関連する諸制度のあり方を将来にわたって方向付けていく基本的な原理を明確にする必要があるとの問題意識の下、情報の自由、規制及び保護のあり方が問われるいくつかの基本的場面に着目し考察を加えている。情報をめぐる法制度、技術、サービスの急速な発展と変化について比較法的視野を踏まえて詳細かつ広範に記述するととどまらず、そもそもなぜ情報の流通が自由であるべきか、それは個人の権利、公共の利益のいずれの視点から説明されるべきか、また、インターネットの発展に顕著に示される社会環境の変化は、そうした自由の保障の必要性及び規制の正当化の論理にいかなる影響をもたらしているか等のさまざまな原理的問題に着目し、複数の基本的な価値原理の交錯とその相互作用が情報法制の設計及び運用をいかに方向付けるかという、情報法の「構造」を読み解こうとする点に、本書の特徴があり、高く評価される。

本書は、考察の本体となる第1部から第4部までの全15章及び結語から構成されている。以下、各部に即して説明する。第1部では、表現の自由を憲法で保障することの原理論の展開を検討し、2つの意味の「思想の自由市場」に着目することによって、基本的な思考枠組みの確立を明らかにしている。第2部では、第1部で明らかにした自由の基本枠組みの限界が問われる現代的課題を取り上げて考察を進めている。特に、マス・メディアの部分規制論を手がかりとして、放送法制の構を基本的価値原理と最新の技術・制度の展開との間を往還しつつ全体として包括的・整合的に説明する著者の立場は、今後の世界各国の放送通信法制の方向性に対して明確な指針を与えるものと高く評価される。第3部では、アメリカでの憲法上の表現の自由をめぐる議論に基づきながら、表現活動や情報流通の新たなメディアとしてのコンピュータ・ネットワークに焦点を当てて4つの具体的な場面を含めて考察を行い、

情報通信技術の発達、従来の法が抱えていたジレンマや対抗利益間の緊張をさらに深刻化させ、法そのものの基底にあるはずの価値原理ないし国家と市場の役割に関する政治哲学に立ち返る検討が求められることを明らかにしている。第4部では、アメリカのみならずイギリスの議論も取り上げながら、知的財産に着目をして、情報を財産として保護することの意義、根拠及びそのための理論枠組みについて考察を加えることで、知的財産権と自由な情報流通との調整のあり方について明らかにしている。著作権及び特許権を中心とする知的財産法制と情報の自由な流通との対立・緊張に関わる諸問題を本格的に論じた、国際的にみても稀少な内容と高く評価できる。

本書は、専門誌・学術誌等に発表した論文9本に基づきまとめられたものであり、上述のとおり独自の知見を数多く提示するだけでなく、全体として情報法の「構造」を明らかにするものであり、関係領域で多大な学問的な貢献を果たすものと高く評価できる。また、本書は第三者からも高く評価され、(財)電気通信普及財団第26回テレコム社会科学賞(2010年度)及び第3回内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞(2011年度)を受賞している。

Yamaguchi, Itsuko (2002), “Beyond De Facto Freedom: Digital Transformation of Free Speech Theory in Japan,” *Stanford Journal of International Law*, vol.38, no.1, pp.109-122 では、インターネットの浸透が日本の表現の自由に及ぼす影響について考察を行っている。戦後日本におかれた特殊事情の影響も加味しつつ、サイバースペース上の表現の自由は、デジュールではなくデファクトとして拡大していることを描きだし、インターネットが日本における表現の自由の実践的な側面のみならず、その原理をも変化させつつあることを明らかにしている。日本が直面する問題について国際的な理解を深めることに多大な貢献をしている。

Yamaguchi, Itsuko(2006), “Mass Media and Privacy in Japan: Current Issues, Recent Trends, and Future Challenges toward the “Ubiquitous Network Society,” *Journal of Korea Information Law*, vol.10, no.1, pp.171-181 では、日本におけるプライバシーの問題について考察を行っている。歴史的背景から説き起こし、マス・メディアにおいて生じている問題やユビキタス・ネットワーク社会における課題などを手堅く論じて、国際的理解を深める上で大きく貢献するものである。

以上のとおり、提出された主要業績の内容が高く評価されるだけでなく、表現の自由や放送法制からサイバースペース上の法的な問題や知的財産法制に至るまでの扱う領域の広さや、情報通信技術の最新動向を咀嚼した上で制度のあり方を考察している点などを踏まえると、学際的な教育研究を行う大学院情報学環において多大な貢献をすることが大いに期待される。

教育においても、学際情報学府等において献身的に教育に従事し、多数の卒業生を輩出してきた実績がある。また、東京大学本部の委員会委員を歴任するほか、法務担当学環長補佐などを通じた、情報学環への多大な組織的貢献等を総合的に勘案すると、人事選考委員会は、情報学環基幹教授として、山口いつ子氏を十二分に適任であると判断した。

1.5 財務

平成24年度予算および決算に基づき、情報学環の財務構造を説明する。対象は、部局の研究教育に直接関係する運営費交付金と外部資金（科学研究費補助金等）とし、常勤教職員の人件費及び部局の管

理が直接及ばない授業料及び入学検定料については特に言及しない。

具体的な数字を見る前に、情報学環財務の特徴である流動教員に関する資金の取り扱いについて説明しておく。

運営費交付金の配賦にあたっては、流動教員分も情報学環の予算として計上されるが、執行は原則として流動元の部局で行うこととなっている（支出委任）。

流動教員に係る外部資金についても、受け入れは情報学環で行っているが、その全額を流動元部局に振り替えてから執行している。これは直接経費についても間接経費についても原則として同じである。

すなわち、運営費交付金の配賦額、あるいは外部資金の受入額のうち、ある程度の割合については流動元部局において執行されている。この仕組みを前提とした上で、以下では具体的な数字を見ていくこととする。

平成 24 年度の収入総額は 669 百万円だった。これは前年度比で約 75% であり、大幅に減ったというべき数字だ。主な要因は受託研究費の減で、全体でも約 30% 減、基幹教員分だけを見れば半減以下となっている。内訳は運営費交付金¹が約 35% に対して外部資金が約 65% となっており、当然ながら相対的には運営費交付金の割合が上がった。

運営費交付金の使途内訳を見ると²表 1-5-1 のとおりとなる。前述した流動教員分の研究費 77,780 千円が全体の 3 割強を占めている。したがって、運営費交付金のうち情報学環の裁量が及ぶのは残りおよそ 7 割の 168,124 千円となる。

その 1 億 7 千万円弱のうち、6 割強のおよそ 103,000 千円が、消耗品等一般経費や非常勤職員人件費といった事務管理経費で、残りの 4 割弱（約 65,000 千円）が直接の教育研究活動に充てられることになった。昨年度の年報でも触れたとおり、平成 24 年度には教員個人研究費および各委員会経費の一律 25%削減を行った一方、事務管理経費については削減の余地が小さいため、相対的に教育研究活動に充てる経費は減っている。

表 1-5-1 平成 24 年度実績(運営費交付金)

経費区分	執行額 (単位:千円)	備考
光熱水料	10,430	*執行実績(22,688 千円)のうち 12,258 千円は間接経費より支出
通信運搬費	1,810	
建物保守料	2,267	

¹ 本項では、運営費交付金のうち特別経費（大学防災情報システム：12,493 千円および知識コンテンツ：20,400 千円）については外数として扱っており、収入総額等には含んでいない。

² 本段落では、部局長裁量経費（約 14 百万円）については、外数として扱い、割合の算出の際には分母及び分子のいずれにも含まれない。

業務委託料	9,512	
非常勤職員人件費(事務)	18,985	
非常勤職員人件費(教育研究)	20,916	
旅費交通費	971	
事務／教育研究一般用経費	28,465	
図書館全学共通経費	9,880	
教員研究費	22,107	
各種委員会等経費	42,781	*内訳は別表(表 1-5-2)に掲載
小計	168,124	
流動教員分	77,780	
総計	245,904	
部局長裁量経費	7,489	

表 1-5-2 平成 24 年度各種委員会等経費執行実績内訳

委員会名	執行額 (単位:千円)	備考
施設整備委員会	1,560	
情報ネットワーク委員会	1,027	
情報セキュリティ委員会		
業績評価委員会	799	
企画広報委員会	4,238	
図書・出版委員会	7,162	
国際活動委員会	1,134	
社会情報研究資料センター運営委員会	9,502	

教務委員会	4,187	
学生・留学生委員会	1,577	
入試実施委員会	2,437	
教育部委員会	1,691	
総合防災情報センター	3,741	
福武ホール管理運営委員会	3,726	
合計	42,781	

外部資金の収入内訳は表 1-5-3 のとおりである。ここに計上しているのは外部資金関係間接経費（情報学環分）を除いて直接教育研究に充当される資金である。外部資金のうち大学本部及び流動元部局の間接経費となる金額については計上していない。

表 1-5-3 平成 24 年度外部資金の収入内訳 （単位：千円）

区分	総額	うち流動元 執行分	学環収入分
寄付講座			0
寄附金	62,949	9,540	53,409
科学研究費補助金	119,644	50,348	69,296
厚生労働科学研究費補助金	12,200	12,200	0
その他補助金	43,330	3,000	40,330
受託研究費	301,321	143,893	157,428
共同研究費	123,808	37,522	86,286
間接経費(部局分)	22,998		22,998
外部資金合計	686,250	256,503	429,747

大学運営費交付金は毎年度削減されており、情報学環への配賦額においても例外ではない。表 1-5-1

にあるように、光熱水料にも外部資金の間接経費が充てられているのが現状である。

かような状況においては、外部資金獲得の重要性は高まりこそすれ下がることはない。しかしながら、現在の社会情勢を鑑みるに、企業等がこれからも現在と同等の水準の研究資金を大学に投入し続けると考えることは難しい。事実平成 24 年度の外部資金収入は前年度から大幅に減った。昨年度の年報で指摘した「外部資金への依存度が高まっている一方で、それをあてにできない現状」はますます強まっていると言える。

この厳しい財務状況のもと、平成 25 年度においては教員個人研究費および各委員会経費のさらなる削減（一律 20%）が決定された。平成 26 年度からは施設修繕準備金制度も開始されることが決定しており、運営費交付金の削減も続く以上、さらなる経費削減が必要となることが見込まれる。

1.6 運営

1.6.1 情報学環教授会

大学院情報学環教授会が研究組織としての情報学環の意思決定機関である。教員が帰属するのは情報学環であり、情報学環教授会は基幹教員と流動教員によって構成され、両者の間に権利と義務において相違はない。教授会は月に 1 度開催され、重要事項を審議し決定する。人事に関しては人事教授会が開催される。

部局長たる情報学環長は教授会における選挙によって選任され、総長によって任命される。被選挙権は教授にあり、選挙権は講師以上にあるが、基幹教員と流動教員は同等の権利を持つ。学環長の任期は旧情報学環と旧社会情報研究所の統合後の最初の学環長は 2 年、その後の、つまり 2006 年 4 月からの学環長は 3 年（再任不可）となっていた。2012 年 4 月からの学環長に関しては、学環長の任期は、3 年とし、再任されることができるよう（ただし、引き続き 5 年を超えて在任することはできない）となった。学環長が副学環長を指名する。学環長が主宰する総務委員会が、教授会と教授会の間で諸案件や方針について協議し、教授会にかけるとの準備をする。また、総務委員会が決定し、教授会に報告すると定められた事項もある。総務委員会は学環長、副学環長、両学圏長、重要委員会の委員長、5 コース長、学環長補佐などによって構成され、ほぼ月に 1 度開催される。これが実質的な執行部である。

1.6.2 学府委員会

教育組織としての大学院学際情報学府の決定機関は、学府委員会である。そこで教務関係、入試関係、学生の身分の異動などの重要事項が審議され決定される。学府委員会の構成メンバーは学府の教育に関わる教員であり、情報学環の教員のほか兼担教員がこれに加わる。学府のもとに学際情報学専攻の専攻長が置かれており、学環長が指名する。専攻長は教務委員会と入試実施委員会を組織する。

学府は社会情報学コース、文化・人間情報学コース、先端表現情報学コース、総合分析情報学コース、アジア情報社会コースに分かれて入試を行い、合格した学生はそれぞれのコースの所属となるが、それぞれのコースの運営に責任を持つ、コース会議および運営委員会が置かれている。各コース長が責任者を務め、適宜開催される。

1.6.2.1 社会情報学コース

社会情報学コース運営委員会は、学生がより深く社会情報学を学習し、質の高い論文を執筆できる環境を整備することを目的とする。具体的には、教務委員会、入試実施委員会、他のコースと協力をしながら、主に以下の(1)~(12)の業務を担当した。2012年度は、特に、(a)修士・博士課程の適切な人材の選抜方法についての継続審議、(b)博士論文の指導プロセスならびに審査の更なる充実、(c)社会情報学コースに所属する大学院生の研究生活を支援するための様々な対応の検討、等に取り組んだ。また社会情報学コース志望および所属の学生たちのためによりよき教育指導を提供できるよう、教育環境の整備に取り組んだ。

(1)ガイダンス、研究構想発表会、社会情報学コース新入生歓迎会(4月)／(2)外国人研究生審査(5・11月)／(3)入試説明会(6月)／(4)修士中間発表会(7月)／(5)修士入学試験(8月)／(6)博士コロキウム(11月)／(7)次年度の開講科目、非常勤講師、RA・TA、共通入門科目(学際情報学概論)の計画・決定(1月)／(8)修士論文審査(2月)／(9)博士入学試験(2月)／(10)優秀学生論文の決定(3月)／(11)博士論文に関する審査委員会、審査結果の審議(随時)／(12)学生の休学、退学、復学の審議(随時)

1.6.2.2 文化・人間情報学コース

文化・人間情報学コースは、社会科学系の社会情報学コースと自然科学系の先端表現情報学コース、総合分析情報学コースとをつなぐ中間の位置にあり、文理の融合を進めながら、新しい学際的な情報学の創造に正面から取り組んでいる。このコースを担当している教員には、基礎情報学、進化学、生態心理学、科学技術コミュニケーション、知覚情報論、記号学、映像学、カルチュラル・スタディーズ、歴史情報学、アーカイブ論、メディア・リテラシー、メディア表現、教授・学習設計、フェミニズム、科学思想史、人的資源管理論などの諸領域の専門家が揃い、新しい融合的な知の地平を拓きながら授業や学生の指導、いくつかの教育上のプロジェクトの実施に当たっている。このコースの教育は、①生命・身体・環境、②文化・表象・映像、③メディア表現・学習・リテラシー、④アーカイブ・歴史情報という、理論的なものから実践的なものまでの4つの大きな柱を軸にしつつ、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの幅広い21世紀的諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいる。教員の専門分野、また学生の研究テーマも多岐に渡るため、基礎的な研究方法や学術リテラシーを涵養するために、コースの選択必修科目である文化・人間情報学基礎(4単位)と文化・人間情報学研究法(2単位)にはさまざまな工夫を凝らしており、上記の4つの柱に応じた基礎力増強のトレーニングとフィールドワーク型のグループ実習、量的・質的研究法の訓練、社会情報学コースとの合同科目などが用意されている。

1.6.2.3 先端表現情報学コース

先端表現情報学コースは、教員26名(学環基幹2名、流動9名、兼任・課程担当15名)が担当しており、毎年修士(定員19名)と博士(定員8名)の学生を受け入れて教育している。

コースは、先端表現情報学コース運営委員会(コース会議)のもとに、コース長、教務担当、入試担

当がおかれ、他のコースと協力しながら運営されている。

このコースの特徴は、学環の基幹教員のみならず、関連部局（情報理工学系研究科、工学系研究科、総合文化研究科、生産技術研究所、地震研究所、情報基盤センターなど）からの多くの流動教員、兼任教員、さらには併任・客員教員の協力によって運営されていることである。これによって、多様な背景と目的を持つ学生の教育が可能になっている。一方で関係教員の負担が課題となっている。なお、12年度から、コース運営に関しては、情報理工学系研究科の兼任教員から学府委員を選出し、教務委員として教務委員会へ参画してもらうようになった。

また、多様な背景をもつ学生をより受け入れやすくするための、入試内容の改善にも取り組んできた。この2011年に大きく入試を変更し、ある程度の形にたどりついている。また、博士課程の入試についても、これまで冬のみであった試験時期を、夏と冬の2回に増やすなどの取り組みも進めた。

今後の課題としては、(1)幅広い部局からの教員の協力により成り立っているコース運営方法の改善、(2)学際性を維持しながら、専門を深めることのできるさらなる教育カリキュラムの検討、などが挙げられよう。

1.6.2.4 総合分析情報学コース

総合分析情報学コースは、平成18年4月に設立されたコースである。本コースでは、主にコンピュータサイエンスやコンピュータネットワークの基礎知識を基に、IoT (Internet of things) や M2M (Machine-to-Machine) 技術を活用して大量のセンサー情報の取得、観測衛星からマクロなデジタル情報の取得、新世代型のコンピュータネットワークを利用した必要な場所や機器への通信、ビッグデータ技術による大量データの保存・解析、それらの解析結果を人間に伝えるための高度な Human-Computer Interface、更に実社会においてそれらのデータを有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している。

分析情報学が有効に適用できる分野は多岐にわたり、医学、薬学、農学、水産学、環境学、資源学、社会学、考古学といった学問分野をはじめ、災害支援や遭難救助、社会安全保障、国土や社会基盤の管理保全といった国レベルの施策、更には情報セキュリティポリシーの策定やインターネット等のサイバー空間の管理といった分野へも及ぶ。こうした現実社会に深く関わる技術課題とともにそれを支える社会制度までも興味を持ち、膨大な情報を活用して確固たる決断を下すことが可能な人材並びに、分析情報学及び計算機科学の研究者を育成することを目標としている。

1.6.2.5 アジア情報社会コース

アジア情報社会コース International Master's/Doctoral Degree Program: Information, Technology, and Society in Asia (ITASIA) は、大学院情報学環と東洋文化研究所の協力を基づき、2008年4月に発足した、大学院学際情報学環の5番目のコースである。留学生、日本人を問わず、アジアや世界の舞台で専門的職業人として活躍することを志す学生を対象に、情報通信技術の発達に大きな影響を受けている現代アジアの社会と国際関係に対する分析力と洞察力を養う大学院教育を目指し、2007年度から準備が進められてきた。

本コースの最大の特徴は、すべての教育を英語で行い、学生に日本語能力を求めないことにある。入

学時期は 10 月に一本化し、入学者の選抜も他コースのように筆記試験ではなく、TOEFL・GRE のスコア、推薦書、研究計画書やこれまでの業績などを含む書類選考に基づいて行い、さらに学内外の支援により上位合格者に与える奨学金枠を用意することで、これまで英語圏に進学していたアジアの優秀な学生に対して、日本の東大で学ぶことを現実的な選択肢として提示した。

修士課程は、グローバル化するアジアにおける変容する政治的、経済的、社会的現実を把握できるよう、アジアの歴史と国際関係、メディア研究、社会調査方法論、情報技術という文理にまたがる 4 分野の必修基礎科目を軸に関連科目を提供するとともに、修士論文完成に向けた段階的行事と個別指導を通じて学生を訓練し、それぞれの専門分野で適切な判断や提言を行える修了生を送り出すことを目指している。

博士課程は、アジア研究および情報学の研究における高水準の研究者・専門家の養成を目的としており、文理にわたる広範な知識とともに、政治学、経済学、メディア研究その他の社会科学における先端的な研究に必要な調査研究法と理論的分析能力を修得する機会を提供している。

発足して 5 年目に当たる 2012 年度は、修士課程の第 3 期生 9 名が 9 月 27 日（木）に卒業した。そのうち 3 名は博士課程に進学し、2 名はアメリカの大学院博士課程に進学したものの、それ以外は日本国内での就職や、母国で就職している。

2012 年 10 月 4 日（木）には修士課程 14 名、博士課程 7 名が入学し、同日にコースガイダンスを実施した。これで修士課程には 27 名、博士課程には 20 名の学生が、それぞれ在籍していることになる。修士課程学生については、もう少し多くの合格者を出していたものの、奨学金を供与できなかった学生や放射能汚染を危惧する者の中から、合格辞退者が出た。もっとも応募者のクオリティーは高くなってきている。2010 年度から北京大学国際関係学院からの受入れ事業を開始したが、今回、初めて北京大学の学生 2 名が修士課程に入学することとなった。

2012 年度入学時での全学生 47 名の国籍別構成は以下の通り（台湾は独立してカウント）。出身国が 18 ときわめて多様であり、2008 年当時に比べてずいぶんと多様化が進んだことがわかる。

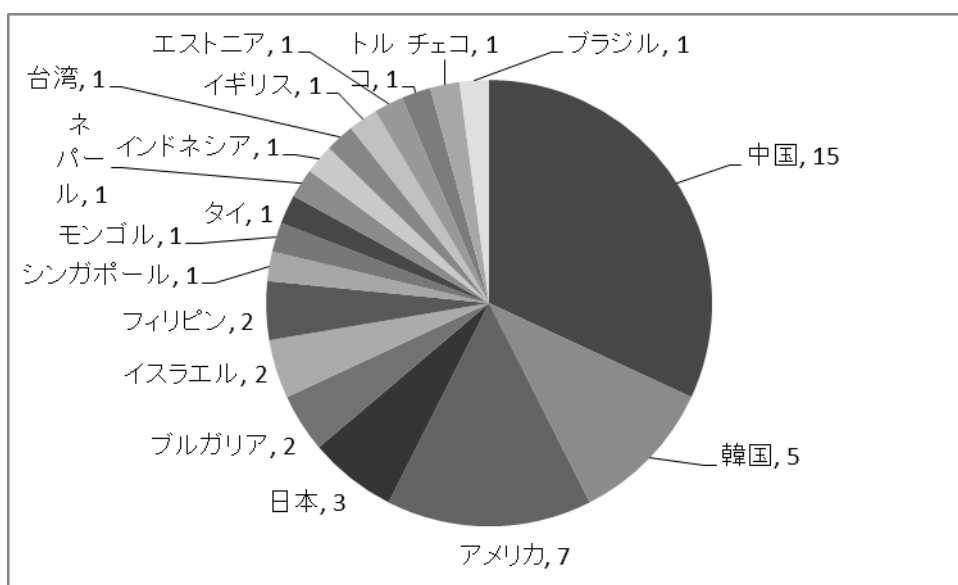


図 1-6-2-5-1 在籍学生の国籍別構成：2012 年 10 月（修士課程、博士後期課程含む）

2012 年 10 月 5 日（金）には修士 2 年生 11 名が修士構想発表会を実施。また同日と 11 月 14 日（水）に博士コロキウムとして博士課程学生 10 名が研究報告を行った。

また、2012 年 2 月 12 日（火）には、修士論文中間発表を実施し、11 名が報告を行った。

学生による自治組織（Student Body Government）が着実に活動を進めていることも特筆すべきだろう。特に、キャリアパネルの実施が定例化し、2013 年 2 月 12 日に 3 回目の会合が開かれた。学生主導で講師からテーマまで選定されたが、こうしたキャリアパネルの実施・運営は、今後のコースの発展を考える上でも大きな意義をもっている。事実、2013 年度入試の志願者の中に、キャリアパネルに参加した者もいることから、今後、こうしたイベントの周知は重要な広告戦略となるだろう。

他方で、自治組織に依頼していた、プロモーションビデオの制作は完成していない。今後とも粘り強く、自治組織と連絡を取る必要がある。

学務関係のカレンダーもほぼ固まる一方で、学務上の新しい試みも行った。昨年、「1 年での修了要件の確定」を行ったが、今年度は、半年卒業を延長し、「2.5 年での修了」を可能にする規定の修正も行った。他コースが 3 月卒業であることから、それに合わせた卒業を可能にしたのだが、今年度初めて、このルールを利用した 3 月卒業生が生まれることとなった。

ソウル大学やデュイスブルグ＝エッセン大学、中央研究院社会学研究所との共同ワークショップなど、各教員主導のプロジェクトへの参加もさることながら、大航海プログラムを利用し、個人での研究発表やフィールドワークを行うケースも増えてきた。2012 年度の大航海プログラム利用者は 47 名だったが、そのうち 11 名が本コースの学生で、在籍者の 2 割以上が大航海プログラムを使用した計算となる。学生の海外での研究活動が活発化している現状は、「タフな東大生」を育成するミッションに叶っており、心強い。

1.6.3 教務委員会

教務委員会は、大学院学際情報学府の教育運営の中核をなしている。大学院学際情報学府では、情報学環に属している基幹・流動の教員に加え、学内兼任教員、授業担当教員、客員及び非常勤講師などから成る教員スタッフが学生指導に当たっている。その数は、平成 23 年度現在で、基幹教員 30（教授 21、准教授 9）、流動教員 21（教授 13、准教授 8）、兼任・課程担当教員 37（教授 24、准教授 13）、兼任・授業担当教員 17（教授 10、准教授 6、講師 1）、客員教員 5（教授 3、准教授 2）、非常勤講師 25、総計 135 名となっており、修士課程 202 名、博士課程 176 名、学府全体で約 378 人の大学院生を教育するにも十分な教師陣を備えている。教務委員会では、これらの多数の教員に協力を得ながら、カリキュラムの運営と改善、授業時間割の編成と講師の手配などの基本的な業務の他に、授業取材、特別研究学生・大学院外国人研究生・大学院研究生（国内）による授業履修及び出席の承認、博士最終審査におけるテレビ及びインターネット会議システムによる参加のあり方など広く教育に関する制度設計業務も行っている。平成 24 年度は 23 年度に引き続き、情報倫理だけでなく研究倫理についての授業を行った。

1.6.4 予算委員会

予算委員会は、情報学環の事業計画及び決算に関して、原案を総務委員会に提出するが任務である。

1.6.5 将来計画委員会

2012年度は「情報学環戦略企画室」を廃止し、「将来計画委員会」を発展させて新たに設置した。2012年度は、主に概算要求案の作成、定数再配分要求案の作成、秋入学制度に代表される学事暦の問題に関して関連する他の委員会と共同で議論を行なった。

1.6.6 入試・カリキュラム制度検討委員会

入試制度、カリキュラム制度にかかわる問題を、学環・学府の組織運営体制の根幹にまで立ち戻って再点検し、必要があれば改善・見直しを提案する検討委員会として2008年度に設置された。関連する常設委員会との協議やヒアリング、拡大検討会議をおこない、(1)組織運営上の一般的問題点、(2)教育体制上の一般的問題点、(3)研究体制上の一般的問題点について議論を重ねている。

「入試・カリキュラム制度検討委員会」

委員長 佐倉統

副委員長 中尾彰宏

委員 石崎雅人 池内克史 上條俊介 北田暁大 須藤修 水越伸 山内祐平 暦本純一

事務 学務係

今年度は、昨年度と同様、2011年度に策定した研究倫理、アカデミックマナー資料(Web サイト)

日本語：<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/graduate.php?id=1259>

英語：<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/en/graduate.php?id=1272>

を利用して、情報学環の新生の導入教育として、研究倫理に関する講義を実施した(講義担当 佐倉、暦本)。受講者アンケートによればこの講義は好評であり「研究倫理に関する基本的な心構えや論文発表に関する注意事項などがよく理解できた」といった感想が今年も多く得られた。来年度以降もこの講義は導入教育としてカリキュラムに定着させていく。

今年度のもうひとつの課題が、秋入学への対応策の検討である。大学本部が導入を模索している秋季入学の実施にともなって、授業カリキュラムや入試のあり方がどのように変わるのか、変えるべきなのか、どのような問題点が生じるのかなどを、教務委員会および将来計画委員会との合同検討委員会において分析した。この案件は来年度以降も引き続き重要案件として検討していくことになると思われる。

1.6.7 施設整備委員会

施設整備委員会の最大のミッションは現在の情報学環がおかれている最低必要面積が確保されてい

ないという認識のもと、教育研究に必要な施設を確保することにある。これまで、護国寺にある東大病院分院跡地に学環プロジェクト共同ルーム、第二本部棟の3階のフロアの一部を確保した上に、更に、平成20年3月には福武ホールが竣工し、これらのスペースを有効に使って研究教育が実施できるようになった。そして平成22年には、大和ハウス工業様からの寄附による暫定アネックスの建て替えが決まった。平成23年度には施設整備委員会内に新棟建設に関するWGを構築し、学内調整や暫定アネックス及び第二本部棟からの研究室の移設作業等を行なった。夏には、暫定アネックスの取り壊しが行なわれ、平成26年3月竣工に向けた作業が進められている。また平成24年度途中から開始されたリーディング大学院（GCL）プログラムのためのスペース確保などに務めた。施設整備委員会としては、当面はこの新棟の建設に関わる作業を実施するとともに、建設中に不足する教育研究環境の手当や整備などに注力しつつ、今後も教育・研究に必要な施設を確保できるように引き続き尽力する。

1.6.8 福武ホール管理運営委員会

福武ホール運営委員会の最大のミッションは、2008年3月に竣工した情報学環・福武ホールを有効活用し、教育研究活動を支援することである。2012年度、当該ホール地下2Fのラーニングシアターとラーニングスタジオを利用して開催されたシンポジウムやワークショップは計213件であり、情報学環内部のみならず外部に対しても、開かれた学びの施設となっている。特にラーニングスタジオ、1F会議室、1F学環コモンズは、情報学環教員・学生に対して、授業、ミーティング、授業外学習の場として活用されている。また、当該ホール1Fに併設されているUT Cafeにおいては、様々な領域で活躍している本学の教員をゲストとして招き、毎月開催するイベントである「UTalk（ユートーク）」を継続的に実施してきた。毎回の定員は15名であるが、情報学環の教員・学生のみならず、他大学の教員や学生、企業人など多様な参加者が多数集まり、定刻を過ぎても議論が続く盛況ぶりを見せている。情報学環・福武ホールが今後も学内外に開かれた学習空間となるよう、引き続き努力する。

表 1-6-8-1 2012年度 UTalk 実施テーマ一覧

実施月	タイトル	ゲスト所属	ゲスト氏名
2012・4	一堂に会する楽しさと危うさ	教育学研究科・講師	新藤浩伸
5	「電話」って何？	情報学環・教授	水越伸
6	幻の大蝶 ブータンシボリアゲハの謎に迫る	総合研究博物館・助教授	矢後勝也
7	隠れキリシタンを画像に探る	史料編纂所・助教	岡美穂子
8	アンデス山中に古代キャラバンの影を追う	総合研究博物館・助教	鶴見英成
9	医療と社会を対話でつなぐ	医学教育国際協力研究センター・講師	孫大輔

10	書きたくなる文脈づくり	情報学環・特任助教	高橋薫
11	人の体で外の世界を体験する	総合文化研究科・特任研究員	玉城絵美
12	重装備化する住まい	人文社会系研究科・准教授	祐成保志
2013・1	交渉を科学する	東京大学公共政策大学院・特任 准教授	松浦正浩
2	台所とレシピにみる歴史	農学生命科学研究科・講師	藤原辰史
3	課題解決の方法としての「見える 化」	「プラチナ社会」総括寄付講 座・特任講師	菊池康紀

1.6.9 情報セキュリティ委員会

2012年8月教授会において「メールサーバ障害および対外ウェブサーバに関するご報告とお願い」を資料に基づき周知するなどの対応を進めている。

1.6.10 情報ネットワーク委員会

2000年の情報学環発足以来、所属教職員ならびに学際情報学府学生に対して、部局内LAN、学内LANであるUTnet、さらにはインターネットへの接続環境を提供し、また部局としての電子メール・サーバ、WWWサーバ等を運営することなどを中心とする、情報ネットワークに関わるサービス提供と管理が要請されてきた。しかし、これを専門に担当する委員会は当初は存在せず、部局ウェブページのコンテンツ管理等も含め、「HP・ネットワーク担当」の数名の助教授および助手が任に当たっていた。2002年6月になって、情報学環の広報及び情報システム等に関する事項の審議のため、「広報・情報委員会」が設置された。さらに、2004年4月の社会情報研究所との組織合併に際して機能分化が図られ、部局ウェブページのコンテンツ管理に当たる「企画広報委員会ホームページ担当」とともに本委員会が設置された。本委員会は、2002年11月に設置された情報倫理審査会が行う調査・審査等や、学生・留学生委員会その他が管理する個別端末、さらに2006年に設置された情報セキュリティ委員会の担当範囲等をも除き、インフラ等、部局の情報ネットワークに関して残る部分を、関係委員会等と協力しつつ、全般的に担当してきた。

具体的には、2005年度以降、情報ネットワーク基盤の維持やセキュリティ事案への対応などの日常的管理実務を着実にを行うとともに、情報ネットワーク運営管理体制の明確化・強化、基幹ネットワークの更新・整備、サーバ室の環境改善、基幹サーバの更新、諸規則の整備、iii-PKI(Public Key Infrastructure)に基づく安全な通信・情報共有のための基盤形成およびVPN・会議資料オンライン閲覧システムの構築・運用などを順次進めてきた。

内規に従い、基幹の情報ネットワーク管理の実務(セキュリティ事案対応にあたるCERT業務を含む)は、情報ネットワーク基幹実務担当者(2012年央時点で准教授2名、助教2名)が担ってきたが、2008年度末に情報セキュリティ委員会主導で全学の情報セキュリティ・ポリシーの実施手順に相当する諸内規等が成立したことなどを受け、日常業務の諸局面で情報セキュリティをより一層考慮した運用を進める必要が生じた。ただ、この点について委員会内部で十分意思統一ができない事態が生じ、日常業務に

も支障が出たことから、情報関係諸委員会の整理・再編も視野に入れた、当委員会についての見直しが始まるとともに、情報セキュリティ委員会の下で情報ネットワーク基幹実務担当者が必要な作業を正当に行えるようにする措置がとられた。2011年度末には、CERT等の関係体制を（規則上部局情報セキュリティ委員長である）部局CISO（最高情報セキュリティ責任者）の下に再編することを求める正式な要請も全学CISOからなされた。多くのウェブその他のサーバが多様な主体の下で運用されているという状況の下で、CERT対応が必要な事案が情報ネットワーク基幹実務担当者の管理外において毎年発生していることも考慮しつつ、CISO・情報セキュリティ委員会の主流化という方向性に沿った新体制を確立することが必要となっている。

1.6.11 情報倫理審査会

情報倫理審査会は、東京大学の情報倫理委員会が定める情報倫理規則にもとづき、主査1名と委員（2012年度は4名）において、情報倫理の遵守のための審査をおこなっている。2003年度の新情報学環の発足以来、構成員への連絡通知のためのMLをつうじてネットワーク利用者への注意喚起などをおこなってきた。2012年度は、例年通り新入生ガイダンスにおける啓蒙と注意喚起を行った他、既に違法化されていたダウンロード行為に対して新たに刑事罰を設ける著作権法改正がなされ10月1日から施行されたことに伴い、事前に数回の注意喚起をおこなった。

1.6.12 業績評価委員会

業績評価委員会は、情報学環・学府の研究・教育活動に対して行われる、学内外の様々な評価に関連する業務を遂行することが任務である。

1.6.13 ヒトを対象とした実験研究および調査研究に関する倫理審査委員会

ヒトを対象とした実験および調査研究に関する倫理審査委員会では、情報学環の教員や学生がこれらの実験・調査をおこなう際に、事前に倫理審査をおこなうものであり、平成21年度に設置された。情報学環は教員・学生とも研究領域が多様であるため、どのような倫理審査が適しているのか、まだ手探りの段階であるが、学祭組織での研究倫理のあり方を確立することを目標に活動している。平成24年度は申請はなかった。今後は、学環教員に対する啓発活動も必要かもしれない。

1.6.14 企画広報委員会

本委員会は、情報学環・学際情報学府の活動や行事（大学院入試説明会、シンポジウム、ワークショップ、ホームカミングデイ、教員研修会など）を企画・運営すること、および両組織の情報を、ニューズレター、ホームページ、メール等で、学内外に案内するなどの広報活動を行うために設置されている。その他、学環・学府内の多くのメーリングリストへの配信管理や、福武ホールや工学部2号館9階などの施設の利用管理なども行なった。

また、ファカルティデベロップメントの一環として、学府委員会と教授会の中に教員が研究内容を紹介する「学環トーク」を企画した。10分間という限られた時間ではあったが、毎回興味深い話題が提供され、学環教員の研究内容の多彩さ、学際性の高さを再認識できる機会となった。以下が、今年度の学

環トーク講演者一覧である。

学環トーク担当教員一覧（平成 24 年度）

第 9 回	平成 24 年 5 月 18 日	中村 周吾	准教授	（農学系研究科）
第 10 回	平成 24 年 6 月 15 日	松田 康博	教授	（東洋文化研究所）
第 11 回	平成 24 年 7 月 13 日	池上 高志	教授	（大学院総合文化研究科）
第 12 回	平成 24 年 9 月 21 日	広田 光一	准教授	（新領域創成科学研究科）
第 13 回	平成 24 年 10 月 19 日	暦本 純一	教授	
第 14 回	平成 24 年 11 月 30 日	Jordan Sand	准教授	
第 15 回	平成 25 年 1 月 18 日	岡本 剛和	准教授	
第 16 回	平成 25 年 2 月 15 日	西垣 通	教授	
第 17 回	平成 25 年 3 月 15 日	姜 尚中	教授	

1.6.15 図書・出版委員会

2007 年度から図書委員会と出版編集委員会が統合されて、図書・出版委員会となった。

1. 図書室関係

情報学環図書室は、新聞研究所、社会情報研究所以来のマス・メディア、ジャーナリズム研究の資料に加えて、2004 年度の情報学環との統合以降は、文系・理系を問わず、情報の学際的な研究に関する資料を幅広く収集し、利用に供している。

2012 年度は「図書購入方針」（2007 年 6 月 図書出版委員会承認）にもとづいて、①見計らいによる推薦、②基幹教員による推薦、③授業用図書の推薦、の 3 方式で図書を購入した。見計らい図書選定については、選定リストの改善によって選定参加教員が文系・理系双方で大幅に増えて、各分野の基本図書が選定されるなど機能し始めている。

2011 年度から教務委員会の要請に基づき、図書・出版委員会で審議し、図書室内に「授業参考図書（Reserved Books for Courses）」コーナーを新設した。同コーナーには、学際情報学府の授業を担当する教員の授業に必須の図書を配架し、学生の利用に供している。

表 1-6-14-1 2012 年度図書受入冊数

	購入	寄贈	計
和書	127	22	149
洋書	120	87	207
計	247	109	356

表 1-6-14-2 貸出冊数の年度推移

年度	2010	2011	2012
図書	5,290	5,129	4,912
雑誌	730	706	744
計	6,020	5,835	5,656

2. 出版関係

(4. 6 出版活動を参照されたい)

1. 6. 16 国際活動委員会

国際活動委員会は、情報学環への外国人研究員等の受け入れを審議し許可してきた。最近の受け入れ総数を見ると、平成 17 年度 13 名、平成 18 年度 15 名、平成 19 年度 15 名、平成 20 年度 14 名、平成 21 年度 27 名、平成 22 年度 36 名、平成 23 年度は 25 名、平成 24 年 25 名である。おおむね、増加の傾向をたどっており、情報学環の多様な研究背景を生かし、引き続きさまざまな教員を受け入れていくことが課題であろう。

また、本年度が最終年度となる『アジア・グローバリゼーション・スタディーズ』若手研究者育成プログラム』を推進した。同プログラムは、プログラム運営委員会の審査を受けた学生および若手研究者の国際活動を支援してきた。本年度はこのプログラムによって、短期派遣として、若手研究者等 13 名、大学院生 90 名（国際協働プロジェクト 64 名、個人プロジェクト 26 名）、長期派遣者（若手 6 名）を国際的研究シーンに送り出した。要件を満たした派遣学生には単位も認定している。

1. 6. 17 産学連携委員会

産学連携委員会は、情報学環・学際情報学府における研究・教育活動を、産業界との連携を通して社会還元をすることを目的として設置されている。2012 年度の産学連携委員会の活動は、職務発明特許やそれに類する著作権等の知財に関する規定の策定に関して、東京大学産学連携委員会を通して参加をしている。また、東京大学産学連携協議会に参加し産業界との交流も行っている。学環・学府において、寄付講座・社会連携講座・受託研究などを通じて産業界と連携するケースが増加している。連携する上で生じた様々な課題に対応する。

1. 6. 18 知的財産室

知的財産室では、情報学環・学際情報学府の教職員が発明したり、著作物を作成した際の届け出を受け付ける。ここで、それらの発明や著作物が、職務上のものであるか、そうでないかを、届け出の内容から判断する。

1. 6. 19 利益相反アドバイザー

現在、東京大学の教職員は、東京大学が定める規定の範囲内で、様々な立場を学外において持つことが可能である。例えば、学会の役員や政府委員、他大学の非常勤講師、産学連携のための民間企業の兼職などがある。こうした立場に立って、様々な活動を行うと、東京大学の構成員としての利害と、学外の立場における利害がぶつかる場合がある。そのようなケースを利益相反と呼ぶが、利益相反アドバイザーは、情報学環内において、利益相反が心配されるときに相談を受け、本部事務とも連絡を取りながら、利益相反に関する対応をアドバイスする役割を担っている。今後、産学連携が進む上で、起こることが予想される利益相反の問題に対して適切に対応していきたい。

1.6.20 ハラスメント予防担当者

ハラスメント予防担当者は、アカデミック・ハラスメントあるいはセクシャル・ハラスメントなどの問題に対応するために設置され、引き続き活動を行っている。ハラスメントに関するパンフレット等を配布し、ハラスメント予防について教員および学生への周知を行っている。また、ハラスメントに関する相談に対して、ハラスメント相談所や男女共同参画室と連携を取り合いながら、具体的な相談を受けた場合に対応し、相談体制を整えている。

1.6.21 社会情報研究資料センター

社会情報研究資料センターは、新聞資料を中心に、各種メディア情報資料を研究のために収集、整理し、それらの資料を学内外の研究者に提供することを目的としている。現在、本センターの所蔵資料は製本済原紙約 20,000 冊、縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 リールに達している。

本センターの沿革は、1964 年に当時の新聞研究所に開室された「プレスセンター」が 1967 年、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992 年 4 月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称された。その後、2004 年 4 月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合にともなって、「社会情報研究資料センター」と改称した。センター運営委員会は、この社会情報研究資料センターの運営にあたっており、2007 年度から 2011 年度にかけては新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」を推進した。

なお、本センターの現在の年間利用者数は 1,000 人を越えており、2012 度における月別利用者数は、下記の通りである。

表 1-6-20-1 社会情報研究資料センター月別利用者数 (2012 年度)

	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計
(開室 日数)	20	21	21	21	20	19	22	21	17	17	16	20	
学内	56	126	94	86	61	68	104	129	97	99	76	47	1043
学外	63	79	64	37	33	71	45	40	22	30	24	53	561
合計	119	205	158	123	94	139	149	169	119	129	100	100	1604

1.6.21.1 情報学環メディア・コンテンツ研究機構

情報学環メディア・コンテンツ研究機構は、2009 年 9 月、情報学環におけるメディア・コンテンツ分野の研究開発や教育推進、産・官・学の連携の発展、国際的な人材養成の展開のために設置されたネットワーク型の機構である。組織としては、情報学環附属研究施設の社会情報研究資料センターの下に置かれている。

情報学環は、「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」(2004 年度～2008 年度) や「コンテン

ツ創造教育研究コア」(2005年度～2009年度)をはじめとして、メディア・コンテンツ分野での研究教育に取り組んできた。本機構は、それらのメディア・コンテンツ研究をアカデミックに発展・深化させ、教育を根付かせ、国際的な研究協働と人材育成を支援するための体制の確立を目指している。産・官・学を結ぶ「知のトライアングル」の構造化、研究・教育・国際連携のための戦略的組織である。

本機構は、研究教育の軸として、デジタル・テクノロジーを共通の基盤に、1) クリエーション、2) プロデュース、3) アーカイブ、4) アナリシス、5) リテラシーの5つの柱を立て、それを円環のプロセスで連結し組織化することをめざしている。

2011年度からは、特別経費「国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実」(2011年度～2015年度)の概算要求が認められ、「知識コンテンツ基盤拡充に向けた横断型教育モデルの国際展開」プログラムが開始された。これにもとづいて、2012年度からは、従来の学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」に加え、大学院横断教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」が情報学環を世話部局として開始されることになった。

1.6.22 総合防災情報研究センター

総合防災情報研究センターは、情報学環附属のセンターであるが、地震研究所、生産技術研究所と連携して運営されており、その具体的仕組みとして、平成19年10月12日付け大学院情報学環教授会決定の「情報学環総合防災情報研究センター運営委員会規則」に基づき情報学環総合防災情報研究センター運営委員会がその任に当たる。本センター運営委員会は3部局長および各部局から選出された委員各1名の合計6名から構成される。運営委員会委員のうち、部局選出委員は、2011年4月1日現在で以下に示した3名である。

大学院情報学環	橋元良明教授
地震研究所	瀧瀬一起教授
生産技術研究所	古関潤一教授

2012年度は11月27日に、下記内容で開催した。

【総合防災情報研究センター運営委員会の記録】

場所：情報学環本館6階会議室

議題1：恒久ポストの運用について

配分の趣旨および総合防災情報研究センターの3部局連携の方針に鑑み、5年時限ポストから、恒久ポストに移行することを提案することで合意された。

その他：意見交換

- ・外部中間評価委員会について

次の外部評価委員会は7年目を目途に行う予定であることが共有された。

- ・研究方針について

東日本大震災の復興過程の実態と課題とを解明するとともに、その分析を活かしながら、首都直下地震の全体像の解明を研究の基軸に置く。

- ・体制について

流動1も含めて、6年目から10年目にかけての計画を立てる必要がある。その際、研究計画とともに、研究ネットワークのハブとして機能する点も考慮すること、研究成果を通じて、学内外のプレゼンスを高めること、個別科学の先に防災面で何があるか先を見通すことに資する成果が求められること、などが指摘された。

1.6.23 ユビキタス情報社会基盤研究センター

ユビキタス情報社会基盤研究センターは、21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」(平成16～20年度)の研究成果を引き継ぎ、総合分析情報学コースの教育と連携して、ユビキタスコンピューティング、ネットワークングに関する世界最高の教育・研究拠点の中核を担うことを目的として、平成21年4月1日に設立された。現在7名の東京大学情報学環の教員がユビキタス情報社会基盤研究センターの教員を兼務している。

1.6.24 現代韓国研究センター

現代韓国研究センターは、グローバル化する東アジア地域のなかでダイナミックに変化している朝鮮半島及び現代韓国の諸相を学際的に研究し、その成果を世界に向けて発信する国際的拠点を目指して2010年設立された。本センターは、東アジア地域の国際的協力と地域主義的連携を展望しつつ、日本と韓半島の相互協働とパートナーシップの多面的な展開の可能性を探求する必要性から、初年度の研究テーマを「東アジア共同体と日韓パートナーシップ」と設定し、情報学環内で現代韓国の政治や情報、文化を中心とする学术交流と共同研究のプログラムを策定・実施するとともに、東京大学内の現代韓半島研究に携わる諸組織・機関をネットワーク化し、研究者や大学院生の活発な相互連携を図り、韓国研究の水準の向上とその普及を目指している。さらに2011年には、駒場キャンパスに現代韓国研究センター駒場支所を開設し、駒場と本郷の現代韓国と関わる研究教育の連携を図っている。

1.6.25 駒場カリキュラム連携運営委員会

駒場カリキュラム連携運営委員会は、総合文化研究科・教養学部における、大学学部前期課程、学部後期課程の教育と情報学環・学際情報学府の教育に関する連携を協議し、連携に関わる授業科目を円滑に運営する目的で平成20年度から設置された。設置以来、教養学部前期課程で情報学環教員が担当する科目に関する調整と、同後期課程学際科学科総合情報学コースへの協力体制構築を主な案件として活動してきたが、前者についてはルーチンが確立し、後者についても基本的な役割分担が確定したため、平成24年度は、定例委員会を開催せずに、教務委員会委員長と相談の上で各科目担当者を決定した。ただし、長期的な観点から協力体制の見直しが必要と考えられる項目を、教養学部前期課程の担当部署

に伝え、今後の検討課題とした。

1.6.26 学生・留学生委員会

学生・留学生委員会では、大学院生全般を対象としたサービスに関して、学際情報学府に在籍する大学院生（留学生を含む）の福利厚生に関する以下の業務を担当してきた。

- (1) 大学院生の勉強・研究用スペースの整備、維持
- (2) 大学院生用備品の購入、管理
- (3) 大学院生と教職員スタッフとのコミュニケーションの維持
- (4) 大学院生向け情報の提供
- (5) 大学院生奨学金および研究支援経費関係

これらのうち、(1)については、本郷キャンパス情報学環本部棟 4 階に加えて、福武ホール学環コモンズにおいて勉学する環境を用意している。

(2)については適宜学生の希望を募り、必要と認められた場合には、共通予算で備品購入をおこなっている。

(3)については、年に 1 回、院生向けの連絡会を開催し、情報の相互流通をはかるとともに、年度はじめの新生歓迎会、留学生旅行（本年度は鎌倉、江ノ島散策）、年度末の謝恩会を開催している（新生歓迎会は在校生が、謝恩会は当該年度の修了生が企画実施）。

(4)については、教務関係の情報は上記(3)のルートのほか、適宜掲示板、学務係メールニュースでの情報配信をおこなっている。また、大学院生向けの奨学金・就職・住宅などの情報を、学務係横のスペースで閲覧できるようにしている。

(5)については、各種奨学金の付与に関して希望者を募り、適宜順位付けをして申請している。

留学生を対象としたサービスの現状に関しては、留学生専用の窓口となる留学生支援室を通じて積極的な留学生支援を行っている。ITASIA コースも充実し、留学生が増加しており、今後も支援の強化を行う予定としている。

次に課題についてであるが、大学院生全般を対象としたサービスに関しては、学際情報学府全体として院生スペースが減少し、特に夜間の使用に関して院生から不満を聞いている。現状スペースの増加は対応が困難であるが、院生との対話を深め、今後は既存施設の改善等を通じて解決を図りたい。

留学生を対象としたサービスは留学生支援室が軌道に乗りかなり改善はされたが、留学生が飛躍的に増加しており、きめ細やかな留学生の要望の把握と必要な対策を迅速に実施することが求められている。また留学生と日本人学生との交流も不十分で、改善を目指したい。このためには学生・留学生委員会自体の強化も検討されるべきであろう。

1.6.27 教育部委員会

情報学環教育部は、情報、メディア、コミュニケーションについて学びたい人々のために、情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。修業年限 2 年。大学 2 年生以上であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験することができる。1949 年（昭和 24 年）に新聞研

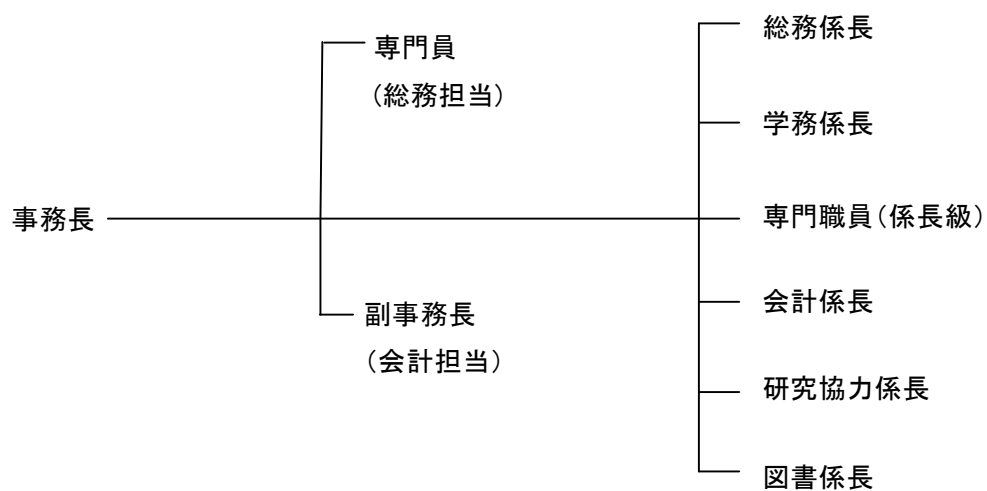
研究所教育部として設置され、2004年度（平成16年度）には社会情報研究所（元新聞研究所）との組織統合によって情報学環に引き継がれ、60年を越える歴史を有している。

2011年度にはここ数年にわたって継続的に検討をしてきた入試改革、カリキュラム改革などをおこなった。それに基づいて2012年度入試をおこなった。すなわち、入試問題や資格要件を再検討し、定員を一学年50名程度から30名程度としぼった。同時に授業内容を講義からゼミや制作、実験など実践的な活動をおこなうものまで多様化させ、より手厚い教育ができる体制を敷いた。その結果として2012年度冬学期現在、学生の授業履修率などが著しく向上している。

研究生たちは「ジャーナリズム、マスメディアをめぐる実践知」「情報コミュニケーション（ICT）技術、産業をめぐる実践知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる文系知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる理系知」をめぐる、きわめてユニークな教育を受けつつ、大変活発に、自主的な学習活動を展開している。

1.7 事務組織

図 1-7-1 事務部組織図(平成 24(2012)年 4 月 1 日現在)



事務長	副事務長	専門員	専門職員	係長	主任	係員	計
1	1	1	1	5	4	1	14

2 教育活動

2.1 概況

学際情報学府の教育は、情報学についての文理相互浸透の学際的カリキュラムとネットワーク型の教員編成による教育指導体制に最大の特色がある。学際情報学という分野が、すでに体系化された学問の修得と継承というよりも、従来の学問体系の組み換えと新しい学問の創生というところに目標を据え、そのような教育を実施しようと考えているからである。

学際性の学問論とネットワーク型の組織を引き継ぎつつ、2004年4月の組織統合にあたって、3コース制が導入された。これは、修士課程学生定員70名という規模に適合するためと、ディシプリンの基礎をもった学際性への教育効果のためと、2つの理由から導入された構成であった。現在は、2006年4月に総合分析情報学コース、2008年4月（学生受入れは同年10月）にアジア情報社会コースが設立され、5コース（修士課程学生定員100名）となっている。

このコース制は設立当初からの学際性の目標と矛盾するものではない。むしろ高水準の学際性を備えた人材を育成するために必要な措置であった。入り口で基礎学力のある優秀な学生を採用するためにコースごとの入試を行い、出口で学力の品質管理をするためにコースごとの修了試験を行う。しかし、入試における面接でも、修了試験の口述試験でも、学際的な教員構成での審査体勢がとられており、また入学後の学生はミニマムな選択必修科目のほかは全コースに開かれている多数の自由選択科目群から自分の研究計画と関心に合った科目を選んで、自分の学習メニューを組むことが可能となっている。

コースはあくまで学府学生が帰属するより小さな枠組みであり、研究科の専攻のようにそこに決して教員が帰属しているわけではない。教員はあくまで学環に帰属しているのであって、コースとの関わりはどのコースの学生を主として指導するかという点である。コース制は、学生が自らの学問的なアイデンティティを構築しつつ、同時に学際性へと越境していくための、バランスのよい舞台を提供しようとしているのである。

2.2 教育カリキュラム

学際情報学府の授業科目群は、(1) コース共通必修科目、(2) コース別選択必修科目、(3) コース共通選択科目、(4) コース横断科目の3つの科目群から構成されている。

第1のコース共通必修科目は、それぞれの学生の指導教員による個別研究指導のほか、学際情報学府の大学院生が、専門分野の視点や立場の違いを越えて、今日の情報学の様々なアプローチについての基礎知識を身につけてもらう「学際情報学概論」が主軸である。この科目には、情報学環のほぼすべての基幹・流動教員が関与し、学生はe-learningシステムでの受講も可能な仕組みになっている。同時に、学際情報学府院生には、修士1年ではWeb発表会における修士1年間の研究の成果発表が、修士2年では修士論文中間発表会での発表が、また博士課程では毎年の博士課程コロキウムでの発表が、大学院での必修カリキュラムの一部として課せられている。

第2のコース別選択必修科目は、修士課程の大学院カリキュラムとして設けられている科目群で、それぞれのコースにおいて専門的な研究能力のトレーニングをしていくためのものである。この科目群は、

「基礎」の4単位と「研究法」の2単位の6単位から成り、「基礎」は主として、各専門分野の基礎的方法論についてのトレーニング、「研究法」は、そのようにして習得した専門的方法論を生かした実習（調査、制作、実験、政策立案など）が分野に応じたやり方で実施されている。それぞれのコースの院生にとって、一般的に最もエネルギーを割かなくてはならない科目群であり、コースごとの特徴が最も明瞭に示されるカリキュラム編成になっている。

第3の共通選択科目群と第4のコース横断科目は、学府を担当しているそれぞれの教員が開講する大学院授業科目であり、形式としては一般的な大学院の授業科目と変わらない。但し、学際情報学府の共通選択科目の大きな特徴は、いずれも「情報」や「メディア」を中心的な対象としながらも、情報科学からジャーナリズム論までの幅広い専門家が集まっていることによる横断性にある。すなわち、ここでの共通選択科目には、自己組織情報、アジア情報政策、異文化コミュニケーション、学習環境デザイン、情報行動、映像文化、メディア表現、情報記号、情報倫理、自然言語処理、情報法、ジャーナリズム、ヒューマンインタフェース、数理言語、ユビキタスコンピューティング、知覚情報、ネットワーク経済、歴史情報、シミュレーションシステム、情報造形、視覚情報処理、医療福祉情報、身体情報認知、情報データベースなど、きわめて多様な分野が含まれている。これらの科目は、学際情報学府のカリキュラム編成においては、①情報・言語・行動系科目、②社会・制度系科目、③メディア・文化系科目、④表現・リテラシー系科目、⑤数理・システム系科目の5つの領域に分けられている。コース横断科目は、コースの専門性を越境して、より広く学際性を身に付けるための科目である。

2.3 カリキュラム支援体制

大学院学際情報学府では、上記のカリキュラムを大学院教育の基軸に据えながら、以下のような教育上の支援体制を組織し、運営している。

2.3.1 主指導教員・副指導教員の配置

学際情報学府では、指導教員の個別研究指導に加え、副指導教員による側面からの研究指導という複眼的な指導体制を整えている。情報に関する研究は、専門的であると同時に学際的な性格をもつため、既存の単一の学問分野の知識だけでは適切に対応できないことが多い。学際情報学府では、既存分野の専門的な知識や方法を十分に身につけつつ、それらを複眼的に結びつけて新しい情報研究に挑む若手研究者を効果的に育てるために、従来の指導教員による指導だけでなく、副指導教員を加えた指導体制を採用している。この体制は、学生の視野を広げ、より柔軟な学問的展開を可能にするといった効果を挙げてきた。

2.3.2 修士・博士 研究計画書の作成

学際情報学府の大学院生は、修士1年及び博士2年の段階で、自分の研究計画書を作成する。このうち修士1年の段階での研究計画書は、修士論文に向けての対象設定、およその研究視角を示す概要的なものであり、提出された計画書は、修士1年生全員がお互いの研究テーマについての認識を共有するための冊子にまとめられる。博士2年での研究計画書は、その学生が博士論文を執筆していくための第一

歩となる。

2.3.3 修士課程研究構想発表会

研究構想発表は、学際情報学府修士2年生が新年度の最初におこなう教育行事である。修士1年生の間に進めてきた学習や研究の成果をまとめ、約1年後に提出する修士論文の構想や進捗状況について発表する。この発表は、学際情報学府に所属する教員と学生に対して行われるもので、各自が研究の内容・計画をポスター発表（バザール）形式で行う。

1日を数セッションに分けて実施され、教員や在学生の他、発表者も自分の発表のないセッションでは聞き役に回り、コメントシートを提出する。

発表者は、このような中間総括と相互評価のプロセスを経ることで、修士論文に向けた残り1年間の研究をより一層充実させるための手がかりを得ることとなる。また、学際情報学府の新入生もオンライン発表を閲覧し、オフライン発表会の聞き役となることで、学府における研究の内容や修士論文に向けたプロセスについて具体的なイメージをつかむことができる。

2.3.4 修士論文中間発表会

学際情報学府では、多くの修士2年の学生が修士論文執筆に本格的に取り組む7月上旬に修士論文中間発表会を開催している。この発表会では、その年度に修士論文を提出するすべての学生が自分の研究の進捗状況を発表しなければならないことになっており、指導教員や福指導教員だけでなく、関連分野の教員や他の学府の大学院生が発表会に参加する。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、90名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、中間発表会全体を組織する。この発表会には、学府の院生は誰でも参加することができるので、修士1年の院生たちにとっては、先輩たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.5 博士課程コロキウム

学際情報学府では、博士課程に在籍している学生を対象に、毎年11月上旬に博士課程コロキウムを開催している。このコロキウムでは、博士課程3年までに在籍しているすべての学生が、博士論文執筆に向けての研究の進捗状況を発表しなければならない。教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、90名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、博士課程コロキウム全体を組織する。このコロキウムには、学府の院生は誰でも参加することができるので、博士課程の学生たちにとっては、他の学生たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

2.3.6 E-learning 授業 (iii online)

2.3.6.1 iii online の目標

iii online は2002年4月に始まった学際情報学府のeラーニングサイトである。iii online は、学部・研究科レベルでは東京大学初のeラーニングサービスである。

eラーニングを開始した最大の理由が、社会人大学院生の学習機会の確保である。

学際情報学府は独立大学院であるために、多種多様な学生が集まっている。2003年度までは、実践

情報学コースという社会人学生をターゲットとしたコースが設けられており（現在は、社会人特別選抜枠に変更）、マスコミ関係者やシステムエンジニアなど、学生の 2 割程度が社会人という状況であった。学際情報学府に入学する社会人は、銀行や製造業につとめている一般的な社会人に比べ、比較的時間に自由がきく代わりに、忙しくなる時期とそうでない時期が交互にやってくる。たとえば、広告代理店に勤めている場合、コマーシャルの撮影などで 1 ヶ月間は仕事が超過密スケジュールで入るが、企画段階ではそれほど時間に制約がないという状態である。

このような状況では、講義に毎回出席することは難しくなる。iii online が始まる前は、出席しなければ自動的に欠席になり、全く講義の情報が手に入らない状態であった。2 回、3 回と欠席が続けば、当然講義の理解に影響が現れてくるので、教育水準の確保上、大きな問題となっていた。

通常社会人向けの大学院では授業を夜間に開講することによって、この問題を解決している。しかし、フルタイムの学生は昼間に授業が開講されることを望んでおり、学際情報学府で授業を夜間に持つてくることは、非現実的であった。

2.3.6.2 iii online の概要

iii online はこのような問題を解決するために、ビデオのストリーミングと掲示板を組み合わせたサービスを提供している。ビデオのアイコンを押すと、およそ 15 分×6 つにカットされた授業の映像を見ることができる。ストリーミングは FlashVideo 形式 500kbps エンコーディングで行っている。FlashVideo 形式を選んだのは、利用者として Windows ユーザー、Mac ユーザー、Linux ユーザーが混在しているからであり、エンコーディングレートは、ブロードバンドで十分スピードがでない場合でも対応できるという観点から設定してある。

15 分にカットしたのは、90 分の映像を一気に見るのは大変だからである。利用者アンケートからも、朝 30 分、会社の休憩時間に 30 分、夜帰ってから 30 分見ると行ったような分割視聴が日常的に行われていることが明らかになっている。

ビデオは、パワーポイント連動型ではなく、カメラで撮影したものをそのまま流している。理由はパワーポイントを使う授業スタイルを教員に押しつけるのは良くないと判断したからである。OHP を使う人もいれば、ホワイトボードの方がインタラクティブにできるという教員もいる。そういう多様な授業スタイルを認めなければ、e ラーニングを導入すると、かえって授業がやりにくくなるということになりかねない。日常的に e ラーニングを展開する場合には、「e ラーニングだから」といった制約条件を減らすことが重要である。

データのアイコンを押すと、授業の資料を見ることができる。資料はすべて PDF ファイル形式にしてある。これも前述の通りユーザー側が多様な環境にいるためである。

アンケート調査では、実際に利用するときには、この PDF ファイルを印刷し、それをノートとして使いながら授業を聞いている。



図 2-3-6-2-1 : iii online の画面

表 2-3-6-2-2 : iii online で閲覧可能な授業の一覧

配信年	講義名	授業者
2002	自然言語処理論	辻井潤一
	コミュニケーション・システム	原島博
	メディア表現論	水越伸
	情報政策論	浜田純一
	学際情報学概論	オムニバス
2003	情報リテラシー論	山内祐平
	情報記号論	石田英敬
	情報進化論	佐倉統
	シミュレーション・システム	荒川忠一
2004	学際情報学概論	オムニバス
	文化・人間情報学基礎	水越伸・山内祐平
	医療福祉情報学	山本隆一
	社会情報システム	松浦幹太
2005	学際情報学概論	オムニバス
	ネットワーク経済論 II	田中秀幸
	学際数理情報学概論 VI	鈴木高宏
2006	学際情報学概論	オムニバス

	身体行動情報論	深代千之
	能動情報論	奈良高明
2007	学際情報学概論	オムニバス
	学習環境デザイン論	山内祐平
	歴史情報論	本郷和人
2008	学際情報学概論	オムニバス
	学際理数情報学特論 IX	大島まり
	文化・人間情報学特論 V	前田幸男
2009	学際情報学概論	オムニバス
	組織学習システム論 II	中原淳
	科学技術コミュニケーション論	鈴木高宏・大島まり 佐倉統 ・丹羽美之
2010	学際情報学概論	オムニバス
	総合分析情報学特論 XI	堀 里子
	ネットワーク経済論 (2010)	田中 秀幸
2011	学際情報学概論	オムニバス
	ネットワーク経済論 (2011)	田中 秀幸
	歴史情報論	本郷 和人
2012	学際情報学概論 I	オムニバス
	学際情報学概論 II	オムニバス

2.4 学際情報学府への進学

2000年度に設立されて以来、2003年度まで、大学院学際情報学府は毎年、修士課程約50人、博士課程約20人の大学院生を受け入れてきた。2004年度の社会情報研究所との合併により、それまで人文社会系研究科社会情報学専門分野の定員であった修士課程14人、博士課程7人が統合され、2006年度からは総合分析情報学コース、2008年度からはアジア情報社会コースが新設されたため、学際情報学府の入学定員はさらに拡大し、現在では修士課程定員が100人、博士課程定員が44人となっている（詳しくは巻末資料参照）。

その結果、学際情報学府に在籍する大学院生数は、2000年度の修士52人（修士）から出発して、2012年度が378人（修士202人、博士176人）へと、10年強で7倍以上に増加した。これは学際情報学府の教育研究が順調に発展していることを象徴しているが、反面、短期間に急増したため、サポートスタッフの不足、教員と事務員の業務負担増加などの問題点も生じている。大学院生数は、教育学研究科、経済学研究科、薬学系研究科などとほぼ同じ規模となっている。

また、本学際情報学府の大学院生の構成についてみると、(1) 東京大学以外の他大学出身者の割合が高いこと、(2) 実践的キャリアを持つ人々や第一線で活動している社会人の割合が高いこと、(3) 外国人学生の割合が相対的に高いこと、(4) 入学者の男女比も、全体の30～50%程度が女性とほぼ均衡が

とれていることなど、きわめてハイブリッドな特徴がみられる。これらの特徴は、本学府が学生の構成という面からみても東京大学のなかできわめて新しい可能性をもった大学院組織であることを示している。

本学府への志願者についてみると、社会情報研究所との合併後の最近 5 年間では、2006 年度入学試験が志願者 225 人（受け入れ予定人員 90 人、2.5 倍）、07 年度入学試験が 148 人（同 90 人、1.64 倍）、08 年度入学試験が 230 人（同 105 人、2.19 倍）、09 年度入学試験が 238 人（同 105 人、2.27 倍）、10 年度入学試験が 259 人（入学定員 100 人、2.59 倍）、11 年度入学試験が 264 人（同 100 人、2.64 倍）、12 年度入学試験が 255 人（同 100 人、2.55 倍）の志願者が応募している。しかも合併後では、本大学院への志願者が増加傾向にあり、今日、大学院重点化のなかで大学院生数の枠が急速に広がったために大学院入試への競争倍率が低下してきている全般的な傾向からすれば、顕著に異なる人気の高さを保っている。

2.5 修士論文及び博士論文の執筆

学際情報学府の修了者数は、修士修了者では、2001 年度が 38 人、02 年度が 40 人、03 年度が 51 人、04 年度が 57 人、05 年度が 62 人、06 年度が 59 人、07 年度が 61 人、08 年度が 71 人、09 年度 82 人と徐々に増え、10 年度は 84 人、11 年度は 83 人、12 年度は 87 人の修士修了者を輩出している。

また、博士課程の修了者についてみるならば、学際情報学府では、設立されたのが 2000 年度なので、最初の入学者が博士 3 年に達する 2004 年度に初めて 4 人の博士号取得者を輩出することになった。05 年度は 1 名だったが、06 年度は 7 人、07 年度は 3 人（他に論文博士 1 人）、08 年度は 13 人（他に論文博士 1 人）、09 年度は 8 人、10 年度は 3 人、11 年度は 11 人、12 年は 12 人の博士号取得者を輩出するに至っている。

大学院学際情報学府では、新しい学生が修士課程に入学した段階から、入学ガイダンスでの丁寧な指導、M2 の先輩たちによる研究構想発表会への参加、主指導・副指導教員体制、修士課程研究計画書の提出、基礎演習および研究法授業、研究構想発表会の実施、修士論文中間発表会というように、修士論文完成に至る個々の段階で学生の研究をサポートしていく体制が完備している。また、博士課程進学後も、博士課程研究計画書や博士課程コロキウムの毎年の実施、主指導・副指導による指導というように修士論文、博士論文の執筆をサポートする体制を整えている。このような体制のなかで、これまで多様な分野の専門的な修士論文、博士論文が書かれてきており、その一例は、別表のようなりストに示される。

（別表）

2012 年度修士論文タイトル

ソーシャルビジネスによる国際協力活動—ネットワーク形成による共通価値とイノベーションの創出—

デジタル時代のマンガ産業論—マンガ家と出版社の再編成—

中京広域圏における民間放送ネットワーク形成史―「分断」と「集権」の挟間で―

韓国における日本大衆文化の消費―1990年代以降のCMを中心に

地域防災教育参加モデルに関する比較研究―杭州市と横浜市を事例として

元号の歴史社会学

再生可能エネルギー普及における、地方自治体の役割・意義・政策継続性についての研究

内部告発を端緒とする報道のあり方―その正当性を担保するジャーナリストの役割

「体育会系」の社会史

ニュース編集室におけるマイノリティ・ジャーナリストの様相に関する―考察―在日コリアン・ジャーナリストのインタビュー調査を通して―

異化により新たな想像を促すアート表現―身体と周辺環境への意識を生み出す―

小劇場という〈場〉の上演―演劇人の承認共同体と「選択的貧困」の成立過程―

テレビドラマ「日本の日蝕」の研究

心理学的手法に基づくゲーム画面の視覚認知に関する研究

新卒社員の組織社会化を促す社会化エージェントの役割分担に関する実証研究

「コト」がうみだす権力と可能性―「情報デザイン」概念をめぐる批判的デザイン研究

反マフィア観光―観光による地域文化形成に関する―考察―

アニメーションにおける「異化」表現―宮崎アニメにみる非日常性の導入と神話の構造―

アナログからデジタルへ―制作技術転換にみるアニメーション―

「自律的学校改善コミュニティの形成を促進する校長のリーダーシップとソーシャル・キャピタルに関する実証的研究」

写真芸術表現の触発を引き起こす教育的実践活動の検討

役員秘書の経験からの学習に関する研究

戦後日本社会運動における「科学」と「市民」—武谷三男、高木仁三郎の比較を通じて—
日常の「演出」と「しつらえ」—台東区谷中、人々の生活空間でいとなまれる表現実践の
実証的研究—

風土学の理論と実践——遺伝子組換え作物と社会の風景論——

PBLにおけるチームパフォーマンスを向上させる座席レイアウトに関する研究

「アニメ」のつくり手とアニメーション表現——アニメーターへのインタビューを通じて
——

デジタルゲームがプレイヤーの感情と生理活動に与える影響——デジタルゲーム研究の課
題とその解決の試み——

地方公立美術館の地域における機能と課題—青森県立美術館の事例から—

明治期地域社会のコミュニケーション空間の変遷—大日本農会及び農談会にみる「農民」
の誕生—

オーラル・ヒストリー・プロジェクトの教育的実践と評価

美術家の作品コンセプトの生成過程に関するケーススタディ—ドローイングと写真の利用
に着目して—

母親の育児情報活用に関する研究

革命とパンダ——1960年～70年代の日本社会における中華人民共和国イメージの構築——

海賊が作る「大衆の文化」～韓国におけるポップソングの受容と流用をめぐるメディア文
化論～

日本におけるゲーム内広告の実態と効果に関する研究

サイエンス・カフェにおける参加者の興味に関する研究

「気配」情報を増幅するインスタレーション作品の制作と研究

ワークショップにおける自閉症児と健常児の社会的相互作用に関する研究

『無厘頭』から『悪搞』～中国におけるパロディの誕生と変容をめぐる文化社会学～

小中学校教員の「科学と自然の関係」の捉え方—日本と南アフリカの共同プロジェクトを通じた予備的考察—

光合成を考慮した造礁サンゴの形態生成シミュレーションに関する研究

ソーシャルメディア上の位置情報が付与されたテキストのマイニングに関する研究

マルチモーダルセンシングによる複数人会話状況における参加度推定

人体機能模倣膝関節を備えた筋骨格ヒューマノイドの下肢設計と行動実現

身体動作の階層的記述と認識：アクロバティックな動きを含む武道「躰道」を例として

視線運動のモデル化のための個人差の解析

コンピュータグラフィックスによる流体表現の現実感評価

超多自由度筋骨格腱駆動ヒューマノイドのダンスに向けた基礎運動能力分析

視線情報に基づく画像選好の識別

飲食店の口コミに含まれるオノマトペの分析およびシステム応用

声の効果音を用いた感想共有メディアの研究—ラジオ番組との連携とプレゼンテーションの場での実践—

多孔質粒子モデルによる湿潤布の挙動シミュレーション

Research and Development of "Prime Galaxy" for Improving Mathematical Thinking in Primary Education

(数学的な思考力を養う算数ゲーム“プライムギャラクシー”の開発研究)

充電時間およびトリップチェーンを考慮した電気自動車向けカーナビゲーションシステムのルート探索アルゴリズム

マルチスケールによる気泡シミュレーション

個人利用に特化した食事画像メニュー認識

多面体メッシュの折り目を含んだ可展面近似

個人の手書き文字フォントを用いたコミュニケーション支援システムの開発と評価

モバイル機器を用いたレンダリングに作用するインタフェースに関する研究

ICTを用いた高齢者のMosaic型就労支援に関する研究

Sketch-Based Manga Retrieval

スケッチ入力による漫画検索

自律的発光モデルを用いた光のインタフェースの考案

Complex game contents framework —game development platform in the future

複合的ゲームコンテンツフレームワーク—未来のゲーム開発プラットフォーム提案

端末非依存型IoTプラットフォームuIDアーキテクチャの研究

安全安心情報を扱うためのオープンデータプラットフォームに関する研究

エネルギー最適化を目指した都市の<形態>に関する数理的考察

伴泳ロボットを用いた水泳支援に関する研究

動的な形態をもつディスプレイを用いたインタラクション手法の提案

SaSYS: A System for Exploring Urban Environment Using Swipe Gestures for the Visually Impaired

視覚障害者のためのスワイプジェスチャを用いた周辺探索システム

Tourism Event Progress Estimation Using Twitter

Twitterを活用した観光イベント進行の認識

Mesh slicing: Improving the robustness of wireless mesh networks via network virtualization

メッシュスライシング：ネットワーク仮想化を用いた無線メッシュネットワークの堅牢化手法

個人属性が屋内環境における回遊行動へ与える影響に関する研究

無線APの仮想化による網内アドターゲットティング

大災害時オフライン環境のための避難情報事前キャッシュシステム

歩行空間におけるバリア情報の自動取得手法

浸水予測ハザードマップにおける表現手法と利用者のリスク認知の研究

言語化の違いが嘘の判断に与える影響

投影を用いたインタラクションと物体作成支援に関する研究

Renewable Energy Cooperation between China and the United States

Search for Storytelling in the Traditional Craft Industries

—A Case Study of Mage-wappa Producer Kurikyu—

Breaking Down Barriers: Improving the Passing Rate of Filipino Nurses in the Japanese Nursing Licensure Examination

The Relationship between the Chinese Central Government and the National Oil Companies with Regard to China's Energy Security Strategy

Film Archive and the Historization of the Post-war Japan

Tokyo Activists: Diversity and Commonality in the Post 3.11 Antinuclear Social Movement

Japan's Gendered Morning Television: Housewives, Social Identity, and 'Wide-Show' infotainment

The (Networked) Geography of Knowledge in "Booktown" Jimbocho, Tokyo

Who and Why Retweet on Sina Weibo: An Analysis of Retweeting Motivation in a Fan Community

Fukushima on 24-Hour Television News: A Case Study of News as Narrative in Crisis Coverage

2.6 学際情報学府からの就職・進学動向

修士課程修了者のうち、博士課程進学者は全修了者の35~40%程度である。したがって、修士課程

を修了した者の約6割が就職することになる。一般に、理系では修士修了後に就職をするケースが多く、文系では博士課程に進学するケースが多いが、文理相互浸透の大学院組織である学際情報学府は、ちょうどその中間的な割合を示しているといえる。修士修了者の就職先は別表の通りであり（別表 修士修了者の進路状況）、シンクタンク、マスコミ、情報通信およびコンピュータ関連企業、出版社など知識集約型の企業への就職が多数を占めているところが特徴的である。

2.7 学際情報学府以外の教育活動

大学院情報学環では、大学院教育組織である学際情報学府と密接に連携しながら、教育部、ベネッセ先端教育技術学講座、「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座でも教育活動を行っている。

2.7.1 教育部

情報学環教育部は、情報、メディア、コミュニケーションについて学びたい人々のために、2年間にわたって情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。講義は、各自が所属する学部や大学院の授業などと両立できるように、おおむね夕刻（14:50分以降）から夜間にかけて開講されている。学部、研究科という「タテ糸」で成り立つ東京大学のなかに、情報というキーワードをめぐる教育研究を「ヨコ糸」で縫い合わせてできた情報学環。教育部は、その情報学環という斬新な組織の特性を活かした、魅力的な教育研究活動の場となっている。

情報学環教育部では、毎年、前年度後期に入学試験をおこない、一学年約30名の教育部研究生を選抜している。大学2年生以上（4月以降大学2年生になる見込みの人を含む。ただし、大学院に在学している人は含まない）であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験をすることができる。

情報学環教育部の歴史は古く、その起源は、1929年（昭和4年）の文学部新聞研究室にまでさかのぼる。小さな組織だった新聞研究室は、戦後まもない1949年（昭和24年）に、文系の学際的研究組織である新聞研究所へと発展した。新聞研究所は、その名のとおり、新聞をはじめとするマスメディアが巻き起こす社会情報現象やコミュニケーション変容を体系的に研究することを目的として設立されたが、同時に、マスメディアで働く記者などの実務家を育成することも目的としていた。

1992年（平成4年）、新聞研究所は社会情報研究所として改組され、マスメディアに限定しない、情報に関わるあらゆる社会現象の研究を総合的に進めていくことになった。2004年（平成16年）には、大学院情報学環と合併し、今日まで情報学の伝統を脈々と引き継ぎながら、文理融合の最先端の研究を推進し、また教育活動にも力を注いでいる。

参考として平成24年度開講科目を以下に示す。

（夏学期）

	4限 14:50~16:20	5限 16:40~18:10	6限 18:30~20:00
--	----------------	----------------	----------------

月			メディア・ジャーナリズム論 講義 I (新聞論) 菅沼堅吾 講師
火			情報産業論 講義 I (広告コミュニケーション論) 澤本嘉光 講師 岸勇希 講師・谷山雅計 講師
水		メディア・ジャーナリズム論 実験実習 I (ドキュメンタリー制作) 丹羽美之 准教授	情報産業論 講義 II (情報と法制度) 牧野二郎 講師
木	情報産業論 文献講読 I (音楽と産業) 加藤綾子 助教	情報技術論 実験実習 I (実世界情報処理) 石井健太郎 助教	情報産業論 実験実習 I (書籍の見方・作り方と 出版業の実際) 中嶋廣 講師
金		情報技術論 研究指導 I (交通と情報) 中野公彦 准教授	

(冬学期)

	4限 14:50~16:20	5限 16:40~18:10	6限 18:30~20:00
月		メディア・ジャーナリズム論 講義 II (テレビと平成) 秋山浩之 講師	情報技術論 講義 I (社会を支える交通～ 情報技術の戦略的活用が 未来を拓く) 天野肇 講師
火	情報社会論 研究指導 I (教育と情報) 山内祐平 准教授		メディア・ジャーナリズム論 文献講読 I (メディア思想) 長谷川一 講師
水			
木		情報社会論 実験実習 I (地域とメディア実践) 水越伸 教授	
金			

なお、2008年から2012年までの教育部志願者数、受験者数、合格者数についてはⅡ.資料を参照していただきたい。

2.7.2 学部横断型教育プログラム 「メディアコンテンツ」

学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」は、東京大学横断型教育プログラムのひとつである。東京大学学部横断型教育プログラムは、狭い専門知識だけでなく、新たな学問的課題に果敢に挑戦し、幅広い分野を横断していく柔軟な思考力を備えた「知的にタフな東大生」を育成するために開設された学際的・分野融合的な教育プログラムである。学部や大学院の枠組みを超えて実施されている。現在開講されている横断型教育プログラムのなかでも、本教育プログラム「メディアコンテンツ」は、メディア上に流通するコンテンツの創造に関わる基礎教育と人材養成を目的として、最新のインターネットビジネスの動向などを踏まえた教育を行っている。「技術・創造」「文化・社会」「人間・心理」「総合」の分野からメディアコンテンツに関連する科目を開講している。本教育プログラムは、東京大学の学部後期課程（3～4年生）を履修対象としているが、大学院生の履修も可能で必修科目や選択科目の区別はなく、各自の目的にあわせて履修できる。開講されている科目の中から、合計 12 単位以上を修得した学生に「プログラム修了証」が交付される。

2.7.3 大学院横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」

大学院横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」は、東京大学横断型教育プログラムのひとつである。東京大学横断型教育プログラムは、狭い専門知識だけでなく、新たな学問的課題に果敢に挑戦し、幅広い分野を横断していく柔軟な思考力を備えた「知的にタフな東大生」を育成するために開設された学際的・分野融合的な教育プログラムである。学部や大学院の枠組みを超えて実施されている。デジタル技術とウェブシステムの革新は、人類の知的資源の保存、研究、発信の方法を大きく変革し、現代社会の新たな知識基盤を形成しつつある。近年、世界ではこの変化に対応し、デジタル媒体による資料アーカイブの構築・分析・公開の方法をめぐる、文理の壁を超えて研究方法を模索する「デジタル・ヒューマニティーズ」の確立が重要な課題となり始めた。

本教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」は、1) デジタル・テクノロジーを用いた人文学資料のアーカイブ構築、2) デジタル・コンテンツ資源と結びついた映像分析やテキスト分析、3) 研究成果のプレゼンテーションやエキシビションを有機的に循環させて、人文学および情報学の各領域の学際的な体系化を目指した科目を開講している。多面的な観点から学術研究を深化させ、人文学の新たな方法論を実践的に学んでいく教育プログラムである。デジタル・テクノロジーを批判的に使いこなす学際的な人文学者、デジタル・コンテンツの知識基盤を創造的に構築する情報学者をはじめ、アーキビストやキュレーター、ライブラリアンといった知識や文化の担い手、さらには多様化する情報社会の諸領域を横断して活躍の場を見出そうとする批判力をそなえた人材の育成を目的としている。

本教育プログラムは、東京大学の大学院生を履修対象としている。人文系のみならず、人文学とのコラボレーションに興味のある理工系の大学院生の受講も歓迎している。プログラムは、〈コア科目〉、〈基礎科目〉、〈関連科目〉によって構成されている。コア科目内の必修科目を修得し、合計 12 単位以上を修得した学生に「プログラム修了証」を交付する（修了を目的とせず、個別の科目のみを履修することも可能である）。

2.7.4 ベネッセ先端教育技術学講座（寄付講座）

ベネッセ先端教育技術学講座では、教育活動として以下の2点に力を入れた。

- ・学際情報学府の教育活動との有機的連携

ベネッセ先端教育技術学講座 (BEAT) での研究プロジェクトおよび社会還元的教育活動 (公開講座、メールマガジン発行、web サイト運用) に対する学際情報学府の大学院生の参加を奨励し、研究プロジェクトおよび社会還元的教育活動がそのままプロジェクト学習の基盤になるような工夫をした。その中で特に研究プロジェクトに関心を持った学生については、研究プロジェクトの中で修士研究を行うなどの配慮をすることにより、先端教育技術に関する教育活動の拠点として確立した。

- ・公開講座による社会還元的教育活動

一般社会に対して、先端教育技術に関する知見やノウハウの教育活動を行うため、3ヶ月に1回のペースで公開研究会 BEAT セミナーを開催した。2012年度に開催された公開研究会は、以下の通りである。

第1回：子どもとデジタル絵本 (2012年6月2日)

第2回：安心して学べるソーシャルメディア環境 (2012年9月1日)

第3回：スマートテレビが変える家庭学習 (2012年12月1日)

第4回：変革期を迎えた学習プラットフォーム (2013年3月23日)

2012年度はのべ700名を超える参加者が公開研究会に参加した。この中には、学生・大学教員に加え、教材開発を行っている社会人も数多く含まれており、デジタル時代の学習コンテンツ・システムに関する最新の知見を伝える機能を果たした。

なお、ベネッセ先端教育技術学講座 (BEAT) は2012年度をもって終了となる。2004年発足以来実施されたプロジェクトにおける研究業績等については、情報学環・福武ホール web サイトのもとのアーカイブ化を進めている。

2.7.5 「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座

「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座は平成21年4月1日に開設され、現在、首都高速道路株式会社、東京地下鉄株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、株式会社日立製作所と東京大学大学院学際情報学府総合分析情報学コースを中核として運営されている。また、日本電信電話株式会社、アビームコンサルティング株式会社及びユビキタス情報社会基盤研究センターも協力している。本講座は、情報技術を活用した施設管理等に関するマネジメントを高度化するとともに、新たな情報基盤を活用した新たなビジネスを創出し、インフラ・イノベーションの実現を目指す。また、こうした目的を達成するため、シーズとニーズ、技術と運用、理論と実践といった様々な知識や経験を結合し、新しい価値を生み出す実践的な研究プラットフォームの確立を目指す。設立された平成21年度より、毎年4月に研究成果を発表するシンポジウムを開催している。

2.7.6 「アジア・グローバルゼーション・スタディズ」若手研究者育成プログラム

本事業は、1) アジアのメディア環境がどのように歴史的に変化し、2) その変化に対してアジア諸国はどのように対応しているのか、3) 新たなメディア環境が政治・経済・文化にもたらす可能性と限界は何かなど、グローバルゼーションに伴って生じるアジアの新たな情報社会のありようを探究する若手研究者を養成することを目的としている。

具体的には教員のイニシアチブにより学生の海外経験値を高める国際共同プロジェクトと、学生自身の提案・イニシアチブによる個人プロジェクトの2つを立ち上げ、前者については教員による意見の公募と、後者については毎年、春と秋の2度学内公募を行い、これらの情報の管理を行うためにプログラム運営委員会を立ち上げ、プロジェクトの情報提供ならびに、個々のプロジェクトの実施状況についてチェックする役割を担った。採択プロジェクトおよびその成果については、すべて以下のホームページに収録されている。(http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/daikokai/)

申請段階では、4年の間に、若手研究者36名(うち長期派遣者30名)と大学院生96名、合計132名の派遣を計画していた。しかし、実際には若手研究者の派遣は7名(うち長期派遣者は5名)、大学院生の派遣は82名(うち長期派遣者は2名)、合計89名を送りだせたにすぎない。合計89名の学生派遣の内訳は、個人プロジェクトが25名で、残り64名は国際共同プロジェクトの実施に伴う派遣であった。個人プロジェクトの応募者は採択者の3倍以上いたが、公的資金を利用して海外に行くことの意味を十分に理解してもらいたいという趣旨から、特に大学院生たちから出された申請書は厳しくチェックしたため、全体の派遣学生数が当初の予想より抑えられる結果になった。また、長期派遣に関しては、若手研究者たちが他の業務で忙しく、2か月以上日本を開けることがきわめて難しかったことが大きな原因と見ている。

国際共同プロジェクトでは吉見、林、園田、田中(秀幸)、石田、佐倉の6名が関わった。個人プロジェクトに関しては、多くが国際会議での報告を目的としていたが、訪問先での文献収集やフィールドワークなどの活動も行われている。他方、国際共同プロジェクトに関しては、ソウル大学との共同プロジェクトが3件、台湾大学との共同プロジェクトが2件、清華大学との共同プロジェクトが1件、嶺南大学での国際学会参加が2件と東アジア諸大学との関係を利用したものが多かった一方で、UCバークレーやフランス・ポンピドゥーセンターとの共同プロジェクトもあった。

4年にわたる本事業を通じて、以下のような成果を得ることができた。

- 1) ソウル大学との定期的な交流を継続的に行うことによって、英語で報告することに躊躇を見せていた日本人学生たちも、以前よりは多くが交流活動に参加するようになった。
- 2) 学生たち、特に留学生たちに、国際学会や海外での報告機会を利用して知的刺激を得ようとする態度が涵養された。
- 3) 個人プロジェクトの公募によって、学生たちは申請書を作成し、みずからの海外活動の必要性を説得的に説かねばならない訓練を受けた。プログラム運営委員会は、相当数の学生の申請書を厳しく評価したが、こうした機会を通じて、学生たちは外部資金を獲得することの必要性とむずかしさ、そして何よりどうすれば外部資金を得られるかを学習する機会を得た。

- 4) 国立台湾大学、Duisburg-Essen 大学などを皮切りに、制度的な交流に着手した。これらは今後の国際展開力強化のための布石と位置付けたい。
- 5) 教員側において、国際交流を通じた教育活動の意義と重要性を共有することができた。
- 6) 教員も学生も、大学院教育の国際化のための「ソフト・スキル」習得の重要性への認識を新たにした。学生たちは自ら主体的に学び取る「ラーニング」の態度を獲得し、さらにその学びを自ら積極的に表現する「プレゼンテーション」能力も極めて重要であるという認識が、少なくとも一部の教員や学生の間において確実に芽生えた。今後は、プレゼン能力を強化するアカデミック・コミュニケーション授業の一層の強化や、国際ワークショップを自ら企画、立案、開催することによって単位授与をする仕組みづくりなど、グローバルに活躍する若手研究者育成に欠かせない新たなカリキュラムが構想されている。

3. 研究活動

3.1 概況

研究組織としての情報学環は、異領域の出会いの場である。同じ学問領域の研究者が集まり、その集積性によってその学問領域の体系化を図り、またそれまで解決できなかった問題に突破口を開こうとする目標の立て方とやり方が存在する。しかし、情報学環は違う目標をもっており、違うアプローチを採っている。情報学環は社会情報学の深化及び学際情報学の展開という新しいフロンティアを創出するという目標をもっており、異なった学問領域の研究者に出会いの場を提供し、異種交配と相互越境というやり方によって、それを達成しようとしている。そのような研究組織は規模においてそれほど大きいものである必要はないが、しかし特有の研究組織論が必要とされる。

3.1.1 文理の相互作用と連携

伝統的に日本の大学においては、学問研究は文系と理系に大きく分けられてきたし、現在もそれが生きている。新しい分野、とりわけ社会情報学と学際情報学にとっては、その区分けを乗り越えて、文理連携、文理越境、文理相互浸透が必要であり、それなくして発展の展望はない。情報学環は最初からそのような文理連携の研究組織論に基づいて設立されたものである。しかも、その文理の比重がどちらかに大きく偏ることなく、バランスを取っているのが大きな特色である。

現在、情報学環では大小合わせてさまざまな文理連携型の研究プロジェクトが実施されている。政府予算に基づく大型の研究プロジェクトとして、特別教育研究経費による研究プロジェクト「災害緊急情報を活用した大学防災情報システムの開発」（2010年度～2014年度）が進められるとともに、同じく「知識コンテンツ基盤拡充に向けた横断型教育モデルの国際展開」（2011年度～2015年度）が進められ、また、東京大学の他部局、大学院医学系研究科、高齢社会総合研究機構、大学院工学系研究科との連携大規模研究プロジェクト「活力ある高齢社会の推進」（2013年度）も進められており、情報学環のスタッフ体制は、文理連携の大型研究プロジェクトを推進することが可能である。

文理連携は、組織の財政上、情報学環ならではの効用とメリットを発揮することに結びつく。国立大学に対する現在の財政政策の仕組みでは、文系の資金獲得には限界があり、困難が伴う。理系が必要とするような大きな額ではないにも関わらず、文系が運営費交付金や競争的資金を新たに得るのは容易なことではない。しかし、文理連携の研究計画のもとに競争的資金が獲得できることによって、結果的に文系の研究分野へ資金が流れ、これまで経済的な理由からできなかった研究活動を展開できるようになるのである。これは、文理連携で情報学を構築していくという組織論が、財務上も有益な影響を生み出していることを物語っている。こうした研究資金状況の改善によって、文系は文系の側から文理連携の企てを積極的に展開していくことが可能になるのである。

3.1.2 流動教員制度

情報学環独特の仕組みとして、流動教員制度がある。これは設立当初、学内の情報関連教員を糾合し、ネットワーク組織型に新しい大学院を創設するため、学内関連部局の協力を得て作り出されたものである。これにより、情報学環に所属する教員には、基幹教員と流動教員の2種類が存在する。

基幹教員は、情報学環に固有のポスト、すなわち基幹教員枠（部局の「採用可能数」として割り当てられているポスト）で採用されている教員である。その教員室のスペースも学環によって手当てされている。それに対して、流動教員は、流動元の部局から情報学環へ時限で振替られている流動教員枠を使って、流動元の部局よりやはり時限で配置換えになって情報学環に所属している教員である。その教員スペースは現状では情報学環として手当てすることができず、流動元部局のスペースをそのまま使用している。

この流動教員制度により、情報学環の研究組織は研究者の循環と入れ替わりの仕組みを内蔵しており、もって研究活動に常にイノベーションの条件を保障しようとしているのである。流動教員の立場からすれば、情報学環に流動教員として参加することによって、元部局とは異なった学際的な教育研究環境に入ることが可能であり、また研究所が元部局の教員にとっては大学院教育に通常の義務と権利で加わる機会が得られることとなる。こうした条件が研究者同士に新たな刺激を生み出すとともに、従来の枠を脱する糧となると見込まれている。こうした組織論による利得は、現在、大小さまざまな研究プロジェクトの活動に見て取ることができる。

3.2 大型研究プロジェクト（1,000万円以上規模）

各教員が研究代表者となって行う研究プロジェクトでも、以下（事業規模1千万円以上）に示すとおり、大型研究プロジェクトを積極的に展開している。（すべての外部資金による研究の状況は、IV. 外部資金獲得状況を参照のこと）

<科学研究費補助金>

基盤研究(A)「デジタル茶室の花鳥風月的な時空間創出技術」（研究代表者 河口 洋一郎）

基盤研究(A)「視聴覚を利用した見まね学習によるアクティブな動的動作生成に関する研究」（研究代表者 池内 克史）

基盤研究(A)「法令・人事から見た近世政策決定システムの研究」（研究代表者 山本 博文）

基盤研究(A)「学習者の状況および知識構造に対応したシナリオ型防災教育教材の開発」（研究代表者 山内 祐平）

基盤研究(B)「脳神経科学と社会の相互作用——事例研究と枠組み構築——」（研究代表者 佐倉 統）

基盤研究(B)「「中国」と向き合って：日韓台対中進出企業の現地化プロセスに関する比較社会学的研究」（研究代表者 園田 茂人）

基盤研究(B)「立体顔情報表示による遠隔実在感の創出」（研究代表者 暦本 純一）

基盤研究(B)「繁栄と自立のディレンマ—ポスト民主化台湾の国際政治経済学—」
(研究代表者 松田 康博)

基盤研究(B)「記録映画アーカイブに見る戦後日本イメージの形成と変容」(研究代表者 丹羽 美之)

基盤研究(B)「西欧教会ならびにオペラ劇場の動学的音場解析とその比較」(研究代表者 伊東 乾)

基盤研究(B)「路車異種センサー融合による衝突防止システムの統合的研究」(研究代表者 上條 俊介)

基盤研究(B)「培養神経回路と人工神経回路の身体化によるホメオダイナミクスの研究」
(研究代表者 池上 高志)

基盤研究(B)「血管内治療のための in vivo 流体構造連成解析システムの開発」
(研究代表者 大島 まり)

基盤研究(B)「メディア産業構造変動から見る報道職とジャーナリズムの将来：東アジア国際比較研究」
(研究代表者 林 香里)

基盤研究(B)「【薬と健康食品】適正使用のためのリスクコミュニケーションの場とネットワーク創製」
(研究代表者 堀 里子)

<その他外部資金関係>

総務省 戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE)「市民の交通行動変容を促進する持続可能な生活交通情報フィードバックシステムの研究開発」(研究代表者 池内 克史)

総務省 戦略的情報通信研究開発推進制度(SCOPE)「キャッシュ指向ネットワークアーキテクチャ (CONA:Cache-Oriented Network-Architecture) の研究開発」(研究代表者 中尾 彰宏)

総務省「広域災害対応型クラウド基盤構築に向けた研究開発」(研究代表者 中尾 彰宏)

国土交通省 近畿地方整備局 国営飛鳥歴史公園事務所「甘樫丘地区における歴史的体験施設整備に関する研究開発」(研究代表者 池内 克史)

文部科学省 科学技術試験研究費「連動性を考慮した強震動・津波予測及び地震・津波被害予測研究」
(研究代表者 古村 孝志)

文部科学省 イノベーションシステム整備事業大学発新産業創出拠点プロジェクト
(プロジェクト支援型)「無線アクセスポイント仮想化による情報通信サービスの高度化」
(研究代表者 中尾 彰宏)

(独) 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「差分法に基づくポストペタスケールアプリケーション開発環境」
(研究代表者 古村 孝志)

(独) 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「食、健康に関わるライフログ取得とコミュニティ創成」(研究代表者 相澤 清晴)

(独) 新エネルギー・産業技術総合開発機構 エネルギーITS 推進事業「協調走行(自動運転)に向けた研究開発」(研究代表者 池内 克史)

(独) 情報通信研究機構「新世代ネットワークを支えるネットワーク仮想化基盤技術の研究開発」
(研究代表者 中尾 彰宏)

大学共同利用機関法人情報・システム研究機構「超巨大データベース時代に向けた最高速データベースエンジンの開発と当該エンジンを核とする戦略的社会サービスの実証・評価」(研究代表者 須藤 修)

(独) 海洋研究開発機構「地震の予測精度の高度化に関する研究」(研究代表者 古村 孝志)

3.3 付属センターの役割

3.3.1 社会情報研究資料センター

大学院情報学環附属社会情報研究資料センターは、1964年1月、当時の新聞研究所内に開室された「プレスセンター」が1967年6月、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称されたものである。2004年4月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」と改称し、今日に至っている。

本センターは、新聞資料を中心とした各種メディア情報資料を収集・整理し、学内外の研究者の利用に供することで、社会情報学に関する研究の発展に寄与している。現在、本センターの収蔵資料は製本済原紙約20,000冊、縮刷版約8,000冊、マイクロフィルム約45,000リールに達している。これらの新聞資料は情報学環書庫のほかに、駒場キャンパス内の旧宇宙航空研究所跡地などに別置されている。

センターの閲覧室には、利用者のために各種データベース閲覧用PCとマイクロフィルムのデジタルデータ変換機能をもつマイクロリーダーを設置して利用者の便宜を図ると共に、従来のマイクロリーダ

ーも継続利用して需要に応じている。また、本センターの定期刊行物として「社会情報研究資料センターニュース」を刊行している。

また、2007年度から2011年度まで東京大学新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化計画」として、(1) 整理保存機能の高度化、(2) 利活用機能の高度化、(3) 教育研究機能の高度化、(4) 情報化アーカイブ機能全般の高度化に重点を置き、事業に着手した。その結果、デジタル化スタジオの整備、収蔵庫の整備、展示室を改築し閲覧室としての公開、『坪井家関連資料目録』・『小野秀雄関係資料目録』の2冊の目録発行、『文化資源のデジタル化に関するハンドブック』および『新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」事業報告書』の発行を行った。

3.3.1.1 情報学環メディア・コンテンツ研究機構

情報学環メディア・コンテンツ研究機構は、2009年9月の設置以来、メディア・コンテンツ分野の研究開発や教育推進、産・官・学の連携の発展、国際的な人材養成の展開のための活動を行ってきた。2011年度からは、特別経費「国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実」(2011年度～2015年度)の概算要求が認められ、「知識コンテンツ基盤拡充に向けた横断型教育モデルの国際展開」プログラムが開始された。これにもとづいて、2012年度からは、従来の学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」に続いて、二つ目の部局横断型教育プログラムとして、大学院横断教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」を立ち上げた。

2012年9月には、東京大学本郷キャンパスにて行われた国際会議 JADH2012 (Japanese Association for Digital Humanities) を共催として運営した。同会議では、国内外から多数の研究者が集まり、3つの基調講演、8つの研究発表パネル、1つのポスター・セッションに加え、TEI (Text Encoding Initiative) に関するプレカンファレンス・ワークショップも行われ、デジタル・ヒューマニティーズの方法と可能性について活発な議論が展開された。加えて、2012年7月にドイツ・ハンブルグ大学で行われたデジタル・ヒューマニティーズの年次国際学会「Digital Humanities 2012」への参加、2012年12月にフランス・パリのボンピドゥーセンターで行われた国際会議「ENMI2012」での講演、2013年2月にアメリカ合衆国・カルフォルニア大学バークレー校で開催された国際会議「Media Histories/ Media Theories & East Asia」での発表、2013年3月にフランス・リヨンの Atrium de l' Hôtel de Ville de Lyon で開催されたシンポジウム「Renaissance du Japon」での講演および、パリで行われたボンピドゥーセンターIRI との共同ワークショップでの発表等を通じて、デジタル・ヒューマニティーズやメディア・コンテンツに関する発表を国際的な場において行ってきた。

また、2011年10月にフランス・リヨン Villa Gillet で行われた「東大フォーラム 2011」でのシンポジウム「現代日本のメディア文化：カタストロフとメディア」を引き継ぎ、2012年11月には東京大学本郷キャンパスにてシンポジウム「映画、建築、記憶」を開催し、2012年12月には同じく本郷キャンパスにて、日本マス・コミュニケーション学会放送研究部会、NHK 放送文化研究所、放送人の会と共に、日本マス・コミュニケーション学会第33期第8回研究会(放送研究部会企画)「テレビ研究における『口述資料』『証言』の可能性——草創期『放送人』の相関関係を抽出する試みを例として——」

を開催した。

さらには、凸版印刷株式会社との共同研究「学内文化資源の横断的アーカイブに関する基盤研究」を通じての「附属図書館建設関連資料」のデジタル・アーカイブ化と横断型アーカイブ形成に係る基礎検証、東京国立近代博物館フィルムセンターおよび東京藝術大学大学院映像研究科とのコラボレーションによる「記録映画アーカイブ・プロジェクト」の推進、東京大学附属図書館「新図書館計画」と連動した「ハイブリッド図書館研究プロジェクト」など、メディア・コンテンツを批判的に分析し研究するための様々なプロジェクトを展開した。

3.3.2 総合防災情報研究センター

総合防災情報研究センターは、2008年4月1日に、東京大学の大学院情報学環、地震研究所、生産技術研究所の連携により、情報の概念を核とした文理融合型の総合的な防災研究機関として設立された。5年目を迎えた2012年には、研究面では、東日本大震災への対応とともに、首都直下地震災害の全体像の解明に向けて、災害情報研究会を開始した。教育面では、情報学府コース横断型科目である災害情報論を講義主体型から受講者が主体的に参加する実習型を継続するとともに、学部前期課程学生向けに全学自由研究ゼミナールを継続した。組織運営面では、「平成25年度 教員採用可能数再配分」で認められた教授1の運用を、運営委員会で審議し、学環人事教授会で承認を受けた。

以下、2012年度の主な活動をミッション毎に示す。

3.3.2.1 災害情報の生産－伝達－受容過程の解明

東日本大震災の復興に際しての住民の意志決定過程を解明し、復興に資する情報のあり方を検討するために宮城県女川町、気仙沼市、亘理町、ならびに福島県南相馬市を対象とした、復興定点調査を開始した。

このほか、CIDIR定期調査の第4回などを実施した。

3.3.2.2 首都直下地震災害の全体像の把握

「首都直下型地震における高速道路の津波被害の影響把握に関する研究」（NEXCO 中日本との共同研究）では、首都直下地震が発生した際に、沿岸部を通過する高速道路において、津波による人的被害を最小限にとどめるため、中高速道路への津波の影響の把握と、避難誘導計画における課題抽出および改善点の検討を行った。

また、災害時における首都圏固有の課題を抽出するとともに、災害情報研究会を開催した。

3.3.2.3 大学 SCM モデルの開発

概算要求「災害緊急情報を活用した大学防災情報システムの開発」では、緊急地震速報等の学内配信を実際に行うとともに、キャンパス内の建物強震観測の拡張を行った。

また、引き続き、大学本部の防災訓練の企画・運営に当たった。2012年度の訓練では、附属病院との合同訓練を実施するとともに、バリアフリー支援室や国際本部との連携も図った。訓練の目的として、病院への誘導の確認や病院と大学本部との問い合わせへの対応分担、応急救護所の設置、役員不在時の

本部運営等を検討し、訓練後の評価に基づく初動アクション・プランの改訂を訓練WGで行った。

3.3.2.4 災害情報教育の実施とプログラム開発

昨年に引き続き、情報学環各コース横断型の教育プログラムである「災害情報論」を開講した。昨年度から、講義主体型から東日本大震災におけるメディアの評価を実証的に行う実習型に変えた。各自の問題意識に基づく仮説を実証的に検証するグループワークを行った。

また、学部前期課程学生向けに全学自由研究ゼミナールを開講した。

いずれの科目も、震災から1年経過した本年度も多くの受講生が履修したが、災害情報論については実習型への変更も有効だったと考えている。

ライフライン・マスコミ連携講座に関しては、2012年度は「広報の一元化」と題して、3.11東日本大震災時の広報の実際と課題とを踏まえ、広報の一元化に向けての意見交換を行った。

3.3.3 ユビキタス情報社会基盤研究センター

ユビキタス情報社会基盤研究センターは、ユビキタスコンピューティング、ネットワーキングに関する世界最高の教育・研究拠点の中核を担うという目的を達成するため、以下のような研究を実施している。

(1) ユビキタス情報基盤技術の研究

これまでのCOEプログラムで確立した、ユビキタスコンピューティング分野の基盤技術である、ユビキタスID技術やT-Engine/T-Kernel、eTRONを用いた、インターネットの次の新世代の情報インフラを確立する。具体的には、「国際ユビキタスIDセンター」を世界各地に立ち上げ、本研究センターがこれらの連携の中核となる。

(2) ユビキタス情報社会研究

ユビキタス情報インフラの普及とともに、社会がどのように変化するかということ、実証的に研究し、かつそのために必要な新しい社会システムや制度、法律、ビジネスモデルを考案し、積極的に提案していく。

ユビキタスコンピューティング技術は、ICT分野において、我が国がリーダーシップをとって普及を進めている技術である。本センターにおける研究を推進することによって、情報科学、情報社会学等の、学術的な分野の成果を輩出することはもちろん、更にそれを社会基盤として実社会に普及させ、顕在化している様々な社会問題を解決することが期待される。

3.3.4 現代韓国研究センター

現代韓国研究センターは、東アジア地域の国際的協力と地域主義的連携を展望しつつ、日本と韓半島の相互協働とパートナーシップの多面的な展開の可能性を探求する必要性から、2010年度の研究テーマ「東アジア共同体と日韓パートナーシップ」と2011年度「現代韓国文化のアジア的還流と地域アイデンティティの可能性」に引き続き、2012年度の研究テーマを「日韓における民主主義の変容と世論をめぐって」と設定し、情報学環内で現代韓国の政治や情報、文化を中心とする学術交流と共同研究の

プログラムを策定・実施するとともに、東京大学内の現代韓半島研究に携わる諸組織・機関をネットワーク化し、研究者や大学院生の活発な相互連携を図り、韓国研究の水準の向上とその普及を目指した。2012年度開催された学術行事は、以下の通りである。

- (1) 2012年7月31日(火)、第一回研究会
- (2) 2012年10月12日(金)、第二回研究会
- (3) 2012年11月27日(火)、シンポジウム「在日コリアンの現在と未来」
- (4) 2013年1月11日(金)、第三回研究会
- (5) 2013年3月2日(土)、国際ワークショップ「東アジアの政権交代」
- (6) 2013年3月30日(土)、国際シンポジウム「日韓における民主主義の変容と世論をめぐって：新たな市民的公共圏と政治変動」
- (7) 2012年7月17日(火) / 7月21日(土) / 10月16日(火) / 11月21日(水) / 2013年1月30日(水)、大学院生ワークショップ

4 社会との交流

情報学環教員は、以下に述べるとおり、国際的委員会や政府委員会委員、産学協同等を通じて社会との交流を進めながら、社会への貢献を積極的に行っている。

4.1 国際的委員会

情報学環教員は、IEEE、ACM等の国際学会が開催する会議の運営委員等を通じて、国際的な研究の推進に貢献をしている。

相澤 清晴	APSIPA (Asia Pacific Signal Processing Association), Board of Governors
相澤 清晴	APSIPA Transactions on Signal and Information Processing, Editor
相澤 清晴	Journal of Visual Communication and Image Representation, Editorial Board
相澤 清晴	ACM Transactions on Multimedia Computing Communications and Applications, Associate Editor
相澤 清晴	IEEE Trans. Image Processing, Associate Editor
相澤 清晴	映像情報メディア学会英文誌, 編集委員
相澤 清晴	International Journal of Multimedia Retrieval, Editor
相澤 清晴	ACM Multimedia 2012, General Co-Chair
相澤 清晴	IEEE Visual Communication and Image Processing 2012, General Co-Chair
相澤 清晴	IEEE ICASSP 2012, Tutorial Co-Chair
五十嵐 健夫	ACM SIGGRAPH ASIA, Program Committee
五十嵐 健夫	ACM UIST, Program committee

五十嵐 健夫 Shape Modeling International, SMI, Program committee

五十嵐 健夫 ACM Symposium on Interactive 3D Graphics, Program committee

五十嵐 健夫 ACM CHI, Program committee, Associate chairs

池内 克史 特定非営利活動法人 ITS Japan, 理事

池内 克史 日本学術振興会「頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム」, 専門・評価部門専門員

池内 克史 IEEE ITSS, Board of Governors

池内 克史 2012 IEEE Fellow Committee, Fellow

池内 克史 International Journal of Computer Vision, 編集委員長

池内 克史 The 21st International Conference on Pattern Recognition, プログラム委員長

池内 克史 ACCV2012, 組織委員長

石崎 雅人 InterSpeech 2012, Reviewer

石崎 雅人 社会言語科学会, 研究大会発表賞選考委員

石崎 雅人 日本認知科学会, 運営委員

石崎 雅人 日本認知科学会, 論文賞選考委員

植田 一博 International Journal of Design Creativity and Innovation, editorial board member

大石 岳史 The 11th Asian Conference on Computer Vision (ACCV 2012), Publicity co-chair

大石 岳史 International Workshop on Depth Image Analysis (WDIA2012), Co-chairs

大谷 智子 The Greater Tokyo Area Multimedia/Vision Workshop, local chair

岡本 剛和 社会情報学会 研究活動委員会 情報政策研究会専門委員会, 委員

上條 俊介 ITS 世界会議, 国際プログラム委員副委員長

上條 俊介 IEEE-ITSC(The IEEE Intelligent Transportation Systems Conference), Program Chair for Asia/Australia

上條 俊介 IEEE ITSC2012 International Technical Program Committee, 国際委員

上條 俊介 ACECC Technical Committee WG16, 共同議長

上條 俊介 TC 204 Intelligent transport systems, 国際委員

上條 俊介 ITST2012(the 12th International Conference on ITS Telecommunications), 国際委員

上條 俊介 International Journal on ITS Research, ITS JAPAN, 国際論文誌 編集委員

上條 俊介 Journal on Multimedia Tools and Applications, Springer Publisher, 国際誌 編集委員

木宮 正史 社会科学院 (韓国), 客員研究員

木宮 正史 韓国ソウル大学統一平和研究院, 編集委員

木宮 正史 日韓有識者間政策対話, 代表世話人

木宮 正史 Korean National Strategy Institute Asiatic, Editorial Advisory Board

越塚 登 IoT 2012 Conference, Technical Program Committee

越塚 登 ITU-T SG16, "H.IDscheme" Editor

越塚 登 ITU-T SG16, "H.IRP" Editor

佐倉 統	East Asian Science, Technology and Society, Advisory Board
須藤 修	International CIO Academy, Adviser
須藤 修	Heidelberg Club International (HCI) organized by the Mayor of Heidelberg City (Germany), Member
須藤 修	Living Labs Global Award 2011(USA), The Jury Member
田中 秀幸	社会情報学会, 編集委員会委員
田中 秀幸	日本経済政策学会, 国際会議企画委員会委員
中尾 彰宏	IEEE Cloud Computing, Board member
西垣 通	International Society for Information Studies, Vice-President
藤本 徹	Games and Culture Journal, Reviewer
藤本 徹	International Journal on Multidisciplinary Approaches to Innovation, Editorial Board Member
山口 いつ子	Duke University School of Law, Visiting Professor
山口 いつ子	The AHRB Research Centre for Studies in Intellectual Property and Technology Law, The University of Edinburgh, Advisory Board Member of "SCRIPT-ed" Journal
暦本 純一	Ubicomp 2013, Program Chair

4.2 政府・自治体委員会

情報学環教員は、政府・自治体委員会の委員等としても活躍し、情報通信などにかかわる政策立案等に参画することで、社会に貢献している。

<政府>

池内 克史	総務省独立法人評価委員会情報通信・宇宙開発分科会情報通信研究機構部会 専門委員
池内 克史	文部科学省科学技術政策研究所科学技術動向研究センター 専門調査員
石川 雄章	国土交通省 下水道における ICT 活用に関する検討会 委員
石川 雄章	国土交通省 東北観光博 IT 統括マネジメントチームアドバイザー
大原 美保	内閣府 首都直下地震対策検討ワーキンググループ 委員
大原 美保	内閣府 首都直下地震モデル検討会 委員
越塚 登	総務省 G 空間×ICT 推進会議・委員
越塚 登	内閣官房 IT 戦略本部 電子行政オープンデータ実務者会合・委員
越塚 登	内閣官房 IT 戦略本部 電子行政オープンデータ実務者会合・データ WG 委員 (主査)
越塚 登	国土交通省 歩行者移動支援有識者委員会委員
越塚 登	内閣官房 IT 防災ガイドライン推進協議会・構成員
越塚 登	経済産業省 公共データワーキンググループ構成員 (IT 融合)
坂村 健	文部科学省 平成 24 年度 科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞審査部会 委

員

坂村 健 国土交通省 交通政策審議会 臨時委員
坂村 健 国土交通省 社会資本整備審議会 臨時委員
坂村 健 国土交通省 社会資本整備審議会河川分科会 臨時委員
坂村 健 国土交通省 ICT を活用した歩行者の移動支援に関する勉強会 委員（座長）
佐倉 統 経済産業省資源エネルギー庁 原子力広聴・広報アドバイザー・ボード委員
須藤 修 内閣官房「情報セキュリティ政策会議技術戦略専門委員会」 委員
須藤 修 総務省情報通信審議会 委員
須藤 修 総務省情報通信審議会「情報通信政策部会」 部会長
須藤 修 総務省情報通信審議会「情報通信技術分科会」 委員
須藤 修 総務省「放送サービスの高度化に関する検討会」 座長
須藤 修 総務省「ICT 成長戦略会議」 構成員
須藤 修 総務省「ICT 生活資源対策会議」 座長
須藤 修 総務省「ICT まちづくり推進会議」 構成員
須藤 修 総務省「ICT 超高齢社会構想会議」 構成員
須藤 修 総務省「予算執行監視チーム」 外部有識者
須藤 修 総務省「自治体クラウド推進本部」 有識者懇談会座長
須藤 修 総務省「災害に強い電子自治体に関する研究会」 座長
須藤 修 総務省「災害に強い電子自治体に関する研究会 ICT 利活用ワーキンググループ」 座長
須藤 修 総務省「地方公共団体における番号制度の活用に関する研究会」 座長
須藤 修 総務省「ICT を活用した街づくりとグローバル展開に関する懇談会」 構成員
須藤 修 総務省「官民連携事業評価委員会」 委員
須藤 修 総務省「緑の分権改革推進会議」 構成員
須藤 修 総務省「緑の分権改革推進会議」 ICT 分科会座長
須藤 修 総務省「地域 ICT 利活用モデル構築事業評価会」 委員
須藤 修 総務省「地域情報化評価会」 構成員
須藤 修 総務省「地球温暖化対応 ICT イノベーション推進事業」 専門評価委員
竹内 文乃 環境省 微小粒子状物質等疫学調査実施班（肺機能発達への影響調査グループ）
田中 秀幸 総務省 無線 LAN ビジネス研究会構成員
橋元 良明 総務省 情報通信白書編集委員
目黒 公郎 総務省 G 空間×ICT 推進会議 委員
山口 いつ子 総務省情報通信政策研究所 情報通信法学研究会構成員

<自治体>

坂村 健 東京都 東京都 IC タグ実証実験実行委員会 委員
坂村 健 東京都 「東京ユビキタス計画・銀座」 地区協議会 会長

坂村 健	神戸ビエンナーレ アート イン コンテナ コンペティション 審査員
坂村 健	高知県梶原町 梶原町環境モデル都市推進協議会 アドバイザー
坂村 健	高知県梶原町 ゆすはら未来大使
須藤 修	福島県 IT 推進アドバイザー
須藤 修	高知県「電子自治体推進協議会」 顧問
須藤 修	甲府市「甲府 PMO 委員会」 副委員長
須藤 修	鳥取県「地域活性化総合特区推進協議会」 アドバイザー
須藤 修 究委員会委員	東京消防庁 大規模災害時における災害時要援護者の被害軽減方策に関する調査研究委員会委員
須藤 修	厚木市 北部地区公園整備検討会副委員長
水越 伸	文京区 文京区アカデミー推進協議会長

4.3 学協会活動

情報学環教員は、国内外の関係学会の活動に積極的に参加しており、会長や副会長など、学会の要職等を通じて学協会活動に貢献している。

相澤 清晴	超臨場感産学官コミュニケーションフォーラム 映像分科会 超高精細 WG 委員長
相澤 清晴	柏の葉キャンパスシティ IT コンソーシアム (KACITEC) 副理事長
相澤 清晴	日本学術会議 連携会員
相澤 清晴	電気電子情報学術振興財団 評議員
相澤 清晴	日本バーチャルリアリティ学会 理事
相澤 清晴	電子情報通信学会 ハンドブック/知識ベース委員会 幹事長
相澤 清晴	映像情報メディア学会 評議員
相澤 清晴	電子情報通信学会 出版委員会 幹事
相澤 清晴	画像符号化シンポジウム・映像メディアシンポジウム 運営委員長
池内 克史	特定非営利活動法人 ITS Japan 理事
池内 克史	NEXCO 中日本新東名夢ロード懇談会 委員
池内 克史	マイクロソフトリサーチアジア 技術アドバイザー
池内 克史	日本学術振興会 博士課程教育リーディングプログラム 委員
池内 克史 委員	独立行政法人産業技術総合研究所研究ユニット評価委員会 (知能システム研究部門)
池内 克史	日本 VR 学会デジタルミュージアム研究委員会 研究委員
池内 克史	日本情報処理学会 理事
池内 克史	情報処理学会 フロンティア領域委員会 委員長
池内 克史	情報処理学会 CVIM 研究会 運営委員

石井 健太郎 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会 2012 プログラム委員

石井 健太郎 2012 年度人工知能学会全国大会(第 26 回) プログラム委員

石井 健太郎 情報処理学会第 75 回全国大会 座長

石川 雄章 ジャパンクラウドコンソーシアム 幹事

石崎 雅人 国際標準化規格委員会 (TC37/SC4) 国内対策委員

石崎 雅人 情報処理学会 自然言語処理研究会 運営委員

石崎 雅人 人工知能学会 言語音声理解と対話処理研究会 主査

植田 一博 日本認知科学会 常任運営委員

植田 一博 HAI2012 シンポジウム プログラム委員

大石 岳史 IAPR TC(Technical Committee)-19 Vice-Co-Chair

大石 岳史 Integrated Media Systems Center, University of Southern California Advisory Board Member

大谷 智子 日本バーチャルリアリティ学会「情報技術と文化の融合」調査研究委員会 幹事

大谷 智子 VR 文化フォーラム「さよなら CABIN」シンポジウム実行委員会 委員

大原 美保 土木学会東日本大震災報告書編纂委員会 編纂委員会幹事

大原 美保 日本学術振興会「博士課程リーディングプログラム」委員会 書面レビュー委員

大原 美保 アジア政経学会 編集担当理事

大原 美保 日本学術振興会・海外学術調査社会科学系小委員会 科学研究費委員会専門委員

大原 美保 日本学術会議 連携会員

岡本 剛和 情報通信政策研究所 特別上級研究員

加藤 綾子 情報文化学会(JICS) 大会実行委員会・委員

加藤 綾子 日本ポピュラー音楽学会(JASPM) 研究活動委員会・委員

上條 俊介 独立行政法人新エネルギー・産業技術総合開発機構 (NEDO) Reviewer

上條 俊介 社団法人 土木学会 技術推進機構 実践的 ITS 研究委員会 委員

上條 俊介 (独) 国際協力機構 (JICA) ITS 国内支援委員会 委員

上條 俊介 社団法人 電子情報通信学会 ITS 研究専門委員会 専門委員

上條 俊介 社団法人 電子情報通信学会 ソサイティ論文誌 和文誌 編集委員

木宮 正史 アジア政経学会 評議員

木宮 正史 現代韓国朝鮮学会 会長

木宮 正史 アジア政経学会 編集委員

木宮 正史 日本国際政治学会 編集責任者

越塚 登 T-Engine フォーラム 学術教育 SWG・主査

越塚 登 公益財団法人 佐藤陽国際奨学財団 選考委員

越塚 登 独立行政法人 情報処理推進機構 (IPA) 未踏プロジェクト・プロジェクトマネージャー

越塚 登 一般社団法人 住宅履歴情報蓄積・活用推進協議会 住宅履歴情報蓄積・活用推進会

議・委員

越塚 登	オープンデータ流通推進コンソーシアム 理事 (会長代理)
越塚 登	オープンデータ流通推進コンソーシアム 技術委員会委員 (主査)
坂村 健	日本学術会議 会員
坂村 健	日本経済新聞社 日経優秀製品・サービス賞 審査員
坂村 健	日経 BP 社 日本 イノベーター大賞 選考委員
坂村 健	株式会社キャンディッド・コミュニケーションズ 日本に新しい大人をつくるネットワーク 『club willbe』 発起人
坂村 健	株式会社リコー RICOH & Java(TM) Developer Challenge Plus 2012 (JAVA コンテスト) 審査員
坂村 健	公益財団法人佐藤陽国際奨学財団 運営諮問委員
坂村 健	公益財団法人本田財団 フェロー
坂村 健	公益財団法人セコム科学技術振興財団 評議員
坂村 健	公益財団法人伝統文化活性化協会 伝統文化活性化政策調査研究委員会 委員
坂村 健	財団法人国土技術研究センター (JICE) 研究顧問
坂村 健	財団法人河川情報センター 理事 (非常勤)
坂村 健	財団法人 ひょうご情報教育機構 ダブルディグリー・プログラム プログラムアドバイザー
坂村 健	一般社団法人日本文化芸術機構 (Japan Institute) 顧問
坂村 健	社団法人 日本プロジェクト産業協議会 (JAPIC) アドバイザー
坂村 健	一般社団法人 住宅履歴情報蓄積・活用推進協議会 委員 議長代理
坂村 健	一般社団法人日本建築学会 ユビキタス情報基盤構築による震災復興・スマートシティ特別研究委員会 委員長
坂村 健	一般社団法人日本電気計測器工業会 賛助会員 T-Engine フォーラム (会長 坂村健)
坂村 健	一般社団法人情報サービス産業協会 (JISA) JISA Awards 2012」選考委員会 委員長
坂村 健	一般社団法人組込みシステム技術協会 (JASA) 特定非営利活動法人 TOPPERS プロジェクト 顧問
坂村 健	社団法人 日本プロジェクト産業協議会 (JAPIC) 日本創生委員会 委員
坂村 健	公益財団法人東京都道路整備保全公社 (総務省所轄?平成 25 年度) 社会基盤サポート事業コンソーシアム運営委員会 委員
坂村 健	学校法人 東洋大学 情報系学部構想委員会 委員
佐倉 統	科学基礎論学会 評議委員
佐倉 統	日本生命倫理学会 編集委員会委員
佐倉 統	日本子ども学会 理事
須藤 修	国立情報学研究所 客員教授

須藤 修 日本学術会議 連携会員
 須藤 修 日本学術会議「情報学委員会安全安心社会と情報技術分科会」 委員
 須藤 修 日本学術会議「経済学委員会人口変動と経済分科会」 委員
 須藤 修 日本学術会議「社会学委員会・法学委員会・政治学委員会・経済学委員会・経営学委員会合同国民目線による統計調査・意識調査の方向性検討分科会」 委員
 須藤 修 情報文化学会 会長
 須藤 修 情報文化学会第 20 回全国大会 実行委員長
 須藤 修 情報文化学会第 18 回情報文化学会賞選考委員会 委員
 須藤 修 情報社会学会 理事
 須藤 修 第 19 回社会情報システム学シンポジウム プログラム委員
 須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」 推進委員
 須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」 幹事
 須藤 修 独立行政法人情報通信研究機構・総務省「新世代ネットワーク推進フォーラム」 アセスメントワーキンググループ主査
 須藤 修 独立行政法人産業総合研究所社会知能技術研究ラボ 評価委員
 須藤 修 財団法人自治体衛星通信機構理事会 評議員
 須藤 修 財団法人国際 I T 財団 評議員
 須藤 修 社団法人日本情報システム・ユーザ協会「イノベーション経営カレッジ委員会」 委員
 須藤 修 一般社団法人セコム科学技術振興財団 評議員
 須藤 修 全国地域情報化推進協議会「技術専門委員会」 アドバイザー
 須藤 修 タイムビジネス協議会 顧問
 須藤 修 **Open Government Cloud** コンソーシアム 代表幹事
 須藤 修 一般社団法人「日本 IC カード利用促進協議会」 会長
 須藤 修 「わたしたち生活者のための共通番号推進協議会」 幹事
 須藤 修 「日本アカデミア」 幹事
 須藤 修 NPO「高度 I T 人材育成アカデミー」 副理事長
 須藤 修 NPO「市民が主役の地域情報化推進協議会」 理事長
 須藤 修 日本学術会議「サービスサイエンス分科会」 委員
 鷹野 澄 日本災害情報学会 広報委員会副委員長
 竹内 文乃 統計関連学会連合大会 運営委員
 田中 秀幸 財団法人地方自治情報センター 災害に強い地方公共団体の情報システムのあり方に関する調査研究委員会委員長
 田中 秀幸 独立行政法人情報処理推進機構 情報セキュリティ被害と対策に関する委員会委員

長

田中 秀幸 特定非営利法人横断型基幹科学技術研究団体連合 理事
田中 秀幸 社会情報学会 理事
田中 秀幸 社会情報学会 研究活動委員会副委員長
田中 秀幸 日本経済政策学会 理事
田中 秀幸 日本経済政策学会 大会企画委員会委員
田中 秀幸 社会情報学会 大会企画委員会委員
田中 秀幸 社会・経済システム学会 理事
中尾 彰宏 電子情報通信学会 NS 研究会 専門委員
中尾 彰宏 電子情報通信学会 NV 研究会 専門委員
中尾 彰宏 CFI TPC
中尾 彰宏 電子情報通信学会 CQ 研究会 専門委員
西垣 通 生命誌研究館 評価委員
西垣 通 朝日文化財団 評議員
西垣 通 パリ日本文化会館 運営審議会委員
西垣 通 本田財団 理事
西垣 通 情報メディア学会 会長
西垣 通 社会情報学会 理事
西垣 通 情報文化学会 理事
丹羽 美之 公益財団法人放送文化基金 放送文化基金賞専門委員
丹羽 美之 一般社団法人日本民間放送連盟 日本民間放送連盟賞（テレビ部門）中部・北陸地区
審査会審査委員
丹羽 美之 公益財団法人民間放送教育協会 評議員
丹羽 美之 特定非営利活動法人放送批評懇談会 理事（選奨事業委員会・テレビ部門委員長）
丹羽 美之 日本マス・コミュニケーション学会 放送部会委員
丹羽 美之 日本マス・コミュニケーション学会 編集委員会委員
橋元 良明 日本子ども学会 理事
橋元 良明 日本社会言語科学会 理事
馬場 章 財団法人科学技術融合振興財団 科学技術の融合を促進させる研究課題に対する助
成事業と、その成果の普及啓発事業 理事
藤本 徹 特定非営利活動法人 Educe Technologies 理事
藤本 徹 コンピュータ利用教育学会（CIEC） 理事
藤本 徹 日本教育工学会 大会企画委員
藤本 徹 日本デジタルゲーム学会 大会実行委員
藤本 徹 日本デジタルゲーム学会 編集委員
藤本 徹 日本デジタルゲーム学会 広報委員

目黒 公郎	(独) 日本学術振興会 「科学研究費委員会」 専門委員
目黒 公郎	(独) 防災科学技術研究所 「災害リスク情報プラットフォームの利活用推進に関する委員会」 委員
目黒 公郎	高知県津波対応委員会 委員
目黒 公郎	川崎市宅地耐震化推進事業検討委員会 委員
目黒 公郎	(社) 日本マリーナ・ビーチ協会 「水門・陸閘等の効果的な管理運用検討委員会」 委員
目黒 公郎	日本自然災害学会 「学会賞審査委員会」 委員
目黒 公郎	(社) 土木学会 「調査研究部門地震工学委員会 日本土木史地震工学部門編纂小委員会」 委員長
目黒 公郎	(社) 土木学会 「日本土木史編集特別委員会」 委員兼幹事
目黒 公郎	日本学術会議 連携会員
山口 いつ子	日本社会情報学会 監事

4.4 他組織役職

情報学環教員は、公益団体や他大学の役員・委員などとして、積極的に社会貢献を行っている。

相澤 清晴	日本工業技術振興協会 次世代画像入力ビジョンシステム部会 委員長
相澤 清晴	foo.log 株式会社 取締役
相澤 清晴	NHK 放送技術研究所 NHK 放送技術研究委員会委員
相澤 清晴	マイクロソフトリサーチ AAC
相澤 清晴	学位授与機構 電気電子部会専門委員
朝倉 敬子	慶應義塾大学医学部 非常勤講師
石井 健太郎	慶應義塾大学 理工学部 訪問研究員
石井 健太郎	科学技術振興機構 ERATO 五十嵐デザインインタフェースプロジェクト 研究推進委員
植田 一博	東京財団・仮想制度研究所 フェロー
越塚 登	中央大学 非常勤講師 (大学院理工学研究科)
越塚 登	横須賀テレコムリサーチパーク YRP ユビキタス・ネットワーキング研究所・副所長
越塚 登	東京大学教養学部 非常勤講師
越塚 登	東京大学理学部 非常勤講師
越塚 登	内田洋行 デジタルコンテンツの質の保証に関する調査研究 (文部科学省委託事業)・調査研究委員会・委員
越塚 登	NTT データ経営研究所 実践的 ICT 人材育成推進委員会に関する産学連携 ICT 人材育成推進ワーキング委員 (総務省委託事業)
越塚 登	NTT データ経営研究所 実践的 ICT 人材育成推進委員会委員 (総務省委託事業)

越塚 登 三菱総総合研究所 公共情報交換標準スキームに関する検討委員会・委員（経済産業省委託事業）（主査）

越塚 登 日本工営 情報流通連携基盤の地盤情報における実証・実証会合・地盤情報流通連携基盤システム検討委員会・委員（総務省委託事業）

越塚 登 野村総合研究所 情報流通連携基盤の生鮮農産物トレーサビリティ情報における実証検討委員会・委員（総務省委託事業）

越塚 登 横須賀テレコムリサーチパーク 公共交通実証に係る有識者会合・委員（総務省委託事業）

越塚 登 横須賀テレコムリサーチパーク ユビキタス救急医療情報推進協議会・委員（総務省委託事業）

坂村 健 YRP ユビキタス・ネットワーキング研究所 所長

坂村 健 T-Engine Forum 会長

坂村 健 オープンデータ流通推進コンソーシアム 顧問

佐倉 統 中山科学振興財団 常任選考委員

佐倉 統 独立行政法人科学技術振興機構 日本科学未来館企画展「The Money」（仮）基本設計業務提案審査委員会委員

佐倉 統 株式会社国際電気通信基礎技術研究所脳情報通信総合研究所 脳情報解析研究所動的脳イメージング研究室客員研究員

佐倉 統 科学研究費委員会専門委員 独立行政法人日本学術振興会

佐倉 統 大学共同利用機関法人自然科学研究機構生理学研究所多次元共同脳科学推進センター 客員教授

佐倉 統 独立行政法人理化学研究所理化学研究所脳科学総合研究センター 客員主管研究員

佐倉 統 独立行政法人科学技術振興機構 日本科学未来館企画展示ゾーン等活用事業審査委員会委員

佐倉 統 独立行政法人科学技術振興機構 科学コミュニケーションセンターフェロー

佐倉 統 独立行政法人科学技術振興機構研究開発戦略センター 「ヒトと社会」分野俯瞰委員

佐倉 統 財団法人国際高等研究所 研究プロジェクト「老いを考える」参加研究者

佐倉 統 独立行政法人科学技術振興機構 日本科学未来館企画展「おかね(仮)」展示制作業務総合評価委員会委員

園田 茂人 松下幸之助記念財団 国際スカラーシップ審査委員会委員

園田 茂人 人事院 法務省専門職員採用試験試験専門委員

園田 茂人 人事院 国家公務員採用総合職試験（人間科学）試験専門委員

園田 茂人 朝日新聞 朝日アジアフェロー

園田 茂人 科学技術振興機構・平成 24 年度テニユア・トラック普及・定着事業 個人選抜型選考委員（社会科学総合部会）

園田 茂人 アジア調査会 アジア調査委員会委員

鷹野 澄	IT 強震計研究会 代表
鷹野 澄	IT 強震計コンソーシアム 代表
田中 秀幸	東京工業大学「エージェントベース社会システム科学研究センター (CABSSS)」運営委員会 運営委員会委員
田中 秀幸	東京工業大学 非常勤講師
中尾 彰宏	情報通信研究機構 招へい専門員
丹羽 美之	CS テレ朝チャンネル 番組審議会委員
丹羽 美之	株式会社 mmbi 番組審議会副委員長
林 香里 委員	BPO 放送倫理・番組向上機構 放送と人権等権利に関する委員会 (放送人権委員会)
藤本 徹	東京工芸大学 非常勤講師
藤本 徹	立命館大学ゲーム研究センター 客員研究員
藤本 徹	NPO 法人産学連携推進機構 客員研究員
堀 里子 委員	独立行政法人医薬品医療機器総合機構 独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門
堀 里子	特定非営利活動法人 医薬品ライフタイムマネジメントセンター 理事
米 海鵬 研究推進委員	独立行政法人科学技術振興機構 ERATO 五十嵐デザインインタフェースプロジェクト
目黒 公郎	国土交通省建築研究所 非常勤講師
森本 一夫	日本イスラム協会 監事
森本 一夫	日本オリエント学会 副編集委員長
森本 一夫	日本中東学会 理事
山口 いつ子 委員会委員	一般社団法人 モバイルコンテンツ審査・運用監視機構 (EMA) 審査・運用監視委
暦本 純一	ソニーコンピュータサイエンス研究所 副所長
暦本 純一	多摩美術大学 客員教授
暦本 純一	放送大学 客員教授

4.5 セミナー・研究会・公開講座

情報学環・学際情報学府の研究・教育活動の成果を公表ために、別表に示すようなさまざまな公開のイベントを実施した。

入試説明会は、学環・学府の全体像を受験生によく理解してもらうことに留意し、学環長に学環全体を、そして各コース長にコースの魅力を存分に語ってもらう時間を設けた。また、各研究室や研究プロジェクトを教員や学生が紹介し、受験生と直接交流する機会を設けた。大変熱心な議論が各所で展開され、イベント終了を宣するのが困難なほどであった。

今年度はホームカミングデイを拡充し、学環から五十嵐健夫教授、暦本、工学系研究科から荒川忠

一教授、学環卒業生でもある筧 康明 慶應義塾大学境情報学部准教授の4名による講演会を行った。参加者数も例年にないほどであり、教育部交流会との合同での懇親会でも学環関係者の交流が深められた。

学環の特徴でもあるさまざまなプロジェクトは、公開研究会、シンポジウムなどを通して学際情報学・社会情報学の研究情報を発信している。下記がその一覧（現在稼働しているもの）である。いずれも学際的なチャレンジをしている営みだといえる（学環ホームページ上に公開されたプロジェクトのみで、全てを網羅していないことを申し添えておく）。

【シンポジウム】

NO	実施日 場所	タイトル 主要登壇者
1	2012. 5.19 福武ホール	2012 年先端表現情報学コースシンポジウム 目黒 公郎（東京大学大学院情報学環・先端表現情報学コース長） 大原 美保（東京大学大学院情報学環 准教授） 五十嵐健夫（東京大学大学院情報学環 教授）ほか
2	2012. 5.25 工学部 2 号館	情報学環・空間情報科学研究センターシンポジウム「空間を知る—空間・情報・人間」 松本洋一郎（東京大学理事・副学長） 坂村 健（東京大学大学院情報学環・副学環長／ユビキタス情報社会基盤研究センター長・教授） 浅見泰司（東京大学空間情報科学研究センター・センター長・教授） 柴崎亮介（東京大学空間情報科学研究センター・教授） 越塚 登（東京大学大学院情報学環・教授） 山田育穂（東京大学大学院情報学環・准教授） 石川 徹（東京大学空間情報科学研究センター・准教授）
3	2012. 6.29 福武ホール	日本学術会議情報学委員会シンポジウム「震災直後および復興期における情報学の役割」 喜連川優（東京大学 生産技術研究所・教授・第三部会員・情報学委員会副委員） 坂村健（東京大学 大学院情報学環・教授・第三部会員・情報学委員会ユビキタス状況認識社会基盤分科会委員長） 徳田英幸（慶應義塾大学 大学院政策・メディア研究科・教授） 萩田紀博（株式会社国際電気通信基礎技術研究所 知能ロボティクス研究

		<p>所・所長)</p> <p>野城智也(東京大学 生産技術研究所・教授・連携会員)</p> <p>嶋谷吉治(KDDI 株式会社 取締役執行役員専務技術統括本部長)</p>
4	<p>2012. 7. 16</p> <p>福武ホール</p>	<p>日韓国際シンポジウム「放送の公正性とは何かー韓国放送局ストライキから考える日韓メディア産業の未来」</p> <p>林香里(東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授)</p> <p>李康澤(韓国・全国言論労働組合委員長、KBS プロデューサー)</p> <p>黄大峻(韓国・PD 連合会会長、KBS プロデューサー)</p> <p>永田浩三(武蔵大学社会学部メディア社会学科教授)</p> <p>玄武岩(北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授)</p>
5	<p>2012. 7. 18</p> <p>生産技術研究所 コンベンション・ ホール</p>	<p>第 15 回東京大学空間情報科学研究センターシンポジウム(GSIS シンポジウム)</p> <p>浅見泰司(東京大学 空間情報科学研究センター長)</p> <p>Alan Murray(アリゾナ州立大学, GeoDa センター 教授)</p> <p>田中耕市(徳島大学大学院 ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部 准教授)</p> <p>原田 豊(科学警察研究所 犯罪行動科学部長)</p> <p>中島直樹(九州大学病院 メディカル・インフォメーションセンター 准教授)</p> <p>瀬崎 薫(東京大学 空間情報科学研究センター 教授)</p> <p>今井 修((有)ジー・リサーチ) ほか</p>
6	<p>2012. 11. 17</p> <p>福武ホール</p>	<p>シンポジウム「映画、建築、記憶」</p> <p>諏訪敦彦氏(映画監督)</p> <p>五十嵐太郎氏(建築評論家)ほか</p>
7	<p>2012. 11. 23</p> <p>福武ホール</p>	<p>第 1 回 ITASIA/東京大学大学院情報学環 ITASIA 学会</p>
8	<p>2012. 11. 24</p> <p>福武ホール</p>	<p>公開フォーラム:震災の記録をどう活用するかー膨大な映像記録を中心に</p>

		御厨貴(東京大学客員教授) 高野明彦氏(国立情報学研究所教授) 玉井克哉氏(東京大学先端科学技術研究センター教授) 目黒公郎氏(東京大学生産技術研究所教授) 柳与志夫氏(国立国会図書館電子情報部司書監) 吉見俊哉(東京大学教授・副学長) ほか
9	2012. 11. 27 駒場キャンパス 18号館ホール	シンポジウム: 在日コリアンの現在と未来外村大(東京大学・准教授)金容琥(東北亜歴史財団政策企画室長)木宮正史(東京大学現代韓国研究センター副センター長)田中宏(一橋大学・名誉教授)徐阿貴(お茶の水女子大学・研究員)柳赫秀(横浜国立大学・教授)三ツ井崇(東京大学・准教授)金顯哲(東北亜歴史財団研究委員)ほか

【研究会・講演会】

1	2012. 6. 20 山上会館	災害情報研究会「南海トラフの巨大地震による最大クラスの想定とは何か」
2	2012. 7. 24 Fukutak Learning Studio	ITASIA Colloquium: Talks by professor D'Souze and Professor Sand
3	2012. 7. 31 本館6階実験室	2012年度現代韓国研究センター第一回研究会「情報行動の日韓比較」
4	2012. 8. 30 福武ホール	Greater Tokyo Area multimedia/vision workshop
5	2012. 12. 5 工学部2号館	Microsoft Research Forum & GCL Program of School of IST of the University of Tokyo 講演会
6	2013. 1. 30(予定) 工学部2号館	「日台メディア・ジャーナリズム研究」学生交流会

【プロジェクト関連】

JST ERAT O五	2012. 12. 19	最終成果報告会
-------------------	--------------	---------

十嵐 デザイ ンイン タフェ ースプ ロジェ クト		
記録 映画	2012. 6. 17	第 8 回ワークショップ「空に、地下にのびる都市ー東京オリンピック前の建設記録映画」
アーカ イブ・ プロジ ェクト	2013. 1. 26(予 定)	第 9 回ワークショップ「フィルムを捨てないで！ー記録映画の保存と活用」
TV ア ーカイ ブ・ プロジ ェクト	2012. 4.20	第 4 回「みんなでテレビを見る会」
	2012. 5.25	第 5 回「みんなでテレビを見る会」
	2012. 6.22	第 6 回「みんなでテレビを見る会」
	2012. 7.20	第 7 回「みんなでテレビを見る会」
	2012. 11.12	第 8 回「みんなでテレビを見る会」
	2012. 12. 10	第 9 回「みんなあでテレビを見る会」
	2013. 1. 25(予 定)	第 10 回「みんなでテレビを見る会」
メディ ア研 究の つどい	2012. 5. 9	研究会「韓国の選挙番組の現況を意義」
	2012. 5. 16	研究会「放送局ストライキから見る韓国のメディアと社会」
	2012. 7.11	研究会「新聞記者今昔ーデジタル発信時代のあるべき姿とは」
	2012. 12. 6	研究会「現代日本のメディア・アクティビズム」
その 他	2012. 12.6～ 12.10 工学部2号館ほ か	東京大学第 14 回制作展 “いとをかし”

4.6 出版活動

2004年の社会情報研究所との統合後は、社会情報研究所で出されていた定期刊行物と情報学環・学際情報学府の定期刊行物を統合し、新たな出版体制を整備しつつある。その中心となるのは、以下の5つの刊行物である。

- (1)研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』（年2回刊）
- (2)調査実験紀要『同情報学研究・調査研究編』（年1回刊）
- (3)英文紀要（オンライン論文サイト"iii Online Research Journal"への移行を検討中）
- (4)年報『東京大学大学院情報学環年報』（年1回刊）
- (5)ニューズレター『学環学府』

これらはいずれも、情報学環にとって基幹的な出版活動であり、相互に役割を分担しながら有機的に結びついている。

表 4-6-1 情報学研究/同調査研究編の発行状況

東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究	
76号	2009年3月
77号	2009年8月
78号	2010年3月
79号	2010年11月
80号	2011年3月
81号	2011年10月
82号	2012年3月
83号	2012年10月
84号	2013年3月
情報学研究・調査研究編	
26号	2010年3月
27号	2011年3月
28号	2012年3月
29号	2013年3月

4.6.1 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』

『情報学環紀要 情報学研究』は、2004年の情報学環と社会情報研究所との統合により、旧社会情報研究所の『社会情報研究所紀要』を改称したものである。

同紀要は、1952年に『新聞研究所紀要』として創刊されて以来、新聞学、世論研究、マス・コミュニケーション論、ジャーナリズム、メディア史、マス・メディアの制度と受容、社会的コミュニケーションの諸過程、災害や地域情報化などの政策課題、高度情報化や新しいメディア接触と情報行動などを理論的、実証的に扱う多くの論考を掲載し、半世紀以上にわたって国内外の専門研究者や学生に多くの影響を及ぼしてきた。

社会情報研究所と情報学環との統合に際し、このような歴史と定評のある研究誌としての紀要の学問的な伝統と蓄積を、情報学環での教育研究基盤のうえでさらに発展させたいと考えた。このような視点から、『情報学環紀要 情報学研究』を、これまでの伝統を維持しつつも、理工学系において発展してきた情報学の基礎理論や応用分野の研究と融合した新しい研究成果が共に公開されていく場として位置づけた。

そのために、本紀要は、巻頭エッセイの「思考の環」、巻末の「フィールド・レビュー」をはじめ、情報学環教員の研究論文や学際情報学府博士課程院生の査読論文（博士課程在籍者の投稿論文は、外部査読者を含む複数の審査員による審査の上、掲載を許可している）などさまざまなセクションから複層的に構成されている。大学院情報学環において育まれる研究の創造的成果の主要な発表媒体として、また新たな学問的視座や調査研究の発表の場として、本紀要は内外から高い評価を得ている。

4.6.2 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』

『情報学環紀要情報学研究・調査研究編』は、1992年から刊行されてきた『社会情報研究所調査研究紀要』を継承するものである。

『社会情報研究所調査研究紀要』は、同研究所におけるさまざまな社会調査、情報行動や災害情報、インターネットなどに関わる多くの調査の成果が発表されていく主要な媒体であった。これらの社会調査は、関係する研究者や学会、自治体などで高く評価されているものが多く、そのデータの価値が高く評価されていた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環と社会情報研究所との統合後は、これまで主要な柱をなしてきた情報行動や災害行動の調査の成果に加え、情報工学や情報科学との融合分野での実験の成果、文理相互浸透分野でのフィールドワーク、情報教育分野での実験、デジタル・アーカイブに関する諸実践、デザイン表現論などの調査や実験、実践の成果が多分野にわたって発表される媒体となっている。

2013年3月に刊行されたNo.29には、「2012年 日本人の情報行動—橋元研究室・総務省情報通信政策研究所共同研究」「中高生のスマートフォン利用と有害情報接触—東京23区親子訪問留置調査—」「若者のサブカルチャー実践とコミュニケーション—2010年練馬区「若者文化とコミュニケーションについてのアンケート」調査」「緊急地震速報に対する住民意識の経年変化に関する分析—全国定期的調査結果(2009-2012)に基づいて—」「シンポジウム報告『映画、建築、記憶』—東日本大震災以降の表象可能性を考える—」「中国における日本イメージ及びその構造モデルに関する検討—2012年中国全国調査の結果に基づく考察—」の6本の論文が掲載された。

4.6.3 『英文紀要』

『情報学環英文紀要』は、前記の『社会情報研究所紀要』が発展していく中で研究の国際化、グローバル化に対応して独立したものであった。『英文紀要』は、基本的には研究者の個人研究論文とともに、社会情報研究所で開催された国際的なシンポジウムなどの記録を収録していた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環・社会情報研究所の統合後は、情報、メディア、コミュニケーションをめぐるより広い学問分野の知見が掲載できるように体裁をあらため、和文紀要の一部に英語論文を掲載するとともに、英語のウェブサイトに英語論文および和文論文の英訳を掲載している。

4.7 定期刊行物・ホームページ

4.7.1 定期刊行物

情報学環・学際情報学府では、日々の活動を学内外の方々に広く知ってもらうため、ニューズレター『学環学府』を発行している。『学環学府』は、情報学環教職員や学生だけでなく、学内他部局や本部役員をはじめ、学環にゆかりのある学外教員、そのほか広報用として入試説明会、ホームカミングデー、学環来訪者などに随時配布している。内容は、教員へのインタビュー、研究室の活動報告、イベント予定、研究成果、受賞報告、展示会、各教員の書籍刊行情報など。2002年冬号から始まり、2011年度末までに通算36回発行した。デザイン性を高めた紙面は、情報学環・学際情報学府の特徴をよく表現しており、各方面から好評を得ている。昨年までは、年3回発行していたが、本年からは2回の刊行となった。表紙は、様々な色の柔らかなグラデーションを展開し、毎号、色彩によって希望を象徴するデザインは、多くの読者から好評を得た。

4.7.2 ホームページ

情報学環・学際情報学府は、これまでも教育・研究活動を広く国内外に周知すべく、ホームページを開設し情報発信を行っている。これによって、「学環」「学府」という有機的で複雑な組織の活動の全貌や相互の関係が、学環・学府の活動に関心をもつ一般の人や将来の学府受験生など、学環・学府の外部の人にも明快に把握できるようにしている。また、「学環・学府公式パンフレット」と統一的なデザインを採用することで、学環・学府のヴィジュアル・アイデンティティの確立を担っている。

サイト全体は、教員情報を軸にして構築されており、教員のプロフィールページから、担当する授業、参加しているプロジェクト、登壇したイベント、講演の動画など、関係するすべてのページに相互リンクされている。こうしたカテゴリ横断的な情報の関連付けによって、閲覧者がみずからの関心に応じて、回遊的にページを読み進めていけることを大きな特徴としている。また、グローバルナビゲーションは、研究組織としての学環と、教育組織としての学府を明確に区別しながら、修士課程・博士課程や教育部研究生制度の入試に関する「受験情報」や、『紀要』や『ニューズレター』、『年報』など学環が発行する「紀要・出版物」といった基本情報をはじめとした各情報に、容易にアクセスできるようになっている。「イベント」ページでは、イベントの概要やプログラムといった基本的な情報はもちろんのこと、関連するイベントや教員も表示されるようになっており、サイト内での回遊を促すようデザインされている。また、「コース」ページでは、各コースの基本的な理念を掲げると同時に、受講できる授業や担当教員、関連する施設・研究センターやイベントも表示されるようになっている。

このように学環のホームページは学環の中心的な広報手段として重要であるが、現状のホームページをさらに充実させるために、以下の点からの再デザインを検討中である：

- ・ 現状のホームページは Flash を利用したアニメーションが多用されているが、近年重要性を増しているスマートフォンやタブレットは Flash をサポートしないので、コンテンツが快適に閲覧できない。そこで、現代的な Web サイト構築手法として主流となっている HTML5 およびレスポンス・ウェブデザインを取り入れ、全体を再構成する。
- ・ ユーザの操作がシンプルになるように、アニメーションなどのビジュアル効果は控えめにし、シンプルで分かりやすい情報構造にする。

Web の利用環境もパソコンだけではなく、スマートフォンやタブレットなど、さまざまなデバイスによる閲覧が普及してきているが、学環ホームページもそうした時代の変化に対応するための再構成を計画している。今年度は、要求項目の洗い出しと業者の選定を行った。次年度に実際の再構成作業に取り組む予定である。

4.8 国際交流

2012 年度の情報学環の国際交流事業は、活発で多彩な活動が展開された。以下、その経緯を時系列で記載する。

8 月 30 日には、Greater Tokyo Area Multimedia/Vision Workshop と題するワークショップを福武ホールにて開催した。台湾大学のシュー准教授の訪問団とともに、東大および東京近郊のメディア技術研究者、大学院生が集まるワークショップを行い、活発な意見交換を行った。

11 月 9 日、10 日には、毎年恒例のソウル大・東大交流シンポジウムがソウル大学ヒガン記念ホールにて開催された。今年度は、学環からは、水越教授、林教授、岡本准教授、金助教ならびに 11 人の院生が参加した。ソウル大からはユン・スクミン教授、イ・ジュンウン教授、キム・ユンミ教授、イ・ウンジュ教授、ハン・キュソプ教授、イ・ジュンファン教授および 9 人の院生が参加した。また、開会にあたって、ヤン・スンモク・ソウル大学社会科学院長から、長年の研究交流に対して祝辞もいただいた。

シンポジウムのテーマは、“Social Media, Public Communication” だった。このテーマが示すとおり、議論はクラウド・ソーシングから放送制度論まで多岐に渡り、グローバル化と情報化によって激動する日韓両国の事例をもとに、教員、院生による活発な討論が行われた。なお、本交流のための学生、および教員のソウル渡航費用に関しては、「アジア・グローバルイノベーション・スタディーズ」若手研究者育成プログラムの援助を受けた。

また、情報学環は、昨年度より、国際連合の下部組織である国際電気通信連合の電気通信標準化部門 (ITU-T、本部：スイス ジュネーブ) のアカデミック・メンバーとしての加盟を実現した。今年度、継続して、東京大学は、ITU-T のアカデミック・メンバーとして、電気通信分野の標準化に貢献した。

さらに、情報学環は、平成 24 年度は、コレージュ・ド・フランス、デュースブルク・エッセン大学、パリ第 8 大学、ベルリン自由大学との全学あるいは部局間協定を推進した。

以上のように、大学間国際交流協定に基づく研究交流活動や教育行事に加えて、学環の教員それぞれは、積極的に海外で研究調査活動を行ったり、学会やシンポジウムを企画したり参加したりしている。また、海外からの研究者を招聘して共同研究に取り組み、多彩なシンポジウムを主催している。今後とも、組織としても、また教員個人としても、多様な国々の多様な研究機関やその他の社会における交流

を深めることが課題である。

II. 資料

1 沿革

(旧社会情報研究所)

- 1929年 東京帝国大学文学部新聞研究室
- 1949年 東京大学新聞研究所
- 1992年 東京大学社会情報研究所に改組
- 東京大学大学院情報学環・学際情報学府と組織統合

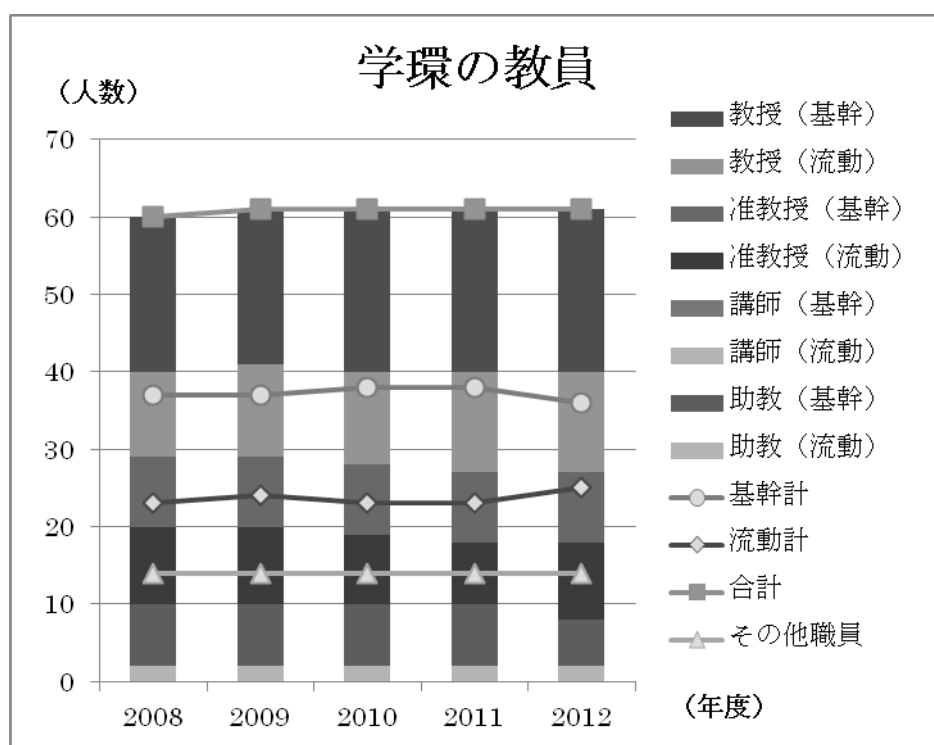
(大学院情報学環)

- 2000年 東京大学大学院情報学環・学際情報学府
- 2004年 東京大学社会情報研究所と組織統合
文化・人間情報学コース、社会情報学コース、学際理数情報学コース設置
社会情報研究資料センター設置
- 2006年 総合分析情報学コース設置
- 2008年 アジア情報社会コース設置
総合防災情報研究センター設置
- 2009年 学際理数情報学コースが先端表現情報学コースへ変更
ユビキタス情報社会基盤研究センター設置
- 2010年 現代韓国研究センター設置

2 学環の教員（定員）

・情報学環(平成16年4月 社会情報研究所と合併)

年度	教授		准教授 (助教授)		講師		助教 (助手)		計		その他 の職員	
	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動		
2008	20	11	9	10	0	0	8	2	37	23	60	14
2009	20	12	9	10	0	0	8	2	37	24	61	14
2010	21	12	9	9	0	0	8	2	38	23	61	14
2011	21	13	9	8	0	0	8	2	38	23	61	14
2012	21	13	9	10	0	0	6	2	36	25	61	14



客員教員の状況

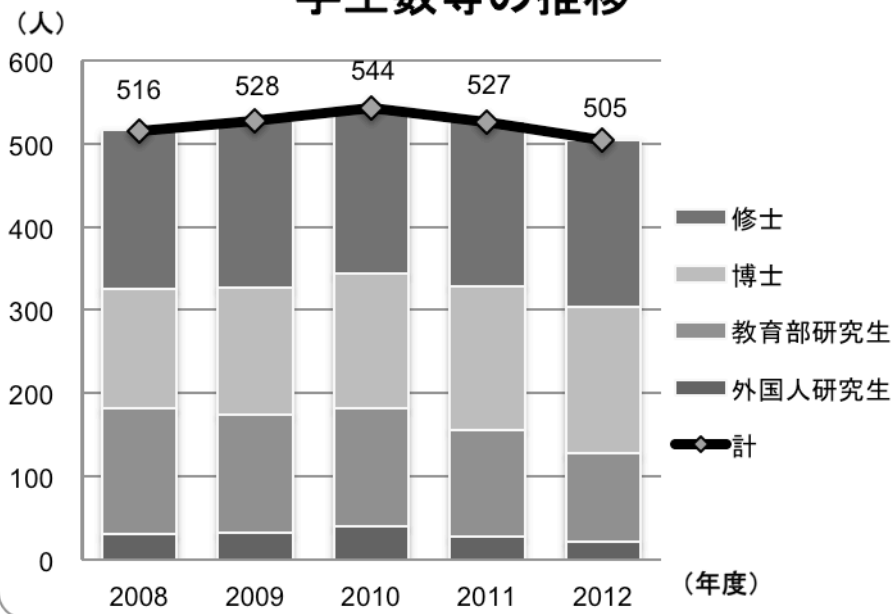
年度	職	氏名	担当授業	本務先
平成18	客員教授	佐藤 哲	文化・人間情報学特論Ⅷ	長野大学産業社会学部
	客員助教授	魏 晶玄	文化・人間情報学特論Ⅸ	ソウル(社)コンテンツ経営研究所
平成19	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所
	客員准教授	奈良 高明		電気通信大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	大場 光太郎		産業技術総合研究所
	客員准教授	下畑 光夫	総合分析情報学特論Ⅸ	沖電気
	客員准教授	荒牧 浩二		(株)日立製作所中央研究所

平成 20	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
平成 21	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
平成 22	客員教授	水島 久光	社会情報学研究法Ⅰ	東海大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	片田 敏孝	災害情報論	群馬大学
平成 23	客員教授	片田 敏孝	災害情報論	群馬大学
	客員教授	Roberson James	Information, Technology, and Society in Asia801	東京女学館大学
	客員教授	Paterson Robert Dunsmore	〃	国際基督教大学
	客員教授	水島 久光	社会情報学研究法Ⅰ	東海大学
	客員教授	遠藤 知己	メディア社会学	日本女子大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
平成 24	客員教授	片田 敏孝	災害情報論	群馬大学
	客員教授	水島 久光	社会情報学研究法Ⅰ	東海大学
	客員教授	Paterson Robert Dunsmore	Information, Technology, and Society in Asia801	国際基督教大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	田中 圭介	総合分析情報学基礎Ⅳ	東京工業大学
	客員准教授	宇陀 則彦	デジタル・ヒューマニティーズ 基礎論	筑波大学
	客員准教授	大向 一輝	〃	国立情報学研究所

3 学府の学生数

	2008	2009	2010	2011	2012
修士	191	202	201	198	202
博士	144	152	161	173	176
教育部研究生	151	142	142	129	106
外国人研究生	30	32	40	27	21
計	516	528	544	527	505

学生数等の推移



4 教育部

教育部入学試験

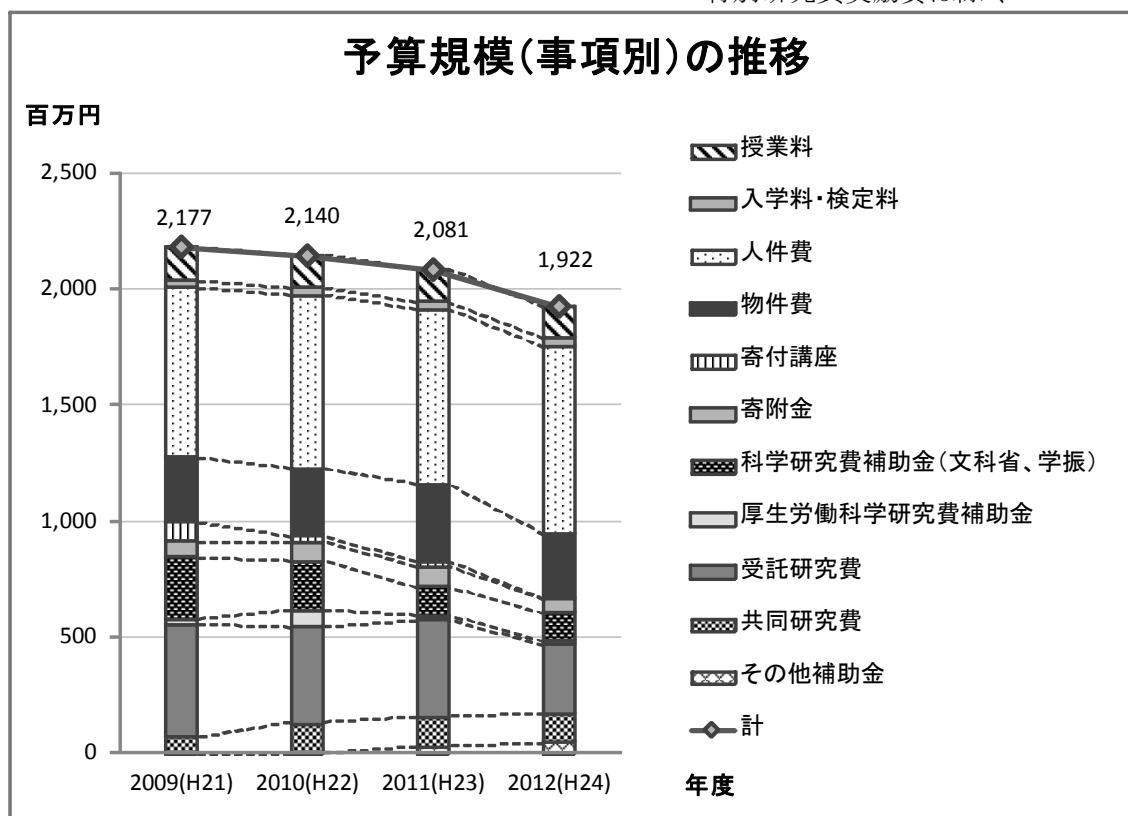
平成 20(2008)年度から平成 24(2012)年度入学志願者数・受験者数・合格者数

年度	受入 予定 人員	日本人/ 外国人	志願者			受験者			合格者		
			本 学	他 大 学	計	本 学	他 大 学	計	本 学	他 大 学	計
平成 20(2008) 年度	約 50	日本人	55	45	100	54	44	98	40	17	57
		外国人	0	1	1	0	1	1	0	0	0
		計	55	46	101	54	45	99	40	17	57
平成 21(2009) 年度	約 50	日本人	69	50	119	67	49	116	42	9	51
		外国人	0	2	2	0	2	2	0	0	0
		計	69	52	121	67	51	118	42	9	51
平成 22(2010) 年度	約 50	日本人	99	47	146	95	45	140	37	10	47
		外国人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		計	99	47	146	95	45	140	37	10	47
平成 23(2011) 年度	約 50	日本人	121	53	174	112	51	163	32	10	42
		外国人	5	2	7	5	2	7	0	0	0
		計	126	55	181	117	53	170	32	10	42
平成 24(2012) 年度	約 30	日本人	76	51	127	72	51	123	22	11	33
		外国人	0	3	3	0	3	3	0	0	0
		計	76	54	130	72	54	126	22	11	33

5 予算

	2009(H21)		2010(H22)		2011(H23)		2012(H24)	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
授業料	-	138,515,946	-	138,116,530		138,088,930		136,486,210
入学料・検定料	-	36,296,200	-	33,850,600		37,398,800		38,418,200
人件費	-	729,703,012	-	744,968,962		753,689,804		806,775,260
物件費*	-	277,805,902	-	290,523,101		327,577,436		278,431,866
寄付講座	3	84,000,000	1	27,000,000	1	27,000,000	-	-
寄附金	30	70,204,659	39	82,902,448	40	85,963,505	27	62,948,565
科学研究費補助金** (文部科学省、学振)	40	271,080,000	69	211,625,326	58	126,197,516	71	119,643,805
厚生労働科学研究費 補助金	5	17,200,000	6	72,400,000	3	12,500,000	3	12,200,000
受託研究費	27	486,887,690	34	417,707,413	27	422,020,319	22	301,320,888
共同研究費	41	64,951,858	40	122,371,987	38	128,436,336	35	123,808,179
その他補助金	-	-	-	-	5	22,171,066	2	43,330,000

*追加配分及び前年度からの目的積立金分を含む
** 特別研究員奨励費は除く



6 土地・建物面積

・建物（平成25年3月31日現在；借用部分を含む）

建物名	建築年度	面積（延面積・㎡）
情報学環本館	S27	472
	S29	26
	S33	360
	S58	4,171
	計	5,029
工学部2号館	*H18	*500
目白台西1号館	*H18	*492
目白台西2号館	*H18	*545
第2本部棟	*H18	42
福武ホール	H19	**3,241
法学部総合研究棟 （弥生キャンパス）	*H23	92
分生研1号館 （弥生キャンパス）	*H24	30
駒場Ⅱ56号館	*H23	473

*使用開始年度・使用㎡数

**福武ホール面積については全学共用スペース分を除く

7 入試定数と受入数

	修士		博士	
	入学定員	受入予定人員	入学定員	受入予定人員
平成20(2008)	100	105	44	46
平成21(2009)	100	105	44	46
平成22(2010)	100	100	44	44
平成23(2011)	100	100	44	44
平成24(2012)	100	100	44	44

8 年度別入試データ詳細

修士

	2008	2009	2010	2011	2012

志願者	230	238	259	264	255
合格者	97	104	97	105	109
入学者	93	88	89	85	92

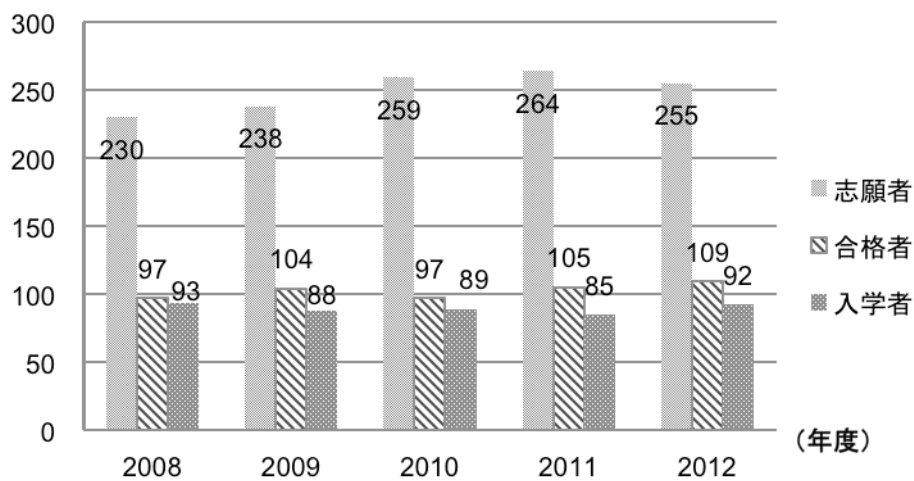
博士

	2008	2009	2010	2011	2012
志願者	64	65	70	69	55
合格者	37	38	41	40	35
入学者	35	36	39	39	34

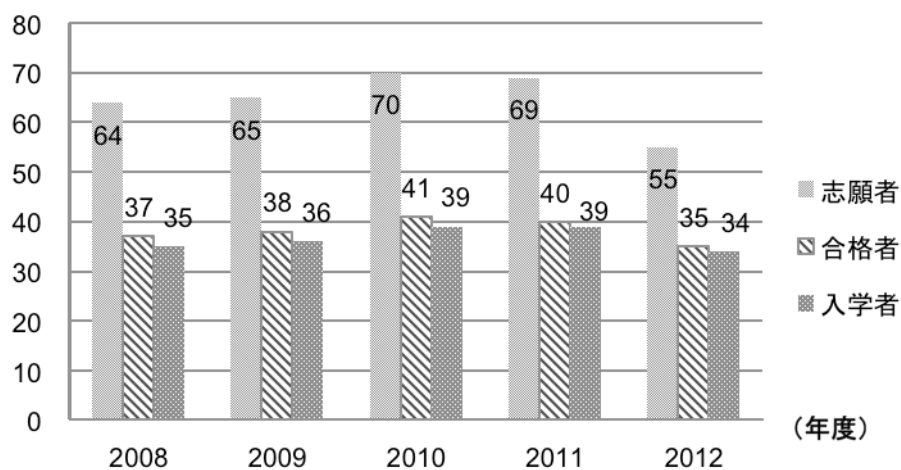
志願倍率（志願者／入学定員）

	2008	2009	2010	2011	2012
修士	2.30	2.38	2.59	2.64	2.55
博士	1.45	1.48	1.59	1.57	1.25

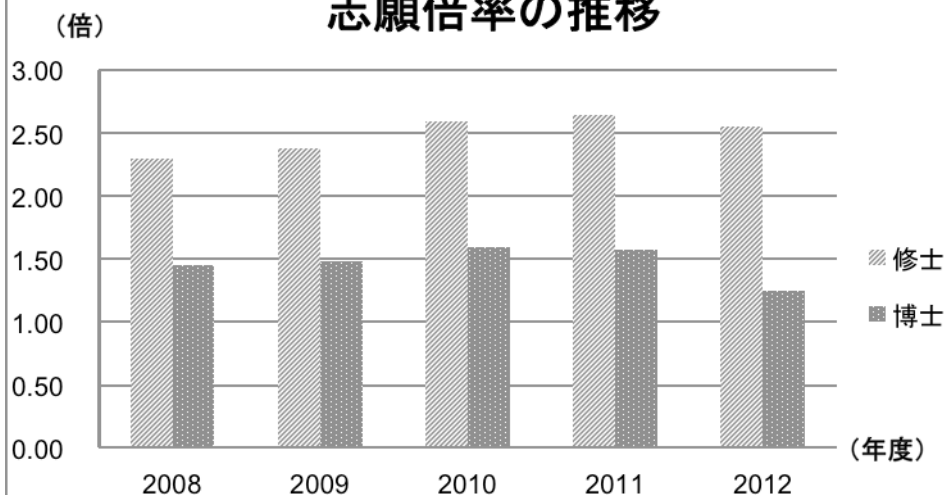
(人) 【修士課程】志願者・合格者・入学者の推移



(人) 【博士課程】志願者・合格者・入学者の推移



志願倍率の推移



2012 年度修士入学試験詳細

志願者

本学	42
他大学	213

255

合格者

本学	30
他大学	79

109

入学者

本学	21
他大学	71

92

志願者

日本人	193
外国人	62

255

合格者

日本人	79
外国人	30

109

入学者

日本人	66
外国人	26

92

志願者

男	182
女	73

255

合格者

男	78
女	31

109

入学者

男	65
女	27

92

志願者

一般学生	217
社会人	38

255

合格者

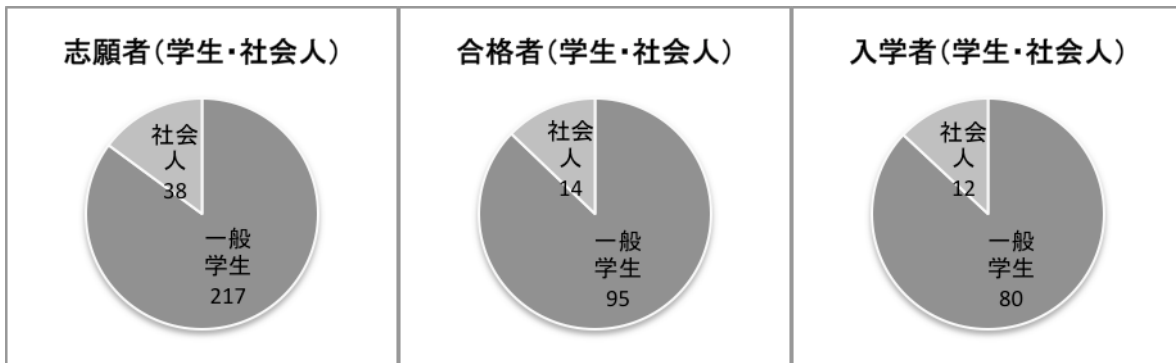
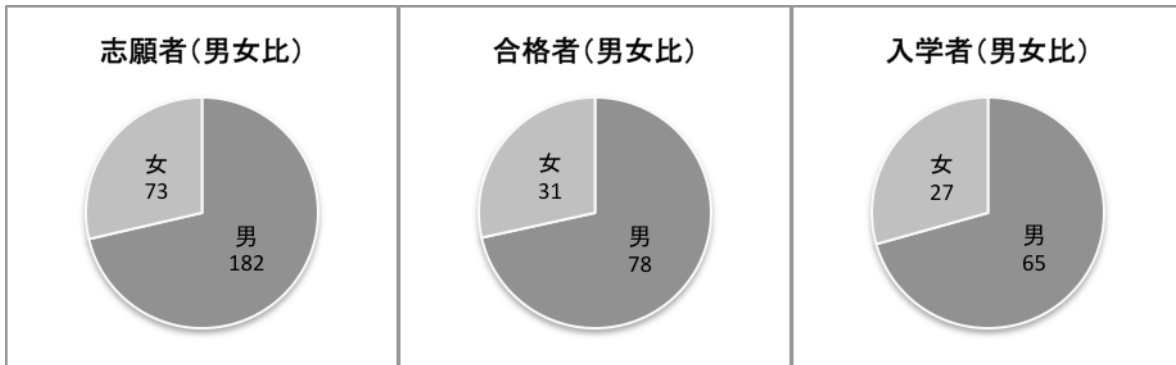
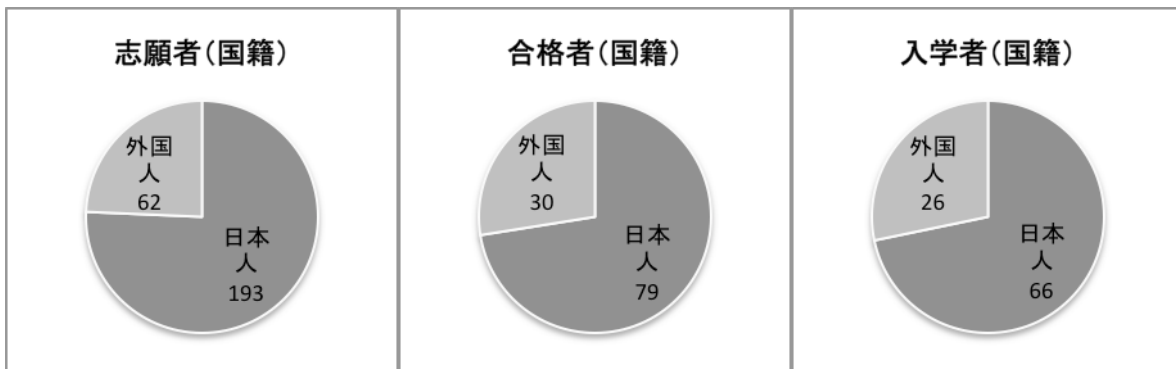
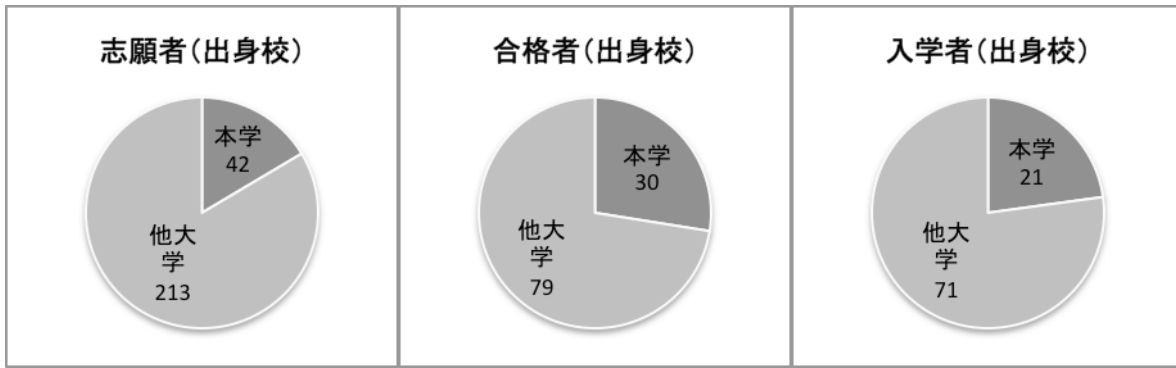
一般学生	95
社会人	14

109

入学者

一般学生	80
社会人	12

92



2012 年度博士入学試験詳細

志願者

本学府	28
他大学院	27
	55

合格者

本学府	21
他大学院	14
	35

入学者

本学府	20
他大学院	14
	34

志願者

日本人	36
外国人	19
	55

合格者

日本人	23
外国人	12
	35

入学者

日本人	23
外国人	11
	34

志願者

男	32
女	23
	55

合格者

男	22
女	13
	35

入学者

男	21
女	13
	34

志願者

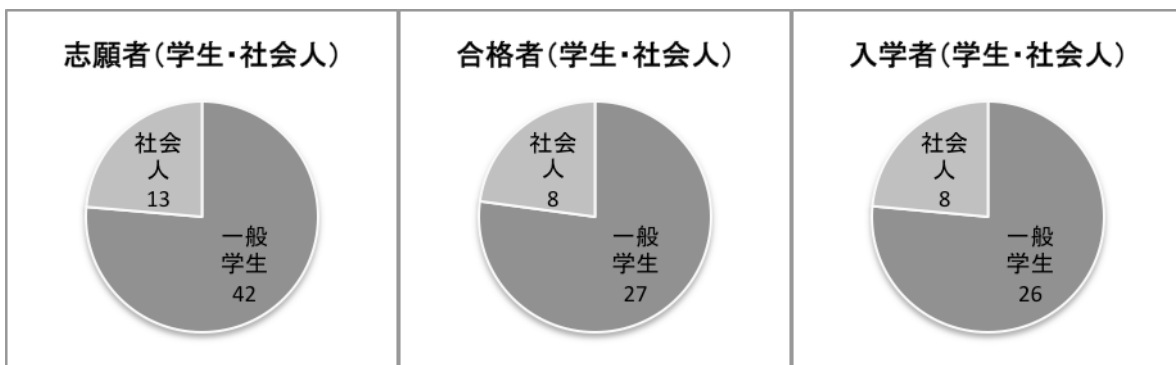
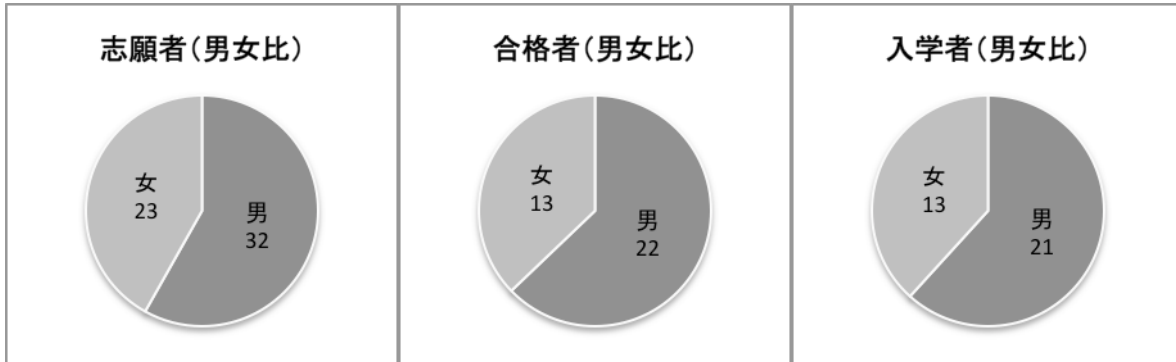
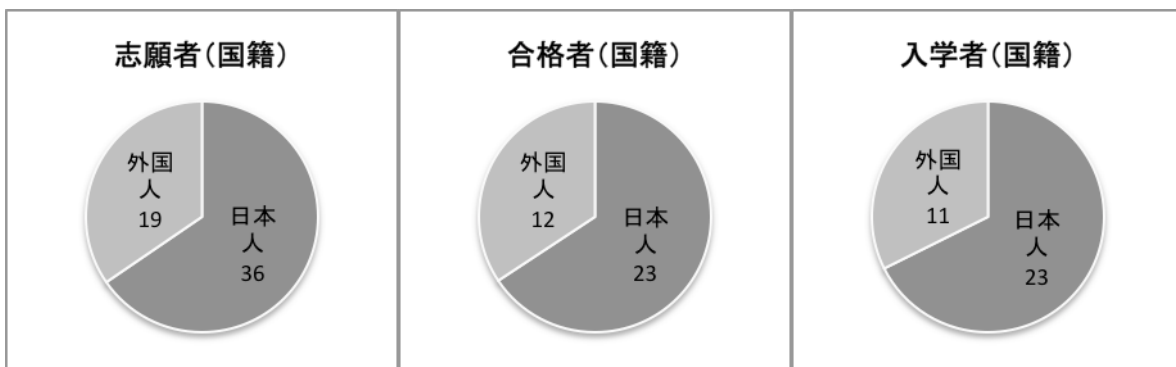
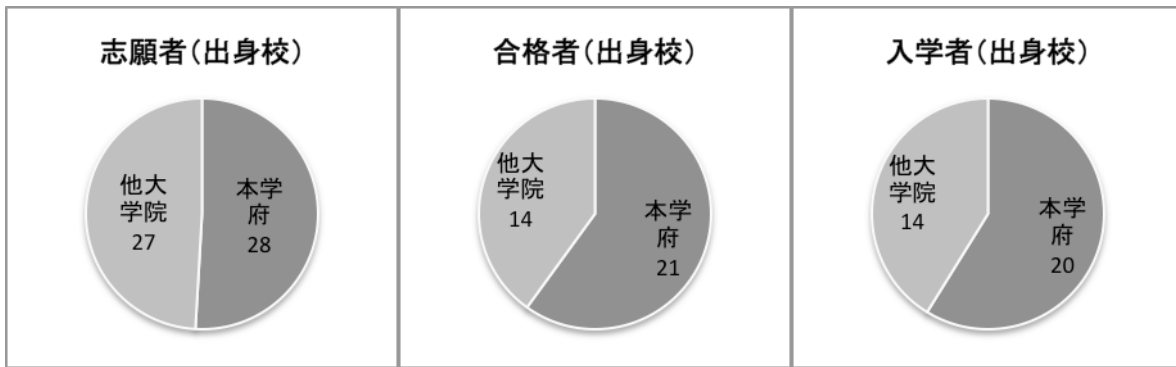
一般学生	42
社会人	13
	55

合格者

一般学生	27
社会人	8
	35

入学者

一般学生	26
社会人	8
	34

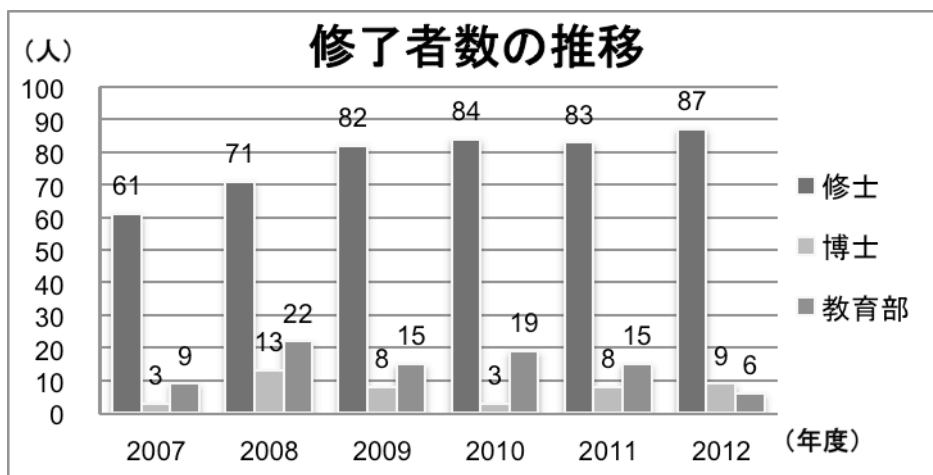


9 修了者数の推移

平成 19 (2007) 年度から平成 24 (2012) 年度修了者数(教育部研究生)

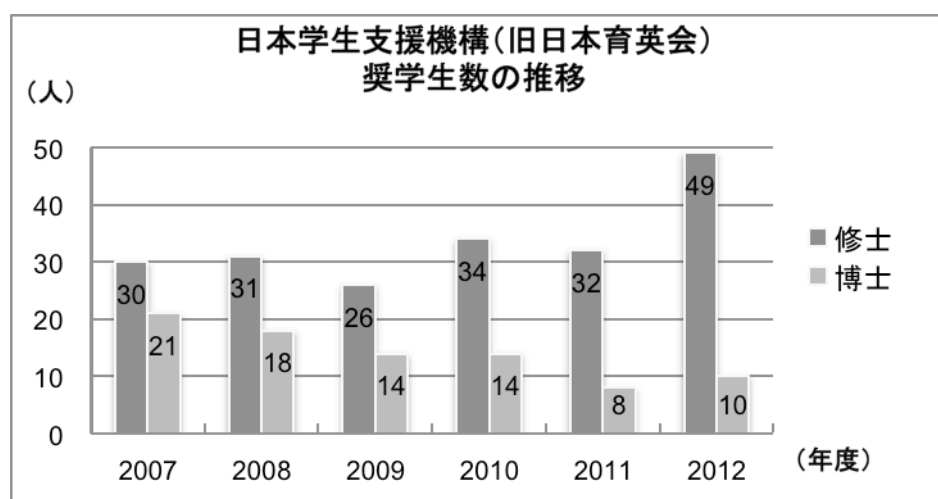
年度		修了者		
		本学	他大学	計
平成 19 (2007) 年度	日本人	3	6	9
	外国人	0	0	0
	計	3	6	9
平成 20 (2008) 年度	日本人	17	5	22
	外国人	0	0	0
	計	17	5	22
平成 21 (2009) 年度	日本人	9	6	15
	外国人	0	0	0
	計	9	6	15
平成 22 (2010) 年度	日本人	11	8	19
	外国人	0	0	0
	計	11	8	19
平成 23 (2011) 年度	日本人	7	7	14
	外国人	1	0	1
	計	8	7	15
平成 24 (2012) 年度	日本人	4	2	6
	外国人	0	0	0
	計	4	2	6

	2007	2008	2009	2010	2011	2012
修士	61	71	82	84	83	87
博士	3	13	8	3	8	9
教育部	9	22	15	19	15	6



10 学生支援機構（旧育英会）奨学生数

	第一種		第二種		合計	
	修士	博士	修士	博士	修士	博士
2007	20	15	10	6	30	21
2008	21	15	10	3	31	18
2009	20	13	6	1	26	14
2010	24	11	10	3	34	14
2011	25	7	7	1	32	8
2012	37	9	12	1	49	10



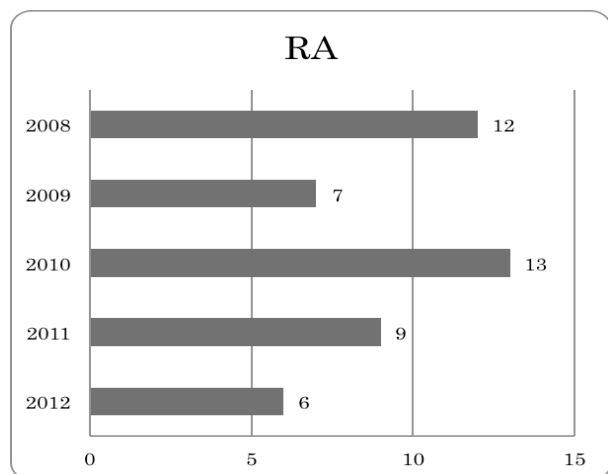
11 日本学術振興会特別研究員数

	DC 1	DC 2	合計
2007	1	10	11
2008	5	8	13
2009	5	12	17
2010	6	9	15
2011	4	4	8
2012	2	9	11

12 リサーチアシスタント数

年度	RA
2007	13
2008	12
2009	7

2010	13
2011	9
2012	6

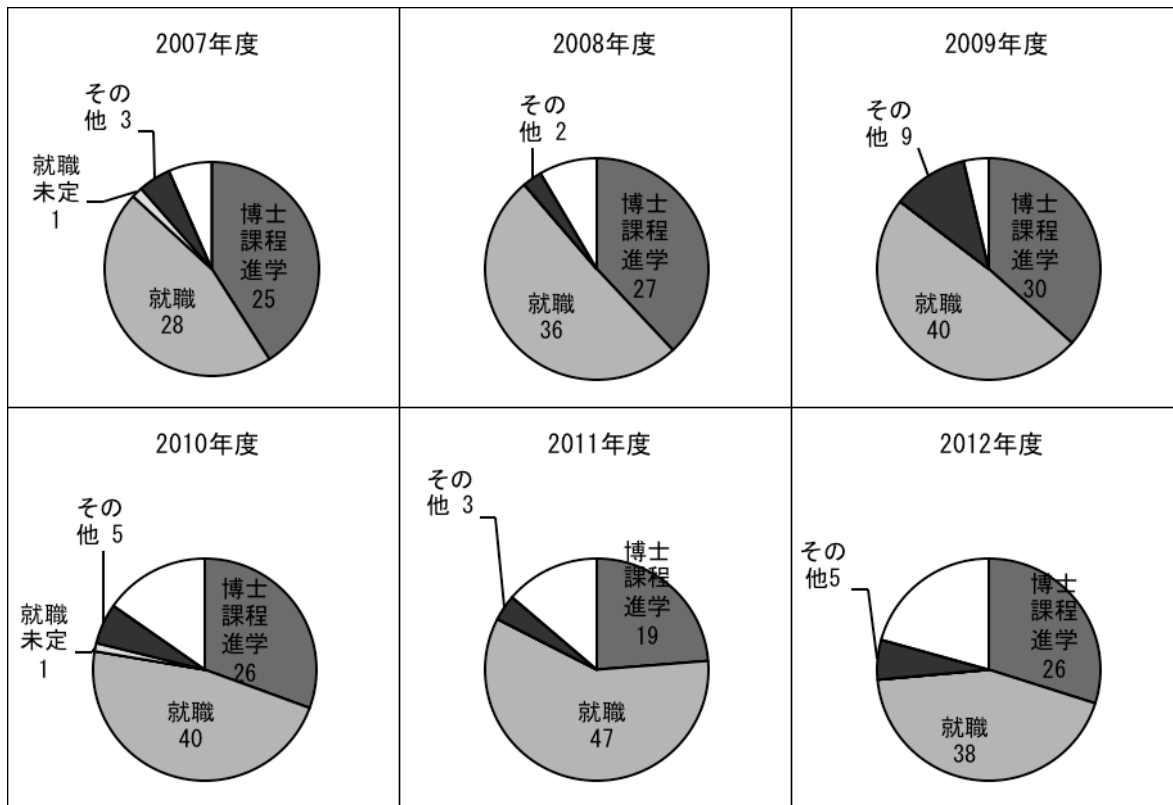


13 就職状況

学際情報学府修士課程修了者 進路状況資料（2007年度～2012年度）

区分		2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
博士課程進学	学際情報学府	25	27	24	19	19	19
	学内他研究科	1	1	1	2	4	2
	学外	1	2	1	1	3	1
海外留学							
就職		28	36	40	40	47	38
大学院研究生	学際情報学府						
	学内他研究科						
帰国(外国人留学生)							
就職未定		1			1		
その他		3	2	9	5	3	5
不明		4	6	3	13	11	18
合計		61	71	82	※85	83	87

※ 2010年度 「博士課程進学」と同時に「就職」した者1名を、それぞれの項目に計上（重複計上）している。



<就職先一覧>

2007年度	2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
(株)野村総合研究所 3	(株)日本アイ・ビー・エム 3	(株)電通 4	(株)電通 3	エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ株式会社 3	(株)SONY 2
(株)三菱東京UFJ銀行 2	(株)マイクロソフト 2	(株)NTTデータ 3	(株)楽天 3	株式会社SONY 3	(株)電通 2
(株)日本電信電話 1	(株)IBMビジネスコンサルティングサービス 1	(株)ソニー 2	(株)ゴールドマン・サックス証券 2	株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ 2	(株)博報堂 2
(株)リードエグジジション ジャパン 1	(株)NECエンジニアリング 1	東京大学 2	(株)凸版印刷 2	アクセンチュア株式会社 2	ゆうちょ銀行 2
(株)IBMビジネスコンサルティングサービス 1	(株)NTTソフトウェア 1	(株)任天堂 2	Cisco Systems G.K. 1	株式会社電通 2	LIDEA & CO.,LTD 1

2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度
(株)ツアイ ト・フォト 1	(株)NTT 東 日本 1	(株)Buffer Renaiss 1	Deloitte Touche Tohmatsu CPA Ltd. Dalian Branch 1	株 式 会 社 日 本 ア イ ・ ビ ー エ ム 2	NPO 法 人 Collable 代 表 理 事 1
(株)JM 1	(株)アクセ ンチュア・テ クノロジー・ ソリューションズ 1	(株)NTT ソ フトウェア 1	(株)朝日新 聞社 1	グリー株式 会社 2	NTT 研 究 所 1
(株)中日新 聞社 1	(株)ソフトバ ンク 1	(株)Sight Entertainm ent Japan 1	(株)セガ 1	株 式 会 社 テ レ ビ 朝 日 1	NTT コ ミ ュ ニ ケ ー シ ョ ンズ 1
(株)思文閣 1	(株)テレビ 朝日 1	(株)シリコ ンスタジオ 1	(株)ソニ ー・コンピ ュータエン タテイメン ト 1	有 限 会 社 リ ブ レ ス ク 1	(株)NSN 1
(株)いまじ ん 1	(株)日本技 芸 1	(株)りそな 銀行 1	(株)テムジ ン 1	株 式 会 社 生 活 の 友 社 1	(株)グリー 1
(株)松下電 器産業 1	(株)ベネッ セコーポレ ーション 1	(株)楽天 1	(株)メディ ア・ゲート ジャパン 1	JFE スチー ル 株 式 会 社 1	(株)スクエ ア・エニッ クス 1
(株)ソニー 1	(株)ミキハ ウス 1	(株)ACCES S 1	(株)ソネッ トエンタテ イメント 1	株 式 会 社 博 報 堂 1	(株)テレコ ムスタッフ 1
(株)日立シ ステム ア ンド サー ビス 1	(株)モリサ ワ 1	(株)NTT ド コモ 1	(株)東京セ ンチュリー リース 1	株 式 会 社 ニ ト リ 1	(株)テレビ 朝日 1
(株)グーグ ル 1	(株)リサ・パ ートナーズ 1	(株)アクセ ンチュア 1	東京大学 1	朝 日 新 聞 社 1	(株)ビービ ット 1
(株)ソネット エンタテイメ ント 1	(株)ソラン 1	(株)サイバ ーエージェント 1	新潟県警 察(行政) 1	面 白 法 人 カ ヤ ッ ク 1	(株)ビデオ リサーチコ ムハウス 1
(株)三菱総 合研究所 1	(株)大和証 券 SMBC 1	(株)シオン 1	(株)日刊工 業新聞社 1	三 三 株 式 会 社 1	(株)マクロ ミル 1
(株)内田洋 行 1	台湾銀行 1	(株)シグマ クス 1	(株)日興コ ーディアル 証券 1	Havok 株 式 会 社 1	(株)ミクシイ 1

2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度
(株)任天堂 1	立川市役所 1	(株)スクウェア・エニックス 1	(株)日産自動車 1	任天堂株式会社 1	(株)ラーンウェル 1
(株)富士通 1	(株)テックファーム 1	(株)チャイナ・コンシエルジュ 1	(株)日本IBMソリューションサービス 1	株式会社 ボストンコンサルティンググループ 1	キャノン株式会社 1
(株)ナブテスコ 1	東京藝術大学教育研究助手 1	(株)日本政策金融公庫 1	(株)日本無線 1	スカパーJSAT株式会社 1	グーグルジャパン 1
(株)d Space Japan 1	徳島文理大学 1	(株)三菱総研 DCS 1	(株)日本口リアル 1	コーエーテクモホールディングス株式会社 1	財団法人地方自治情報センター 1
(株)TBS テレビ 1	(株)日本航空インターナショナル 1	(株)三菱電機 1	(株)パナソニック 1	東芝ソリューション株式会社 1	東映アニメーション株式会社 1
(株)NTT コミュニケーションズ 1	日本放送協会 1	(株)新日本製鉄 1	(株)パナソニックシステムソリューションズジャパン 1	株式会社三井住友銀行 1	日本オラクル株式会社 1
(株)トヨタ自動車 1	(株)根本特殊化学 1	(株)直島福武美術館財団 1	(株)パナソニックシステムネットワークス 1	日本放送協会 1	野村総合研究所 1
(株)パスコ 1	(株)ブーズ・アンド・カンパニー 1	(株)日本アイ・ビーエム 1	(株)日立製作所 1	特許庁 1	富士ゼロックス株式会社 1
	(株)フォスター電機 1	(株)日本テレビ 1	(株)富士通 1	毎日新聞社 1	八千代エンジニアリング株式会社復職 1
	(株)丸善 1	日本放送協会 1	(株)丸善 1	PR 会社 1	ヤフー株式会社 1
	(株)朝日新聞社 1	農林中央金庫 1	(株)三井住友銀行 1	JSR 株式会社 1	楽天株式会社 1
	(株)かんぼ生命保険 1	(株)博報堂アイスタジオ 1	(株)メリルリンチ日本証券 1	google 1	ラティス・テクノロジー株式会社 1
	(株)新潮社 1	(株)富士通 1	(株)郵便局 1	シリコンスタジオ 1	

2007 年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度
	(株)電通レ イザーフィ ッシュ 1	(株)豊田中 央研究所 1	(株)郵便事 業 1	株 式 会 社 キーエンス 1	
	(株)日本経 済新聞社 1	(株)野村総 合研究所 1	早稲田大 学 1	株 式 会 社 野 村 総 合 研 究 所 1	
	(株)野村総 合研究所 1	福山大学 1	警察官(台 湾) 1	マッキンゼ ー・アンド・ カンパニー 1	
		(株)エリプ スガイド 1	企業名不 明(海外企 業) 1	トヨタ自動 車 株 式 会 社 1	
				ニールセン カンパニー 1 (上海)	
				株式会社テ ィーネット 1	
				有 限 会 社 パークス 1	
				プルデンシ ヤル生命株 式会社 1	

14 研究員（客員）等

情報学環

事項／年度	20	21	22	23	24
受託研究員	0	0	0	0	1
中国政府派遣研究員	1	0	1	1	0
客員研究員	7	22	35	28	20
東京大学特別研究員	5	7	11	7	9
内地研究員	0	0	0	0	0
国際研究員等	9	4	4	3	10
交流研究員	2	3	9	11	7
私学研修員	0	0	0	0	0

15 学会賞など受賞者リスト

- ・池内克史「知能情報処理・知能ロボティクス分野における功績」紫綬褒章
- ・相澤清晴「電子情報通信学会フェロー」画像工学・メディア処理に関する先駆的研究，電子情報通信学会
- ・池内克史「3次元デジタルアーカイビング技術の研究開発と海外コンテンツへの応用展開に対する貢献」平成24年度電子情報通信学会業績賞
- ・河口洋一郎「メディア芸術部門」平成24年度（第63回）芸術選奨文部科学大臣賞
- ・東京大学河口研究室「『宙海月』：触手ロボット」Innovative Technologies，経済産業省
- ・五十嵐健夫「リアルタイム3次元心臓拍動シミュレータ」Innovative Technologies 特別賞，経済産業省
- ・杉浦裕太，筧豪太，坂本大介，杉本麻樹，稲見昌彦，五十嵐健夫「クッション [ふわふわ]」グッドデザイン賞（Gマーク），グッドデザイン協会
- ・ミサワホーム株式会社（山内祐平監修）「ホームコモンズ設計」第6回キッズデザイン賞
- ・相澤清晴「ACM Recognition of Service Award」ACM Recognition of Service Award in Appreciation for Contributions to ACM Co-Chair MM, ACM
- ・藤本徹「ゲームを利用した学習の効果とその評価方法に関する検討」研究奨励賞，日本教育工学会
- ・水島希「原子力災害後の女性運動と科学技術：放射性物質をめぐる女性たちの経験・実践の記録と分析」柿内賢信記念賞研究助成金・奨励賞，公益財団法人俱進会
- ・福元和真，川崎洋，小野晋太郎，子安大士，池内克史「自転車位置推定のための複数車載カメラ映像の効率的な時空間マッチング手法」第11回ITSシンポジウム2012 優秀論文賞
- ・福田玄明，植田一博「実際の生物を用いたアニマシー知覚の脳内基盤の検討」2011年奨励論文賞，日本認知科学会
- ・Myung Geol Choi, Kyung-yung Yang, Takeo Igarashi, Jun Mitani, and Jehh Lee「Retrieval and Visualization of Human Motion Data via Stick Figures」Best Paper Award, The 20th Pacific Conference on Computer Graphics and Applications (Pacific Graphics 2012)

- ・ Shoma Hisaka and Shunsuke Kamijo 「Road User Positioning by RSSI Combinations with Pavement Reflection at Real Intersection」 Best Paper Award, International Conference on Intelligent Transport Systems Telecommunications (ITST)
- ・ Yuhei Yamauchi, Toru Fujimoto, Kaoru Takahashi, Junko Araki, Yusuke Otsuji, Hisashi Suzuki 「Impact of Using Facebook as a Social Learning Platform to Connect High School Students with Working Adults.」 Outstanding Paper Award, E-LEARN 2012
- ・ Liang Xue, 小野晋太郎, 阪野貴彦, 大石岳史, 池内克史 「3D Modelling and its Evaluation for Large-Scale Highway Tunnel using Laser Range Sensor」 Best Paper Award, 19th ITS World Congress Vienna
- ・ 福田玄明, 植田一博 「生物らしさの知覚に伴う脳活動-実際の生物とロボットを用いて-」 HAI-2011 Outstanding Research Award (最優秀賞), HAI Symposium 運営委員会
- ・ 吹上大樹, 大石岳史, 池内克史 「透明視知覚特性を利用した複合現実感(MR)環境下における遮蔽矛盾解消手法の提案」 グラフィクスと CAD 研究会優秀研究発表賞, 情報処理学会 グラフィクスと CAD 研究会
- ・ 渡邊恵太, 門城拓, 樋口文人, 稲見昌彦, 五十嵐健夫 「SymmetricCursors: 対称的に動くダミーカーソルによる入力操作の隠蔽」 インタラクティブ発表賞, インタラクシオン 2013, 情報処理学会シンポジウム
- ・ 橋本直, 鈴木良平, 神山洋一, 稲見昌彦, 五十嵐健夫 「LightCloth: 光入出力可能な布状インタフェースの提案」 インタラクティブ発表賞, インタラクシオン 2013, 情報処理学会シンポジウム
- ・ 佐藤朝美, 星野俊樹, 星野裕之, 春日亀美智雄, 山内祐平 「ごっこ遊び遊具～まち遊びキット～の導入による社会的相互作用の評価.」 第9回こども環境学会優秀ポスター発表賞, こども環境学会
- ・ 竹内文乃 「3段階階層モデルで解析をする大気汚染コホート研究の例数設計と検出力計算」 優秀ポスター賞

16 論文数

年度	件数	文理融合	学環・学府内協力
1999年度以前	323	1	0
2000年度	645	48	14
2001年度	654	49	18
2002年度	916	98	53
2003年度	949	107	54
2004年度	904	122	83
2005年度	846	232	91
2006年度	982	149	24
2007年度	947	45	17
2008年度	1100	47	6
2009年度	1002	125	22
2010年度	1070	86	24
2011年度	1208	88	12
2012年度	1067	96	24

注：業績 DB 入力データに基づく各年度の論文数(著書, 分担著書, 雑誌論文, 国際会議論文, その他の論文, 講演発表)

17 特許出願・公開数

年度	出願件数	公開
2000年度	6	0
2001年度	8	2
2002年度	5	5
2003年度	5	4
2004年度	1	2
2005年度	1	3
2006年度	2	1
2007年度	3	1
2008年度	4	2
2009年度	10	5
2010年度	17	6
2011年度	6	8
2012年度	5	16
合計	73	55

18 国際団体役員・委員数

	学術的な団体の役員・委員*1	その他の団体役員・委員等*2
2009年度	16	1
2010年度	18	1
2011年度	13	1
2012年度	13	0

*1 「学会・会議等役職」のうち「国際性有」かつ「学会役員委員」であるもの

*2 「団体役員・委員」のうち国際的なもの

19 政府関係委員会委員数

	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
内閣官房	6	4	2	4
内閣府	9	5	4	2
総務省	19	23	25	26
経済産業省	8	3	5	2
文部科学省	7	7	8	2
厚生労働省	1	2	3	0
国土交通省	3	8	8	7
農林水産省	0	0	0	0
環境省	0	1	1	1
宮内庁	1	0	0	0
文化庁	3	0	0	0
特許庁	0	0	0	0

人事院	0	1	1	0
日本学術会議	0	0	0	0
その他	0	4	5	0
政府全体	57	58	62	44

20 地方公共団体関係委員会委員数

	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度
都道府県	6	3	4	6
市区町村	5	5	4	6
地方公共団体関係全体	11	8	8	12

21 ジャーナル編集・会議運営

	学会誌等編集査読*1	学術大会等運営*2
件数	20	22
うち国際的なもの	15	12

注：国内外の学会活動(学術誌編集委員，会議運営委員など) 注：2012年度のみ

*1 「学会・会議等役職」のうち「ジャーナル編集査読」であるもの

*2 「学会・会議等役職」のうち「大会組織運営」であるもの

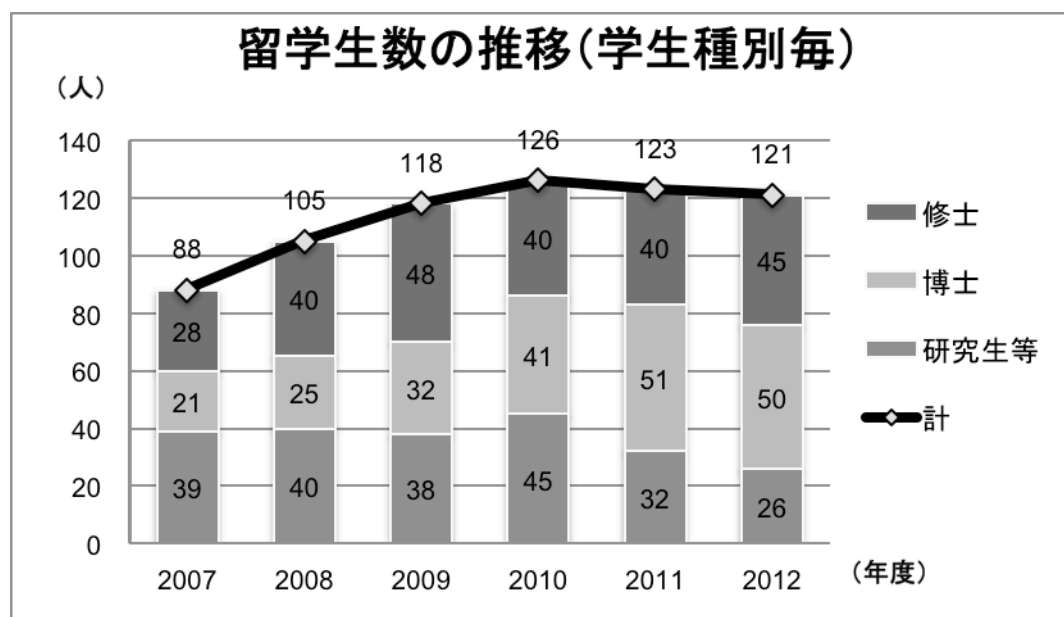
22 定期刊行物一覧

- ・『情報学研究 調査研究編』No.29 (2013年3月)
- ・『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』 No.83 (2012年10月)，No.84 (2013年3月)
- ・ニューズレター『学環学府』No.36 (2012年6月)、No.37 (2012年10月)、No.38 (2013年2月)

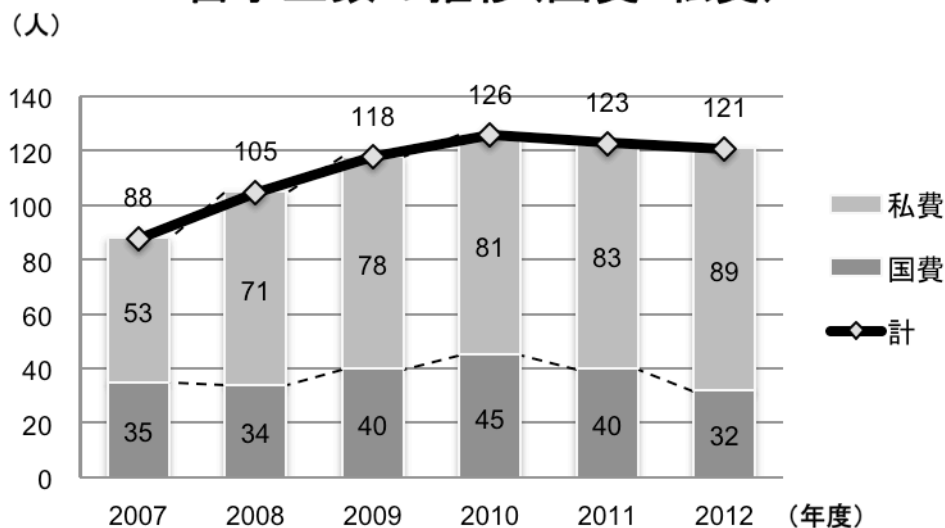
23 留学生数の推移

各年度5月1日現在

年度	修士		博士		外国人 研究生等		教育部 研究生	合計		総計
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	私費	国費	私費	
2007	12	16	8	13	15	23	1	35	53	88
2008	13	27	7	18	14	24	2	34	71	105
2009	15	33	13	19	12	24	2	40	78	118
2010	15	25	17	24	13	31	1	45	81	126
2011	10	30	22	29	8	23	1	40	83	123
2012	12	33	16	34	4	22	0	32	89	121



留学生数の推移(国費・私費)



24 留学生国籍別一覧(2012年5月1日現在)

国又は地域	国費	私費	計
アジア			
タイ	2	1	3
シンガポール		2	2
インドネシア		3	3
フィリピン	1	3	4
韓国	9	20	29
モンゴル		1	1
中国	6	35	41
台湾		10	10
小計	18	75	93
中近東			
イラン	1		1
トルコ	1	1	2
イスラエル	1		1
小計	3	1	4
アフリカ			
エジプト	1		1
チュニジア	1	1	2
アルジェリア		1	1
コンゴ民主共和国		1	1
小計	2	3	5
オセアニア			
オーストラリア		1	1
小計	0	1	1
北米			
カナダ		1	1

アメリカ合衆国	1	5	6
小計	1	6	7
中南米			
ブラジル	1		1
小計	1	0	1
ヨーロッパ			
イギリス	2		2
ドイツ		1	1
フランス		1	1
スペイン	1		1
ギリシャ	1		1
チェコ	1		1
ブルガリア	1		1
ロシア		1	1
エストニア	1		1
小計	7	3	10
合計	32	89	121

Ⅲ．個人業績編

平成 25（2013）年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人の研究テーマおよび 2011 年度の研究業績を、各自が入力したデータベースの内容に基づき、収録しています。教員の配列は、当時の肩書きに基づいた以下のカテゴリーの順、また同一カテゴリー内では氏名の 50 音順となっています。

1. 教授
2. 准教授
3. 講師
4. 助教
5. 客員准教授
6. 特任准教授
7. 特任講師
8. 特任助教
9. 特任研究員

相澤 清晴・教授

研究テーマ(主たるもの)

ライフログ

3次元映像

研究業績(2012年度)

著書

相澤 清晴:「ライフログの技術 ~自分の仕事と趣味を丸ごと整理・保存する!」, 洋泉社 MOOK, 2012年.

相澤清晴, 浜本隆之 編著:「CMOSイメージセンサ」, コロナ社, 2012年.

分担著書

相澤清晴、分担執筆:「実世界ログ:総記録技術が社会を変える」, 東京大学アンビエント社会基盤研究会実世界ログWG 編, PHPパブリッシング, 2012年.

雑誌論文

Rajib Kumar Jha, Badal Soni, Rajlaxmi Chouhan and Kiyoharu Aizawa: "Improved Watermark Extraction from Audio Signals by Scaling of Internal Noise in DCT Domain", Advances in Computer Science, Engineering & Applications, Vol. 166, pp.235-243, 2012年.

相澤清晴:「FoodLog :画像による 食の記録と解析」, 日本色彩学会誌, Vol. 36, No.No. 4, pp.293-296, 2012年.

Kiyoharu Aizawa, Yuto Maruyama, He Li, Gamhewage C. de Silva: "Food Balance Estimation by Using Personal Dietary Tendencies in a Multimedia Food Log (accepted)", IEEE Trans. Multimedia, 2012年. 【査読有】

Rajib kumar jha, Badal Soni, K. Aizawa, ,Logo Extraction from Audio Signals by Utilization of Internal Noise ,IETE Journal of Research ,2012: "Logo Extraction from Audio Signals by Utilization of Internal Noise", IETE Journal of Research, 2012年. 【査読有】

Rajib Kumar Jha, Badal Soni, Kiyoharu Aizawa : "Line Detection from Noisy Images Based on Combined Approach of Radon Transform and Dynamic Stochastic Resonance", Signal Image and Video Processing, 2012年. 【査読有】

Rajib Kumar Jha, Onakar Krishna, Kiyoharu Aizawa: "Dynamic Stochastic Resonance Applied to Watermark Extraction from Audio Signal in DWT Domain (accepted)", IET Signal Processing, 2012年. 【査読有】

杉山春樹, 森川茶民, 相澤清晴:「極値点情報と GrabCut による食事画像領域分割」, 映像情報メディア学会, Vol.66, No.No.5, pp.J179-J181, 2012年. 【査読有】

Chamin Morikawa, Kiyoharu Aizawa: "Iconic Visual Queries for Face Image Retrieval", Journal of Convergence, Volume 3, No. Number 3, pp.39-45, 2012 年.

Ji-Ho Cho, Kwan H. Lee, Kiyoharu Aizawa: "Enhancement of Depth Maps with Alpha Channel Estimation for 3D Video", Enhancement of Depth Maps with Alpha Channel Estimation for 3D Video, Vol. 6, No.No.5, pp.483-494, 2012 年. 【査読有】

鈴木陽一, 榎並和雅, 井ノ上直己, 廣瀬通孝, 相澤清晴: 「超臨場感コミュニケーション産学官フォーラム (URCF) の新たな挑戦」, 映像情報メディア学会, 2013 年.

河村聡一郎, 相澤清晴: 「博物館来訪者の疎な位置情報からの経路推定」, 電子情報通信学会論文誌, Vol..J96-D, No.No.4, 2013 年. 【査読有】

作品

相澤清晴: 「食事画像のマルチメディア処理」, 食に関わるライフログ共有技術基盤シンポジウム, 2012.

日本放送協会, 東京大学, 日立製作所: 「革新的な三次元映像技術による超臨場感コミュニケーション技術の研究開発 課題Ⅰ 三次元映像通信・放送のための中核的要素技術 —インテグラル立体コンテンツ生成のための要素技術の開発」, NICT 産学連携フォーラム展示, 2012.

相澤清晴 他: 「食に関するライフログ共有基盤技術」, CREST領域会議, 2012.

相澤 清晴: 「FoodLog」, 国立健康・栄養研究所 オープンハウス展示, 2012.

国際会議等

Chamin Morikawa: "User Interaction Techniques for Multimedia Retrieval (invited talk)", The Twelfth International Symposium on Spatial Media, 2012. 【査読有】

Chamin Morikawa, Kiyoharu Aizawa: "Automated Acwareness and Visualization of Online Presence", HCCE2012 Joint International Conference on Human-Centered Computer Environments, 2012. 【査読有】

Rajib Kumar Jha, Badal Soni, Rajlaxmi Chouhan, Kiyoharu Aizawa: "Improved Watermark Extraction From Audio Signals By Scaling of Internal Noise in DCT Domain", International Conference on Computer Science, Engineering and Applications (ICCSEA 2012), Volume 1, 2012. 【査読有】

Kiyoharu Aizawa: "FoodLog: Multimedia Food Recording Tool for Personal Dietary Assessment (invited)", 2nd Greater New York Area Multimedia and Vision Meeting, 2012.

Satoshi Ikehata, David Wipf, Yasuyuki Matsushita, Kiyoharu Aizawa: "Robust Photometric Stereo using Sparse Regression", IEEE CVPR 2012, pp.318-325, 2012.

Zhipeng Wu, Kiyoharu Aizawa: "Social Attribute Annotation for Personal Photo Collection", IEEE International Conference on Multimedia and Expo (ICME) Workshops, pp.236-241, 2012.

Rajib kumar jha, Rajlaxmi Chouhan, P. K. Biswas, K. Aizawa: "Dynamic Stochastic Resonance-Based Watermark Extraction From Audio Signals in SVD Domain", European Signal Processing Conference (EUSIPCO 2012), pp.2684-2688, 2012.

Rene M A Teixeira, Kiyoharu Aizawa: "Noise Attenuation Performance of MURA Apertures in Photographic Cameras", IEEE Int. Conf. Image Processing (ICIP2012) , pp.361-364, 2012. 【査読有】

Rajib kumar jha, Rajlaxmi Chouhan, P. K. Biswas, K. Aizawa: "Internal noise-induced contrast enhancement of dark images", IEEE Int. Conf. Image Processing (ICIP2012), pp.973-976, 2012. 【査読有】

Kenichi Iwata, Ryoji Hashimoto, Seiji Mochizuki, Kiyoharu Aizawa: "Intra Texture Prediction based on Repetitive Pixel Replenishment", IEEE Int. Conf. Image Processing (ICIP2012) , pp.2933-2936, 2012.

Chamin Morikawa, Haruki Sugiyama, Kiyoharu Aizawa: "Food Region Segmentation in Meal Images using Touch Points", 4th Workshop on Multimedia for Cooking and Eating Activities : CEA2012, pp.7-12, 2012.

Satoshi Ikehata, Kiyoharu Aizawa: "Confidence-based Refinement of Corrupted Depth Maps", APSIPA Annual Summit and Conference 2012 , 2012.

Kiyoharu Aizawa: "Multimedia FoodLog: Easiest Way to Capture and Archive What We Eat (Keynote)", International Conference on Multimedia Modeling (MMM2013) , 2013.

Soichiro Kawamura, Tomoko Ohtani, Kiyoharu Aizawa: "Navilog: A Museum Guide and Location Logging System Based on Image Recognition", International Conference on Multimedia Modeling (MMM2013), pp.505-507, 2013.

講演・口頭発表

相澤清晴, 馬場口登: 「ACM マルチメディア国際会議の動向」, 情報処理学会オーディオビジュアル複合情報処理研究会, 2012.

相澤清晴: 「Kinect を使ったプログラミング授業について」, Microsoft Kinect for Windows Workshop, 2012.

相澤清晴: 「食に関わるライフログ共有技術基盤プロジェクトについて」, 食に関わるライフログ共有技術基盤シンポジウム, 2012.

相澤清晴: 「FoodLog: 食事画像のマルチメディア処理」, 食に関わるライフログ共有技術基盤シンポジウム, 2012.

佐藤和博・松井勇佑・相澤清晴: 「参照画像を利用したマンガキャラクターの彩色」, 電子情報通信学会 総合大会, 2012.

蔵野達也・森川茶民・相澤清晴: 「パーソナル写真コレクションにおける注目領域の面積を利用したタグ推薦手法」, 電子情報通信学会 総合大会, 2012.

天野宗佑・森川茶民・相澤清晴: 「食事画像のための重み付き空間ピラミッドに基づく段階クラスタリング」, 電子情報通信学会 総合大会, 2012.

天野宗佑・森川茶民・相澤清晴: 「食事画像のための重み付き空間ピラミッドに基づく段階クラスタリング」, 電子情報通信学会 総合大会, 2012.

河村拓哉・趙 志鎬・相澤清晴・酒澤茂之: 「デプスカメラからの距離画像の統合による高速な形状復元」, 電子情報通信学会 総合大会, 2012.

新井俊宏・松井勇佑・相澤清晴: 「漫画画像からの顔検出」, 電子情報通信学会 総合大会, 2012.

青木尚久, 河村聡一郎, 大谷智子, 相澤清晴: 「博物館内での展示物認識でのクラウドソーシングの利用」, 電子情報通信学会 総合大会, 2012.

河村聡一郎・大谷智子・相澤清晴河村聡一郎・大谷智子・相澤清晴: 「写真中の物体認識を用いた博物館ガイド」, 電子情報通信学会 総合大会, 2012.

森川茶民・杉山春樹・相澤清晴: 「User Assisted Segmentation of Meal Images Using Touch Points Entered on a Smart Phone」, 電子情報通信学会 総合大会, 2012.

天野宗佑, 森川茶民, 相澤清晴: 「FoodLog 画像のクラスタリング」, 電子情報通信学会 データベース研究会・食メディア研究会, 2012.

岩館 祐一、片山美和、久富健介、池谷健佑, 相澤清晴、苗村健、広田光一、趙志鎬、久保友香, 山崎眞見、及川道雄、小池崇文、宇都木契: 「革新的な三次元映像技術による」, NICT産学連携フォーラム, 2012.

天野宗佑, 森川茶民, 相澤清晴: 「食事ログ画像のクラスタリング」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2012), 2012.

池畑諭, David Wipf, 松下康之, 相澤清晴: 「スパース回帰に基づいた照度差ステレオ法による非ランバート表面復元」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2012), 2012.

李賀, 杉山春樹, 相澤清晴: 「一般食事画像認識に対する特徴量・認識手法の比較検討」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2012), 2012.

佐藤和博, 松井勇佑, 相澤清晴: 「参照画像を利用したマンガキャラクタの彩色手法の検討」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2012), 2012.

河村聡一郎, 大谷智子, 相澤清晴: 「ナビログ 画像認識を用いた博物館ガイドと行動記録」, 画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2012), 2012.

Nima Baidar, Kiyoharu Aizawa: 「Template Based Human Body Modeling using Kinect」, 情報科学技術フォーラム、FIT2012, 2012.

多田和広, 池畑 諭, 相澤清晴: 「多視点 2 眼一体型カメラのキャリブレーション」, 情報科学技術フォーラム、FIT2012, 2012.

河村聡一郎, 大谷智子, 相澤清晴: 「ナビログ 画像認識を用いた博物館ガイドと行動記録」, 日本バーチャルリアリティ学会 第 17 回大会, 2012.

相澤清晴: 「パネルオーガナイザー」, ミュージアムにおけるデジタル技術への期待」, 日本バーチャルリアリティ学会 第 17 回大会, 2012.

李 賀, 森川 茶民, 相澤 清晴: 「食事画像の色彩分布についての考察」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2012), 2012.

杉山 春樹, 森川 茶民, 相澤 清晴: 「個人記録画像からの食事画像判定についての考察」, 画像符号化・映像メディア処理シンポジウム(PCSJ・IMPS2012), 2012.

Nima Baidar Nima, Satoshi Ikehata, Kiyoharu Aizawa, Shigeyuki Sakazawa: 「Human Body Modeling Based on Pose and Shape Space」, 情報処理学会オーディオビジュアル複合情報処理研究会, 2013.

入江豪, 相澤清晴: 「ACM Multimedia 2012 報告」, 情報処理学会オーディオビジュアル複合情報処理研究会, 2013.
【招待講演】

相澤清晴: 「画像工学のこれまでとこれから」, 電子情報通信学会 総合大会, 2013.

吉松宏晃, 相澤清晴: 「低次特徴量を用いた食事画像のカロリー推定の精度改善」, 電子情報通信学会 総合大会, 2013.

貴志一樹・相澤清晴: 「デスクワーク行動の自動記録のためのビデオセグメンテーション」, 電子情報通信学会 総合大会, 2013.

高松幸広・河村聡一郎・相澤清晴: 「インクリメンタルデータを利用した博物館展示物認識の精度改善」, 電子情報通信学会 総合大会, 2013.

河村聡一郎・大谷智子・相澤清晴: 「画像認識を用いた博物館ガイドの改善」, 電子情報通信学会 総合大会, 2013.

多田和広・池畑 諭・相澤清晴: 「2 眼一体型カメラを利用した誤対応除去による多視点ステレオのキャリブレーション」, 電子情報通信学会 総合大会, 2013.

杉山春樹, 相澤清晴, 小川誠: 「個人の食事ログに特化したメニュー認識」, 電子情報通信学会ライフインテリジェンスとオフィス情報システム研究会, 2013.

新聞・報道

相澤 清晴: 「スマートフォンアプリケーション公開 カロリー計測カメラ」, 黒 Cam (サントリー黒烏龍茶), 2012.

NTT レゾナント, foo.log, 東京大学: 「スマホ向けアプリ「健康増進アシストサービス」が「goo からだログ ヘルスアシスト」として提供開始～食事写真からの自動推定カロリーや歩行数などの毎日の記録が容易に～」, プレスリリース, 2012.

foo.log, 東京大学: 「戦略アプリ活用 記事 ,健康への関心 遊び感覚で. サントリー, 食事画像でカロリー推計」, 日経MJ, 2012.

受賞

相澤清晴: 画像工学・メディア処理に関する先駆的研究「電子情報通信学会フェロー」, 電子情報通信学会, 2012 年.

相澤清晴: ACM Recognition of Service Award in Appreciation for Contributions to ACM Co-Chair MM「ACM Recognition of Service Award」, ACM, 2013 年.

特許

相澤清晴, 小川誠: 「情報処理装置及びプログラム」, 特願特願 2012-103504, 2012 年 04 月.

相澤清晴, チャンミンダ, 小川誠, 杉山春樹:「画像処理装置」, 特願 PCT/JP2012/69027, 2012 年 07 月.

相澤清晴, ヘネ・マルセリノ・アブリッタ・テイシェイラ:「絞り装置, 集光装置, 撮像装置, 及びプログラム」, 特願特願 2012-218664, 2012 年 09 月.

五十嵐 健夫・教授

研究テーマ(主たるもの)

コンピュータグラフィクス

ユーザインタフェース

研究業績(2012 年度)

分担著書

Yuki Igarashi, Takeo Igarashi, Ryo Haraguchi and Kazuo Nakazawa: "Chapter 20 Graphical Finding Reports on Cardiac Catheterization. Artery Bypass", Wilbert S. Aronow 編, ISBN 978-953-51-1025-5, InTech, 2013 年.

雑誌論文

Oliver Mattausch, Daniel Scherzer, Michael Wimmer, Takeo Igarashi: "Tessellation-Independent Smooth Shadow Boundaries", Comput. Graph. Forum, Vol.31(4), pp.1465-1470, 2012 年. 【査読有】

Manfred Lau, Jun Mitani, Takeo Igarashi: "Digital Fabrication", IEEE Computer, Vol.45(12), pp.76-79, 2012 年. 【査読有】

Juncong Lin, Takeo Igarashi, Jun Mitani, Minghong Liao, Ying He: "A Sketching Interface for Sitting Pose Design in the Virtual Environment", IEEE Transactions on Visualization and Computer Graphics, Vol.18(11), pp.1979-1991, 2012 年. 【査読有】

Yuki Koyama, Kenshi Takayama, Nobuyuki Umetani, Takeo Igarashi: "Real-Time Example-Based Elastic Deformation", Symposium on Computer Animation 2012, pp.19-24, 2012 年. 【査読有】

Genki Furumi, Daisuke Sakamoto, Takeo Igarashi: "SnapRail: a tabletop user interface widget for addressing occlusion by physical objects", ITS 2012, pp.193-196, 2012 年. 【査読有】

五十嵐 悠紀, 五十嵐 健夫: 「Holly:ステンシルデザインのためのドローエディタ」, 情報処理学会論文誌, Vol.53-3, 2012 年. 【査読有】

渡邊 恵太, 神山 洋一, 門城 拓, 松田 聖大, 稲見 昌彦, 五十嵐 健夫: 「AirSketcher: 扇風機の直接的な風の教示手法」, コンピュータソフトウェア(日本ソフトウェア科学会論文誌), Vol..29, No.No.4, pp.287-298, 2012 年. 【査読有】

国際会議等

Manfred Lau, Jun Mitani, and Takeo Igarashi: "Sketching and Prototyping Personalised Objects: From Teapot Lids to Furniture to Jewellery", National Conference on Rapid Design, Prototyping and Manufacturing, 2012. 【査読有】

Yuta Sugiura, Calista Lee, Masayasu Ogata, Anusha Withana, Yasutoshi Makino, Daisuke Sakamoto, Masahiko Inami, Takeo Igarashi: "PINOKY: a ring that animates your plush toys", The 30th international conference on Human factors in computing systems (CHI 2012), pp.725-734, 2012. 【査読有】

Rubaiat Habib Kazi, Takeo Igarashi, Shengdong Zhao, Richard Davis: "Vignette: Interactive Texture Design and Manipulation with Freeform Gestures for Pen-and-ink Illustration", The 30th international conference on Human factors in computing systems (CHI 2012), pp.1727-1736, 2012. 【査読有】

Jeff Allen, James E. Young, Daisuke Sakamoto, Takeo Igarashi: "Style by Demonstration for Interactive Robot Motion", The ACM conference on Designing Interactive Systems (DIS 2012), pp.592-601, 2012. 【査読有】

Jun Kato, Daisuke Sakamoto, Takeo Igarashi: "Phybots: A Toolkit for Making Robotic Things", The ACM conference on Designing Interactive Systems (DIS 2012), pp.248-257, 2012. 【査読有】

Nobuyuki Umetani, Takeo Igarashi, Niloy Mitra: "Guided Exploration of Physically Valid Shapes for Furniture Design Paper Abstract Paper Video", ACM Transaction on Graphics (SIGGRAPH 2012), Vol.31(4), pp.Article 86, 2012. 【査読有】

Yuki Igarashi, Takeo Igarashi, Jun Mitani: "Beady: Interactive Beadwork Design and Construction", ACM Transaction on Graphics (SIGGRAPH 2012), Vol. 31(4), pp.Article 48, 2012. 【査読有】

Myung Geol Choi, Kyung-yung Yang, Takeo Igarashi, Jun Mitani, and Jehh Lee: "Retrieval and Visualization of Human Motion Data via Stick Figures", the 20th Pacific Conference on Computer Graphics and Applications (Pacific Graphics 2012), pp. 2057-2065, 2012. 【査読有】

Yuta Sugiura, Masahiko Inami, and Takeo Igarashi: "A Thin Stretchable Interface for Tangential Force Measurement", In Proceedings of the 25th annual ACM symposium on User Interface Software and Technology (UIST 2012), pp.529-536, 2012. 【査読有】

Andre Ribeiro, Takeo Igarashi: "Sketch-Editing Games: Human-Machine Communication, Game Theory and Applications", In Proceedings of the 25th annual ACM symposium on User Interface Software and Technology (UIST 2012), pp.287-298, 2012. 【査読有】

Martin Levihn, Takeo Igarashi, Mike Stilman: "Multi-robot multi-object rearrangement in assignment space", International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS 2012), pp.5255-5261, 2012. 【査読有】

その他論文

小山 裕己, 高山 健志, 梅谷 信行, 五十嵐 健夫: 「例示ベースの弾性変形の実時間計算手法」, VC/GCAD 合同シンポジウム 2012, 優秀研究発表賞, 2012 年. 【査読有】

渡邊 恵太, 石川 直樹, 栗原 一貴, 稲見 昌彦, 五十嵐 健夫: 「TimeFiller:生活を無理なくコンテンツで満たすメディアプラットフォーム」, 第 20 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS 2012), 2012 年. 【査読有】

橋本 直, 盧 承鐸, 山中 太記, 神山 洋一, 稲見 昌彦, 五十嵐 健夫: 「Lighty: ロボティック照明のためのペインティングインタフェース」, 第 20 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS 2012), 2012 年. 【査読有】

石井 健太郎, 米 海鵬, 馬 雷, Natsuda Laokulrat, 稲見 昌彦, 五十嵐 健夫: 「Pebbles: 自律ロボットの移動経路をデザインするタンジブルデバイス」, 第 20 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS 2012), 2012 年. 【査読有】

五十嵐 健夫, 佐々木 直, 坂本 大介: 「面を基本要素とした3次元モデリング」, 第 20 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS 2012), 2012 年. 【査読有】

五十嵐 悠紀, 五十嵐 健夫, 原口 亮, 中沢 一雄: 「冠動脈シェーマに基づいた心臓カテーテル検査所見入力のための電子カルテ・インタフェース」, 第 20 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS 2012), 2012 年. 【査読有】

加藤 淳, 坂本 大介, 五十嵐 健夫: 「Roboko: ソースコードに写真を貼り込める統合開発環境」, 第 20 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS 2012), 2012 年. 【査読有】

王 方舟, Li Yang, 五十嵐 健夫: 「効率的な地図ナビゲーションのための階層的ルートマップの生成」, 第 20 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ (WISS 2012), 2012 年. 【査読有】

渡邊 恵太, 樋口 文人, 稲見 昌彦, 五十嵐 健夫: 「複数ダミーカーソル中における自分自身のカーソル特定」, 情報処理学会・インタラクション 2013, 2013 年. 【査読有】

講演・口頭発表

五十嵐健夫: 「デザインのためのインタフェース」, ニコニコ超会議 超エンジニアミーティング, 2012.

五十嵐健夫: 「生活者みずからによる暮らしのデザイン」, 第 4 回「リビングゼミ」スマート・ネットワーク プロジェクト スマウト, 2012.

Takeo Igarashi: " Design Everything by Yourself: Interfaces for Graphics, CAD Modeling, and Robots", ACM Symposium on Geometry Processing, Tallinn, 2012.

五十嵐健夫: 「デザインのためのインタフェース ～ 創造力を引き出すインタラクション ～」, パターン認識・メディア理解研究会 (PRMU), 2012. 【招待講演】

Takeo Igarashi: 「 Interactive Computer Graphics as Design Tools for the Rest of Us」, Kyoto Prize workshop, 2012. 【招待講演】

五十嵐健夫: 「デジタルファブリケーションのためのインタラクティブな形状設計」, 先進製造シンポジウム, 独立行政法人 産業技術総合研究所, 2013. 【招待講演】

五十嵐健夫: 「デザインのためのインタフェース」, 山形大学次世代ロボットデザインセンター成果報告会, 2013. 【招待講演】

受賞

Myung Geol Choi, Kyung-yung Yang, Takeo Igarashi, Jun Mitani, and Jehh Lee: Best Paper Award「Retrieval and Visualization of Human Motion Data via Stick Figures」, The 20th Pacific Conference on Computer Graphics and Applications (Pacific Graphics 2012), 2012 年.

五十嵐健夫: Innovative Technologies 特別賞「リアルタイム 3 次元心臓拍動シミュレータ」, 経済産業省, 2012 年.

杉浦裕太, 筧豪太, 坂本大介, 杉本麻樹, 稲見昌彦, 五十嵐健夫: グッドデザイン賞 (G マーク)「クッション [ふわふわ]」, グッドデザイン協会, 2012 年.

渡邊 恵太, 門城 拓, 樋口 文人, 稲見 昌彦, 五十嵐 健夫: インタラクティブ発表賞「SymmetricCursors: 対称的に動くダミーカーソルによる入力操作の隠蔽」, インタラクシオン 2013、情報処理学会シンポジウム, 2013 年.

橋本 直, 鈴木 良平, 神山 洋一, 稲見 昌彦, 五十嵐 健夫: インタラクティブ発表賞「LightCloth: 光入出力可能な布状インタフェースの提案」, インタラクシオン 2013、情報処理学会シンポジウム, 2013 年.

池内 克史・教授

研究テーマ(主たるもの)

文化遺産のデジタル化

世界各地の貴重な文化遺産をレーザ測定システムによって数ミリ精度で計測し、デジタルデータの形で保存するプロジェクトを進めています。これまでに鎌倉高德院の国宝阿弥陀仏像(鎌倉大仏)、奈良東大寺の国宝廬舎那仏坐像(奈良大仏)、タイ・スコタイのアチャナ仏、カンボジア・アンコールトムのパイヨン寺院などをデジタル化してきました。これらのデータは、VR(バーチャルリアリティ)のコンテンツ作成、文化遺産の破損、欠損時には修復のために、また製作当時の状態への仮想的復元といった応用など、幅広い分野での利用が期待されています。

人間行動観察学習ロボット

幼児の学習の大部分は、親の行動を見て真似ることから始まります。我々の研究室では、人間の行動を主に視覚によって観察し、これを理解して同じ行動を再現するロボットプログラムの自動生成を研究テーマとしており、主に「全身運動の獲得」と「手作業の獲得」の2つの課題について研究を進めています。

4次元仮想化都市

都市などの広域にわたる実空間の三次元モデル化を効率的に行うため、実験車両に搭載したカメラやレンジセンサおよび電子地図を利用して、要素技術となる画像・距離画像の処理手法を研究しています。また、実空間の動きを仮想空間に重畳する研究や、車両や車種を自動的に認識・判別する研究を行っています。

研究業績(2012年度)

分担著書

工藤俊亮,池内克史:「描く脳-絵を描くロボット」, 岩田 誠,河村 満 編, 医学書院, 2012 年.

雑誌論文

大石岳史,池内克史:「MRによる遺跡復元=高速陰影表現と移動型 MR システム=」, 光アライアンス, Vol.23, No.25, pp.26-29, 2012 年.

池内克史:「照度差ステレオの原理と実際」, 光学, Vol.41, No.5, pp.281-286, 2012 年.

池内克史,松下康之:「照度差ステレオの原理と実際」, 光学, 2012 年.【査読有】

内藤理,佐藤啓宏,工藤俊亮(電気通信大学),池内克史:「日本におけるロボット工学の研究者ネットワークの分析」, 日本ロボット学会誌, 2012 年.【査読有】

吹上大樹,大石岳史,池内克史:「透明視を利用した複合現実感環境下における遮蔽矛盾解消手法の提案」, 情報処理学会研究報告, 2012 年.【査読有】

国際会議等

吹上大樹,大石岳史,池内克史:“透明視知覚を利用した複合現実感環境下における遮蔽矛盾解消手法”, 2012 11th IEEE International Symposium on Mixed and Augmented Reality (ISMAR), 2012.【査読有】

Masaki Inaba,Atsuhiko Banno,Takeshi Oishi,Katsushi Ikeuchi: “3D レンジデータを用いた屋外複合現実感のための頑健な位置合わせ”, VRST2012, 2012.【査読有】

Shintaro Ono,Liang Xue,Atsuhiko Banno,Takeshi Oishi,Katsushi Ikeuchi: “Global 3D Modeling and its Evaluation for Large-Scale Highway Tunnel using Laser Range Sensor”, 19th ITS World Congress Vienna, 2012.【査読有】

Boxin Shi,Ping Tan,Yasuyuki Matsushita,Katsushi Ikeuchi: “A Biquadratic Reflectance Model for Radiometric Image Analysis”, CVPR2012, 2012.【査読有】

Boxin Shi,Ping Tan,Yasuyuki Matsushita,Katsushi Ikeuchi: “A Biquadratic Reflectance Model for Radiometric Image Analysis”, CVPR, 2012.【査読有】

その他論文

小野晋太郎, 薛亮, 阪野貴彦, 大石岳史, 佐藤啓宏, 池内克史:「高速道路における長大なトンネルの三次元計測と評価」, ロボティクス・メカトロニクス講演会 2012 (ROBOMECH), 2012 年.

鈴木亮, 子安大士, 前川仁, 川崎洋, 小野晋太郎, 池内克史:「全方位ステレオ視による環境構造認識のための平面検出」, ロボティクス・メカトロニクス講演会 2012 (ROBOMECH), 2012 年.

Liang Xue, Shintaro Ono, Atsuhiko Banno, Takeshi Oishi, Yoshihiro Sato, Katsushi Ikeuchi: “Global 3D Modeling and Evaluation for Long Highway Tunnel”, The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Shaodi You, Rei Kawakami, Robby T.Tan, Katsushi Ikeuchi: "Adherent raindrop detection and removal in video", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Yoshie Kobayashi, Tetsuro Morimoto, Imari Sato, Yasuhiro Mukaigawa, Katsushi Ikeuchi: "Imagebased BRDF Estimation of Thin Film Interference", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Ashwani Kumar, Takeshi Oishi, Shintaro Ono, Atsuhiko Banno, Katsushi Ikeuchi: "3D Geometric Modeling of Large Scale Urban Structure in World Geodetic System", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Yiming Liu, Shintaro Ono, Katsushi Ikeuchi: "Classify Point Cloud Using Relationship Descriptor", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Min Lu, Kent Fujiwara, Mawo Kamakura, Bo Zheng, Jun Takamatsu, Koh Nishino, Katsushi Ikeuchi: "An Intra-class Shape Analysis Method", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Tetsuro Morimoto, Robby T. Tan, Rei Kawakami, Yasuhiro Mukaigawa, Katsushi Ikeuchi: "Accuracy of Spider model and its Applications", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Masaya Ogawa, Sota Shimizu, Shunsuke Kudo, Takeshi Oishi, Katsushi Ikeuchi: "Analysis of eye movement when playing air hockey—Comparison of individual differences towards the modeling of eye movement—", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

T.Okamoto, T.Shiratori, S.Kudo, S.Nakaoka, K.Ikeuchi: "Toward advancing Robot with Listening Capability: Keypose-Based Integration of Lower, Middle, and Upper Body Motions for Varying Music Tempos", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Menandro Roxas, Takeshi Oishi, Atsuhiko Banno, Katsushi Ikeuchi: "Video Completion via Maintaining Consistent Motion", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Yukiko Uno, Yoshihiro Sato, Shunsuke Kudo, Katsushi Ikeuchi: "Hierarchical representation and recognition based on knowledge for acrobatic whole-body motions in martial arts", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

P.Vinayavekhin, S.Kudo, J.Takamatsu, Y.Sato, Katsushi Ikeuchi: "Regrasping Planning from Observation: Movement Representation and Mapping through Task Primitive", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Zhipeng Wang, Masataka Kagesawa, Shintaro Ono, Atsuhiko Banno, Katsushi Ikeuchi: "Emergency Light Detection in Tunnel Environment", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Bo Zheng, Yibial Zhao, Song-Chun Zhu, Katsushi Ikeuchi: "3D Scene Parsing using Intuitive Mechanics", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Boxin Shi, Ping Tan, Yasuyuki Matsushita, Katsushi Ikeuchi: "A Biquadratic Reflectance Model for Radiometric Image Analysis", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Kent Fujiwara, Ko Nishino, Jun Takamatsu, Bo Zheng, Katsushi Ikeuchi: "Locally Rigid Globally Non-rigid Registration", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Taiki Fukiage, Takeshi Oishi, Katsushi Ikeuchi: "Reduction of Contradictory Partial Occlusion in Mixed Reality by using Characteristics of Transparency Perception", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

Kenji Inose, Rei Kawakami, Yasuhiro Mukaigawa, Katsushi Ikeuchi: "An application of geometric and photometric stereo under a light source with straight motion", The 7th International Workshop on Robust Computer Vision, 2012 年.

講演・口頭発表

池内克史:「人間行動観察ロボット」, 情報技術研究部門第 18 回セミナー, 2012. 【招待講演】

池内克史: "e-Heritage Projects in Italy, Cambodia, and Japan: Lesson learned:", NUS Lesson learned, 2012. 【招待講演】

池内克史:「人まねロボットによる会津磐梯山おどり」, 都市大学付属高校模擬授業, 2012. 【招待講演】【一般向け】

池内克史: "e-Heritage, Cyber Archeology, and Cloud museum", Sun Yat-sen University, 2012. 【招待講演】

池内克史: "e-Heritage, Cyber Archeology, and Cloud museum", ミュンヘン工科大学, 2012. 【招待講演】

池内克史: "e-Heritage, Cyber Archeology, and Cloud museum", 2012 NEM Summit, 2012. 【招待講演】

池内克史:「人間主体のITSと 4 次元仮想化都市」, 社会人のための ITS 専門講座, 2012. 【招待講演】【一般向け】

池内克史: "Programming-by-demonstration", URAI 2012, 2012. 【招待講演】

池内克史: "e-Heritage, Cyber-Archeology, and Cloud Museum", The 2nd ACCV Workshop on e-Heritage2012, 2012. 【招待講演】

池内克史:「Web 上における大規模データの効率的構築および有効利用に関する試み」, コンピュータビジョンとイメージメディア研究会, 2012. 【招待講演】

池内克史: "e-Heritage, Cyber Archeology, and Cloud museum", The International Conference on Information and Communication Technology for Embedded Systems, 2012. 【招待講演】

池内克史:「三次元復原に向けて」, 太陽の船シンポジウム「クフ王の船取り上げに向けて」, 2012. 【招待講演】

池内克史: "e-Heritage, Cyber Archeology, and Cloud museum", UCSD, 2012. 【招待講演】

池内克史: "Cloud museum and e-Heritage", CVPR2012, 2012. 【招待講演】

池内克史:「屋外ギャラリー」, VR 文化フォーラム, 2012. 【招待講演】

池内克史: "e-Heritage, Cyber-Archaeology, and Cloud Museum", ICVGIP2012, 2012. 【招待講演】

池内克史: "e-Heritage, Cyber Archeology, and Cloud museum", シンポジウム, 2012. 【一般向け】

池内克史: "e-Heritage, Cyber Archeology, and Cloud museum", UCLA Lesson Learned, 2012.

池内克史: "e-Heritage Projects in Italy, Cambodia, and Japan: Lesson learned:", MIT Lesson learned, 2012.

池内克史: "e-Heritage Projects in Italy, Cambodia, and Japan: Lesson learned:", Columbia University Lesson learned, 2012.

池内克史: "e-Heritage, Cyber Archaeology, and Cloud Museum", Leibniz-Rechenzentrum, Germany, 2012.

池内克史: "Programming-by-demonstration", Kasetsart University 講演, 2012.

内藤理, 岩見紫乃, 森純一郎, 梶川裕矢, 佐藤啓宏, 工藤俊亮(電気通信大学), 池内克史: 「実社会との関係を深めるロボットに関する研究の現状と今後」, 日本ロボット学会第30回記念学術講演会, 2012.

宇野友季子, 佐藤啓宏, 池内克史: 「直接教示を用いた複数ヒューマノイドロボットによる接触を伴う組手の振り付け手法」, 日本ロボット学会第30回記念学術講演会, 2012.

宇野友季子, 佐藤啓宏, 工藤俊亮, 池内克史: 「武道におけるアクロバティックな全身動作の階層的記述と認識」, 日本ロボット学会第30回記念学術講演会, 2012.

吹上大樹, 大石岳史, 池内克史: 「透明視知覚特性を利用した複合現実感(MR)環境下における遮蔽矛盾解消手法の提案」, 第184回 CVIM2012年12月研究会, 2012.

宇野友季子, 佐藤啓宏, 工藤俊亮, 池内克史: 「全身によるアクロバティックな武道動作に対する知識ベースの階層的記述と認識」, 第184回 CVIM2012年12月研究会, 2012.

光安皓, 市川博一, 田村勇二(パシフィックコンサルタンツ), 長谷川雅人, 須田昌仁(国際情報ネット), 堀口良太, 飯島護久, 花房比佐友(アイ・トランスポート・ラボ), 吉村方男(アジア航測), 佐々木卓, 萬沙織(長大), 小野晋太郎, 大口敬, 池内克史(東京大学): 「環境に配慮した効率的な交通行動への変容を促す生活交通情報フィードバックシステムの構築に関する基礎調査」, 第11回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

Mostafa Kamali, Eric Hayman, Shintaro Ono, Katsushi Ikeuchi: 「正面映像からのカメラの動きと道路幅推定」, 第11回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

Ashwani Kumar, Atsuhiko Banno, Shintaro Ono, Takeshi Oishi, Katsushi Ikeuchi: 「不十分な GPS 環境下における三次元地図モデルのグローバル位置合わせ」, 第11回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

小出公平, 池内克史(東京大学), 牧野浩志(中日本高速), 石名坂賢一, 佐々木政秀(柏市): 「我が国最先端のITSを活用した持続可能な街づくり—柏 ITS スマートシティの実現—」, 第11回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

福元和真, 川崎洋(鹿児島大学), 小野晋太郎, 池内克史(東京大学), 子安大士(埼玉大学): 「自転車位置推定のための複数車載カメラ映像の効率的な時空間マッチング手法」, 第11回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

韓垂由美, 小野晋太郎, 佐々木正人, 池内克史: 「自転車の速度制御を目的とした路面表示による実車実験 —自転車のためのシークエンスデザイン オプティカルドットシステム—」, 第11回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

鄭仁成, 小野晋太郎, 洪性俊, 中野公彦, 山邊茂之, 平沢隆之, 須田義大, 池内克史, 大口敬(東京大学), 牧野浩志(中日本高速道路): 「道路基盤地図情報を利用したドライビングシミュレータ実験による道路交通安全対策の事前評価」, 第11回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

竹田智哉・大石岳史・阪野貴彦(産総研)・池内克史: 「MR 技術のための既存映像からの人物作成」, PRMU, 2012.

小野晋太郎, 薛亮, 阪野貴彦, 大石岳史, 佐藤啓宏, 池内克史:「車載レンジセンサによる高速道路の長大トンネルの三次元モデリングと評価 -高密度計測と絶対位置合わせ-」, 電子情報通信学会技術研究報告 ITS 研究会, 2012.

新聞・報道

池内克史:「自分の行動を制御してCO₂排出抑制できる!? 路上カメラで排出量可視化 東大 千葉・柏で社会実験」, 日刊工業新聞(朝刊)31面, 2012.

池内克史:「春の褒章 674人 20団体」, 読売新聞(朝刊)37面, 2012.

池内克史:「春の褒章 674人 20団体 役所広司さんから受章」, 朝日新聞(朝刊)37面, 2012.

池内克史:「春の褒章 役所広司さんから674人 県内は黄綬、藍綬とも3人」, 山梨日日新聞(朝刊)3面, 2012.

池内克史:「春の褒章 役所広司さんから紫綬 九州から56人、4団体」, 西日本新聞(朝刊)32面, 2012.

池内克史:「春の褒章 674人・20団体 紫綬に役所さんから25人」, 河北新報(朝刊)4面, 2012.

池内克史:「春の褒章 674人 20団体」, 産経新聞(朝刊)22面, 2012.

池内克史:「春の褒章 674人 20団体」, 中国新聞(朝刊)27面, 2012.

池内克史:「春の褒章 674人 20団体 県関係は4人 2団体受章」, 徳島新聞(朝刊)3面, 2012.

池内克史:「春の褒章 674人 20団体 役所広司さんから受章」, 岐阜新聞(朝刊)3面, 2012.

池内克史:「春の褒章 674人に」, 東京新聞(朝刊)28面, 2012.

池内克史:「春の褒章に674人」, 毎日新聞(朝刊)28面, 2012.

池内克史:「東大生産技術研が社会実験 市民の交通行動は変わるのか? 道路交通のCO₂排出削減へ」, 建通新聞, 2012.

池内克史:「役所広司さんから紫綬 春の褒章 674人、20団体」, 静岡新聞(朝刊)30面, 2012.

池内克史:「役所広司さんから春の褒章 674人 20団体 名大の松本教授も」, 中日新聞(朝刊)30面, 2012.

池内克史:「「時論・公論」装飾古墳について」, NHK 総合, 2012.

池内克史:「地球アステク」, BS ジャパン, 2012.

池内克史:「「教科書に載せたい!」高德院大仏CG」, TBS, 2012.

池内克史:「「バーチャル飛鳥京」約1400年前の風景 CGでよみがえる」, 東京大学新聞, 2012.

池内克史:「特集:復元 歴史をリアルに体験」, 三機工業株式会社 広報誌, 2012.

池内克史:「飛鳥幻視紀行」, TV, 2012.

池内克史:「自分の行動を制御してCO2 排出抑制できる!? 東大、千葉・柏で社会実験」, 日刊工業新聞, 2012.

池内克史:「大仏復元のCG映像」, 出没! アド街ツク天国「鎌倉・長谷」, 2012.

受賞

池内克史: 紫綬褒章「知能情報処理・知能ロボティクス分野における功績」, 2012 年.

大学院学生 (池内研)吹上大樹, 大石研 准教授大石岳史, 池内研 教授池内克史: グラフィクスとCAD 研究会優秀研究発表賞「透明視知覚特性を利用した複合現実感(MR)環境下における遮蔽矛盾解消手法の提案」, 情報処理学会 グラフィクスとCAD 研究会, 2012 年.

大学院学生 (鹿児島大)福元和真,教授 (鹿児島大)川崎洋,特任助教(池内研)小野晋太郎,(埼玉大)子安大士, 池内研 教授池内克史: 第11回 ITS シンポジウム 2012 優秀論文賞「自車位置推定のための複数車載カメラ映像の効率的な時空間マッチング手法」, 2012 年.

大学院学生 (池内研)Liang Xue,特任助教(池内研)小野晋太郎,(産総研)阪野貴彦, 大石研 准教授大石岳史, 池内研 教授池内克史: Best Paper Award「3D Modelling and its Evaluation for Large-Scale Highway Tunnel using Laser Range Sensor」, 19th ITS World Congress Vienna, Austria, 2012 年.

池内克史: 平成 24 年度電子情報通信学会業績賞「3次元デジタルアーカイビング技術の研究開発と海外コンテンツへの応用展開に対する貢献」, 2012 年.

池上 高志・教授

研究テーマ(主たるもの)

人工生命

人工システム(センサーネットワークや、コンピュータプログラム、ロボット)を用いて、自律的な振る舞いや複雑なダイナミクスを研究する。

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

Ryoko Uno, Keisuke Suzuki, and Takashi Ikegam: "An Experimental Approach to Speakers", Advances in Complex Systems, Vol.15, No.3-4, pp.1150020-1-20, 2012 年. 【査読有】

Tom Froese^{1*}, Charles Lenay² and Takashi Ikegami¹: "Imitation by social interaction? Analysis of a minimal agent-based model of the correspondence problem", frontiers in Human neuroscience, 2012 年. 【査読有】

作品

Takashi Ikegami, Mizuki Oka,: 「Sensing the Sound Web」, Art Installaiton, 2012.

国際会議等

Mizuki Oka and Takashi Ikegami: "Characterizing Autonomy in the Web via Transfer Entropy", Artificial Life 13, 2012. 【査読有】

Tom Froese, Takashi Ikegami, and Mike Beaton:: "Non-Human Primates Cannot Decontextualize and Objectify the Actions of Their Conspecifics", Evolang, 2012. 【査読有】

Alex Woodward and Takashi Ikegami: "A Self-sustaining Visual Feedback Machine using Chaotic Neural Dynamics", Artificial Life 13, 2012. 【査読有】

Olaf Witkowski, Geoff Nitschke & Takashi Ikegami: "When is Happy Hour: An Agent's Concept of Time", Artificial Life 13, 2012. 【査読有】

Tom Froese¹, Takashi Ikegami¹ and Nathaniel Virgo²: "The Behavior-Based Hypercycle: From Parasitic Reaction to Symbiotic Behavior", Artificial Life 13, 2012. 【査読有】

講演・口頭発表

Takashi Ikegami: "Mind Time Machine/birds song/boids/droplets/sensory nets", workshop Plymouth, 2012. 【招待講演】

Takashi Ikegami: "The Evolution of Chemical Replicators and the Autonomous Sensory Network", Origins of Information Processing, 2012. 【招待講演】

Takashi Ikegami: "Mind Time Machine", UCLA Design, Arts, Media Lectures, 2012. 【招待講演】【一般向け】

Takashi Ikegami: "The default mode network of the brain, transfer entropy network and information turbulence in the web", COGS & Sackler research seminar , 2012.

石崎 雅人・教授

研究テーマ(主たるもの)

専門家社会におけるコミュニケーション・デザイン

専門家社会において、より良い意思決定を行うためのコミュニケーションのあり方について研究をすすめている。専門家と非専門家を対立させる見方で常に問題となってきたのが paternalism (温情的庇護主義)であった。この問題に対して、理論的には、専門家、非専門家それぞれが参加して意思決定をすることが望ましいが、現実には paternalism の問題を解消するものとして提案とされるのは、consumerism (消費者／非専門家至上主義)であった。consumerism が paternalism の問題点を解消できる面があることは否定できないが、それは、専門家に対して専門の

能力を超えた要求に結びつくことがあり、専門家の能力を十全に活用できない問題があった。本研究では、医療、介護、司法など分野における専門家と非専門家の共同意思決定のあり方について、コミュニケーション・デザインの問題としてアプローチする。

医療コミュニケーションにおける共同意思決定

ケア学において、ケアする側とケアされる側がどのような関係にあるべきかという問題は、より良いケアを考える上で中心的課題である。本研究は、理想的な関係とされる共同意思決定に焦点をあて、ケアコミュニケーションの中の医師と患者のコミュニケーションを対象として、その実態の解明を行う。具体的には、共同意思決定の概念、共同意思決定への医師・患者の意識、共同意思決定コミュニケーション過程の具体的なあり方、情報環境等の要因の共同意思決定過程への影響を明らかにすることにより、ケア学、医療コミュニケーション研究へ実証的な観点からの貢献を行うことを目的とする。

介護コミュニケーションにおける多主体協働

介護とは、高齢者が「生きる」ことを支援する活動であり、家族とともに、多くの専門家がかかわる。介護職員（訪問介護員（ホームヘルパー）を含む）、介護支援専門員（ケアマネジャー）、生活相談員・支援相談員、理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）、看護職員、医師、弁護士や司法書士まで関係し得る。このような専門分化は、介護の問題を整理して検討することを可能にする利点がある反面、関係者が多すぎることは単に1対1のコミュニケーションだけを考えればよいのではなく、問題に関係する当事者への配慮や調整を必要とするという意味でコミュニケーションを難しくする。たとえば、高齢者本人と家族の希望が異なる場合、介護支援専門員は、両者の希望を調整しなければいけない。また、高齢者本人と良い関係をつくっている介護職員は、本人の希望が医療の観点からは望ましいものでない場合、本人と医療者の間で悩むことになる。本研究では、介護コミュニケーション研修に紛争解決の手法として発展してきたメディエーションの考え方にもとに、介護に関する多主体間のより良いコミュニケーションのあり方について検討する。

研究業績(2012年度)

雑誌論文

片桐, 石崎, 高梨, 伝, 榎本: 「保健指導対話を対象とした相互信頼感形成過程の分析とモデル」, 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会, Vol.SIG-SLUD-B203, pp.43-48, 2012年.

石崎: 「参加型ワークショップを理解する視点」, 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会, Vol.SIG-SLUD-B202, pp.47-50, 2012年.

Katagiri, Y., Takanashi, K., Ishizaki, M., Enomoto, M., Den, Y., and Matsusaka, Y.: "Negotiation for Concern Alignment in Health Counseling Dialogues", Proceedings of the Workshop on the Semantics and Pragmatics of Dialogue, pp.171-172, 2012年. 【査読有】

講演・口頭発表

Ishizaki, M.: "Bridging the gap between the guidelines and the practice in medical consultation", International Conference on Communication in Healthcare, 2012.

石崎雅人: 「看護コミュニケーションを考える」, 全国自治体病院協議会福島県支部看護部長部会研修会, 2012. 【招待講演】【一般向け】

石田 英敬・教授

研究テーマ(主たるもの)

記号論・情報記号論の研究

記号論を情報学研究に活用する研究

言語態の研究

社会や文化の単位としての言語活動の研究

現代文学、現代思想の研究

近代ヨーロッパ文学および現代思想の研究

研究業績(2012 年度)

分担著書

石田英敬:『加藤周一における「時間と空間」』, ジュリー・ブロック 編, かもがわ出版, 2012 年.

その他論文

石田英敬:「再-魔術化としての文学 - 熊谷謙介『マラルメによる祝祭』書評」, 『表象』, 書評, 2012 年.

石田英敬:「『夢判断』フロイト」, 『UP』, 『ブックガイド 東大教師が新入生にすすめる本』, 2012 年. 【一般向け】

石田英敬:「創造的な知的爆発を目指すデジタル・ヒューマニティーズ」, 『人間会議』, 雑誌インタビュー, 2012 年. 【一般向け】

北川正恭、新藤宗幸、石田英敬:「橋下流の魅力は? 課題は? 市長就任から半年、識者の声」, 『朝日新聞』, 新聞インタビュー, 2012 年. 【一般向け】

石田英敬:「「3・11」の記憶 * 教訓 社会的位置づけを」, 『北海道新聞』, 新聞コラム, 2012 年. 【一般向け】

新聞・報道

石田英敬:「お堅い新聞、変わる一步」, 朝日新聞, 2012.

植田 一博・教授

研究テーマ(主たるもの)

需要側イノベーションの分析(Demand-side Innovation)

既存のイノベーション研究では供給側に焦点があたりがちであるが、実際には、新しい製品・技術やその新しい使い方が消費者により発見され、普及伝播する過程で、消費者自身によってその意味や価値が再解釈・再定義されて、結果的には予想を超えた大ヒットに至る場合がある。我々はこのような現象の事例検証と、この現象を可能にする個人の認知メカニズムや社会的な構造を、実験やインタビュー等により明らかにしつつある。

日本の伝統芸能における身体性と表現の認知科学的分析

文楽とは、言語情報を用いずに3人の人形遣いがイキを合わせて、人工物でしかない文楽人形をあたかも人が動作しているかのように操作する日本独自の伝統芸能である。この文楽人形の動作解析とそれを演じる人形遣いの動作・生理計測を通じて、人形の動きのいかなる要素によって我々は人形に人間らしさを感じているのか、人形を複数の人間が言語情報なしで巧みに操るための協調メカニズムとは何かを科学的に分析している。文楽以外にも、能・狂言の動きの意味を運動力学的、認知科学的に探っている。

生物らしさの知覚に関する研究

我々は生物と非生物を見分けられると考えられている。このような生物らしさの知覚は、生物と非生物とを見分ける能力であるにも関わらず、実物の生物を用いては検討されてきていない。そこで当研究室では、生物らしさの知覚に関する脳内過程を明らかにするために、実際の生物とロボットを用いて脳波による事象関連電位を計測した。その結果、生物らしさの知覚には、対象を主観的に生物と見なす過程と対象の生物的特徴を知覚する過程の二つの独立な過程が含まれていることが示唆されている。

研究業績(2012年度)

雑誌論文

Hiromitsu Miyata, Yasuyo Minagawa-Kawai, Shigeru Watanabe, Toyofumi Sasaki, Kazuhiro Ueda: "Reading Speed, Comprehension and Eye Movements While Reading Japanese Novels: Evidence from Untrained Readers and Cases of Speed-Reading Trainees", PLoS ONE, Vol.7, No.5: e36091, pp.1-13, 2012年。【査読有】

青野 直也, 森田 寿郎, 植田 一博: 「2リンク機構の運動から知覚される生物性の解析」, 電子情報通信学会論文誌「情報・システム:D」, Vol.J95-D, No.5, pp.1268-1275, 2012年。【査読有】

渋谷 友紀, 森田 ゆい, 福田 玄明, 植田 一博, 佐々木 正人: 「文楽人形遣いにおける呼吸と動作の非同期的関係: 日本古典芸能における「息づかい」の特殊性」, 認知科学, Vol.19, No.3, pp.337-364, 2012年。【査読有】

櫻 哲郎, 成田 友紀, 沢井 和也, 森田 寿郎, 植田 一博: 「文楽人形遣いの協調操作を実現する非言語情報通信」, 電子情報通信学会論文誌「情報・システム:D」, Vol.J96-D, No.1, pp.195-208, 2013年。【査読有】

Kazuhiro Ueda: "A Cognitive Perspective on Design Creativity and Innovation", International Journal of Design Creativity and Innovation, Vol.1, No.1, pp.19, 2013年。

国際会議等

Ikuya Nomura, Kazuyuki Samejima, Kazuhiro Ueda, Yuichi Washida, Hiroyuki Okada, Takashi Omori: "Choosing unknown goods: An fMRI study of product choice", The 34th Annual Conference of the Cognitive Science Society, pp.2812, 2012.

Kotaro Miwa, Kazuhiro Ueda: "Analysts' reluctance to voice conservative opinions and the informational value of long-term earnings growth forecasts", The 20th Conference on the Theories and Practices of Securities and Financial Market, 2012. 【査読有】

講演・口頭発表

野村 郁也, 鮫島 和行, 鷺田 祐一, 植田 一博, 岡田 浩之, 大森 隆司: 「商品選択場面における未知商品の選択: fMRI による実験的検討」, 認知心理学会第 10 回大会, 2012.

山田 歩, 植田 一博, 福田 玄明: 「利用範囲の拡大はプリペイドカードの魅力を高めるか」, 第 44 回消費者行動研究コンファレンス, 2012.

鈴木 宏昭, 植田 一博, 渡邊 克己: 「思考における無意識的处理」, 日本心理学会第 76 回大会, 2012. 【招待講演】

土居 裕和, 植田 一博: 「社会的注意方向検出における大域的処理の機能とその神経基盤」, 日本心理学会第 76 回大会, 2012.

宮田 裕光, 渡辺 茂, 植田 一博, 佐々木 豊文, 皆川 泰代: 「日本語小説の読みにおける視空間的处理と眼球運動—速読訓練者と非訓練者の比較」, 第 17 回認知神経科学学会学術集会, 2012.

福田 玄明, 塩見 昌裕, 中川 佳弥子, 植田 一博: 「ヒューマンロボットインタラクションにおける social touch」, HAI シンポジウム 2012, 2012.

植田 一博, 櫻 哲郎, 成田 友紀, 沢井 和也, 森田 寿郎: 「文楽人形遣いの阿咩の呼吸」, 日本認知科学学会第 29 回大会, 2012.

渋谷 友紀, 森田 ゆい, 福田 玄明, 植田 一博, 佐々木 正人: 「文楽人形遣いにおける演技動作と呼吸の対応関係」, 日本認知科学学会第 29 回大会, 2012.

Kotaro Miwa, Kazuhiro Ueda: 「Analysts' reluctance to voice conservative opinions and the informational value of long-term earnings growth forecasts」, 行動経済学会第 6 回大会, 2012.

山田 歩, 植田 一博, 福田 玄明: 「利用範囲の拡大は商品の魅力を高めるか」, 行動経済学会第 6 回大会, 2012.

受賞

福田 玄明, 植田 一博: 2011 年奨励論文賞「実際の生物を用いたアニメーション知覚の脳内基盤の検討」, 日本認知科学学会, 2012 年.

福田 玄明, 植田 一博: HAI-2011 Outstanding Research Award(最優秀賞)「生物らしさの知覚に伴う脳活動—実際の生物とロボットを用いて—」, HAI Symposium 運営委員会, 2012 年.

大島 まり・教授

研究テーマ(主たるもの)

医用画像に基づく血管循環系のマルチスケール・マルチフィジックス解析

本研究は血管病変の発症、進行に関わる流体力学的な要因を数値解析により解明することを目的としている。実際の生体内を再現したモデルや境界条件を採用するために、ここでは CT や MRI などの医用画像から抽出した血管形状モデルを用い、末梢血管網など循環系全体の影響を考慮した境界条件を導出・適用した大規模血流解析システムを構築している。さらに血流および血管壁内での物質輸送・透過モデルを取り入れ、悪玉コレステロールなどの病変に関わる物質の血管壁内への蓄積についても予測を行っている。

血流と血管壁の相互作用を考慮した連成解析と in vitro モデルを用いた可視化計測

本研究では脳動脈瘤の発生・成長のメカニズムの解明を目的とし、血流によって変形する血管壁の力学応答メカニズムを考慮した数値解析を行うとともに、in vitro モデル実験による結果と比較することで評価を行っている。医用画像から再構築した脳動脈瘤モデルを対象として、数値解析では血管壁を超弾性体とした流体構造連成解析を行い、実験では速度 3 成分のデータを得られるステレオ PIV という計測手法を用い、内部の流動構造と血管壁の挙動、およびそれらの相互作用を評価している。

共焦点 Micro PIV による微小流路内混相流の可視化計測

微小血管を流れる赤血球やマイクロ分析チップのような微小流体デバイスの内部の混相流を可視化計測するツールとして、共焦点マイクロ PIV システムを開発している。本手法は、流れの中にトレーサ粒子と呼ばれる微小な蛍光ビーズを混濁させ、共焦点スキャナ・特殊な蛍光顕微鏡・高感度高速度カメラを用いて流れを撮影し、得られた画像を PIV 解析処理を用いて速度分布を求める。共焦点マイクロ PIV を用いることで、マイクロサイズの微小領域における 3 次元的な流れの様子を定量的に知ることができる。

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

R. Torii, M. Oshima: "An integrated geometric modelling framework for patient-specific computational haemodynamic study on wide-ranged vascular network", *Computer Methods in Biomechanics and Biomedical Engineering*, Vol.15, No.6, pp.615-625, 2012 年。【査読有】

F-C. Li, H-N. Zhang, Y. Cao, T. Kunugi, H. Kinoshita, M. Oshima: "A purely elastic instability and mixing enhancement in 3D curvilinear channel flow", *Chinese Physics Letters*, Vol.29, No.9, pp.094704-1-094704-5, 2012 年。【査読有】

A. Hossain, N. Oshima, Y. Nakamura, M. Oshima: "Numerical Simulation of Flame Dynamics Associated with Negative Velocity Induced by Deformed Flame Shape", *Combustion Theory and Modelling*, Vol.16, No.5, pp.799-816, 2012 年。【査読有】

V D.A. Steinman, Y. Hoi, P. Fahy, L. Morris, M.T. Walsh, N. Aristokleous, A.S. Anayiotos, Y. Papaharilaou, A. Arzani, S.C. Shadden, P. Berg, G. Janiga, J. Bols, P. Segers, N.W. Bressloff, M. Cibis, F.H. Gijssen, S. Cito, J. Pallarés, L.D. Browne, J.A. Costelloe, A.G. Lynch, J. Degroote, J. Vierendeels, W. Fu, A. Qiao, S. Hodis, D.F. Kallmes, H. Kalsi, Q. Long, V.O. Kheyfets, E.A. Finol, K. Kono, A.M. Malek, A. Lauric, P.G. Menon, K. Pekkan, M.E. Moghadam, A.L. Marsden, M. Oshima, K. Katagiri, V. Peiffer, Y. Mohamied, S.J. Sherwin, J. Schaller, L. Goubergrits, G. Usera, M. Mendina, K.V. Sendstad, D.F. Habets, J. Xiang, H. Meng, Y. Yu, G.E. Karniadakis, N. Shaffer, F. Loth: "Variability of CFD Solutions for Pressure and Flow in a Giant Aneurysm", *Journal of Biomechanical Engineering*, Vol.135, pp.021016-1-021016-13, 2012 年。【査読有】

大島まり: 「ステントによる血流障害のレオロジー」, *International Review of Thrombosis*, Vol.7, No.1, pp.33-38, 2012 年。

大島まり: 「血管障害における流体力学的アプローチの果たす役割〈I〉」, *Angiology Frontier*, Vol.11, No.2, pp.2-5, 2012 年。

大島まり: 「血管障害における流体力学的アプローチの果たす役割〈II〉—in vivo シミュレーションを目指した試み—」, *Angiology Frontier*, Vol.11, No.3, pp.1-5, 2012 年。

国際会議等

Marie Oshima, Masamichi Oishi, Haruyuki Kinoshita, Teruo Fujii: "Visualization and Measurement of Flow-Induced Dynamic Motion of Red Blood Cells Using Tracking Confocal Micro-PIV System", *ASME 2012 Summer Bioengineering Conference (SBC2012)*, Vol.SBC2012-80516, CD-ROM, 2012. 【査読有】

Marie Oshima: "Multiscale simulation of the blood-wall interactions with applications to cardiovascular diseases", *10th World Congress on Computational Mechanics (WCCM2012)*, 2012. 【査読有】

Marie Oshima, Milan Toma, Absy Krdy: "Fluid structure interactions of carotid artery using multi-scale model as outflow condition", *10th World Congress on Computational Mechanics (WCCM2012)*, 2012. 【査読有】

Marie Oshima: "Image-based Modeling and Multi-scale Simulation for Cardiovascular Diseases", *1st. Spain-Japan Workshop on Computational Mechanics*, 2012. 【査読有】

Kengo Katagiri, Absei Krdey, Sota Yamamoto, Marie Oshima: "Strong Coupled Fluid-Structure Interaction Simulation of Cerebrovascular System Using Multi-Scale Model", *ASME 2012 Summer Bioengineering Conference (SBC2012)*, 2012. 【査読有】

M. Oishi, H. Kinoshita, T. Fujii, M. Oshima: "Phase-locked confocal micro-PIV measurement of three dimensional flow structure of transient droplet formation mechanism in T-shaped micro", *American Physical Society: 65th Annual Fall DFD Meeting*, 2012. 【査読有】

Marie Oshima, Kengo Katagiri: "CFD Challenge-Simulation Using a FVM Program Developed by the Oshima Laboratory at University of Tokyo", *ASME 2012 Summer Bioengineering Conference (SBC2012)*, 2012. 【査読有】

Xiao-Bin Li, Feng-Chen Li, Haruyuki Kinoshita, Masamichi Oishi, Marie Oshima: "Viscoelastic droplet dynamics under very low interfacial tension in a serpentine T-junction microchannel", *7th International Symposium on Multiphase Flow (IMSF2012)*, 2012. 【査読有】

Deog Hee Doh, Mingyu Jeon, Jooho Yum, Sunyoung Moon, Youngho Kim, Oshima Marie, Oishi Masamichi, Sangho Suh, Hyungho Kim: "Simultaneous Measurements for the Flows and the Structure", 2012 Annual Congress of Biomedical Engineering Society for Circulatory disOrders, 2012. 【査読有】

Shio K. Kawagoe, Marie Oshima, Kazuyuki Ishii: "New educational trials for Science and Technology by cooperating with Industries", AAAS(Advancing Science, Serving Society) 2013 Annual Meeting, 2012. 【査読有】

金森 修・教授

研究テーマ(主たるもの)

フランスの現代哲学

フランスの20世紀哲学の研究。具体的にはベルクソン、バシュラール、カンギレム、フォーコー、ドゥルーズなど。

生政治・生権力論

現代の生命科学とフランスの現代哲学との交叉地点で生じる問題群を扱う。主にフォーコー、アガンベンらの研究を参考にしながら、現代の生政治・生権力のありようをみる

研究業績(2012 年度)

河口 洋一郎・教授

研究テーマ(主たるもの)

CG によるメカニック造形研究

生き物のように反応するメカニックな立体造形ロボット技術ならびに新伝統芸能を演出しロボティックに凹凸する映像ディスプレイの造形研究

情感的なジェモーション(Gemotion)によるインタラクション研究

伝統芸能との融合によるパフォーマンスアーツとして、人にインタラクティブに反応する情感的な CG 映像空間の創出、および生き物のように映像に凸凹反応するジェモーション・ディスプレイの研究

自己増殖する複雑系のグロースモデル(Growth Model)による超高精細 CG 映像研究

スーパーハイビジョン(8K×4K)による超高精細の CG 生物・物理シミュレーションによる映像生成研究

研究業績(2012年度)

作品

河口 洋一郎: 「【立体造形】Bucco/宙蝶」, 新宿クリエイターズフェスタ, 2012.

河口 洋一郎: 「【立体造形】Jecco/宙海月(薩摩焼)」, 沈壽官氏との制作発表, 2012.

河口 洋一郎: 「【立体造形】Jecco/宙海月(津軽塗)」, パリにおける東北伝統的工芸品展、世界遺産劇場, 2012.

河口 洋一郎: 「【ロボット】Jecco Robot/機械的宙海月」, ASIAGRAPH 2012、ACE 2012, 2012.

Yoichiro Kawaguchi: 「【CG映像】Growth: Tendril」, SIGGRAPH Asia 2012, 2012.

河口 洋一郎: 「【立体造形】Growth/グロースモデル(色彩)」, 東京デザイナーズウィーク, 2012.

国際会議等

Yusuke Nakagawa, Akiya Kamimura, Yoichiro Kawaguchi: "MimicTile: A Variable Stiffness Deformable User Interface for Mobile Devices", SIGCHI 2012, 2012. 【査読有】

Kinyo. Kou, Y. Kawaguchi: "Emergent Gait Evolution of Quadruped Artificial Life", ACE 2012, 2012. 【査読有】

Haipeng Mi, Y. Kawaguchi: "JECCO: A Creature-Like Tentacle Robot", ACE 2012, 2012. 【査読有】

その他論文

長澤康平、河口洋一郎: 「Marker Level Set 法による流体の微細な自由表面生成手法」, 情報文化学会誌 vol.19 No.1, p3-6, 2012年. 【査読有】

講演・口頭発表

Yusuke Nakagawa, Akiya Kamimura, Yoichiro Kawaguchi: "MimicTile: A Variable Stiffness Deformable User Interface for Mobile Devices", SIGCHI 2012, 2012. 【招待講演】

Kinyo. Kou, Y. Kawaguchi: "Emergent Gait Evolution of Quadruped Artificial Life", ACE 2012, 2012. 【招待講演】

Haipeng Mi, Y. Kawaguchi: "JECCO: A Creature-Like Tentacle Robot", ACE 2012, 2012. 【招待講演】

Y. Kawaguchi: "Growth: Tendril", SIGGRAPH Asia 2012, 2012. 【招待講演】

河口 洋一郎: 「「きぼう」日本実験棟における文化・人文社会科学パイロットミッション第2期テーマのメディア向け結果報告会」, JAXA, 2012. 【招待講演】【一般向け】

Yoichiro Kawaguchi: "Impact of Artistic Robot", 1st International Robot Art Conference, 2012. 【招待講演】

Yoichiro Kawaguchi: "CGと進化生命の宇宙", 第八回中国長春国際アニメマンガゲームフェア, 2012. 【招待講演】【一般向け】

Yoichiro Kawaguchi: "The world of Yoichiro Kawaguchi", Pioneer Cinema, Moscow, Russia, 2012. 【招待講演】【一般向け】

Yoichiro Kawaguchi: "The world of Yoichiro Kawaguchi", University of Hawaii at Hilo, Hawaii, 2012. 【招待講演】

河口 洋一郎: 「宇宙で抹茶を点てる」, JAXA, 2012. 【招待講演】

Yoichiro Kawaguchi: "" Artistic Gemotion Bio-Machine(芸術的情感機械生命体)", VRCAI: Culture & Computing 2012, 2012. 【招待講演】

河口 洋一郎: 「生命造形の宇宙へ」, 京都賞, 2012. 【招待講演】

河口洋一郎, 島津義秀(琵琶奏者), 白鳥五十鈴(バレエダンサー): 「Gemotion Dance」, 展覧会「河口洋一郎の宇宙探検」オープニング, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎: 「生命造形の宇宙へ～伝統文化の視点から～」, 展覧会「河口洋一郎の宇宙探検」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎: 「生命造形の宇宙へ」, 第 36 回横幹技術フォーラム, 2012. 【招待講演】

河口 洋一郎: "宇宙造形のデザイン", The International Conference on Design Principles and Practices, 2012. 【招待講演】

河口 洋一郎: 「国際と日本と次世代のスピード感 ～生命宇宙の未来～」, U35 MEDIA ART FESTIVAL, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎: 「探査する宇宙生命体～生命宇宙の未来～」, JAXA, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎: 「生命造形の宇宙へ」, 女子美術大学, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎: 「宇宙造形の未来」, 種子島宇宙芸術祭推進協議会「宇宙芸術ビッグトークイベント」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎、藤間浩菊(藤間流): 「Gemotion Dance」, 新宿クリエイターズ・フェスタ 2012 オープニング, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎, 細田守氏(アニメ監督), 隈研吾氏(建築家): 「日本の表現は世界に通用するか?」, DIGITAL CONTENTS EXPO 2011, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎: 「生命造形の宇宙へ」, 京都賞キッズサイエンス, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口洋一郎, 玄里氏(女優), 本木克英氏(映画監督): 「河口洋一郎のタネのネタ」, 富山水辺の映像祭, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎, さかもと未明: 「トークセッション」, 新宿クリエイターズ・フェスタ 2012, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎: 「生命造形の宇宙へ」, エンジン01, 2012. 【招待講演】

河口 洋一郎: 「伝統モノつくりの先端アート化の試み」, エンジン 01, 2012. 【招待講演】

河口洋一郎, 加藤泉氏(画家):「アジアンアーティストトークセッション」, 霧島アートの森, 2012. 【招待講演】【一般向け】

河口 洋一郎:「生命造形の宇宙へ」, ナレッジキャピタルアワード ver.0 アジア学生クリエイティブ EX, 2012. 【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

河口洋一郎:「「きぼう」日本実験棟における文化・人文社会科学パイロットミッション第2期テーマのメディア向け結果報告会」, JAXA, 2012.

河口 洋一郎:「霧島アートの森新館長に河口氏」, 南日本新聞, 2012.

河口 洋一郎:「霧島アートの森新館長に河口氏」, 読売新聞鹿児島版, 2012.

河口 洋一郎:「宇宙ニュース-宇宙抹茶実験紹介-」, TV東京, 2012.

河口 洋一郎:「宇宙ニュース-宇宙抹茶実験紹介-」, BSジャパン, 2012.

河口 洋一郎:「宇宙ニュース-宇宙抹茶実験紹介-」, You Tube, 2012.

河口 洋一郎:「雑記帳:薩摩焼の香炉を元に「未来のクラゲ」を創作」, 毎日新聞毎日 jp, 2012.

河口 洋一郎:「沈壽官さんクラゲの造形」, 読売新聞 YOMIURI ONLINE, 2012.

河口 洋一郎:「CG作家河口さん、薩摩焼とコラボ作品発表」, 南日本新聞 373news.com, 2012.

河口 洋一郎:「最先端 CG と薩摩焼がコラボ 伝統技術生かし造形作品」, 朝日新聞デジタル, 2012.

河口 洋一郎:「”消しゴム”薩摩焼新作発表」, 南日本新聞, 2012.

河口 洋一郎:「”青鉛筆”薩摩焼新作発表」, 朝日新聞, 2012.

河口 洋一郎:「CG+薩摩焼=未来型クラゲ」, 西日本新聞, 2012.

河口 洋一郎:「沈壽官さんクラゲの造形 河口教授の CG 元に」, 読売新聞, 2012.

河口 洋一郎:「”雑記帳”薩摩焼新作発表」, 毎日新聞, 2012.

河口 洋一郎:「”交遊抄”散歩の友」, 日本経済新聞, 2012.

河口 洋一郎:「アニメ監督・細田守×建築家・隈研吾シンポジウムレポート 表現における日本と世界とは?」, アニメ!アニメ!, 2012.

河口 洋一郎:「東京デザイナーズウィーク茂木健一郎 with Friends Night」, BS 日テレ「TOKYO DESIGNERS WEEK.tv」, 2012.

河口 洋一郎:「東京デザイナーズウィーク伊藤若冲展」, BS 日テレ「TOKYO DESIGNERS WEEK.tv」, 2012.

河口 洋一郎:「立体造形作品展示「Jecco(宙海月)」, BS フジ「世界遺産劇場-日光東照宮-」, 2012.

河口 洋一郎:「TOKYO DESIGNERS WEEK.tv」, You Tube, 2012.

河口 洋一郎:「芸術生命体の世界”ジェモーショナル・バイオマシーン”」, ARTing 臨時増刊号銀河系美術館, 2012.

河口 洋一郎:「”時事春秋”芸術の南の玄関口に」, 南日本新聞, 2012.

河口 洋一郎:「映像および立体造形作品展示「河口洋一郎の宇宙探検」, MBC 南日本放送「ズバツとかごしま」, 2012.

河口 洋一郎:「平成24年度芸術選奨文部科学大臣賞受賞「創作へ挑戦続けたい」, 南日本新聞, 2012.

受賞

河口 洋一郎: 平成 24 年度(第 63 回)芸術選奨文部科学大臣賞「メディア芸術部門」, , 2012 年.

姜 尚中・教授

研究テーマ(主たるもの)

東北アジアにおけるコリアンネットワークの形成

東北アジアにはこの地域を覆った植民地支配と戦争、さらに内戦と冷戦構造のために、数百万人に及ぶコリアン系マイノリティが散在し、言語、文化、社会、経済、アイデンティティなどの違いがありながらも、コリアンネットワークとも言える越境的(トランスナショナル)な移動、連鎖、交流の歴史が続いてきた。本研究は、このようなコリアンネットワークの形成とその歴史を辿りつつ、それが分断された朝鮮半島の平和的な共存と統一にどのような影響を与えることになるのか、その展望を明らかにすることにある。

東北アジア共同体形成の可能性とその展望

グローバル化の進展とともに、世界の多極化が進み、地域統合や地域主義の動きが顕著になりつつあるが、本研究では、このようなリージョナリズムの可能性と展望を、東北アジア地域に即して明らかにしようとするものである。具体的には、地政学的に東北アジア地域の中心に位置する朝鮮半島の共存と統一の問題を視野に、この地域の冷戦構造の終結と冷戦以後の地域秩序の構築がどのようにしたら可能になるのか、その条件と展望を地域主義の構想を通じて明らかにすることにある。

近代日本の国民意識の形成とアジア認識

東アジアにおいて早熟的に国民国家の形成に成功し、日清戦争、日露戦争を通じて近隣アジア諸国との支配・従属関係を築いていくことになる近代日本は、その過程を通じて「日本型オリエンタリズム」ともいうべき特異なアジア認識、アジア・イメージを形成していくことになった。本研究は、そのような近代日本のアジア認識の理念型的な構造とその歴史を、学問的な言説や論説、ジャーナリズムなどを素材に浮き彫りしようとするものである。

研究業績(2012 年度)

木宮 正史・教授

研究テーマ(主たるもの)

朝鮮半島をめぐる国際政治の展開

第二次世界大戦以後の、朝鮮半島をめぐる国際政治の歴史的展開を、日本、韓国、米国などの外交文書、一次史料を手掛かりに実証的に解明することを目的とする。特に、現在は、1970 年代、米中和解や日中国交正常化など東アジア冷戦体制が変容するのに対して、南北朝鮮がどのような対応を選択したのかを、南北朝鮮のパワー・バランスの変容に対応した南北朝鮮の政策選択の「対称関係の中の対照性」という観点から解明する。

現代韓国政治の展開

現代韓国は、1987 年まで、基本的には権威主義体制が持続してきたが、その後、民主化運動の高揚によって民主主義体制へ移行し、さらに、選挙による与野党政権交代を 2 度にわたり達成するなど、民主主義体制の堅固化を達成した。そうした現代韓国政治の展開を帰結させた政治力学を、冷戦体制への対応、経済開発戦略の選択、民主化運動とそれへの対応という観点から、抽出し、そうした政治力学が民主化後、どのように持続し、また、どのように変容しているのかを解明する。

日韓・日朝関係の展開

日本外交における韓国、朝鮮半島の位置づけがどのように変化したのか、また、韓国外交における日本の位置づけがどのように変化したのか、日本と朝鮮半島との関係をめぐる歴史的展開を、外交文書などの一次史料に基づいて解明する。さらに、そうした作業に基づいて、どのような日韓関係を日韓がともに選択しうるのか、また、するべきであるのか、日韓関係をめぐる政策構想、未来構想についても考察する。

研究業績(2012 年度)

著書

木宮正史:「国際政治のなかの韓国現代史」, 山川出版社, 2012 年.

分担著書

KIMIYA, Tadashi: "Regional Integration and Institutionalization: comparing Asia and Europe", G. John Ikenberry, Yoshinobu Yamamoto, and Kumiko Haba 編, Shoukadoh Publishers, 2012 年.

木宮正史:「世界史史料 11 二〇世紀の世界Ⅱ 第二次世界大戦後 冷戦と開発」, 歴史学研究会 編, 岩波書店, 2012 年.

木宮正史:「日韓関係の未来を構想する」, 姜尚中・木宮正史 編, 新幹社, 2013 年.

木宮正史:「日本の外交 第2巻 外交史 戦後編」, 波多野澄雄 編, 岩波書店, 2013年.

雑誌論文

木宮正史:“일본의 한국연구의 전개와 현상: 새로운 가능성의 모색(日本の韓国研究の展開と現状:新たな可能性の模索)”, 일본공간(日本空間)国民大学日本学研究所, No.11, pp.194-221, 2012年. 【査読有】

木宮正史:「岐路に立つ日韓関係:摩擦を超えた「進化」に向けて」, ニッポンドットコム(インターネット)
<http://www.nippon.com/ja/in-depth/a01301/>, 2012年. 【一般向け】

木宮正史:「思考の環:日本の現代韓国研究をめぐる断想」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究, No.83, pp. i ~ iv, 2012年.

木宮正史:“기로에 선 한일관계: 마찰을 넘어 ‘진화’를 향해(岐路に立つ韓日関係:摩擦を超え「進化」に向けて)”, 일본공간(日本空間)国民大学日本学研究所, No.12, pp.87-100, 2012年. 【一般向け】

木宮正史:「大統領選挙と韓国の政治外交の行方」, 東亜(財団法人霞山会), No.548, pp.30-37, 2013年.

木宮正史:「朴正熙研究のさらなる発展とその普遍的意味」, 国際政治(日本国際政治学会), No.172, pp.152-161, 2013年.

作品

木宮正史:「「朴槿恵」「朴槿恵政権」ほか朝鮮半島関連全 23項目に関する解説」, デジタルイミダス 2013
<http://imidass.jp>, 2013.

国際会議等

木宮正史(기미야 다다시):“日韓関係の歴史的構造的変容と米中G2時代における含意(日本語・韓国語)”, 韓国高麗大学アジア問題研究所HK事業団・韓国東北アジア歴史財団・東京大学現代韓国研究センター・日本学術振興会東アジア現代史研究チーム主催『第2回東北アジア共同体論壇 韓中日関係の歴史的省察と新たな地域協力秩序の模索』, pp.日本語 pp.211-235. 韓国語, pp.237-264., 2012.

KIMIYA, Tadashi: “Peaceful Transformation of the Northeast Asia: In Search of Accommodating China to the South Korea’s Initiated Reunification Based on the Balanced Korea-Japan Relations”, Peace and Humanities Research Group, Institute for Peace and Unification Studies, Seoul National University, Configuration of Peacelessness on the Korean Peninsula: Dialogue between Humanities and Social Science, pp.47-68, 2012.

木宮正史:“戦後日本の対朝鮮半島外交の展開:地政学、脱植民地化、冷戦体制、経済協力”, Asiatic Research Institute, Korea University, Searching for the Future-Oriented Harmony of National Identities: The Political Economy of Economic and Cultural Cooperation and Comprehensive Security, 2012.

木宮正史:“日韓関係の構造変容、その過渡期としての現状、そして解法の模索”, (公財)渥美国際交流財団関口グローバル研究会(SGRA)・国民大学日本学研究所・豪州国立大学(ANU) Japan Institute『第12回日韓アジア未来フォーラム:アジア太平洋時代における東アジア新秩序の模索』, pp.1-10, 2013.

木宮正史:“安倍政権下の日韓関係”, 現代日本学会・ソウル大学日本研究所・東北アジア歴史財団主催『日本新政権の登場と韓日関係展望』, pp.91-100, 2013.

その他論文

KIMIYA, Tadashi: "Japanese and South Korean Leaders Should Strengthen Public Diplomacy", AJISS-Commentary No.172, 2013 年.

講演・口頭発表

木宮正史:「陳チャンス氏の講演に対する討論」, 東京大学大学院情報学環現代韓国研究センター駒場支所主催、研究会「新政権下の日韓関係」, 2012.

木宮正史:「日韓関係の歴史的構造的変容と米中G2時代における含意」, 韓国高麗大学アジア問題研究所HK事業団・韓国東北アジア歴史財団・東京大学現代韓国研究センター・日本学術振興会東アジア現代史研究チーム共催『第2回東北アジア共同体フォーラム 韓中日関係の歴史的省察と新たな地域協力秩序の模索』, 2012.

木宮正史(기미야다다시): "金俊燁と韓国現代史に関するコメント", 財団法人社会科学院・高麗大学校亜細亜問題研究所共催『金俊燁先生逝去1周年記念国際学術セミナー 金俊燁と中国:韓国の中国学、中国の韓国学』, 2012. 【招待講演】

木宮正史:「韓国政治外交の現状と展望」, NEASE-Net(北東アジア研究者交流ネットワーク)第22回政策セミナー, 2012. 【招待講演】

木宮正史:「韓国の政治外交と日韓関係」, 人事院第7回行政研修:韓国中央公務員研究院派遣コース講演, 2012. 【招待講演】

木宮正史:「「情報行動の日韓比較」の討論」, 東京大学現代韓国研究センターワークショップ「情報行動の日韓比較」, 2012.

木宮正史: "일본의 대 한반도 외교의 전개(日本の対朝鮮半島外交の展開)", ソウル大学日本学研究所特別講演会, 2012. 【招待講演】

木宮正史:「梶村秀樹と韓半島に関する指定討論」, 高麗大学アジア問題研究所『한일관계를 되묻는다: 해방인가 문리인가 가지무라 헤에키와 한반도(韓日関係を問い直す:解放か分離か/梶村秀樹と韓半島)』, 2012. 【招待講演】

木宮正史: "日韓関係の構造と展望:日本から見た韓国への期待", 平成24年度大韓民国政府研修職員への講演, 2012. 【招待講演】【一般向け】

木宮正史:「分科会D2(東アジア)、E2(東アジア国際政治史Ⅱ)、討論」, 日本国際政治学会、2012年度研究大会、2012.

木宮正史:「分科会B-2自由論題(世論と政治外交)、司会および討論者」, 日本政治学会 2012年度研究大会, 2012.

木宮正史:「日本の対朝鮮半島外交をどう構想するのか」, 日本大学国際関係学部学際研究会, 2012. 【招待講演】

木宮正史:「日韓関係の現状をどう考えるのか:2012年夏の一連の事態を参考に」, 日本経団連21世紀政策研究所, 2012. 【招待講演】

木宮正史:「第2部「グローバル化と在日コリアン」に関する討論」, 東京大学現代韓国研究センター・韓国東北アジア歴史財団共催「在日コリアンの現在・未来」, 2012.

木宮正史:「公開シンポジウム「新指導者の朝鮮半島—李明博政権の総括と大統領選挙後の展望」司会・討論」, 現代韓国朝鮮学会 2012年度研究大会、, 2012.

木宮正史:「石川誠人氏「冷戦期の華(台)韓関係の変遷—国府の反共国家間の連携の模索とその限界」に関する討論」, サントリー財団主催「戦後アジアの政治・経済秩序研究会」, 2013. 【招待講演】

木宮正史:「安倍政権下の日韓関係」, 韓国現代日本学会・ソウル大学日本研究所・東北アジア歴史財団主催『日本新政権の登場と韓日関係展望』, 2013. 【招待講演】

木宮正史:“韓国の対北朝鮮政策に関する3つの発表へのコメント”, 韓国高陽市主催、培在大学統一学研究所主管、「고양 600년, 2020 고양평화통일특별시 실현을 위한 평화인권도시 국제심포지엄(高陽 600年、2020 高陽平和統一特別市実現のための平和人権都市国際シンポジウム)」, 2013. 【招待講演】

木宮正史:「北朝鮮核問題と日韓の政策協調」, 韓国統一研究院・NPO法人東アジア政経アカデミー・早稲田大学アジア太平洋研究センター主催、『第6回日韓政策フォーラム 日韓新政権と北朝鮮問題』, 2013. 【招待講演】

木宮正史:「新たな公共圏と日韓の政治変動」, 日韓における民主主義の変容と世論をめぐって, 2013.

新聞・報道

木宮正史:「対北協力関係構築を(東京新聞・ソウル新聞共同世論調査結果に関する評価インタビュー)」, 東京新聞, 2012.

木宮正史:「ニュース探究ラジオ Dig 特集:韓国朴槿恵政権の成立」, TBSラジオ, 2012.

木宮正史:「日本の「竹島の日」などに関する解説(インタビュー)」, SBS(韓国)テレビニュース, 2012.

木宮正史:「北朝鮮第3次核実験に関する解説」, NHK 総合「ニュース深読み」, 2012.

木宮正史:「北朝鮮に強烈なメッセージを送る」韓国朴槿恵大統領就任に関する談話(電話インタビュー) , 共同通信配信『岩手日報』『信濃毎日新聞』など、, 2012.

木宮正史:「해외시론:박근혜 정부 외교의 成敗는 균형 감각에 달렸다(海外時論:朴槿恵政府外交の成否はバランス感覚にかかっている)」, 『朝鮮日報』, 2012.

木宮正史:「북한 3차 핵실험 / 3국 전문가 분석:유엔제재 한계...`북핵포기 유도` 당근 제시를(北朝鮮3次核実験/3国専門家分析:国連制裁は限界 『北朝鮮核放棄を誘導』アメの提示を)」(北朝鮮の第3次核実験に関する電話インタビュー) , 『毎日経済新聞』, 2012.

木宮正史:「일본전문가 분석(日本専門家分析)」(北朝鮮の第3次核実験に関する電話インタビュー) , 『京郷新聞』, 2012.

木宮正史:「ニュース探究ラジオ Dig 特集:韓国大統領選挙」, TBSラジオ, 2012.

木宮正史:「해외시론: 동북아 질서 재편에서 소외되는 韓·日(海外時論:東北アジア秩序再編から疎外される韓日)」, 朝鮮日報, 2012.

- 木宮正史:「日朝協議再開に関する解説(録画インタビュー)」, NHK ニュース9 , 2012.
- 木宮正史:「李明博大統領竹島訪問に伴う日韓関係に関して」(生出演), NHK WEB24, 2012.
- 木宮正史:「李明博大統領竹島訪問に伴う日韓関係に関して」(英語), NHK World, 2012.
- 木宮正史:「ニュース探究ラジオ Dig 特集:李承晩韓国大統領竹島上陸」, TBSラジオ, 2012.
- 木宮正史:「李明博韓国大統領竹島訪問に関するインタビュー談話」, 『朝鮮日報』『聯合ニュース』『ハンギョレ新聞』『中央日報』『京郷新聞』『韓国日報』『東亜日報』, 2012.
- 木宮正史:「李明博韓国大統領竹島訪問、天皇訪韓に関するインタビュー」, 日本経済新聞, 2012.
- 木宮正史:「李明博韓国大統領竹島訪問に関するインタビュー」, 朝日新聞, 2012.
- 木宮正史:「尖閣・竹島 どうする東アジア外交 日中、日韓の今後は?、日米関係は?」, NHK 日曜討論, 2012.
- 木宮正史:「영토 문제 부각 땀 양국 내셔널리즘 자극… 확대 안 하는게 낫다”[고려대 아세아문제연구소 주최 좌담회] ■ 韓日 갈등의 해법 무엇인가(領土問題が浮き彫りにされると両国ナショナリズムを刺激、拡大させないことがよい[高麗大学アジア問題研究所主催座談会]韓日葛藤の解法は何か)」, 『韓国日報』, 2012.
- 木宮正史:「南北朝鮮は統一してもらいたい」『東京大学新聞 百年後特集号 I 東大教員が描き出す未来』, 東京大学新聞, 2012.
- 木宮正史:「李明博韓国大統領の天皇訪韓に関する発言についてのインタビュー」, 女性自身, 2012.
- 木宮正史:「天皇皇后両陛下の韓国訪問に関するインタビュー」, 女性自身, 2012.
- 木宮正史:「竹島の「共同管理案」をバカにできないこれだけの理由」, 週刊プレイボーイ, 2012.
- 木宮正史:「韓国大統領選挙に関する解説(電話インタビュー)」, NHK ラジオジャーナル, 2012.
- 木宮正史:「韓国大統領選挙に関する解説(生出演)」, TBSラジオ「ニュース探究ラジオ Dig 特集:韓国大統領選挙」, 2012.
- 木宮正史:「日朝関係どう打開 米韓と共同歩調で対応」, 『高知新聞』など、共同通信配信。(インタビュー), 2012.
- 木宮正史:「해외시론:韓·日“제 3 세력”의 차이(海外時論:韓日「第三極」の違い)」, 『朝鮮日報』, 2012.
- 木宮正史:「韓国大統領選挙に関する解説(電話インタビュー)」, NHK ラジオジャーナル, 2012.
- 木宮正史:「韓国大統領選挙と日韓関係に関する電話インタビュー」, TBS ラジオ 荒川強啓デイキャッチ, 2012.
- 木宮正史:「韓国大統領選挙に関する解説(生出演)」, フジテレビニュースジャパン, 2012.
- 木宮正史:「韓国大統領選挙に関する解説(生出演)」, NHKBS1ワールド Wave モーニング, 2012.
- 木宮正史:「“최악관계 개선 위해 양국 새 정권 타협을[最悪な]関係を改善するため両国の新政権は妥協を”(電話インタビュー)」, ソウル新聞, 2012.

木宮正史: 「<박근혜 당선 해외시각> “한일관계 리더십 발휘하길”(朴槿惠当選 海外の視角 「日韓関係リーダーシップの発揮を望む」)』(電話インタビュー)。、『聯合ニュース』, 2012.

木宮正史: 「美・中・日 한국통 “朴당선인, 이것만은 …”대북·경제협력역사와 분리를(米中日韓国通朴当選者、これだけは、対北朝鮮經濟協力は歴史と分離して)」(書面インタビュー)、『毎日經濟新聞』, 2012.

木宮正史: 「接戦で保守票掘り起し(電話インタビューによる談話)」、『毎日新聞』, 2012.

木宮正史: 「내가 보는 대선 9 미일 전문가: 한일 과거사 뛰어 넘어 “어깨동무”하자(私が見た大統領選挙 9 日米専門家: 日韓の過去史を超えて連帯しよう)」、『東亜日報』, 2012.

木宮正史: 「동아시아와의 인터뷰] 6. 기미야 타다시 도쿄대 東アジアとのインタビュー6 木宮正史東京大学教授) “일본 우경화, 과도한 음모론…실용적 접근해야”(日本の右傾化、過度の陰謀論…実用的接近を)」、평화네트워크(韓国平和ネットワーク) <http://peacekorea.org/zbxe/530600> (韓国語) 韓国インターネットサイトプレシアンに転載。 http://www.pressian.com/article/article.asp?article_num=10130121224958 §ion=05, 2013.

木宮正史: 「韓国朴槿惠政権の成立に関する解説」, TBS CS チャンネル ニュースバード, 2013.

木宮正史: 「3・1節を迎え安倍政権下の日韓関係についてのインタビュー」, 韓国 KBS テレビ, 2013.

木宮正史: 「기로에 선 한일관계: 마찰을 넘어」, PRESSian http://www.pressian.com/article/article.asp?article_num=10130305172645., 2013.

越塚 登・教授

研究テーマ(主たるもの)

Ubiquitous Computing

Ubiquitous Computing は、生活空間の様々なところに埋め込まれたコンピュータが、現実世界の状況を認識し、認識した情報に基き協調動作等を行いながら、人間生活をサポートする情報技術である。21 世紀になり、Post-Internet、Post-Personal Computing の、Leading Concept として世界的に注目を集めている。Ubiquitous Computing は、様々な研究領域の成果を総合的に組み合わせて初めて構築することができる高度な情報技術である。これらの要素技術には、RFID (Radio Frequency Identification)、Sensor Network、Smart Card、Secure Computing、Embedded Realtime System、Context-aware Computing、Augmented Reality/Mixed Reality、Wireless Communication 等があるが、これらのテーマに関して研究を進めている。

Embedded Realtime Systems

Embedded Realtime System は、様々な「モノ」や「場所」に組み込むコンピュータのための基盤技術である。技術的には、実世界の動きに追従するリアルタイム性や、コンパクトな実装、高い信頼性などが求められる。また、現在では、我が国を代表する様々な電子機器製品を支える技術にもなっており、当研究室で坂村教授とともに生み出した TRON や、その最新版である T-Kernel は、両方を合わせると、我が国の組込みリアルタイム OS のシェアの約半数程度を占めると考えられている。当研究室では主に、Kernel や OS を主とした、基盤ソフトウェアの研究を行っている。これらの研究成果や、標準カーネルである T-Kernel、より小型のワンチップマイコン向けの μ T-Kernel、ファ

イルシステムなどの高水準ミドルウェアを備えた T-Kernel Standard Extension、マルチコア向けの MP T-Kernel などの研究開発を行い、これらの成果は、T-Engine フォーラムから、オープンソースとして、世界中に配布され利用されている。

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

M. Kharrat, Y. Wakuda, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "Evaluation of WFM based EEMD Method in Heart Activity Analysis", Journal of Medical Imaging and Health Informatics, American Scientific Publisher, Vol.2, pp.266~271, 2012 年. 【査読有】

Lee Fueng Yap, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "User-Generated Content for Location-Based Services: A Review", Annals of Information Systems Series Special Issue on Virtual Communities, Social Networks and Collaboration, Vol.15, pp.Chapter 9, pp. 163~179, 2012 年. 【査読有】

Y. Shigesada, S. Kobayashi, N. Koshizuka, and S. Koshizuka: "Interoperable Spatial Information Model and Design Environment Based on ucR Technology", IEICE Transactions, Vol.96-D, No.1, pp.51-63, 2013 年. 【査読有】

国際会議等

S. Asano, Y. Wakuda, N. Koshizuka, K. Sakamura: "A Robust Pedestrian Dead-reckoning Positioning Based on Pedestrian Behavior and Sensor Validity", IEEE Position Location And Navigation Symposium 2012, 2012. 【査読有】

Y. Wakuda, S. Asano, N. Koshizuka, K. Sakamura: "An Adaptive Map-Matching based on Dynamic Time Warping for Pedestrian Positioning using Network Map", IEEE Position Location And Navigation Symposium 2012, 2012. 【査読有】

T. Watanabe, S. Kobayashi, N. Koshizuka, K. Sakamura: "A Low Latency and Intuitive Control Video Streaming System", IEEE 1st Global Conference on Consumer Electronic (IEEE GCCE 2012), pp.1~4, 2012. 【査読有】

S. Asano, Y. Wakuda, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "Pedestrian Dead-reckoning Unit for Navigation System using Mobile Device", IEEE 1st Global Conference on Consumer Electronic (IEEE GCCE 2012), pp.530~534, 2012. 【査読有】

Takeshi Yashiro, et. al.: "A Framework for Context-Aware Power Management on Embedded Devices", IEEE 1st Global Conference on Consumer Electronic (IEEE GCCE 2012), pp.588~592, 2012. 【査読有】

M. Kharrat, Y. Wakuda, N. Koshizuka, K. Sakamura: "Near Drowning Pattern Recognition Using Neural Network and Wearable Pressure and Motion Sensors Attached at Swimmer", 19th International Conference on Mechatronics and Machine Vision in Practice (M2VIP12), pp.281~284, 2012. 【査読有】

M. Kharrat, Y. Wakuda, N. Koshizuka, K. Sakamura: "Near Drowning Pattern Detection Using Neural Network and Pressure Information Measured at Swimmer", The Seventh ACM International Conference on Underwater Networks and Systems (ACM WUWNet 2012), pp.Article No. 49, 2012. 【査読有】

M. Kharrat, Y. Wakuda, N. Koshizuka, K. Sakamura: "Automatic Waist Airbag Drowning Prevention System Based on Underwater Time-Lapse and Motion Information Measured by Smartphone", 31st IEEE International Conference on Consumer Electronics (IEEE ICCE 2013), pp.270~273, 2013. 【査読有】

講演・口頭発表

越塚登: 「環境負荷軽減型地域 ICT システム基盤確立事業」, 東京大学大学院情報学環 社会連携講座シンポジウム「情報技術を活用したインフラ高度化の展開」, 東京大学山上会館, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「ユビキタス場所情報システムの最新技術」, 東京大学 情報学環・空間情報科学研究センター シンポジウム「空間を知る—空間・情報・人間—」 東京大学, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「松山市高井町スマートレジデンス実証実験の成果報告」, 四国情報通信懇談会 ICT 研究交流フォーラム 第 5 回技術セミナー 愛媛県松山市, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Engine フォーラム講習会「T-Kernel+ITRON 基礎」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登, 湧田雄基, 峯岸康史: 「IoT, M2M を実現するユビキタス ID 技術」, Interop Tokyo 2012 Session, 幕張メッセ, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Engine フォーラム講習会「 μ T-Kernel 入門(初級編)」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Engine フォーラム講習会「ITRON 入門(初級編)」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Engine フォーラム講習会「T-Kernel 2.0 入門(初級編)」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「すぐに始められる、U コード(ucode)を用いた食品トレーサビリティシステム」, 食品トレーサビリティ公開講座(2012 年度東京会場)「食品トレーサビリティの原理と ucode を使った実践」, 主催:東京大学大学院情報学環ユビキタス情報社会基盤研究センター, T-Engine フォーラム, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「uID 基礎セミナー」, T-Engine フォーラム講習会「ユビキタス ID 入門」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Engine フォーラム講習会「 μ T-Kernel 入門(初級編)」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門:リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Engine フォーラム講習会「T-Kernel+ITRON 基礎」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「IoT, M2M を実現するユビキタス ID 技術」, 情報処理学会 CDC 研究会, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「オープンデータと社会変革:オープンデータ流通推進コンソーシアムの活動と果たすべき役割」, 情報通信政策フォーラム(ICPF)平成 24 年度秋期第 2 回セミナー, 東洋大学, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「中級者向けの RTOS を使ったリアルタイムシステム開発手法入門」, T-Engine フォーラム講習会「ITRON (中級編)」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

Noboru Koshizuka: "Smart City using Ubiquitous Computing Technologies in Japan: Towards resilient infrastructure and society", JSPS' 80th Anniversary Event ¥"The Future of UK-Japan Collaboration in Science & Technology from the perspective of Infrastructure Studies: Building¥ Resilient Infrastructure and Society-Drawing on experiences of the Great East Japan Earthquake¥", Embassy of Japan in the UK, London, 2012. 【招待講演】【一般向け】

Noboru Koshizuka: "Smart House, Smart Building, and Smart City with Ubiquitous Computing Technologies", CSIC-JSPS International Smart Infrastructure Symposium, Cambridge Center for Smart Infrastructure and Construction, Cambridge University, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「オープンデータの利活用の推進」, 電子行政推進シンポジウム～国民の利便性を高める電子行政, 日本経済団体連合会, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「オープンデータ流通推進コンソーシアム委員会活動報告: 技術委員会」, オープンデータシンポジウム「オープンデータは社会をかえるか: 私たちが今取組むべきこと」, 主催: オープンデータ流通推進コンソーシアム, 総務省, 東京大学伊藤謝恩ホール, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「オープンデータとユビキタスコンピューティング、IoT」, TRONSHOW 2013 東京ミッドタウン, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「組み込みプラットフォーム最前線: Open × Open = ∞」, TRONSHOW 2013 東京ミッドタウン, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「クラウドコンピューティングとユビキタスコンピューティング、IoT 最新動向」, TRONSHOW 2013 東京ミッドタウン, 2012. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「中級者向けの RTOS を使ったリアルタイムシステム開発手法入門」, T-Engine フォーラム講習会「μ T-Kernel(中級編)」, 2013. 【招待講演】【一般向け】

越塚登: 「組み込みリアルタイムシステム入門: リアルタイムシステムとリアルタイム OS の概要」, T-Engine フォーラム講習会「μ T-Kernel 入門(初級編)」, 2013. 【招待講演】【一般向け】

坂村 健・教授

研究テーマ(主たるもの)

TRON (The Real-time Operating system Nucleus)

リアルタイムオペレーティングシステム(RTOS)はコンピュータ組込システム構築の際に最も中核となる基本ソフトウェアである。本研究では、RTOS の基礎研究であるリアルタイムスケジューラのアルゴリズムやアーキテクチャ設計など、基礎分野の研究から、RTOS の開発環境、応用システムまで幅広く研究をすすめている。1980 年から 20 年以上にわたり進めているライフワーク的な研究となっており、TRON は現在、携帯電話や車のエンジン制御、デジタルカメラ、電子辞書、レーザープリンタなど多くの機器で使われている。基本哲学はオープンアーキテクチャで、誰でもフリーでソースコードまで含み利用できる。2010 年 6 月に 7 年かけて地球に帰還した宇宙航空研究開発機構(JAXA)の小惑星探査機「はやぶさ」の制御にも TRON が使われている。

Ubiquitous Computing

コンピュータを身の回りのあらゆるものに埋め込み、それらをネットワークで結び、互いに協調動作させることで、人間生活をあらゆる面から支援するコンピュータシステム、ユビキタスコンピューティングの考え方や手法を1980年初頭に提唱し、研究を進めてきた。これは、現在ではユビキタスコンピューティングやIoT(Internet of Things)と呼ばれている分野である。研究室では、Context-aware Computing や超小型チップのアーキテクチャ、ネットワークプロトコル、セキュリティシステム等の基礎的研究から応用システムまで幅広い研究を行っている。最近では、uID アーキテクチャの研究に力を入れており、すでに火災報知器等長期にわたりメンテナンスを要する製品のトレーサビリティシステムなどに、数百万のuコードが使われている。

Open Data Platform

情報通信技術の発展とともに、様々な情報が世界のどこかでは電子データとして存在するようになった。行政、民間企業、個人といった社会を構成する様々な人々が自分のもつ情報を再利用可能な形で公開することにより、Government 2.0 と呼ばれるような市民参加型の新しい行政の実現や、高度で革新的な情報サービスの相乗効果的な実現が期待されている。本研究では、このようなオープン・データを実現するためのプラットフォーム構築を目指した研究を推進している。具体的には、公開に適したデータ・フォーマットやデータ交換のプロトコルといった基盤技術の研究や、オープン・データを活用したビッグデータ解析技術の研究、さらに様々な組織との連携によるオープン・データが可能にする新たな応用サービスの構築と検証などを行っている。

研究業績(2012年度)

著書

坂村健:「毛沢東の赤ワイン ～ 電脳建築家、世界を食べる」, 株式会社角川書店, 2012年.

坂村健 ほか 10名(越塚登、重定如彦、清水謙多郎、加納寛子、大橋真也、志賀潔、武沢護、滑川敬章、松本吉生、数研出版株式会社編集部):「文部科学省検定済教科書 高等学校情報科用 高等学校 社会と情報「高等学校情報の科学」, 数研出版株式会社, 2013年.

坂村健 ほか 10名(越塚登、重定如彦、清水謙多郎、加納寛子、大橋真也、志賀潔、武沢護、滑川敬章、松本吉生、数研出版株式会社編集部):「文部科学省検定済教科書 高等学校情報科用 高等学校 社会と情報「高等学校社会と情報」, 数研出版株式会社, 2013年.

雑誌論文

Lee Fueng Yap, Masahiro Bessho, Tomonori Usaka, Takeshi Yashiro, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "Secure Consumer-Oriented Integrated Services Using Activity-Based Attestation for Converging Online and In-Store Shopping Experience", International Journal of Computer Theory and Engineering, Vol.4, No.2, pp.165-170, 2012年. 【査読有】

M. Kharrat, Y. Wakuda, S. Kobayashi, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "Evaluation of WFM based EEMD Method in Heart Activity Analysis", Journal of Medical Imaging and Health Informatics, Vol.2, pp.. 266~271, 2012年. 【査読有】

Y. Shigesada, S. Kobayashi, N. Koshizuka, and S. Koshizuka: "Interoperable Spatial Information Model and Design Environment Based on ucR Technology", IEICE Transactions, Vol.96-D (1), pp.. 51-63, 2012年. 【査読有】

Ken Sakamura: "Smart Living Environment: Ubiquitous Computing Approach Based on TRON Architecture", Handbook of Ambient Assisted Living 2012, pp.. 469-491, 2012 年. 【査読有】

Lee Fueng Yap, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "User-Generated Content for Location-Based Services: A Review", the Annals of Information Systems Series Special Issue on Virtual Communities, Social Networks and Collaboration, Vol.15, No.9, pp.. 163~179, 2012 年. 【査読有】

国際会議等

Satoshi Asano, Yuki Wakuda, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "A Robust Pedestrian Dead-reckoning Positioning Based on Pedestrian Behavior and Sensor Validity", IEEE/ION Position Location and Navigation Symposium 2012 (PLANS 2012), 2012. 【査読有】

Y. Wakuda, S. Asano, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "An Adaptive Map-Matching based on Dynamic Time Warping for Pedestrian Positioning using Network Map", IEEE/ION Position Location and Navigation Symposium 2012 (PLANS 2012), 2012. 【査読有】

Khan, M.F.F. and Sakamura, K.: "Context-aware access control for clinical information systems", Innovations in Information Technology (IIT), 2012 International Conference on Digital Object Identifier, pp.. 123-128, 2012. 【査読有】

Khan, M.F.F. and Sakamura, K.: "Toward a synergy among discretionary, role-based and context-aware access control models in healthcare information technology", 2012 World Congress on Internet Security (WorldCIS), pp.. 66 - 70, 2012. 【査読有】

Y. Wakuda, S. Asano, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "Ubiquitous sensor-based pedestrian dead-reckoning for LBS applications", IEEE International Symposium on Micro-NanoMechatronics and Human Science (MHS), pp.374-379, 2012. 【査読有】

M Fahim Ferdous Khan, and Ken Sakamura: "Toward a Synergy Among Discretionary, Role-Based and Context-Aware Access Control Models in Healthcare Information Technology", The World Congress on Internet Security (WorldCIS-2012), 2012. 【査読有】

T. Watanabe, S. Kobayashi, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "A Low Latency and Intuitive Control Video Streaming System", Proc. IEEE 1st Global Conference on Consumer Electronic (IEEE GCCE 2012), pp.. 1~4, 2012. 【査読有】

S. Asano, Y. Wakuda, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "Pedestrian Dead-reckoning Unit for Navigation System using Mobile Device", Proc. IEEE 1st Global Conference on Consumer Electronic (IEEE GCCE 2012), pp.. 530~534, 2012. 【査読有】

T. Yashiro, T. Ban, S. Kobayashi, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "A Framework for Context-Aware Power Management on Embedded Devices", Proc. IEEE 1st Global Conference on Consumer Electronic (IEEE GCCE 2012), pp.. 588~592, 2012. 【査読有】

M. Kharrat, Y. Wakuda, S. Kobayashi, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "Near Drowning Pattern Recognition Using Neural Network and Wearable Pressure and Motion Sensors Attached at Swimmer", 19th International Conference on Mechatronics and Machine Vision in Practice (M2VIP12), pp.. 281~284, 2012. 【査読有】

M. Kharrat, Y. Wakuda, S. Kobayashi, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "Near Drowning Pattern Detection Using Neural Network and Pressure Information Measured at Swimmer", The Seventh ACM International Conference on Underwater Networks and Systems (ACM WUWNet 2012), 2012. 【査読有】

M. Kharrat, Y. Wakuda, S. Kobayashi, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "Automatic Waist Airbag Drowning Prevention System Based on Underwater Time-Lapse and Motion Information Measured by Smartphone", 31st IEEE International Conference on Consumer Electronics (IEEE ICCE 2013), pp.. 270~273, 2013. 【査読有】

その他論文

坂村健: 「これからの日本を支える技術と制度の「2.0」」, NATURE INTERFACE ネイチャーインタフェイス 2012年6月号 54号, 2012年. 【一般向け】

坂村健: 「『平成政治 24年 亡国の「戦犯」/尊厳ある死』デジタルデバイドと電子ブック」, 月刊 文藝春秋 2012年7月号 (第90巻第10号), 2012年. 【一般向け】

坂村健: 「「ユビキタス」で広がる可能性 uコードが、紙媒体と情報ネットワークを繋ぐ」, OjO オッホ 読売ADレポート 2012年12月/2013年1月号 Vol.15-No.9・10, 2012年. 【一般向け】

坂村健: 「ユビキタスネットワークで道路を守れ - 人手と予算が足りない時代の処方箋 -」, 中央公論 2013年4月号, 2013年. 【一般向け】

講演・口頭発表

坂村健: 「オープンデータとユビキタス」, オープンデータ流通推進コンソーシアム, 2012. 【招待講演】【一般向け】

坂村健: 「TRON Project 2013 【基調講演】」, TRONSHOW 2013, 2012. 【一般向け】

坂村健: 「障害者、高齢者を支援する最新デジタル技術【基調講演】」, TEPS 2013, 2012. 【一般向け】

坂村健: 「坂村健の目 - ユニバーサル、フリー、オープンで実現するユビキタス社会【基調講演】」, ユニバーサロン アクセシビリティセミナー2013, 2013. 【一般向け】

坂村健: 「大災害時の通信」, 医療の災害安全対策 2013, 2013. 【招待講演】

新聞・報道

坂村健: 「坂村健の目: 財政難下の資金集め, 2012年4月17日」, 毎日新聞, 2012.

坂村健: 「坂村健の目 : 財政難下の資金集め」, 毎日新聞, 2012.

坂村健: 「坂村健の目 : 大気汚染の確率的な害」, 毎日新聞, 2012.

坂村健: 「坂村健の目 : スタックスネットの正体」, 毎日新聞, 2012.

坂村健: 「坂村健の目 : 伝統的ビジネスの変哲」, 毎日新聞, 2012.

坂村健: 「坂村健の目 : 技術を阻む社会の皮肉」, 毎日新聞, 2012.

坂村健:「坂村健の目 : ネット犯罪の本質」, 毎日新聞, 2012.

坂村健:「正論 : 「ゼロリスク」求め過剰反応した」, 産経新聞, 2012.

坂村健:「坂村健の目 : スパコンで救える命」, 毎日新聞, 2012.

坂村健:「坂村健の目 : ユビキタスを支える技術」, 毎日新聞, 2012.

坂村健:「坂村健の目 : 新たなインフラ、五輪で」, 毎日新聞, 2013.

坂村健:「坂村健の目 : 新たなインフラ、五輪で」, 毎日新聞, 2013.

坂村健:「坂村健の目 : 公共のクラウド化を」, 毎日新聞, 2013.

坂村健:「読書 SUNDAY NIKKEI : 災害に備える情報社会」, 日本経済新聞, 2013.

坂村健:「坂村健の目 : 「例外のルール化」必要」, 毎日新聞, 2013.

佐倉 統・教授

研究テーマ(主たるもの)

科学技術コミュニケーション

科学技術の専門家と非専門家間のコミュニケーションを、円滑化、活性化するための方法論や制度策定および科学的・文明的な理論枠組みの構築。

脳神経倫理(ニューロエシックス)

脳神経科学の倫理的、社会的、哲学的諸問題を考察し、教育現場や社会とのコミュニケーションなどにおける実際の問題の解決をめざす。

進化生物学史、動物行動学史

とくに日本における進化生物学、動物行動学の歴史を、諸外国の事例と比較しつつ、特徴を抽出する。

研究業績(2012 年度)

著書

佐倉統・田中沙織・大竹文雄:「脳の中の経済学<ディスカヴァー携書>」, ディスカヴァー・トゥエンティワン, 2012年.

雑誌論文

佐倉統: 『『便利』は人間を不幸にするのですか? (5) 島をめぐる雑感、二題』, 考える人, Vol.40, No.2012 年春号, pp.226-233, 2012 年. 【一般向け】

Yamanoi, T., Suzuki, K., Takemura, M. & Sakura, O.: "Improved "Origami Bird" Protocol Enhances Japanese Students' Understanding of Evolution by Natural Selection: a Novel Approach Linking DNA Alteration to Phenotype Change", *Evolution: Education and Outreach*, Vol.5, No.2, pp.292-300, 2012 年. 【査読有】

佐倉統: 『『便利』は人間を不幸にするのですか? (6) 人の道具、道具の人』, 考える人, Vol.41, No.2012 年夏号, pp.208-215, 2012 年. 【一般向け】

山野井貴浩・遠藤菜緒子・佐倉統・武村政春: 「高校生物 II の授業が進化の理解に及ぼす影響 その2—分子進化と系統分類に関する内容に注目して—」, *生物教育*, Vol.53, No.1/2, pp.57-64, 2012 年. 【査読有】

Sakura, O.: "A View from the Far East: Neuroethics in Japan, Taiwan, and South Korea", *East Asian Science, Technology and Society*, Vol.6, No.3, pp.297-301, 2012 年.

Mizushima, N. and Sakura, O.: "A Practical Approach to Identify the Ethical and Social Problems during Research and Development: A Model for National Research Project of Brain-Machine Interface", *East Asian Science, Technology and Society*, Vol.6, No.3, pp.335-345, 2012 年. 【査読有】

佐倉統: 『『便利』は人間を不幸にするのですか? (7) はるかなり、ヴァンクーヴァー』, 考える人, Vol.42, No.2012 年秋号, pp.172-179, 2012 年. 【一般向け】

佐倉統: 『『便利』は人間を不幸にするのですか? (最終回) 少数意見の常駐』, 考える人, Vol.43, No.2013 年冬号, pp.137-145, 2013 年. 【一般向け】

佐倉統: 「カナダが脳神経倫理学のトップに躍り出た理由」学術の今日と明日, *学術の動向*, Vol.2, pp.74-77, 2013 年.

佐倉統: 「カナダの大学院生および博士研究員のキャリアパスについて——ブリティッシュ・コロンビア大学 脳神経倫理ナショナル・コアの場合——」, *東京大学大学院情報学環紀要・情報学研究*, Vol.85, pp.1-20, 2013 年.

国際会議等

Uchida M., Sakura O.: "Attracting people's attention by 'blending science': Case studies of Science in Home Life. [Poster Presentation]", 12th International Public Communication of Science and Technology Conference (PCST 2012), 2012. 【査読有】

Kase I., Mizushima N., Sakura O.: "Success and failure in voluntary science communication by individual scientists after Fukushima Nuclear Incident in Japan. [Poster Presentation]", 12th International Public Communication of Science and Technology Conference (PCST 2012), 2012. 【査読有】

その他論文

佐々木閑・佐倉統: 「【対談】科学者と仏教学者の縦横問答——輪廻の説と進化論——」, *中央公論* 5 月号, 70-77, 2012 年. 【一般向け】

佐倉統・鈴木香織:「科学と映像——分かることと見せること」, 丹羽美之・吉見俊哉(編)『岩波映画の1億フレーム(記録映画アーカイブ1)』, 東京大学出版会, pp.217-236, 2012年.

講演・口頭発表

Sakura, O.: "The Neurological Status of Vegetative State Patients and the Conditions for Human.", BRC International Conference 2012 in conjunction with the 5th BRC-UK Joint Symposium on Neuroscience, 2012. 【招待講演】

佐倉統:「鏡と窓——サルとロボットから人間を考える——」, 第28回日本霊長類学会大会公開シンポジウム「人間性の由来を探る～霊長類学から総合人間学へ～」, 2012. 【招待講演】

佐倉統:「生物進化と文化進化から人間の老年期を解釈する」, 国際高等研究所「老いを考える」第1回研究会, 2012. 【招待講演】

佐倉統:「脳科学の倫理」, エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所主催応用脳科学アカデミーベーシックコース「応用脳科学の基礎」第3回, 2012. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「総合討論:Issues for clinical application of brain-machine interfaces」, BMI Osaka 2012 国際 BMI シンポジウムブレイン・マシン・インターフェースの臨床応用, 2012. 【招待講演】

佐倉統:「人間はどのような生き物か? —進化論から考える—」, d-labo, 2012. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「総合的な学習の時間」, 東京都立日比谷高等学校, 2012. 【招待講演】【一般向け】

渡部麻衣子・佐倉統:「産むための出生前診断へ: 科学技術の目的の転換について」, 科学技術社会論学会第11回年次研究大会, 2012.

加瀬郁子・佐倉統:「社会の中の科学者という視座からの科学技術コミュニケーション」, 科学技術社会論学会第11回年次研究大会, 2012.

内田麻理香・佐倉統:「科学技術への興味の潜在層に向けた科学技術コミュニケーション」, 科学技術社会論学会第11回年次研究大会, 2012.

佐倉統:「脳科学と社会をつなぐ」, 平成24年度応用物理学会関西支部シンポジウム「最先端の脳科学とその将来」, 2012. 【招待講演】

佐倉統:「コメント:『分断』を埋めるための評論への応答をふまえて」, 林衛(オーガナイザ)ワークショップ「原発リスクコミュニケーション失敗続きの原因」, 科学技術社会論学会第11回年次研究大会, 2012.

佐倉統:「人間はどのような生き物か—進化論から考える—」, 第22回健康医療ネットワークセミナー, 2013. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「日本人の働き方をリデザインする[1]」, ノベーターと学ぶ新しい仕事術「イノベティブな協調力とは? ~生命科学から考える未来のソーシャルキャピタル」, 2013. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「私たちはどこから来てどこへ行くのか?」, 第3回小石川セミナーSSH講座, 2013. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「さまざまな解決を目指して—リスク問題の展望と判断における多様性」, 国際放射線防護委員会(ICRP)第5回福島ダイアログセミナー「福島原発事故による長期影響地域の生活回復のためのダイアログセミナー『帰還—かえるのか、とどまるのか—』, 2013. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「好きこそものの上手なれ」, 桜修館中等教育学校, 2013. 【招待講演】【一般向け】

佐倉統:「地域社会における専門家の役割」, 市民公開講座「飯舘から福島と日本を考える——復興支援に関する医学と人文社会学からのアプローチ——」, 2013. 【一般向け】

佐倉統(ファシリテータ):「パネルディスカッション「BMIと倫理」」, ATR 主催シンポジウム, 玉川大学, 2013.

新聞・報道

佐倉統:「ガリレオ X 『遺伝子組み換え食品』神話本当に危ないのか?」, BS フジ, 2012.

佐倉統:「風評『心のアレルギー』」, 読売新聞, 2012.

佐倉統:「情報判断の力、高める必要」, 読売新聞, 2012.

佐藤 博樹・教授

研究テーマ(主たるもの)

ワークライフバランス

人材活用の多元化と働き方の変化

人材ビジネスの社会的機能

研究業績(2012 年度)

須藤 修・教授

研究テーマ(主たるもの)

ICTの発展とそれに伴う経済システムの変容に関する研究

北アメリカ、EU、アジア諸国、日本という 21 世グローバルシステムに大きな影響力を行使する地域経済システム (Regional Economic System) の動向を比較検討しながら、ICTの発展とそれぞれの経済構造との相互作用的な関係

について、またICTの発展と経済活動のグローバル化との相互作用的な関係に関して研究を行い、ネットワークを基盤にした知識創造型社会経済システムを構想する。

センサーネットワークを用いた予防医療システムに関する研究

産・官・学の連携を促しながら、センサーネットワーク、高度データ分析、グリッド・コンピューティングを組み合わせたICT基盤を用いて、糖尿病を中心とした生活習慣病の予防に関する実証実験を推進し、その実験と連動させて、産・官・学・民の共創を活性化するセンサーネットワーク基盤地域コミュニティの形成とそのガバナンスに関する制度構想の研究を進めたいと考えている。そして、電子行政および医療情報基盤について、社会基盤としてのICTプラットフォームに関する政策科学的研究を推進する。

地球環境問題と持続可能な発展に関する研究

深刻化している地球環境破壊について検討するとともに、IT及びバイオテックの動向とネットワークを基盤にした経済活動の動向を関連させながら、環境保全型(循環型)の持続可能な地域経済発展、特にスマートシティについて研究を行う。

研究業績(2012年度)

著書

須藤修・榎並利博・高地圭輔・宇賀克也:『マイナンバー(共通番号)制度と自治体クラウド』, (地域科学研究会、2012年5月18日)pp.145(担当:p.3-p.23), 2012年.

雑誌論文

須藤修:「マイナンバーがもたらす効果と社会的影響」, 市政, No.第61号, pp.18-20ページ, 2012年.

加藤綾子・須藤修:「技術変化と自生的な生産活動の顕在化—音楽の生産消費に関するアンケート調査」, 情報処理学会第75回全国大会論文集, pp.4=361-4=362, 2012年.【査読有】

村舘靖之・須藤修:「オンライン家計簿ココマネの経済分析—ユーザーの世帯所得とパレート分布の関係について」, 情報処理学会第75回全国大会論文集, pp.4=503-4=504, 2012年.【査読有】

その他論文

須藤修:「東京大学大学院入学式式辞」, 『東京大学内報』, 第1424号(東京大学、2012年4月23日)PP.29-31., 2012年.

須藤修:「インタビュー・タフな学環長」, 『学環・学府』, 第36号(東京大学大学院情報学環・学際情報学府、2012年6月)p.1., 2012年.

峰崎直樹、森信茂樹、須藤修、新保史生:「もっと知りたい!マイナンバー制度」, 『連合』, 第294号(日本労働組合総連合会、2012年9月25日)pp.13-16, 2012年.

須藤修:「自治体クラウドが基盤に」, 『PC-Webzine』, 第248号(DiS、2012年9月25日)pp.29-31, 2012年.

須藤修:「共同執筆」,『国際CIO学会創立7周年記念誌』,(国際CIO学会、2012年9月)pp.1-72.(共同執筆),2012年.

須藤修:「クラウド・コンピューティングと社会・経済システムのイノベーション」,『社会・経済システム』,第33号(社会・経済システム学会、2012年11月)pp.1-13,2012年.

講演・口頭発表

須藤修:「マイナンバーと自治体の在り方」,政府番号制度創設推進本部主催、信濃毎日新聞社共催『マイナンバーシンポジウム in 長野』(サンパルテ山王、2012年4月22日)【招待講演】150名,2012.【招待講演】

清水勉、須藤修、中村雅展、西川禎人、古川元久、向井治紀:「パネルディスカッション・社会保障と税の一体化改革のためのマイナンバー」,政府番号制度創設推進本部主催、信濃毎日新聞社共催『マイナンバーシンポジウム in 長野』(サンパルテ山王、2012年4月22日)150名,2012.【招待講演】

須藤修:「マイナンバー制度と電子自治体ー地域ガバナンスのこれから」,財団法人地方自治情報センター主催『平成24年度コンビニ交付推進セミナー』(ホテルサンルートプラザ名古屋、2012年5月17日)【招待講演】120名,2012.【招待講演】

須藤修:「電子行政の展望ー番号制度と災害に強い電子自治体」,日本経営協会主催『電子自治体・地域情報化フォーラム』(東京ビッグサイト西展示棟・西3ホール、2012年5月23日)【招待講演】150名,2012.【招待講演】

須藤修:「マイナンバーと自治体の在り方」,日本マイクロソフト主催『電子自治体戦略会議』(日本マイクロソフト本社、2012年5月24日)【基調講演】【招待講演】50名,2012.【招待講演】

須藤修:「マイナンバーと自治体の在り方ー地域ガバナンスのこれから」,シスコシステムズ主催『自治体クラウドセミナー』(東京カンファレンスセンター有明、2012年5月24日)【招待講演】100名,2012.【招待講演】

須藤修:「復興に向けたICT戦略と新たな街づくり」,福島県主催『情報通信月間特別講演会』(ホテルサンルートプラザ福島、2012年6月4日)【基調講演・招待講演】100名,2012.【招待講演】

須藤修:「オープンガバメントを基盤とした新しい知識創造社会のあり方」,New Education Expo 実行委員会主催『17th New Education Expo2012』(東京ファッショントウン、2012年6月7日)【招待講演】200名,2012.【招待講演】

須藤修:「番号制度とその先ー情報連携とBig Data分析を基礎にした社会」,一般社会法人日本ICカード利用促進協議会主催『JICSAP 講演会』(プラットフォームスクエア、2012年6月21日)【基調講演】100名,2012.

須藤修:「次世代電子サービスと社会発展」,一般社団法人日本メーリングサービス協会主催『メーリング・アドバイザー資格認定講座』(アクセス渋谷フォーラム、2012年7月6日)【招待講演】100名,2012.【招待講演】

須藤修:「ITによるソーシャルイノベーション」,独立行政法人産業技術総合研究所、日本を元気にする産業技術会議共催『IT社会インフラの未来像』(独立行政法人産業総合研究所臨界副都心センター別館、2012年7月9日)【招待講演】150名,2012.【招待講演】

須藤修、橋田浩一、長沼秀直、滝順一:「討論・IT社会インフラの未来像」,独立行政法人産業技術総合研究所、日本を元気にする産業技術会議共催『IT社会インフラの未来像』(独立行政法人産業総合研究所臨界副都心センター別館、2012年7月9日)150名,2012.

須藤修:「番号制度と自治体の在り方—ICTと地域社会の共創」, 日本マイクロソフト株式会社主催『第15回電子自治体戦略会議』(日本マイクロソフト株式会社品川本社、2012年7月31日)【基調講演】【招待講演】約50名, 2012. 【招待講演】

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開」, 総務省自治大学校『第1部課程第118期研修』(総務省自治大学校、2012年8月1日、6日)61名, 2012.

須藤修:「自治体のICT戦略」, 総務省自治大学校『第3部課程新時代・地域経営コース第5期』(総務省自治大学校、2012年8月2日)109名, 2012.

須藤修:「首都機能バックアップと番号制の連携について」, 群馬経済同友会主催講演会(前橋商工会議所会館、2012年8月8日)約100名【招待講演】, 2012. 【招待講演】

須藤修・新川達郎・堀尾まさゆき・佐々木雅幸:「全体会総括・地域力創造」, 香川県・総務省主催『<地域力創造> 全国市町村長サミット2012 in 香川』(JRホテルクレメント高松、2012年9月3日), 2012.

須藤修・白石鴨彦・長尾一郎・梶浦敏範:「討論・大震災における情報伝達手段の確保」, 自治体危機管理学会(明治大学、2012年10月27日), 2012.

須藤修:「電子行政サービスの構築と今後の課題」, 市町村職員中央研究所主催『電子自治体の推進と地域における情報政策』(市町村アカデミー、2012年9月5日)【招待講演】, 2012.

須藤修:「センサーネット予防医療」, 医療産業サミット主催『医療産業サミット第4回朝食会』(東京大学伊藤国際学術研究センター、2012年9月13日)【招待講演】, 2012.

須藤修:「Open Data, 番号制度、Big Dataのこれから」, MPUF主催『MPUFセミナー』(日本マイクロソフト本社、2012年9月13日)【招待講演】, 2012.

須藤修:「クラウド、マイナンバーと自治体」, 電子自治体推進パートナーズ主催『自治体クラウド講座』(内田洋行・東京ユビキタス協創広場 CANVAS、2012年9月28日)【招待講演】, 2012.

須藤修:「クラウドで変わる社会とビジネスチャンス」, 青森県主催『クラウドコンピューティング等新技術利活用セミナー』(青森国際ホテル、2012年10月10日)【基調講演】【招待講演】, 2012.

須藤修、八島勝、工藤武昭、米田剛:「討論・クラウドを活用した今後のビジネス展開について」, 青森県主催『クラウドコンピューティング等新技術利活用セミナー』(青森国際ホテル、2012年10月10日), 2012.

須藤修:「eGovと一体改革」, 東京財団主催『税制の抜本改革と将来像』(日本財団ビル、2012年10月19日)【招待講演】, 2012.

須藤修:「マイナンバー制度がめざすもの」, 財団法人地方自治情報センター主催『地方自治情報化推進フェア2012』(東京ビッグサイト、2012年10月23日)【基調講演】【招待講演】, 2012.

須藤修・後藤玲子:「対談・マイナンバーで自治体は変わるか」, 財団法人地方自治情報センター主催『地方自治情報化推進フェア2012』(東京ビッグサイト、2012年10月23日), 2012.

須藤修:「オープンソース・プログラミング言語 Ruby を活用した地域活性化」, 三鷹まちづくり総合研究所主催『第5回オープンソース・ソフトウェアを活用した地域活性化に向けた研究会』(三鷹ネットワーク大学、2012年11月16日)【招待講演】, 2012.

須藤修:「マイナンバー制度と自治体—ICTと地域発展」, 日本マイクロソフト主催『第16回電子自治体戦略会議』(KPP 東京八重洲ビル、2012年11月21日)【招待講演】、2012.

須藤修:「ICT、ビッグデータ分析、イノベーション」, 総務省 ICT 戦略会議(総務省、2012年11月27日)、2012.

須藤修:「ビッグデータ分析と情報セキュリティのこれから」, OGC 主催『スマートジャパン実現に向けて』主催(霞が関ビルプラザホール、2012年11月29日)、2012.

須藤修:「社会保障・税改革と番号制度—地域社会発展のために」, 政府番号制度創設推進本部主催、千葉新聞社共催『マイナンバーシンポジウム in 千葉』(ヴェルシオーネ若潮、2012年12月8日)【招待講演】、2012.

織本林太郎、熊谷俊一、清水勉、須藤修、峰崎直樹、向井治紀:「討論・社会保障と税の一体改革のためのマイナンバー」, 政府番号制度創設推進本部主催、千葉新聞社共催『マイナンバーシンポジウム in 千葉』(ヴェルシオーネ若潮、2012年12月8日)、2012.

Osamu Sudoh:「On Vision and Connect」, Cisco Systems org., Public Service Summit 2012, Oslo, Dec. 11th, 2012, 2012.

須藤修:「マイナンバー制度と新たな社会システムの創造」, 同志社大学法学部・政策学部主催『情報と政策』(同志社大学神学礼拝堂、2013年1月21日)【基調講演】【招待講演】、2012.

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開」, 浜松市主催『第6回夜間セミナー』(地域情報センター、2013年1月23日)【招待講演】、2012.

須藤修:「Smart Community」, 日本マイクロソフト主催『第17回電子自治体戦略会議』(KPP 東京八重洲ビル、2013年2月7日)【招待講演】、2012.

須藤修:「ICTを利活用した街づくり」, スマートひかりタウン熊本推進会議主催『ICTを利活用した街づくりサミット』(ホテル日航熊本、2013年2月13日)【基調講演】【招待講演】、2012.

蒲島郁夫、幸山政史、村尾和俊、渡辺克也、須藤修:「討論・ICTを利活用した地域の活性化、街づくり」, スマートひかりタウン熊本推進会議主催『ICTを利活用した街づくりサミット』(ホテル日航熊本、2013年2月13日)、2012.

須藤修:「クラウドと新たな世界」, シスコシステムズ主催『Cisco Connect Japan 2013』(東京ミッドタウン、2013年2月14日)【招待講演】、2012.

須藤修、川原均、窪田大介、栗島聡、谷脇康彦:「討論・クラウドで広がる新しい世界」, シスコシステムズ主催『Cisco Connect Japan 2013』(東京ミッドタウン、2013年2月14日)、2012.

須藤修:「ビッグデータとイノベーション」, シスコシステムズ主催『Cisco Connect Japan 2013』(東京ミッドタウン、2013年2月14日)【招待講演】、2012.

須藤修:「電子自治体と地方行政の展開」, 総務省自治体大学校『第1部課程第119期講義』(総務省自治体大学校、2013年2月20日-21日)、2012.

須藤修:「政府の情報通信基盤と情報セキュリティ—マイナンバー制度とシステム構想」, 情報セキュリティシンポジウム道後2013実行委員会主催『情報セキュリティシンポジウム道後2013』(子規記念博物館、2013年2月28日)【基調講演】【招待講演】、2012.

須藤修:「オープンデータ戦略とビッグデータ利活用、自治体クラウド」, 電子自治体推進パートナーズ主催『自治体クラウド講座』(内田洋行東京・大阪ユビキタス協創広場 CANVAS、2013 年年 3 月 28 日)【招待講演】、2012.

諸橋昭夫、榎並利博、須藤修:「討論・オープンガバメント・データ戦略と番号制度の展望」, 電子自治体推進パートナーズ主催『自治体クラウド講座』(内田洋行東京・大阪ユビキタス協創広場 CANVAS、2013 年年 3 月 28 日)、2012.

新聞・報道

須藤修:「マイナンバーと自治体の在り方」, 『信濃毎日新聞』2012 年 5 月 20 日付け朝刊、2012.

清水勉、須藤修、中村雅展、西川禎人、古川元久、向井治紀:「討論・生活に直結、欠かせぬ理解—マイナンバー—」, 『信濃毎日新聞』2012 年 5 月 20 日付け朝刊、2012.

須藤修、後藤玲子ほか:「けいざい解説—マイナンバー意外な効果—経済効果は 1 兆円超」, 『日本経済新聞』2012 年 6 月 10 日付け朝刊、2012.

須藤修:「インタビュー・争論マイナンバー・行政の効率化に期待」, 『岐阜新聞』2012 年 11 月 27 日付け朝刊(共同通信配信)、2012.

Osamu Sudoh:「Osamu Sudoh」, Marquis Who's Who in the world 2013 (30th edition, Nov.2012)、2012.

須藤修:「インタビュー・争論マイナンバー・行政の効率化に期待」, 『山陰中央新聞』2012 年 12 月 9 日付け朝刊ほか地方紙多数(共同通信配信)、2012.

須藤修:「ICT 利活用で資源枯渇に対応」, 『電波新聞』2012 年 12 月 14 日付け、2012.

須藤修:「社会保障・税改革と番号制度」, 『千葉日報』2013 年 1 月 27 日付け朝刊、2012.

織本林太郎、須藤修、熊谷俊人、清水勉、須藤修、峰崎直樹、向井治紀、大澤克之介:「討論・マイナンバー—公平公正な社会の実現には不可欠—より深い議論と国民の理解が必須」, 『千葉日報』2013 年 1 月 27 日付け朝刊、2012.

須藤修:「データ共有で新サービス」, 『読売新聞』2013 年 1 月 27 日付け朝刊、2012.

園田 茂人・教授

研究テーマ(主たるもの)

変動するアジアの比較社会学

アジア、とりわけ中国系社会を対象に、アジア・バロメーターや中国四都市調査のデータを用い、その変化の諸層をひかくの視野から実証的に研究している。最近では、特に新中間層の台頭を視野に、その社会・文化的特徴や政治的な特徴から、どのようにアジアの変化をもたらすかについて考察を深めている。

日系企業のアジア進出への社会学的アプローチ

1991年から、日系企業のアジア進出をテーマに、社会学的調査を積み重ねている。2006年から07年にかけて、15年前に調査した日系企業(台湾、中国、タイ、マレーシア、インドネシア)を訪問し、その時系列的变化を追いかけて、2005年にはインドの日系企業調査を実施し、現地従業員の日系企業評価の比較を試みている。2009年からは、2001年に調査した中国の日系、韓国系、台湾系企業を対象に時系列調査を実施する計画をたてている。

研究業績(2012年度)

著書

毛里和子・園田茂人編:「中国問題:キーワードで読み解く」, 東京大学出版会, 2012年.

園田茂人編:「日中関係史 1972-2012 III 社会・文化」, 東京大学出版会, 2012年.

園田茂人編:「リスクの中の東アジア:アジア比較社会研究のフロンティアII」, 勁草書房, 2012年.

雑誌論文

園田茂人:「社会——調和社会建設の試みとその帰結」, 国際問題, No.4月, pp.27-37, 2012年. 【査読有】

園田茂人:「なぜ中国の中間層に関心が集まるのか」, アジ研ワールド・トレンド, No.9月, pp.4-5, 2012年. 【査読有】
【一般向け】

園田茂人:「対中ビジネス人材の戦略を問う(1):現地人管理職の力を引き出すために」, 日中経協ジャーナル, No.12月, pp.24-27, 2012年. 【査読有】【一般向け】

園田茂人:「対中ビジネス人材の戦略を問う(2):日本人駐在員育成の理想と現実」, 日中経協ジャーナル, No.1月, pp.24-27, 2012年. 【一般向け】

園田茂人:「「文化イベント」にみる日中関係四〇年」, UP, No.11月, pp.28-34, 2012年. 【査読有】【一般向け】

講演・口頭発表

Shigeto Sonoda: “Utilizing Different Social Capital in Different Social Settings: Comparative Analysis of Localization Process of Japanese, Korean, and Taiwanese Multinationals in mainland China, 2001-2010”, Seoul National University, Asia Center Colloquim, 2012.

園田茂人:「中国人の心理と行動:広東ビジネスに深く入り込むために」, 香港貿易発展局「広東・香港:さらなる融合に向けて」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

Shigeto Sonoda: “Establishing Guanxi in Chinese Market: Comparative Analysis of Japanese, Korean, and Taiwanese Expatriates in mainland China”, International Conference on Boarder Crossing in Greater China: Production, Community, and Identity, 2012. 【招待講演】

園田茂人:「現地化戦略の異なるタイプ?:中国進出企業の日韓比較が示唆する現実」, 新潟大学経済学部経済学会研究会, 2012. 【招待講演】

Shigeto Sonoda: ""Globalization and Social Inequality in Sociological Textbooks: Views from East Asia"", 日本社会学会第 85 回大会・特別セッション, 2012. 【招待講演】

Shigeto Sonoda: ""Contrasting Attitude toward Emerging Chinese Market?: A Comparative Analysis of Expatriate Management of Korean and Japanese Multinationals"" , 韓国・現代日本学会特別セッション「グローバル金融危機以後の韓国と日本」, 2012. 【招待講演】

Shigeto Sonoda: ""Comparing East Asian Multinationals in China: Challenges and Accomplishments"", Joint Workshop, New Directions in Comparative and Transnational Studies, University of Duisburg-Essen, 2012. 【招待講演】

新聞・報道

園田茂人: 「ニュースの本棚: 中国の今後」, 朝日新聞 11 月 11 日, 2012.

園田茂人: 「中国人 9 割は「日本と戦争」「東京空爆」」, 『週刊新潮』2013 年 2 月 21 日, 2012.

鷹野 澄・教授

研究テーマ(主たるもの)

IT を活用し情報で人の命と暮らしを守るという研究

地震災害など大規模災害に対して、情報通信技術(IT)を活用して情報を適切に提供して、人々の命と暮らしを守る
ことについて研究します。

建物や大型構造物の構造物ヘルスマニタリングの研究

建物や大型構造物の劣化などの健康診断(ヘルスマニタリング)のために、IT 強震計などのセンサーを活用して技
術開発や応用の研究を進めています。

緊急地震速報などの即時的地震情報システムに関する研究

気象庁の緊急地震速報を活用するためには、利用者側でどのような対策をしたらいいのか、そのハード面での対策
の研究からソフト面での取り組みなどについて研究します。

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

中川茂樹・鶴岡弘・鷹野澄・酒井慎一: 「チャネル情報管理システムの開発」, 東京大学地震研究所技術研究報告,
No.18, pp.1-8, 2012 年. 【査読有】

その他論文

平田 直・笠原 敬司・小原 一成・岩崎 貴哉・鷹野 澄・森田 裕一・酒井 慎一・飯高 隆・ト部 卓・鶴岡 弘・楠城 一嘉・蔵下 英司・五十嵐俊博・加藤愛太郎・大木 聖子・西田 究・中川 茂樹・パナヨトプロス ヤニス・宮川 幸治・坂上 実・芹沢 正人・川北 優子・伊東 明彦・根本 泰雄:「3. 1. 1 中感度地震観測によるプレート構造調査」, 科学技術振興費 首都直下地震防災・減災特別プロジェクト ①首都圏でのプレート構造調査、震源断層モデル等の構築等, 平成 23 年度 成果報告書, p12-47, 2012 年.

講演・口頭発表

鷹野澄・鶴岡弘・石黒佳彦:「緊急地震速報はどのように放送すべきかー後続報を活かした自動放送設備の開発ー」, 日本災害情報学会第 14 回学会大会, 2012.

伊藤貴盛・鷹野澄:「長期的な建物地震観測による建物健全性調査の可能性ー地震動の強さと層間変形角の関係の調査ー」, 日本地震学会2012秋季大会, 2012.

鷹野澄・伊藤貴盛:「建物用 IT 強震計の地震速報メールとその活用方法」, 日本地震学会2012秋季大会, 2012.

田中 淳・教授

研究テーマ(主たるもの)

災害情報論

災害による被害を軽減するために求められる災害情報の要件を、住民や市町村等利用者側の意志決定過程に関する実証研究の知見に基づき、実証的・理論的に解明し、具体的な提言に結び付けている。災害期の警報や避難勧告等、復旧・復興期の生活再建情報、事前の防災意識向上や防災教育など、各段階での課題を対象とする。

災害弱者対策

阪神・淡路大震災で高齢者や障害者に被害が大きかったことやハリケーン・カトリーナにおける人種や所得によって被害が異なったように、災害による影響は社会集団によって差違が生じる。この際は、地震や火山噴火、あるいは爆発と行った外力による被害の程度に留まらず、避難のしやすさや生活再建の円滑さなど長期的な側面を持つ。災害の過程で生じる社会格差の視座から、研究を進めている。

集合行動論

20 世紀初頭に誕生した集合行動論は、パニックや都市暴動、社会運動など多様な創発的社会行動を理論的に分析してきた。ある意味、災害の社会学的研究もまたその流れをくんでいる。日常の制度や組織、役割など社会秩序が、災害により修正を余儀なくされるためである。災害研究の理論的バックグラウンドとして、集合行動論ならびにその批判的研究として登場した集合行為論の研究を行っている。

研究業績(2012 年度)

分担著書

田中淳:「避難しないのか、できないのか—避難行動と防災教育」, 佐竹健治・堀宗朗 編, 東京大学出版会, 2012年.

雑誌論文

地引泰人・大原美保・関谷直也・田中淳:「東日本大震災後の仙台市の病院・診療所に関する支障と情報ニーズについての分析」, 災害情報, Vol.11, pp.91-101, 2012年.【査読有】

国際会議等

Atsushi tanaka: "Lessons from the 2011 Tohoku Earthquake on Emergency Response and Disaster Prevention Education", UK-Japan Joint Workshop Disaster Risk Reduction, 2012.

Atsushi Tanaka: "Information system and disaster mitigation", Lyon - UT - Yokohama Workshop; Dealing with Urban Vulnerability, 2012.

講演・口頭発表

田中 淳:「防災を考える—首都直下地震に備える」, 人事院公務員研修所「第110回行政フォーラム」, 2012.【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

一般:「南海トラフ巨大地震・被害想定「220兆円」」, NEWS WEB 24, NHK, 2012.

田中 秀幸・教授

研究テーマ(主たるもの)

産業技術のイノベーション・システムに関する研究

技術的限界に直面した産業においては、それを乗り越えるために不確実性の高い技術の方向性を明らかにするような焦点化が求められる。市場メカニズムは、そのような焦点化の機能が全般的に弱いために、従来は、国家のイニシアティブによって、企業の境界を越えたイノベーションの取り組みが進められてきた。しかしながら、近年、最先端の技術限界を突破するためには、必ずしもドメスティックな企業間協力だけでは対応が困難になってきており、それに伴い、国家でもなければ企業でもない非営利の中間組織がグローバルに展開することで、新たなイノベーション・モデル形成する例が生まれつつある。以上のような問題意識の下、産業技術のイノベーションにおける、市場、国家、企業、そして中間組織の機能などについての研究を進めている。

情報セキュリティの経済的相互依存関係に関する分析

情報システムのネットワーク化の進展によって、情報セキュリティは相互依存性が高まっている。相互依存的な環境下では、ある主体の情報セキュリティ水準は自らの管理努力だけではなく、ネットワークで接続された相手方のセキュリティ・マネジメントの影響も受けるようになる。こうした相互依存性は、外部 効果を通じて市場の失敗をもたらすことになり、何らかの制度的な手当が必要となる。このような情報セキュリティを巡る組織の境界の変容に対して、いかなる インセンティブ設計があり得るのかなどについての研究を進めている。

地域情報化に関する研究

現在進められている電子自治体の取り組みは、行政内部の業務プロセスを抜本的に変えるのみならず、従来、行政の外側にあった主体との関係にも大きな 変化をもたらす。具体的には、地域住民、地域企業やNPOとの相互関係を深めることで、新たな地域づくりが実現しつつある。電子自治体を契機として展開する 地域情報化の中で、行政の境界がどのように変容し、いかなる制度が求められるかなどについての研究を行っている。

研究業績(2012 年度)

分担著書

田中 秀幸:「東日本大震災の経済的側面:経済構造変化と財政難の日本を背景に」、『東日本大震災の科学』, 佐竹健治・堀宗朗 編, 東京大学出版会, 2011 年.

田中秀幸:「アンビエント社会基盤のビジョン:「成長」と「発展」による持続可能な社会に向けて」,『実世界ログ:総記録技術が社会を変える』, 広瀬通孝 編, PHP パブリッシング, 2012 年.

田中秀幸:「国・自治体による地域 SNS:施策とその効果の検証」,『情報化時代のローカル・コミュニティ:ICTを活用した地域ネットワークの構築』, 杉本星子 編, 国立民族学博物館, 2012 年.

雑誌論文

Takagi, Soichiro and Hideyuki Tanaka: "Offshore Outsourcing of Information Services and Employment in Japan", *Journal of Economic Policy Studies*, Vol.9, No.2, pp.29-32, 2012 年. 【査読有】

田中秀幸、井出智明、榊原理恵、長野晋也、豊田優美子、馬渡 一浩、佐藤訓、堀江真弘:「地域のソーシャル・メディア活用:実社会とのかかわりがポイントに」, *地方議会人*, Vol.43, No.2, pp.8-12, 2012 年. 【一般向け】

Takagi, Soichiro and Hideyuki Tanaka: "International Trade of Information Services, and its Effect on Productivity and Industrial Structure in Japan", *the 2012 Global Business & Economics Anthology*, pp.334-345, 2012 年. 【査読有】

Takagi, Soichiro and Hideyuki Tanaka: "Offshore Outsourcing of Information Services and its Effect on Productivity in Japan", *社会・経済システム学会第 31 回大会予稿集*, No.33, pp.107-114, 2012 年. 【査読有】

田中秀幸、諭静媛、林香里、北原利行、有賀勝、榊原理恵:「新聞・新聞広告に対する意識と新聞広告への反応に関する研究」, *日経広告研究所報*, No.267, pp.16-23, 2012 年.

正村俊之、伊藤守、米山優、遠藤薫、伊藤賢一、田中秀幸:「社会情報学と世界:新たな共有と創造に向けて(理論編)」, *社会情報学*, Vol.1, No.3, pp.67-113, 2012 年. 【査読有】

国際会議等

Jenjarrussakul, Bongkot, Hideyuki Tanaka, and Kanta Matsuura: "Sectoral and Regional Interdependency of Japanese Firms under the Influence of Information Security Risks", the 11th Workshop on the Economics of Information Security (WEIS), 2012. 【査読有】

Day, Robert and Hideyuki Tanaka: "In Search of the Elusive "Cultural Discount: Comparing Determinants of Foreign-Language and Domestic Film Success at the US Box Office", The Asian Conference on Media and Mass Communication 2012, pp.450-466, 2012.

その他論文

田中秀幸、井出智明、榊原理恵、長野晋也、豊田優美子、馬渡 一浩、佐藤訓、堀江真弘:「広告が企業価値に及ぼす影響に関する実証研究」, 助成研究集(要旨)平成23年度(2011)第45次, 公益財団法人吉田秀雄記念事業財団, pp.35-44, 2012年.

Day, Robert and Hideyuki Tanaka: "We", 2012年社会情報学会(SSI)学会大会研究発表論文集, pp.287-290, 2012年.

中野邦彦, 田中秀幸:「地域 SNS の利用実態に関する地域間比較」, 社会・経済システム学会第31回大会予稿集, pp.85-88, 2012年.

Takagi, Soichiro and Hideyuki Tanaka: "Cloud Computing and Economic Implications", 社会・経済システム学会第31回大会予稿集, pp.53-56, 2012年.

田中秀幸:「大震災が地域経済に及ぼす」, 計測自動制御学会 システム・情報部門学術講演会 2012 講演論文集, CD, pp.361-366, 2012年.

田中秀幸:「新聞閲読時間の長短と新聞広告への反応」, 朝日新聞広告局調査レポート, <http://adv.asahi.com/modules/kikimimi/index.php/content0130.html>, 2012年. 【一般向け】

講演・口頭発表

佐藤訓, 田中秀幸, 井出智明:「媒体別広告が企業価値に及ぼす影響に関する研究」, 第69回日本経済政策学会全国大会, 2012.

Takagi, Soichiro and Hideyuki Tanaka: "Macroeconomic analysis of cloud computing in Japan", 進化経済学会第17回大会, 2012.

田中秀幸:「地域の幸福に地域 SNS は貢献できるか」, 第10回地域 SNS 全国フォーラム, 2012. 【招待講演】【一般向け】

田中秀幸:「アンビエント社会のビジョン:アンビエント発展先進国にむけて」, G 空間 EXPO 特別シンポジウム, 2012. 【招待講演】【一般向け】

田中秀幸:「地方公共団体におけるソーシャル・メディアの活用について」, 地方自治情報化推進フェア2012・トピックスセミナー, 2012. 【招待講演】【一般向け】

田中秀幸:「情報化社会と企業の立地展開」, (財)日本立地センター・第118回産業立地研修会, 2012. 【招待講演】【一般向け】

田中秀幸:「地域社会の活性化と不動産業の役割」, 不動産保証協会京都府本部第4回研修会, 2012. 【一般向け】

田中秀幸:「企業における脅威と被害の新たなモデル構築」, 情報処理振興協会主催情報セキュリティエコノミクスシンポジウム 2013, 2012. 【招待講演】【一般向け】

田中秀幸:「自治体の SNS 活用で生まれる」, オープンガバメント時代の自治体ウェブプロモーション最前線セミナー, 2012. 【招待講演】【一般向け】

西垣 通・教授

研究テーマ(主たるもの)

基礎情報学

生命情報から社会情報、機械情報にわたる情報学の基礎的な検討。マトウラーナ／ヴァレラのオートポイエーシス論、ホフマイヤーの生命記号論、ルーマンの理論社会学、グレイザーズフェルドのラディカル構成主義、シュミットの文学システム論などを批判的に摂取しつつ、情報メディア思想を理論的に検討する。これは、文理融合の学際的研究分野「ネオ・サイバネティクス」の一環をなす。

インターネット社会論

基礎情報学の応用として、21世紀インターネット社会における諸問題(企業組織、オンライン共同体、情報倫理、サイバースペース心理、集合知など)を理論的かつ実践的に検討する。

研究業績(2012年度)

著書

西垣通:「集合知とは何か」, 中央公論社, 2013年.

分担著書

Toru Nishigaki: "Is the Society of Cohabitation with Robots Possible? (Information Ethics)", Toru Nishigaki, Tadashi Takenouchi 編, V2 Solution, 2012年.

西垣通:「現代社会学事典(情報、コンピュータ、IT、ウェブ 2.0、サイバネティクスなど)」, 見田宗介、大澤真幸、吉見俊哉、鷲田清一 編, 弘文堂, 2012年.

雑誌論文

西垣通:「人間機械論とオートポイエーシス」, 人間会議, No.26, pp.258-263, 2012年. 【一般向け】

西垣通:「スマートフォンと哲学が会おうとき」, 環境会議, No.38, pp.244-249, 2012年. 【一般向け】

西垣通:「基礎情報学の射程」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究, No.83, pp.1-30, 2012 年.

西垣通:「思考機械へのむなしい呼びかけ」, 現代思想, Vol.40, No.14, pp.84-91, 2012 年. 【査読有】【一般向け】

その他論文

西垣通:「知の裂け目からリアルが覗く」, 環(藤原書店), vol.49, 2012 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

西垣通:「生命と機械をつなぐ知(記念講演)」, 東北大学教育情報学研究部・教育部10周年記念式典, 2012. 【招待講演】

新聞・報道

西垣通:「視点論点「スマホとケータイの文化差」」, NHK教育テレビ, 2012.

西垣通:「ネット集合知、精度向上を(経済教室)」, 日経新聞, 2012.

西垣通:「IT社会と人間」, 読売新聞, 2013.

橋元 良明・教授

研究テーマ(主たるもの)

情報行動に関する社会心理学的分析

メディア利用やコミュニケーション行動などが、社会変化に伴ってどのような変容を遂げているのか、そうした情報行動のパターンを規定する要因は何か、等について社会心理学的観点から実証的に分析している

メディアの効果、とくに青少年に及ぼす影響の研究

テレビやインターネットなどが社会生活や世論形成過程、青少年の精神的発達に及ぼす影響、携帯電話などの新しいコミュニケーション・ツールが対人関係、家族関係に及ぼす影響などを調査等の実証的手法で分析している。

言語的コミュニケーションの了解・伝達過程、変容に関する研究

言語的コミュニケーションに関し、おもに語用論的視点から了解・伝達構造を研究している。また、日本人の言語行動が、社会システムの変化とどのようににかかわっているか、あるいはマスメディアや新しいメディア・ツールの普及によってどのような影響をこうむっているのかに関する研究をおこなっている。

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

橋元良明、千葉直子、堀川裕介、関良明、原田悠輔:「中高生のスマートフォン利用と有害情報接触—東京23区親子訪問留置調査」, 東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編, No.No.29, pp.51-104, 2012年.

橋元良明:「災害情報の発信と受容」, 日本語学, Vol.31, No.6, pp.4-13, 2012年. 【査読有】

橋元良明:「社会学、社会心理学、社会情報学、君たちは何者か」, 社会情報学, Vol.第1巻, No.第1巻1号, pp.47-55, 2012年. 【査読有】

橋元良明:「メディアリテラシーとは何か」, 月刊『母子保健』, No.2012年12月号, pp.8-12, 2012年.

橋元良明:「調査から見た被災地におけるメディアの役割」, マス・コミュニケーション研究, No.82号, pp.19-35, 2013年. 【査読有】

橋元良明、北村智、河井大介他:「日本人の情報行動—橋元研究室・総務省情報通信政策研究所共同研究」, 東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編, No.No.29, pp.1-50, 2013年.

その他論文

橋元良明:「ことばとメディアを追いかけながら」, 『社会言語科学』第14巻第2号巻頭言, 2012年.

橋元良明、中村功、関谷直也、小笠原盛浩、山本太郎、千葉直子:「東日本大震災における仙台盛岡住民の情報行動と通信不安」, 報告書, NTTとの産学連携共同研究成果報告書, 2012年.

橋元良明、中村功、関谷直也、小笠原盛浩、山本太郎、千葉直子:「東日本大震災における首都圏住民の情報行動と通信不安」, 報告書, NTTとの産学連携共同研究成果報告書, 2012年.

橋元良明、大野志郎、河井大介、天野美穂子、堀川裕介:「ネット依存の要因—2011年調査」, 報告書, 総務省・安心ネットづくり促進協議会の委託調査研究成果報告書, 2012年.

橋元良明:「ICTが変える生活者の暮らし」, CEL, 2012年. 【一般向け】

橋元良明:「スマートフォンを使ったプロモーション—社会進学研究者から」, 『宣伝会議』No.848, 2012年. 【一般向け】

橋元良明:「コミュニケーション学探求途上」, 『日本語学』2012年11月臨時記念号, 2012年.

橋元良明:「「情報行動」から見たメディアの未来」, 毎日新聞社『スペース』No.392, 2013年. 【一般向け】

講演・口頭発表

hasimoto@iii.u-tokyo.ac.jp:「調査から見た被災地におけるメディアの役割」, 日本マス・コミュニケーション学会(春季大会、於:宮崎公立大学)シンポジウム「震災後のメディア研究、ジャーナリズム研究」報告, 2012. 【招待講演】

橋元良明:「この2年間における情報行動の変化」, 社会情報学会(於:群馬大学)シンポジウム「社会情報学と世界—新たな共有と想像に向けて(実証系)」報告, 2012. 【招待講演】

橋元良明:「『ネット依存』とは何か?」, 安心ネットづくり促進協議会, 2012. 【招待講演】

橋元良明:「ネットとテレビ」, 日本社会心理学会(筑波国際会館)ワークショップ「ネット時代のテレビの社会的役割を問い直す」指定討論者, 2012. 【招待講演】

橋元良明(コーディネイター):「日本人のネット利用行動の実態—新しい情報指標作成のための試行的調査から」, 日本社会情報学会定例研究会, 2013.

橋元良明:「ネットでつながる“幸福”なお中高生」, NHK 放送文化研究所シンポジウム(パネラー), 2013. 【招待講演】
【一般向け】

新聞・報道

橋元良明:「高齢者のネット利用60代は6割近くに」, 『日本経済新聞』朝刊 10 面, 2012.

橋元良明:「60代ネット利用過半に」, 『日経産業新聞』5面で電通との共同研究「デジタル・シニアプロジェクト」成果紹介, 2012.

橋元良明:「「デジタルシニア」に関するニュースでコメント」, NHK「おはよう日本」, 2012.

橋元良明:「新書論壇 テレビ的社会の危うさ」, 『読売新聞』朝刊「新書論壇で著書『メディアと日本人』の紹介」, 2012.

橋元良明:「震災後 科学者信頼できますか」, 『読売新聞』朝刊(7 面)「震災後 科学者信頼できますか」へのコメント(写真付), 2012.

橋元良明:「ブームの予感 ソーシャルメディア」, 『日経 MJ(日経流通新聞)』(16 面), 2012.

橋元良明:「デジタルシニアのメディア利用」, フジテレビ『新週刊フジ批評』, 2012.

橋元良明:「直接的コミュニケーションよりメール」, NHK『NEWS WEB24』, 2012.

橋元良明:「ネット依存—ゲームや SNS のめり込み」, 『日本経済新聞』朝刊社会面, 2012.

橋元良明:「原発事故時想定 県外避難 拒む福井」, 『読売新聞』(大阪版)(36 面), 2012.

橋元良明:「集まれ! ほっとエイジ~シニアビジネス研究所:デジタルシニアと IT 社会(1)(2)」, ラジオ NIKKEI, 2012.

橋元良明:「高齢者はIT苦手」はウソ ネットが老後を充実」, 日本経済新聞 Web 版, 2013.

橋元良明:「学び合う『お助け塾』でシニアのネット利用に関する研究紹介とコメント」, 『読売新聞』(九州・山口総合版、31 面), 2013.

橋元良明:「ソーシャルメディア利用 92% スマホ書字の中高生調査」, 『読売新聞』で NTT との共同研究成果の紹介, 2013.

橋元良明:「スマホ中高生ルール必要」, 『読売新聞』(大阪、16 面), 2013.

林 香里・教授

研究テーマ(主たるもの)

ジャーナリズムの自由主義イデオロギーについて「ケアの倫理」からの批判的検討

ジャーナリズムは17世紀より自由主義イデオロギーとともに発展してきた。それはマスメディアというシステムとともに自由市場で拡大することによって、そのイデオロギーを一層先鋭化させてきた。しかし、今日の情報化とグローバル化状況において、自由主義思想も再検討を迫られており、ジャーナリズムにおいても自由主義的発想の対案を考えていかななくてはならない。こうした新しいジャーナリズムの倫理について、とくに自由主義の批判理論である「ケアの倫理」を応用して研究をしている。

各国のジャーナリズム制度ならびに言説の国際的比較分析

欧米や東アジア諸国のジャーナリズム研究者と共同で、各国のジャーナリズムの制度および言説の比較研究を行っている。制度の違いがニュース報道の内容にどこまで影響するかについて、さまざまな事例をもとに行っている。日本証券奨学財団、二十一世紀文化学術財団学術奨励金、三菱財団から、寄附金を受け、多角的な報道比較研究を進めている。

- 1) 東アジアを中心としたテレビ・ニュース番組の比較。とりわけ制度的相違から演繹される内容の多様性の位相を研究している。
- 2) 福島第一原子力発電所事故に際して、日、独、米、中、韓国の5か国比較を行っている。
- 3) メディアシステム、政治文化と市民の情報力の連関について：8カ国国際比較研究(科学研究費補助金(B)2009-2012)の成果をもとに、さらに発展的にテレビ、およびウェブジャーナリズムの比較を行っている。
- 4) 以上の実証的研究とともに、「国際メディア比較論」の方法論の洗練をめざしている。

メディア産業構造変動から見る報道職とジャーナリズムの将来：東アジア国際比較研究

従来のマスメディア産業は、コンジット(conduit, 伝送経路)とコンテンツ(contents)の垂直統合を基本にして、コンテンツはプロフェッショナルが媒体ごと、会社内の枠組みごとに制作するという仕組みを踏襲してきた。しかし、近年、垂直統合は解体され、コンテンツの制作方法では多様化と分業が進んでいる。こうして、報道の世界でも、産業構造、ならびにジャーナリスト(報道職)という職業プロフィールは大きな変動期にある。本プロジェクトは、科学研究費補助金(B)を受けて、産業構造分析の専門者とメディア研究の専門者との共同研究とし、メディア産業の構造変動を見極め、それに規定されるジャーナリスト(報道職)の職業プロフィールの変容過程を明らかにし、現代ジャーナリズムの総合的考察を試みる。調査では、韓国、台湾、中国(香港)、日本の東アジア4カ国を対象とし、グローバル化する情報産業において各国の状況を比較・相対化することによって新しい時代のジャーナリズムのモデルを模索する。

研究業績(2012年度)

著書

ドミニク・カルドン著、林香里・林昌宏翻訳：「インターネット・デモクラシー 拡大する公共空間と代議制のゆくえ」, トランスビュー, 2012年.

雑誌論文

畑仲哲雄、林香里: 「地域ジャーナリズム」という事業—SNS に取り組んだ地方紙 7 社への調査から—, 杉本星子編『情報化時代のローカル・コミュニティ—ICT を活用した地域ネットワークの構築—』国立民族学博物館調査報告, Vol.No.106, pp.147-177, 2012 年. 【査読有】

Stuart Soroka, Blake Andrew, Toril Aalberg, Shanto Iyengar, James Curran, Sharon Coen, Kaori Hayashi, Paul Jones, Gianpetro Mazzoleni, June Woong Rhee, David Rowe and Rod Tiffen.: “Auntie Knows Best? Public Broadcasters and Current Affairs Knowledge.”, *British Journal of Political Science*, available on CJO2012., Vol.doi:10.1017/S0007123412000555., 2012 年. 【査読有】

林香里: 「討論型世論調査でめざした民主主義の「実験」は成功したか?」, *Journalism*, Vol.1 月号, pp.24-29, 2013 年.

Toril Aalberg, Stylianos Papathanassopoulos, Stuart Soroka, James Curran, Kaori Hayashi, Shanto Iyengar, Paul K. Jones, Gianpietro Mazzoleni, Hernando Rojas, David Rowe, Rodney Tiffen: “International TV News, Foreign Affairs and Public Knowledge.”, *Journalism Studies*, Vol.DOI: 10.1080/1461670X.2013.765636, pp.1-20, 2013 年. 【査読有】

林香里: 「際立つドイツの原発事故報道: 福島原発事故報道の国際比較研究より」, 『学術の動向』2013 年 1 月号, Vol.1 月号, pp.50-55, 2013 年.

林香里: 「震災後のメディア研究、ジャーナリズム研究 — 問われる「臨床の知」の倫理と実践のあり方」, 『マス・コミュニケーション研究』, No.82, pp.3-17, 2013 年.

国際会議等

Hernando Rojas, JungHwan Yang, Magdalena Wojcieszak, Sharon Coen, Toril Aalberg, James Curran, Shanto Iyengar, Hayashi Kaori, Vinod Pavarala, Gianpietro Mazzoleni, Stylianos Papathanassopoulos, June Wong Rhee, Stuart Soroka.: “Patterns of media use, conversation and perceived political polarization in 10 countries” outstanding presentation”, WAPOR (World Association for Public Opinion Research 65th Annual Conference, June 14-16, 2012 in Hongkong, 2012. 【査読有】

Sunyoung KWAK, Kawol CHUNG, Minjoo LEE, Jingyuan YU, Kaori HAYASHI: “Threat from an Invisible Enemy: A Five-Nation Comparative Study on the Representation of Citizens in TV News Coverage of the Fukushima Nuclear Accident”, ECREA (European Communication Research Association) Istanbul 2012. 25 Oct. 2012., 2012. 【査読有】

その他論文

林香里: 「「地域」という魔法の言葉 問われる住民活動の内容」, 『東京新聞』 2012 年 4 月 21 日 メトロポリタン面: 談論誘発「孤立死」, 2012 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

外岡秀俊 元朝日新聞編集局長、M.Fackler New York Times 東京支局長 齋藤貴男 ジャーナリスト 林香里 東京大学大学院情報学環教授: 「不信の壁を超えて 3・11 後の言論と社会」, 朝日新聞労働組合主催 「第25回 言論の自由を考える5・3集会」, 2012. 【一般向け】

林香里（東京大学）、橋元良明（東京大学）、大井眞二（日本大学）、坂田邦子（東北大学）、コメンテーター 原由美子（NHK 放送文化研究所）、市村元（関西大学）：「震災後のメディア研究、ジャーナリズム研究」，日本マス・コミュニケーション学会春季研究発表会 2012 年 6 月 3 日、宮崎公立大学にて。、2012.

李康澤（イガンテク） 韓国・全国言論労働組合委員長、KBS プロデューサー パネリスト 黄大竣（ファンデジュン） 韓国・PD 連合会会長、KBS プロデューサー 永田浩三 武蔵大学社会学部メディア社会学科教授 玄武岩（ヒョンムアン） 北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授 総合司会：林香里（東京大学大学院情報学環・学際情報学府教授）：「放送の公正性とは何か—韓国放送局ストライキから考える日韓メディア産業の未来」，日韓国際シンポジウム，2012.

林香里：「Japanese Media. 日本のマスメディアを国際的視点から考える」，d-labo by Suruga Bank. ミッドタウン・タワー7階、スルガ銀行，2012. 【一般向け】

池上彰（ジャーナリスト） 東浩紀（作家・批評家） 林香里（東大大学院教授） 杉浦信之（朝日新聞ゼネラルエディター兼東京本社編成局長） 中村直樹（テレビ朝日報道局ニュースセンター編集長） 宮崎知己（朝日新聞東京本社特別報道部次長）：「『震災報道を考える ～被災地の声を伝えるために～』」，朝日新聞・テレビ朝日合同シンポジウム ，2013. 【招待講演】【一般向け】

NHK 放送文化研究所主任研究委員 井上裕之、コメンテーター、河北新報編集委員寺島英弥、東京大学大学院情報学環教授 林香里：「『被災者』ではなく『被災した人』」，NHK 放送文化研究所 2013 年春の研究発表、2013 年 3 月 14 日，2013. 【招待講演】

新聞・報道

林香里：「中国新聞新聞週間インタビュー「ジャーナリズム性重要に」」，中国新聞 2012 年 10 月 16 日、15 面。、2012.

馬場 章・教授

研究テーマ(主たるもの)

日本近世経済史

日本近世の度量衡をはじめとする計量制度、三貨を中心とする貨幣制度を文献資料と現物資料の連関に注目して実証的に解明する。

デジタルアーカイブズ科学

文化資源のデジタル化の理論と方法について研究する。

コンテンツ創造科学

デジタルコンテンツ、とりわけ電子的なゲームの面白さの解明とそれを構造化した制作理論の構築、およびシリアスゲームについて研究する。

研究業績(2012 年度)

講演・口頭発表

馬場章: 「デジタルゲームを進化させる」(Making Digital Games evolved), TED × UTokyo, 2012. 【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

馬場章: 「ファミコン史」, 自動車技術会の機関誌『自動車技術』第 66 巻第 5 号, 2012.

馬場章: 「1 章ファミコン史(P.45)」, 『ジョージ・ポットマンの平成史』, 2012.

古村 孝志・教授

研究テーマ(主たるもの)

地震とその揺れの可視化

大地震による強い揺れの発生と、平野での揺れの増幅を高密度地震観測データ解析と、地震波伝播のコンピュータシミュレーションをもとに調べている。地震波伝播の可視化技法の開発と、地球シミュレータおよび次世代スパコンを用いた大規模並列シミュレーションの開発も進めている。

研究業績(2012 年度)

松田 康博・教授

研究テーマ(主たるもの)

東アジア国際政治研究

中国および台湾の政治・対外関係・安全保障

中台関係論

研究業績(2012 年度)

分担著書

松田康博:「馬英九再選—2012年台湾總統選挙の結果とその影響—」, 小笠原欣幸, 佐藤幸人 編, 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2012年.

松田康博:「【改訂版】岐路に立つ日中関係—過去との対話・未来への模索—」, 家近亮子, 松田康博, 段瑞聡 編, 晃洋書房, 2012年.

松田康博:「中共「十八大」菁英甄補—人事、政策與挑戰—」, 陳德昇 編, INK 印刻文学生活雜誌出版有限公司, 2012年.

Yasuhiro Matsuda: “China’s Domestic Politics and Foreign Policies and Major Countries’ Strategies toward China”, Jung-Ho Bae and Jae H. Ku eds 編, Korea Institute for National Unification (KINU), 2012年.

松田康博:「台湾民主化下の兩岸關係與台日關係」, 松田康博, 蔡增家 編, 國立政治大學當代日本研究中心, 2013年.

松田康博:「蔣介石研究—政治・戦争・日本—」, 山田辰雄, 松重充浩 編, 東方書店, 2013年.

雑誌論文

松田康博:「馬英九再選と台湾の「自己革新」」, アステイオン, No.76, pp.106-115, 2012年. 【査読有】【一般向け】

Yasuhiro Matsuda: “Engagement and Hedging: Japan’s Strategy toward China”, SAIS Review, Vol.XXXII, No.2, Summer-Fall 2012, pp.109-119, 2012年. 【査読有】

松田康博:「台湾における憲政の展開過程概論—独裁か民主か? 中華民国か台湾か?—」, 現代中国研究, No.第31号, pp.42-55, 2012年. 【査読有】

松田康博:「台湾をめぐる米中関係の変動要因とは何か?」, 東亜, No.2013年03月01日発売号, pp.92-100, 2013年. 【一般向け】

国際会議等

政治大学国際関係研究中心: “中共対台政策—回顧與展望—”, 中共「十八大」精英甄補與政治繼承—変遷、政策與挑戰国際研討会—, pp.1-14, 2012.

政治大学国際事務学院日本研究硕士学位学程・政治大学国際関係研究中心当代日本研究中心: “馬英九政府の兩岸關係—自立與繁榮的困境—”, 2012 台日論壇: 台湾民主化下兩岸關係與台日關係—台日学者台湾研討会—, 2012.

Brookings Institution: “Foreign Relations of the Chinese People’s Liberation Army: An Analysis Based on Series of China’s Defense White Paper”, An Off-the Record Workshop on China’s Foreign Relations and Role in Regional Security, 2013.

水越 伸・教授

研究テーマ(主たるもの)

ソシオ・メディア論

メディアを情報技術の側からだけでなく、人間や社会の営みの側からもとらえるメディア論の構築。そのための思想的方法論として「批判的メディア実践」を構想、実践している。

メディア史

19世紀後半から20世紀半ばにかけての電氣的メディア、電子的メディアをめぐる技術と社会のダイナミズムについての歴史的研究。

メディア・リテラシー

メディア・リテラシーについての理論と実践に関する総合的な研究。

研究業績(2012年度)

分担著書

水越伸:「メディアと社会(『現代用語の基礎知識 2013』所収)」, 自由国民社 編, 自由国民社, 2012年.

水越伸:「「モバイル」「メディア・リテラシー」「ワークショップ」(『現代社会学事典』所収)」, 見田宗介、他 編, 弘文堂, 2012年.

水越伸:「情報(『現代デザイン事典 2013』所収)」, 勝井三雄・田中 一光・向井周太郎(監修)、伊東順二・柏木博(編集) 編, 平凡社, 2013年.

雑誌論文

水越伸:「形態学からデザイン論へ——メディア論の再検討と提言——」, 国語科教育, No.72号, pp.80-84, 2012年.

水越伸:「メディア論と生涯教育」, 日本生涯教育学会年報, No.33, pp.107-124, 2012年.

水越伸:「メディアとしての新聞を学ぶということ」, 新聞活用の工夫 提案:NIEガイドブック高等学校編, 2013年.【一般向け】

作品

水越伸、鳥海希世子:「生涯学習サポーター養成コース「区民メディアリポーターになろう!」」, 平成24年度中央区民カレッジ, 2012.

水越伸、他:「コミかるた」, コミかるた, 2012.

講演・口頭発表

水越伸:「新しいメディア・リテラシーの構図」, ICT地域連携フォーラム in 東京「地域で考えるメディアリテラシーの育成について」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

水越伸:「電話って何?」, UTalk, 2012. 【招待講演】

水越伸:「メディアの可能的様態を発現させる試み:メディア・エクспリモの実践プロジェクトを事例として」, シンポジウム「地・球」文化の可能性, 2012. 【招待講演】【一般向け】

Kari-Hans Kommonen, Shin Mizukoshi: "Media, Everydaylife and Design: International Seminar of Aalto Media Factory & Todai Joho-Gakkan", Media, Everydaylife and Design: International Seminar of Aalto Media Factory & Todai Joho-Gakkan, 2012.

Shin Mizukoshi: "Media Factory Tokyo", Media Lab Seminar, 2012.

Shin Mizukoshi: "Genealogy of the Critical Media Practice in Japan", School of Communication, Media and Theatre Seminar, 2012.

Shin Mizukoshi: "Genealogy of the Critical Media Practice in Japan", School of Architecture and Design Seminar, 2012.

Shin Mizukoshi: "(Re)weaving collaborative storytelling networks via mobile media practices", 2012 SNU-UT Symposium: Social Media and Public Communication, 2012. 【招待講演】

Shin Mizukoshi: "Media Exprimo: Exploring a new dimension of information design for people", d CATCH project 10th Anniversary in Bangkok, 2013. 【招待講演】

水越伸:「情報化と社会教育～デジタル・ストーリーテリングの展開～」, 社会教育主事講習, 2013. 【招待講演】【一般向け】

Shin Mizukoshi: "Graduate Program for Social ICT Global Creative Leaders", Seminar of GCL, GDWS in the Media Lab, 2013. 【招待講演】

新聞・報道

水越伸、他(テレビ出演):「あらぶんちょ!」, 東京ケーブルネットワーク, 2012.

水越伸(コメント):「特集ワイド「どう読む?週刊誌の衆院選」」, 毎日新聞夕刊, 2012.

水越伸:「研究室散歩@メディア論」, 東京大学新聞, 2013.

目黒 公郎・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

著書

目黒公郎(部分執筆):「電子トリアージシステム「TRACY」、災害と医療(監修:高久史麿)」, ライフメディコム, 2012 年.

雑誌論文

川崎昭如, Henry, M., 目黒公郎:「言語能力の違いに着目した東日本大震災後の外国人の災害情報収集分析」, 地域安全学会論文集, No.No.18, pp.373-380, 2012 年. 【査読有】

Henry, M., 川崎昭如, 目黒公郎:「東日本大震災後の外国人退避の意思決定と災害情報収集過程の関係」, 地域安全学会論文集, No.No.18, pp.381-390, 2012 年. 【査読有】

石川哲也, 川崎昭如, 目黒公郎:「山陰地方豪雪災害時の Twitter ユーザによる情報発信行動の分析」, 地域安全学会論文集, No.No.17, pp.135-143, 2012 年. 【査読有】

國分瑛梨子・沼田宗純・目黒公郎:「2011 年東日本大震災直後において「集中的にテレビ報道された市町村」の基礎的分析」, 土木学会論文集 A1(構造・地震工学), Vol.68, No.No.4, pp.1015-1022, 2012 年. 【査読有】

川崎昭如, 小森大輔, 中村晋一郎, 木口雅司, 西島 亜佐子, 沖一雄, 沖大幹, 目黒公郎:「2011 年タイ王国チャオプラヤ川洪水における緊急災害対応:政府機関の組織間連携と情報共有に着目して」, 地域安全学会論文集, No.No.17, pp.109-117, 2012 年. 【査読有】

早乙女愛・沼田宗純・目黒公郎:「2011 年東日本大震災における緊急支援物資の数量推移に関する研究-仙台市の救援物資を事例として」, 土木学会論文集 A1(構造・地震工学), Vol.68, No.No.4, pp.969-975, 2012 年. 【査読有】

Kimiro MEGURO, Rajendra SOTI, Sathiparan NAVARATNARAJ, Muneyoshi NUMADA: "DYNAMIC TESTING OF MASONRY HOUSES RETROFITTED BY BAMBOO BAND MESHES", Journal of Japan Society of Civil Engineers, Ser. A1 (Structural Engineering & Earthquake Engineering (SE/EE), Vol. 68, No.No. 4, pp.760-765., 2012 年. 【査読有】

大原 美保, 近藤 伸也, 沼田 宗純, 目黒 公郎:「東日本大震災後における関連学会の活動状況の俯瞰」, 土木学会論文集 A1(構造・地震工学), Vol. 68, No.No. 4, pp.995-1005, 2012 年. 【査読有】

井原 毅・藤生慎・沼田宗純・大原美保・目黒公郎:「東北地方太平洋沖地震における三陸地方の高地移転地域の調査報告」, 土木学会論文集 A1(構造・地震工学), Vol. 68, No.No. 4, pp.1239-1249, 2012 年. 【査読有】

藤生 慎, 沼田 宗純, 大原 美保, 目黒 公郎:「効率的な建物被害認定のための被害写真管理手法の開発-東日本大震災後の宮城県仙台市宮城野区での実装に基づく考察-」, 土木学会論文集 A1(構造・地震工学), Vol. 68, No. No. 4, pp.1006-1014, 2012 年. 【査読有】

目黒公郎:「大震災を契機に国土づくりを考える」, 学術の動向, pp.36-40, 2012 年.

Muneyoshi NUMADA, Yasunori HADA, Miho OHARA, and Kimiro MEGURO: , : 「DEVELOPMENT OF IT TRIAGE SYSTEM (TRACY) TO SHARE REGIONAL DISASTER MEDICAL INFORMATION」, Journal of Civil Engineering and Architecture, ISSN 1934-7359, USA, Volume 6, pp. 985-996, Vol.ume 6, , No.No. 8 (Serial No. 57), pp. 985-996, 2012 年. 【査読有】

Muneyoshi NUMADA, Kimiro MEGURO: "Concentration of TV news coverage to the specific municipalities – Case study on the 2011 Tohoku Earthquake ", Civil Engineering and Building Materials & Francis Group, London, pp.15–20, 2012 年.

Saleem Muhammad Umair, Muneyoshi NUMADA and Kimiro MEGURO: "Numerical Simulation of In Plane Behavior of Fiber Reinforced Polymer and Polypropylene Composite Retrofitted Masonry Wall Using 3-D Applied Element Method", Civil Engineering and Building Materials, Taylor & Francis Group, London, pp.817–822, 2012 年.

目黒公郎・沼田宗純:「効果的な災害対応に講演する報道モデルの構築に向けて(2)」, CIDIR ニュースレター, No. 第 16 号, pp.p3, 2012 年.

目黒公郎:「効果的な地域防災計画・アクションプランの作り方」, CIDIR ニュースレター, No.第 17 号, pp.p3, 2012 年. 【査読有】

目黒公郎:「震災記録デジタルアーカイブスの重要性とその要件」, CIDIR ニュースレター, No.第 19 号, pp.p2, 2012 年.

目黒公郎 沼田宗純:「東日本大震災後のマスコミ報道の分析」, CIDIR Annual Report 2012, 2012 年.

目黒公郎・大原美保:「東日本大震災後の学会などの活動調査」, CIDIR Annual Report 2012, 2012 年.

国際会議等

Meguro, K., Kawasaki, A., Henry, M.: " An analysis of the information dissemination channels among foreigners after the 2011 Tohoku Earthquake considering language ability. ", The Great East Japan Earthquake Succession Workshop 2012, 2012. 【査読有】

Muneyoshi NUMADA, Yasunori HADA, Miho OHARA, Kimiro MEGURO: " PROPOSAL OF TRIAGE SYSTEM "TRACY" FOR SHARING DISASTER MEDICAL INFORMATION DURING LARGE-SCALE DISASTERS," , The Great East Japan Earthquake Workshop Series 2012, 2012. 【査読有】

Tomoko MATSUSHITA, Muneyoshi NUMADA, Kimiro MEGURO: "Positive Efforts in Providing Post-Disaster Housing after the 2011 Great East Japan (Tohoku) Earthquake and Remaining Issues for Future Disasters," , The Great East Japan Earthquake Workshop Series 2012, 2012. 【査読有】

Muneyoshi NUMADA, Kimiro MEGURO: " Analysis of the concentration of TV news coverage to the specific municipalities on the 2011 off the Pacific coast of Tohoku Earthquake ", 15th World Conference on Earthquake Engineering (15th WCEE), 2012. 【査読有】

Shinya Kondo and Kimiro MEGURO: "Development of a Web-based Trend Analysis System of Earthquake Disaster Researches Presented at the Past World Conferences on Earthquake Engineering", The 15th World Conference on Earthquake Engineering (15th WCEE), 2012. 【査読有】

Kawasaki, A., Henry, M., Meguro, K.: "Comparing the disaster information gathering behavior and post-disaster actions of Japanese and foreigners in the Kanto area after the 2011 Tohoku Earthquake. ", 15th World Conference of Earthquake Engineering (15th WCEE), 2012. 【査読有】

Muneyoshi NUMADA, Kazuo KONAGAI: "Numerical study of relationship between landslide geometry and run-out distance of landslide mass", 5th World Conference on Earthquake Engineering (15th WCEE), 2012. 【査読有】

Muneyoshi NUMADA, Yasunori HADA, Miho OHARA, Kimiro MEGURO: "Development and Application of IT Triage System (TRACY) for Sharing Disaster Medical Information During Large-Scale Disasters", 15th World Conference on Earthquake Engineering (15th WCEE), 2012. 【査読有】

Saleem Muhammad Umair, Muneyoshi Numada, Kimiro Meguro: "IN PLANE BEHAVIOR OF POLYPROPYLENE AND FRP COMPOSITE RETROFITTED BRICK MASONRY WALLS UNDER DIAGONAL COMPRESSION TEST", 15th World Conference on Earthquake Engineering (15th WCEE), 2012. 【査読有】

Kimiro MEGURO, Shunichi KOSHIMURA, Muneyoshi NUMADA: "New Tsunami Disaster Mitigation System considering Local Conditions of Indian Ocean Rim Regions", 15th World Conference on Earthquake Engineering (15th WCEE), 2012. 【査読有】

Kimiro Meguro, Sathiparan Navaratnaraj, Kotaro Sakurai, Muneyoshi Numada: "Shaking Table Tests on 1/4 Scaled Shapeless Stone Masonry Houses with and without Retrofit by Polypropylene Band Meshes", 15th World Conference on Earthquake Engineering (15th WCEE), 2012. 【査読有】

Kimiro MEGURO, Naoki SORIMACHI, Muneyoshi NUMADA: "Development of Promotion Systems for PP-Band Retrofitting of Non-Engineered Masonry Houses", 15th World Conference on Earthquake Engineering (15th WCEE), 2012. 【査読有】

Kimiro Meguro, Sathiparan Navaratnaraj, Kotaro Sakurai, Muneyoshi Numada: "Dynamic Behavior of Masonry Houses Retrofitted by Bamboo Band Meshes", 5th World Conference on Earthquake Engineering (15th WCEE), 2012. 【査読有】

Kimiro Meguro, Sathiparan Navaratnaraj, Kotaro Sakurai, Muneyoshi Numada: "Table Test of Two-Story Masonry House Model Retrofitted by PP-band Mesh", 15th World Conference on Earthquake Engineering (15th WCEE), 2012. 【査読有】

Muneyoshi NUMADA, Kimiro MEGURO: "RUNNING SPECTRUM ANALYSIS OF TEXT DATA FOR THE ERA OF SPREADING HUGE DISASTER INFORMATION", Proceedings of the First International Symposium on Earthquake Engineering, Japan Association for Earthquake Engineering, pp.159-168, 2012. 【査読有】

Tomoko MATSUSHITA, Muneyoshi NUMADA and Kimiro MEGURO: "STUDY ON POST-DISASTER HOUSING: ANALYSIS OF LOCAL BUILDER'S PARTICIPATION", Proceedings of the First International Symposium on Earthquake Engineering, Japan Association for Earthquake Engineering, pp.291-294, 2012. 【査読有】

Saleem M. UMAIR, Muneyoshi NUMADA and Kimiro MEGURO: "MODIFICATION OF 3D-APPLIED ELEMENT METHOD FOR NUMERICAL SIMULATION OF OUT OF PLANE BEHAVIOR OF POLYPROPYLENE AND FIBER REINFORCED POLYMER COMPOSITE RETROFITTED MASONRY WALL SYSTEMS", Proceedings of the First International Symposium on Earthquake Engineering, Japan Association for Earthquake Engineering, pp.507-516, 2012. 【査読有】

Muneyoshi NUMADA and Kimiro MEGURO: "News Coverage Concentration on Specific Municipalities: Analysis of TV Report Contents at 2011 Tohoku Earthquake", the 11th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, 2012. 【査読有】

Saleem Muhammad Umair, Muneyoshi Numada and Kimiro Meguro: "Development of Advanced Composite Material for Seismic Safety of Non-retrofitted Masonry Housing Schemes in Urban and Rural Areas of Developing Countries", the 11th International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, 2012. 【査読有】

Henry, M., Kawasaki, A., Meguro, K.: “. Disaster information collection by Thai and foreigners during the 2011 Thai flood”, the Eleventh International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, 2012. 【査読有】

Muneyoshi NUMADA and Kimiro MEGURO: “. Analysis of Disaster Process by Running Spectrum Approach of Keywords – Case study of Fukushima minpo ”, nternational Workshop of Special Project for Reducing Vulnerability for Urban Mega Earthquake Disasters, 2012. 【査読有】

Muneyoshi NUMADA and Kimiro MEGURO: “. Impact analysis of the Great East Japan Earthquake by running spectrum analysis of the newspaper Authors”, the 10th International Conference on Urban Earthquake Engineering (10th CUEE Conference), pp..203–210, 2012. 【査読有】

Saleem Muhammad Umair, Muneyoshi Numada and Kimiro Meguro: “. Stress Strain Characteristics of Polypropylene band (PP-band) and Fiber Reinforced Polymer (FRP) Composite Retrofitted Masonry Wall Systems”, the 10th International Conference on Urban Earthquake Engineering (10th CUEE Conference), pp..225–230, 2012. 【査読有】

Muneyoshi Numada: “. Case Studies of Decision-making and response strategies of Central and Local governments”, International Conference on “Building Disaster Resilient Societies: Lessons from Japan, , 2012. 【査読有】

その他論文

近藤伸也, 目黒公郎: 「東日本大震災から一年間における関連学会の活動動向分析」, 安全工学シンポジウム 2012 講演予稿集, pp. 376–377, 2012 年.

近藤伸也, 目黒公郎: 「東日本大震災発生後における学会の活動評価の試み」, 日本地震工学会・大会－2012 梗概集, pp.338–339, 2012 年.

沼田宗純・目黒公郎: 「2011 年東日本大震災直後に WEB ニュースが集中的に取り上げた市町村の基礎的分析、地」, 域安全学会梗概集, 2012 年.

沼田宗純・目黒公郎: 「東日本大震災後のゴールデンタイムのテレビ報道の分析、自然災害学会」, 第 31 回自然災害学会学術講演会講演概要集, 2012 年. 【査読有】

Saleem Muhammad Umair, Muneyoshi Numada and Kimiro Meguro: “. Seismic Retrofitting of Unreinforced Masonry Structures using High Performance and Low Cost Composite Material”, 第 31 回自然災害学会学術講演会、講演概要集, 2012 年.

沼田宗純・目黒公郎: 「: 災害報道の時系列的変化を把握するためのランニングスペクトル解析手法の開発」, 日本災害情報学会 第 14 回研究発表大会, 2012 年.

沼田宗純・原綾香・目黒 公郎: 「被害想定と防災基本計画を全体フレームワークに用いた東日本大震災のマクロ的把握～NHK 総合を事例として～」, 日本災害情報学会 第 14 回研究発表大会, 2012 年.

野田哲司・藤生慎・沼田宗純・目黒公郎: 「東日本大震災における自治体間の人的支援の実態分析」, 第 32 回土木学会地震工学研究発表会, 2012 年.

東郷夏菜子・沼田宗純・目黒公郎: 「災害イメージ向上のためのワークショップの実践とイメージ支援システムの試作」, 第 32 回土木学会地震工学研究発表会, 2012 年.

松下朋子・沼田宗純・目黒公郎:「被災者への住宅供給システムについての考察 ～東日本大震災の事例より～」, 第 32 回土木学会地震工学研究発表会, 2012 年.

Saleem Muhammad Umair, Muneyoshi Numada and Kimiro Meguro: 「Optimum Quantity of Fiber Reinforced Polymers for Cost Effective Seismic Retrofitting of Masonry Structures」, 第 32 回土木学会地震工学研究発表会, 2012 年.

目黒 公郎:「持続可能な都市システムの構築を目指した新生 ICUS の1年間」, 生産研究, Vol. 64 (2012)、No. 4、pp. 427-428, 2012 年.

藤生 慎, 沼田 宗純, 大原 美保, 目黒 公郎:「東日本大震災における自治体の建物被害認定調査の実施状況に関する考察」, 生産研究, Vol. 64 (2012), No. 4, pp. 433-437, 2012 年.

近藤 伸也, 目黒 公郎:「東日本大震災における関連学会の活動成果の評価」, 生産研究, Vol. 64 (2012) 、No. 4, pp. 439-443, 2012 年.

澤田 義人, 遠藤 貴宏, 沼田 宗純, 目黒 公郎, 沢田 治雄:「2011 年山陰豪雪に関連する Twitter メッセージ解析法の開発」, 生産研究, Vol. 64 (2012), No. 4, pp.467-473, 2012 年.

澤田 義人, 遠藤 貴宏, 沼田 宗純, 目黒 公郎, 沢田 治雄:「災害に関連したテキストデータの可視化手法の開発」, 生産研究, 2012 年.

川崎 昭如, ヘンリー マイケル, 目黒 公郎:「東日本大震災後の外国人の災害情報収集過程 その1:日本人と外国人の情報収集比較分析」, 生産研究, Vol. 64 (2012), No. 4, pp. 483-490, 2012 年.

川崎 昭如, ヘンリー マイケル, 目黒 公郎:「東日本大震災後の外国人の災害情報収集過程 その2:退避行動の違いによる分析」, 生産研究, Vol. 64 (2012), No. 4, pp. 491-495, 2012 年.

Michael Henry, Akiyuki Kawasaki, Kimiro Meguro: "Foreigners", 生産研究, Vol. 64 (2012) No. 4, pp.497-503, 2012 年.

石川 哲也, 近藤 伸也, 川崎 昭如, 大原 美保, 目黒 公郎:「災害時における Twitter 利用の特徴と課題の整理」, 生産研究, Vol. 64 (2012), No. 4, pp. 545-552, 2012 年.

牧之段 浩平, 藤生 慎, 大原 美保, 目黒 公郎:「首都圏大規模水害時の江東デルタ地帯における適切な避難計画の検討」, 生産研究, Vol. 64 (2012), No. 4, pp. 557-563, 2012 年.

目黒 公郎:「将来の巨大地震災害に備えてー市民が,そして行政がすべきことー」, 生産研究, Vol. 64 (2012), No. 5, pp. 697-710, 2012 年.

12. 山本 了平, 大原 美保, 目黒 公郎:「東日本大震災における企業の緊急地震速報の利用状況に関する調査報告」, 生産研究, 2012 年.

13. 山本 了平, 大原 美保, 目黒 公郎:「製造業における緊急地震速報の活用効果に関する一考察」, 生産研究, 2012 年.

14. 大原 美保, 目黒 公郎, 田中 淳:「全国で発表された緊急地震速報(警報)の地域傾向に関する分析」, 生産研究, 2012 年.

沼田 宗純, 目黒 公郎:「渋谷区立松濤中学校における災害イメージング力の向上ワークショップ」, 生産研究, 2012 年.

16. 沼田 宗純, 佐藤 唯行, 目黒 公郎:「防災ビジネスの創造と育成のための Disaster Profiling に関する研究」, 生産研究, 2012 年.

17. 高野 佑, 沼田 宗純, 目黒 公郎:「応急仮設住宅供給業務へのプロジェクトマネジメント手法適用の検討」, 生産研究, 2012 年.

沼田 宗純, 目黒 公郎:「テキストデータのランニングスペクトル解析による福島民報の分析」, 生産研究, 2012 年.

沼田宗純・目黒公郎:「災害対策フェーズを用いた災害対策状況の可視化手法の提案 ～災害報道を利用したモニタリングを事例として」, 第 32 回土木学会地震工学研究発表会, 2012 年.

講演・口頭発表

目黒 公郎:「確実にやってくる大地震に対して 防災対策のあるべき姿 –ハードとソフト、事前と事後、公と私–」, 市町村アカデミー講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「“我が国の今後の地震防災対策のあるべき姿 ～間違った防災対策に陥らないための災害イメージングの重要性について～”」, 人事院公務員研修, 2012. 【招待講演】

目黒公郎・沼田宗純・高野佑:「: 応急仮設住宅供給業務へのプロジェクトマネジメント手法適用の検討」, 平成 24 年度土木学会年次学術講演会, 2012.

沼田宗純・目黒公郎:「2011 年東日本大震災のテレビ報道を用いた「計画停電・電力不足・節電」に関する課題の時系列分析」, 平成 24 年度土木学会年次学術講演会, 2012.

野田哲司・沼田宗純・目黒公郎:「東日本大震災における被災地支援分析に基づく協定締結支援システムの開発」, 平成 24 年度土木学会年次学術講演会, 2012.

目黒 公郎: “Urban Earthquake Disaster Mitigation Systems”, IISEE Special Lecture , 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「都市防災と耐震補強」, 防災士機構特別講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「将来の巨大地震災害に備えて –市民が、そして行政がすべきこと–」, 生研公開 2012(駒場リサーチキャンパス公開) オープニングセレモニー「復興と防災の工学」, 2012.

目黒 公郎:「東日本大震災から 1 年を経て 総合的な防災力を向上させる情報マネジメントのあり方と課題」, 平成 24 年度 APPLIC 講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「都市防災、災害情報と災害報道」, NTT ラーニング、防災士特別講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「確実にやってくる大地震に対して 間違いだらけの地震防災対策 「学ぶべき本当の教訓と今すべきこと」」, ゆうらく大成, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「都市防災と耐震補強」, 防災士機構特別講演会, 2012.

目黒 公郎:「将来の巨大地震災害に備えて ―市民が、そして行政がすべきこと―」, 大成建設, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「“東日本大震災を踏まえて ～我が国の今後の地震防災対策のあるべき姿～ 特に、間違った防災対策に陥らないための災害イマジネーションの重要性について”」, 千葉県千葉県教育庁防災研修(教員対象), 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「東日本大震災を踏まえた東京の地震防災対策」, 東京都耐震フォーラム基調講演, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「Total Disaster Management Considering Local Availability, Applicability and Acceptability」, JSCE Summer Symposium Keynote Lecture, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「都市防災と耐震補強」, 防災士機構特別講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「“東日本大震災を踏まえ、首都圏の地震防災対策のあり方 ―災害イマジネーションの重要性と海外の防災支援―”」, 大和ライフネクスト協力会社会講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「防災教育と防災まちづくり」, 国土交通省都市局防災講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「東日本大震災から学ぶ本当の教訓と今すべきこと ―間違いだらけの防災対策にならないように―」, NTT-LS学舎新橋危機管理塾 企業を取り巻く脅威に先手を打つ, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「日本学術会議連続シンポジウムと三十学会共同声明の報告」, 日本自然災害学会 特別セッション講演, 2012.

目黒 公郎:「Perspectives for Earthquake Disaster Reduction」, Invited Lecture at The 8th APRU Research Symposium on Multi-hazards around the Pacific Rim held at Tohoku University , 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「Implementation of Earthquake Safer Non-engineered Masonry Houses through Technological and Social Approaches」, 15th WCEE , 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「「災害危機管理」 東日本大震災を踏まえた今後の防災対策と危機管理」, 自治大学校特別講義, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「Impact of Tohoku Earthquake and Message for Future Disaster Prevention」, Invited Speech at 15 UK-Japan Joint Workshop on Disaster Risk Reduction - Learning from the 2011 Great East Japan Earthquake, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「リスクコントロールにより貢献する地震保険制度を目指して」, 財務省地震保険検討委員会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「都市防災と耐震補強」, 防災士機構特別講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「都市防災と耐震補強」, NTT 防災士機構特別講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎:「耐震補強の役割と重要性」, 耐震セミナー, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「“Toward Implementation of Proper Disaster Countermeasures for Minimalizing Negative Impact due to Future Large Disasters: Perspectives for Disaster Management and Concrete Procedure”」, Interntional Workshop of Special Project for Reducing Vulnerability for Urban Mega Earthquake Disasters, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「都市の総合的防災力の向上」, 東京都高度人材研修講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「都市の総合的防災力の向上」, 第 14 回 都市防災推進セミナー特別講演, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「災害に強いまちづくり、住民と行政が一体となって進めるまちづくり」, 東京都市町村研修, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「「巨大地震発生とわが国の防災対策」－被害想定を真正面から捉えたりスクコントロールを考察する－」, 公益財団法人損害保険事業総合研究所特別講演, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「地震のしくみと被害」, 防災士機構特別講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「“Toward Implementation of Proper Disaster Countermeasures for Minimalizing Negative Impact due to Future Large Disasters: Perspectives for Disaster Management and Concrete Procedure”」, Key Note Speech invited by CODE 2012 – 2nd International Conference on COmputational Design in Engineering, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「災害に強いまちづくり、住民と行政が一体となって進めるまちづくり」, 東京湾岸集合住宅ぼうさいネットワーク第 6 回ぼうさいフォーラム特別講演「東京大震災に備えるために」, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「減災社会を築く地域防災計画のあり方」, 北海道開発局地域防災計画セミナー基調講演, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「減災社会を築く地域防災計画のあり方」, 北海道開発局防災講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「災害情報と耐震補強」, NTT 防災士機構特別講演会, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「災害情報のマネジメントのあり方と災害報道について」, 「東日本大震災に関するアーカイブシンポジウム」, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「防災の知識を行動へ ～これまでの震災と今後の想定を踏まえて皆さんにお伝えしたいこと～」, 東京消防庁「防災シンポジウム2012」基調講演, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「中国・四国地方が直面する地震被害とその対策について」, 第 56 回中国四国合同産業衛生学会 基調講演, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「防災を考える－首都直下に対し、組織機能を維持する前提となる個人はどう備えるか」, 人事院第22回行政研修, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「我々のいのちを守るために必要な、真実の防災」, i-tec24防災コミュニティフォーラム基調講演, 2012. 【招待講演】

目黒 公郎: 「Role of Private sector on promoting safer building construction: Experience from Japan」, Invited Speech at the seminar jointly organized by the National Society for Earthquake Technology– Nepal (NSET), International Center for Urban Safety Engineering (ICUS) and the Federation of Nepal Chamber of Commerce and Industries (FNCCI), 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「Total Earthquake Risk Management in Developing Countries」, Special Lecture at Nepal Association of Engineers, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「Use of appropriate technology and its promotion by social approach」, Special Lecture at Japanese Ambassador's House, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「今後の防災対策を考える上での重要ポイントと効果的な防災計画やアクションプランの作成と実施法について」, 比較防災ワークショップ, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「災害に強いまちづくり、住民と行政が一体となって進めるまちづくり」, 東京都市町村職員研修, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「三連動地震に対する社会技術的防災」, 社会技術シンポジウム第9回社会技術研究シンポジウムプログラム「南海トラフの巨大地震への防災対策と社会技術」, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「防災にとって大事なこと～自助・共助・公助」, 朝日新聞社 防災セミナー基調講演, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「自然災害と都市防災 ～首都と直下地震～」, ひょうご防災リーダー講座, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「最新の防災対策について」, 丹波地域ひょうご防災リーダー講座, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「都市防災と耐震補強」, 防災士機構特別講演会, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「地震大国の地震頻発期に生きる皆様へ ～防災対策のあるべき姿と災害イメージングの重要性～」, 多摩高進50周年記念講演会, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「確実にやってくる大地震に対して 間違いだらけの地震防災対策 一学すべき本当の教訓と今すべきこと一」, 神奈川歯科大学千葉同窓会防災講演会, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「地震のしくみと被害と都市防災」, 防災士機構特別講演会, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「医療における減災対策」, 平成23年度 医療の高度化に対応した医療人養成推進事業(国公立大学病院栄養士研修)プログラム講演, 2013. 【招待講演】

目黒 公郎: 「Total Disaster Management for Implementation of Disaster Safer Built Environment」, Special Lecture at Yangon Technological University, 2013. 【招待講演】

新聞・報道

一般: 「地域防災計画 「震災その時なにができるか」」, 東京ケーブルネットワーク, 2012.

一般: 「「想定外」でお手上げにならに都市を」, 日経アーキテクチュア, 2012.

一般: 「国と自治体で役割整理を」, 日本経済新聞, 2012.

一般: 「本当の防災対策「災害イメージング」力を高め適切な対策を進めることが大事」, 週刊東洋経済, 2012.

一般: 「うるおい生活講座」, TBSラジオ, 2012.

一般:「うるおい生活講座」, TBSラジオ, 2013.

一般:「東日本大震災2年特集 報道減少 風化の懸念」, 河北新報, 2013.

山口 いつ子・教授

研究テーマ(主たるもの)

ユビキタス時代の情報法における基底的価値とエンフォースメントに関する比較制度研究

これまで進めてきた表現の自由、メディア法、サイバー法及び知的財産法をめぐる憲法学的考察を基盤として、今後のネット上のコミュニケーション特性を方向付けるであろう「ユビキタス化」による社会変容という文脈の下で、情報の自由、規制及び保護をめぐる法のエンフォースメントに際して諸利益間の調整のあり方が問われている幾つかの問題領域に着目し、主に日米欧の議論を取り上げて比較制度分析の観点から検討を加える作業を通じて、こうした利益調整において考慮されるべき、情報や情報通信技術をめぐる法の基底にある価値原理や、対立する諸利益の間のバランスを図るための論理技術を探求していく。

より具体的には、現在、情報の自由、規制及び保護に関する以下の三つの作業を柱として、本研究を進めている。

第一に、情報の自由の理論的基礎として、表現の自由を憲法で保障することのそもそもの意義や根拠を問いかける原理論に着目し、この自由が複数の価値の組み合わせによって支えられているという価値構造や、自由の限界を根拠付ける論理について、考察を行っている。

第二に、こうした従来の法における表現活動ないし情報流通の「自由」と「規制」のバランスが、今日、新たな情報通信技術の発達の下で問い直されている状況を、マス・メディアの報道・取材の自由、通信と放送の融合化、プライバシー・個人情報保護、著作権などの個別の争点を取り上げながら、検討している。

第三に、財産としての情報の保護のあり方をめぐって、とりわけ、「知的財産権」と「自由な情報流通」とが衝突する場面に着目し、そこでの両者の調整—つまりは、情報の「保護」と「自由」との調整—における均衡にかかわる課題に取り組んでいる。

研究業績(2012年度)

雑誌論文

山口いつ子:「スマート・サーベイランス環境におけるプライバシー価値の正当化と組み込み」, アメリカ法, No.[2012-1], pp.59-62, 2012年.

山口いつ子:「ネット時代の名誉毀損・プライバシー侵害と「事前抑制」—北方ジャーナル事件判決」, 論究ジュリスト, No.1, pp.50-58, 2012年.

講演・口頭発表

山口いつ子:「司法的事前抑制の合憲性—インターネット時代の表現の自由と名誉・プライバシーとの間の調整」, マスコミ倫理懇談会全国協議会・第10期第11回「メディアと法」研究会, 2012.【招待講演】

山口いつ子:「日英米における「事前抑制」の法理に関する判例分析—名誉毀損・プライバシー侵害をめぐる差止めの事案を中心として」, 総務省情報通信政策研究所・第8回情報通信法学研究会, 2012.

Itsuko Yamaguchi: "How to Protect Your Privacy against "Smart" Surveillance in Japan", Lecture co-sponsored by the Japan Foundation and the Center for International & Comparative Law (CICL) of Duke University School of Law, 2013. 【招待講演】

新聞・報道

山口いつ子: 「「メディアと法」研究会 ネット時代の事前差し止めで意見交換」, 「マスコミ倫理」633号第1面(マスコミ倫理懇談会全国協議会、2012年7月25日), 2012.

山口いつ子: 「「曖昧なままでは発展しない」 東大大学院山口准教授 事前抑制の法理を解説 マス倫研究会」, 「新聞協会報」4009号第3面(日本新聞協会、2012年7月17日), 2012.

山本 博文・教授

研究テーマ(主たるもの)

日本近世史

織豊政権から江戸時代にかけての政治史を中心に研究している。特に諸藩に残された史料を悉皆的に調査・分析することによって、近世国家の理念、幕藩関係史、諸藩の政治史・社会史などを究明することを目指している。

歴史社会学

江戸時代の武士の行動を、一次史料をもとに研究し、特異な倫理観を持つ武士が、いかなる社会構造の中から生まれてきたのかを明らかにしている。

研究業績(2012年度)

吉見 俊哉・教授

研究テーマ(主たるもの)

20世紀日本とアメリカニズム

1920年代から敗戦を経て現在に至る日本の文化的アメリカニゼーションを焦点に、占領期における大衆意識の屈折、米軍基地の文化的影響、アメリカからの視線を媒介にした戦後のアイデンティティの再構築、消費社会的なりアリティを演じる自己の他者化といった歴史的展開を構造的に把握してきている。これまで国際関係や政治経済的な面からの日米関係の分析は多数なされてきたのに比べ、大衆文化やメディア文化、都市文化の面から戦後日本におけるアメリカニズムを歴史的に掘り下げていく研究をリードしてきた。とりわけ本研究は、日本と韓国、台湾、フィリピン、東南アジア諸国との連続性に視点を広げ、これらの東アジア諸国に点在したアメリカ軍基地と同地域に大衆文化の関

係に関心を向けている。帝国主義期から冷戦期への流れのなかで、ポスト植民地主義や文化研究、新しい文化史の視座を十分に消化しながらこのテーマに本格的に取り組むものである。

MALUI連携とデジタル知識基盤

デジタル技術は活字と視聴覚を架橋し、これまで多様な方式で蓄積されてきた文化的記憶を統合的に扱う。こうした技術的可能性にいち早く着目し、新たな記憶のプラットフォームを構築してきたのは、グーグルをはじめとするグローバル企業である。しかし、20世紀の大衆消費社会における文化資源の生産・流通・消費のサイクルを支えたマスメディア産業に代わり、やがて地球規模で広がる新たな知識循環型社会における文化資源の保存と活用、価値の創造のサイクルを支えていくのは、これまで公共的な文化施設として整備されてきた図書館、博物館・美術館、文書館・資料館、フィルムセンター、番組アーカイブなどの機関と大学、この新たな体制に適応した文化産業の横断的な連携、すなわちMALUI連携である。この場合、Mは Museum、Aは Archives、Lは Library、Uは University、Iは Industry を示す。これらの公共的な文化・知識機関の連携により、いかにした新たなデジタル知識基盤を構築していくことができるかについて探究を進めている。

20世紀東アジア文化史を書く

東アジアの若手研究者が共同で、20世紀全体を通じた東アジア文化史を書くことを目指している。これまで、Inter-Asia Cultural Studies や、Cultural Typhoon のプロジェクトで展開してきたネットワークと蓄積を基礎に、20世紀の東アジアが経験した様々な歴史をそれぞれの国民国家の枠を越えた仕方で記述したい。特に、第一次世界大戦と西洋の後退の東アジアにおける文化的インパクト、1920～30年代の東アジアの諸都市におけるモダン文化の浮上、日本の軍事侵略と終戦、植民地独立戦争、冷戦と朝鮮戦争、ベトナム戦争、様々な「戦後」と「成長」の時代の到来、トランスナショナルなメディア文化と、東アジアが経験した20世紀を共通の歴史として、最初から国民国家を越えた視座と枠組みのなかで集团的に記述していく。

研究業績(2012年度)

著書

丹羽美之、吉見俊哉他:「岩波映画の1億フレーム——記録映画アーカイブ1」, 東京大学出版会, 2012年.

吉見俊哉:「「声」の資本主義(文庫版)」, 河出書房新社, 2012年.

土屋由香、吉見俊哉他:「占領する眼 占領する声——CIE/USIS 映画とVOA ラジオ」, 東京大学出版会, 2012年.

吉見俊哉:「夢の原子力——Atoms for Dream」, 筑摩書房, 2012年.

高野明彦、吉見俊哉、三浦伸也:「311情報学——メディアは何をどう伝えたか」, 岩波書店, 2012年.

吉見俊哉:「アメリカの越え方——和子・俊輔・良行の抵抗と越境」, 弘文堂, 2012年.

分担著書

吉見俊哉:「現代社会学事典」, 大澤真幸、吉見俊哉、鷲田清一 編, 弘文堂, 2012年.

暦本 純一・教授

研究テーマ(主たるもの)

Human Computer Interaction

Ubiquitous Computing

Reality Sensing

研究業績(2012 年度)

著書

黒須 正明, 暦本 純一: 「コンピュータと人間の接点」, 放送大学教育振興会, 2012 年.

雑誌論文

石黒祥生, 暦本純一: 「Peripheral Vision Annotation: 拡張現実感環境のための視線計測による周辺視野領域情報提示手法」, 情報処理学会論文誌, Vol.53, No.4, pp.1328 - 1337, 2012 年. 【査読有】

国際会議等

Yu Ukai and Jun Rekimoto: "Swimoid: A Swim Support System using An Underwater Buddy Robot", 4th International Conference on Augmented Human, pp170-177. (AH 2013), 2012. 【査読有】

Yu Ukai and Jun Rekimoto: "Swimoid: Interacting with an Underwater Buddy Robot", International Conference on Human-Robot Interaction (HRI 2013), 2012. 【査読有】

Jun Rekimoto: "Squama: a programmable window and wall for future physical architectures", Proceedings of the 2012 ACM Conference on Ubiquitous Computing (UbiComp' 12), 2012. 【査読有】

Koh Sueda, Henry Been-Lirn Duh, and Jun Rekimoto: "Social life logging: can we describe our own personal experience by using collective intelligence?", APCHI ' 12 Proceedings of the 10th asia pacific conference on Computer human interaction, 2012. 【査読有】

Yoshio Ishiguro and Jun Rekimoto: "GazeCloud: A Thumbnail Extraction Method Using Gaze Log Data for Video Life-Log", 16th International Symposium on Wearable Computing (ISWC), 2012. 【査読有】

Kana Misawa, Yoshio Ishiguro, Jun Rekimoto: "LiveMask: A Telepresence Surrogate System with a Face-Shaped Screen for Supporting Nonverbal Communication", Advanced Visual Interfaces (AVI 2012), 2012. 【査読有】

Jun Rekimoto: "Squama: Modular Visibility Control of Walls and Windows for Programmable Physical Architectures", Advanced Visuale Interfaces (AVI 2012), 2012. 【査読有】

その他論文

樋口 啓太, 暦本 純一: 「Flying Head: 頭部動作との同期による無人航空機の操作メカニズム」, 情報処理学会インタラクシオン, 2012 年. 【査読有】

鵜飼 佑, 暦本 純一: 「Swimoid: 伴泳ロボットを用いた水泳支援システム」, 日本ソフトウェア科学会インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ(WISS), 2012 年. 【査読有】

樋口啓太, 石黒祥生, 暦本純一: 「Flying Eyes: 飛翔型撮影プラットフォームによる自律撮影の提案」, 日本ソフトウェア科学会インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ(WISS), 2012 年. 【査読有】

暦本純一: 「Squama: プログラマブルな建築のための構成要素(最優秀論文賞)」, 日本ソフトウェア科学会インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ(WISS), 2012 年. 【査読有】

講演・口頭発表

暦本純一: 「オーグメンティッド・リアリティからオーグメンティッド・ヒューマンへ: 人間の進化と情報技術」, 国立情報学研究所(NII)オープンハウス基調講演, 2012. 【招待講演】

Jun Rekimoto: 「Augmented Human: Technologies for Augmenting Human Beings」, ACM Ubicomp 2012 Invited Guest Lecture, 2012. 【招待講演】

暦本純一: 「インタラクシオンからインテグレーションへ: 人間・テクノロジーの未来」, AXIS フォーラム, 2012. 【招待講演】

暦本純一: 「Augmented Human」, 情報処理学会ユビキタスコンピューティング研究会招待講演, 2012. 【招待講演】

新聞・報道

一般: 「ライフログ、人生まるごと記録」, テレビ東京 ワールドビジネスサテライト, 2012.

一般: 「五感を超える力 英知、使いこなせるか(1面トップ記事)」, 日本経済新聞, 2012.

一般: 「 “ 景気低迷笑い飛ばせ！ スマイルで開く冷蔵庫」, 東京新聞／中日新聞, 2012.

一般: 「Geladeira japonesa s ・ abre com sorriso; conhe ・ a!」, R7 videos, 2012.

一般: 「Les 50 qui font le Japon de demain」, Zoom Japon, 2012.

一般: 「AR の未来とは！？」, Saai Isara, 2012.

伊東 乾・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

大原 美保・准教授

研究テーマ(主たるもの)

緊急地震速報の効果的な利用法に関する研究

緊急地震速報を効果的に活用するために、地域における海溝型地震・活断層型地震の発生リスクを考慮した速報効果の検証、技術的戦略の提案を行うとともに、実際の速報発表時の住民の対応行動の調査や対応行動力向上のための環境整備を行っている。

人口減少を考慮した減災に向けた土地利用および防災施設配置に関する研究

わが国は長期の人口減少過程にある。将来の災害による被害を軽減するためには、災害リスクの少ない土地にあらかじめ人口・産業を誘導し、被害発生を未然に防ぐことが効果的である。本研究では、人口減少を考慮した上で、将来的に減災効果を生み出す土地利用方策や避難場所・避難所等の防災施設の配置方針について検討している。

組織の危機管理対応力の向上に関する研究

首都直下地震などの大規模災害時に、組織の事業・サービスを途絶することなく継続させるためには、組織の危機管理対応力を日頃から向上させておく必要がある。大原研究室では、大学・病院などの各種組織を対象とした、危機管理マニュアルのあり方や危機管理対応力を向上させるための方法論を研究している。

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

Yasunori Hada, Shinya Kondo, Kimiro Meguro, Miho Ohara, Shinsaku Zama, Makoto Endo, Keiji Kobayashi, Takeyasu Suzuki, Itsuki Noda, Hiroki Shimora, Ikuo Takeuchi, Satoshi Kobayashi, and Jumpei Arakawa: "Implementation of Demonstration of Information Linkage Supposing the Tokyo Metropolitan Near Field Earthquake Disaster", Journal of Disaster Research, Vol.7, No.No.2, pp. 160-172, 2012 年。【査読有】

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎: 「大規模地震災害時における遠隔建物被害認定システムの開発と評価」, 日本地震工学会論文集, Vol.12, No.7, pp.19-37, 2012 年。【査読有】

大原 美保, 近藤 伸也, 沼田 宗純, 目黒 公郎: 「日本大震災後における関連学会の活動状況の俯瞰」, 土木学会論文集 A1(構造・地震工学), Vol.68, No.4, pp.995-1005, 2012 年。【査読有】

井原 毅・藤生慎・沼田宗純・大原美保・目黒公郎: 「東北地方太平洋沖地震における三陸地方の高地移転地域の調査報告」, 土木学会論文集 A1(構造・地震工学), Vol.68, No.4, pp.1239-1249, 2012 年。【査読有】

藤生 慎, 沼田 宗純, 大原 美保, 目黒 公郎: 「効率的な建物被害認定のための被害写真管理手法の開発-東日本大震災後の宮城県仙台市宮城野区での実装に基づく考察-」, 土木学会論文集 A1(構造・地震工学), Vol.68, No.4, pp.1006-1014, 2012 年. 【査読有】

大原美保: 「震災時の駅周辺における帰宅困難者対応の課題 —東京都内の駅周辺地区帰宅困難者対策地域協力会の活動レビューに基づく考察—」, 生産研究, Vol.64, No.6, pp.17-21, 2012 年.

石川哲也・近藤伸也・川崎昭如・大原美保・目黒公郎: 「災害時における Twitter の有力アカウントの利用調査」, 生産研究, Vol.64, No.4, pp.545-552, 2012 年.

山本了平・大原美保・目黒公郎: 「東日本大震災における企業の緊急地震速報の利用状況に関する調査報告」, 生産研究, Vol.164, No.6, pp.3-7, 2012 年.

山本了平・大原美保・目黒公郎: 「製造業における緊急地震速報の活用効果に関する一考察」, 生産研究, Vol.164, No.6, pp.9-12, 2012 年.

大原美保・牧之段浩平・佐原孝紀: 「津波避難場所および津波避難ビルの減災効果に関する一考察 —宮城県南三陸町におけるケーススタディー—」, 生産研究, Vol.64, No.6, pp.17-21, 2012 年.

大原美保・目黒公郎・田中淳: 「全国で発表された緊急地震速報(警報)の地域傾向に関する分析」, 生産研究, Vol.64, No.6, pp.17-21, 2012 年.

牧之段浩平・藤生慎・大原美保・目黒公郎: 「首都圏大規模水害時の江東デルタ地帯における適切な避難計画の検討」, 生産研究, Vol.64, No.4, pp.131-137, 2012 年.

大原美保・川崎昭如・近藤伸也・田中淳: 「2011 年 9 月台風 12 号豪雨災害でのエリアメールによる情報伝達状況の調査—香川県三木町での調査速報—」, 生産研究, Vol.64, No.4, pp.127-130, 2012 年.

大原美保: 「ジェンダーの視点から見た災害応急対策の課題」, 生産研究, Vol.64, No.4, pp.35-39, 2012 年. 【査読有】

Muneyoshi NUMADA, Yasunori HADA, Miho OHARA, and Kimiro MEGURO: 「DEVELOPMENT OF IT TRIAGE SYSTEM (TRACY) TO SHARE REGIONAL DISASTER MEDICAL INFORMATION」, Journal of Civil Engineering and Architecture, Vol.6, No.8, pp.985-996, 2012 年. 【査読有】

大原美保, 地引泰人, 田中淳: 「東日本大震災後における大学の対応に関する調査—首都直下地震への効果的な対策を目指して—」, 地域安全学会論文, Vol.18, pp.523-533, 2012 年. 【査読有】

国際会議等

Muneyoshi NUMADA, Yasunori HADA, Miho OHARA, Kimiro MEGURO: "Development and Application of IT Triage System (TRACY) for Sharing Disaster Medical Information During Large-Scale Disasters", 15th World Conference on Earthquake Engineering (15th WCEE), pp.No.1048, 2012.

Miho OHARA, Kimiro MEGURO and Atsushi TANAKA: "A Study on People", Proceedings of the 15th World Conference on Earthquake Engineering, pp.CD-ROM(7pages), 2012. 【査読有】

Makoto FUJIIU, Miho OHARA and Kimiro MEGURO: "Study on Implementation of Remote Building Damage Assessment System during Large Scale Earthquake Disaster", Proceedings of the Nine International Symposium on New Technologies for Urban Safety of Mega Cities in Asia, pp.CD-ROM(10pages), 2012. 【査読有】

Makoto FUJIIU, Miho OHARA and Kimiro MEGURO: "Development of remote building damage assessment system during large-scale earthquake disaster", Proceedings of the 15th World Conference on Earthquake Engineering, pp.CD-ROM(10pages), 2012. 【査読有】

Muneyoshi NUMADA, Yasunori HADA, Miho OHARA, Kimiro MEGURO: "PROPOSAL OF TRIAGE SYSTEM "TRACY" FOR SHARING DISASTER MEDICAL INFORMATION DURING LARGE-SCALE DISASTERS", Institute of Social Safety Science, Japan, The Great East Japan Earthquake Workshop Series 2012 in Iwaki, The 1st Asian Conference on Urban Disaster Reducton, pp.No.2-1, 2012. 【査読有】

講演・口頭発表

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎: 「東日本大震災における自治体の建物被害認定調査の実施状況に関する分析」, 第30回地域安全学会研究発表会発表概要集, 2012.

藤生慎, 大原美保, 目黒公郎: 「大規模地震災害向け遠隔建物被害認定システムの実装に向けた検討-建物被害認定経験者に対する実証実験を通じて-」, 第31回日本自然災害学会講演集, 2012.

大原美保, 山本了平, 目黒公郎: 「製造業における緊急地震速報の効果的活用方法に関する一考察」, 安全工学シンポジウム2012講演予稿集, 2012.

大原美保・目黒公郎・田中淳: 「全国における緊急地震速報(警報)の発表傾向の分析」, 第32回地震工学研究発表会講演論文集, 2012.

大原美保, 牧野段浩平: 「首都圏大規模水害時の避難状況のイメージに向けた3D水害可視化システムの開発」, 日本災害情報学会第14回研究発表大会予稿集, 2012.

大原美保, 牧野段浩平, 佐原孝紀: 「宮城県南三陸町における津波避難場所・ビルの空間配置に関する一考察」, 日本地震工学会大会2012梗概集, 2012.

岡本 剛和・准教授

研究テーマ(主たるもの)

情報通信政策論

情報通信に関する政策論とその客観的裏付けのための理論・手法を研究するもの。経済学からのアプローチ(実証分析を含む。)を第一義とするが、法制度論にも目配りする。研究対象国は我が国を含むOECD加盟諸国が主たるものとなるが、論点によっては開発途上国をも視野に入れ検討を行う。

研究業績(2012年度)

雑誌論文

岡本 剛和:「情報通信政策論 -二つの転換点と今後の論点-」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究, Vol.No. 84, pp.99-103, 2013 年.

講演・口頭発表

岡本 剛和: "Latest Reform of Broadcast Acts -Convergence of telecom and broadcasting?-", 2012 Seoul National University-The University of Tokyo Symposium , 2012.

JASON G. KARLIN・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

分担著書

Jason G. Karlin: 「Idols and Celebrity in Japanese Media Culture」, Patrick W. Galbraith and Jason G. Karlin 編, Palgrave Macmillan, 2012 年.

講演・口頭発表

Jason G. Karlin: "Engendering the Self on Screen and off Screen: Women's Consumption and the Media in Japan", Asian Studies Conference Japan, 2012.

上條 俊介・准教授

研究テーマ(主たるもの)

車載画像センサーの開発

交差点等の一般道において、歩行者や自転車を車の事故から守るための安全運転支援システムの開発が世界的に行われている。当研究室では、独自の画像処理技術を活かし、歩行者や自転車を車載カメラを用いて認識する技術を開発している。

路車協調型安全運転支援技術

路側センサーから交通状況を的確に把握し、危険状況をドライバーに知らせることで事故を回避するシステムの開発を行っている。本研究では、情報提供を受けたドライバーの受容性を考慮したセンサ開発を行うことが重要である。

時空間 Markov Random Field Model による時空間画像の領域分割

コンピュータ・ビジョンでは画像上で移動物体同士が重なった場合(オクルージョン)において、個々の物体を分離して追跡することが困難であった。そこで、本研究では、この問題を時空間画像の領域分割と等価であることを明確にし、時空間 Markov Random Field Model を定義した。

これにより、オクルージョンが生じている場合でも正確に移動物体を画像上で分離することが可能となった。さらに、本手法は、低画角画像のようにオクルージョンが激しい場合でも効果的であることが証明された。

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

Takayasu kawasaki, Shunsuke Kamijo: "Inhibition of Aggregation of Amyloid β 42 by Arginine-Containing Small Compounds", Biosci, Biotechnol, Biochem, Vol.76, No.(4), pp.762-766, 2012 年. 【査読有】

Shoma Hisaka and Shunsuke Kamijo: "Onboard Sensing System for Intersection Safety Use of Received Signal Strength Indication", Transportation Research Record: Journal of the Transportation Research Board, Vol.2324, pp.110-118, 2012 年. 【査読有】

Shunsuke Kamijo, Toshimitsu Takahashi, Takeshi Naito, Yuji Yoshimitsu: "Framework Study on Behavior Understandings Based on Posture and Location State Transition for Railway Station Security", International Journal of Intelligent Transportation Systems Research, Vol.10, No.3, pp.148-155, 2012 年. 【査読有】

日坂翔馬 上條俊介: 「車両による遮蔽と路面反射を考慮した RSSI による接近移動物体検知」, 自動車技術会論文集, Vol.43, No.5, pp.1117-1122, 2012 年. 【査読有】

金 亨官, 高橋 俊允, 上條 俊介: 「異種 HOG カスケードと差分領域特徴を用いた歩行者クラス分類」, 自動車技術会論文集, Vol.44, No.2, pp.573-578, 2013 年. 【査読有】

国際会議等

Shoma Hisaka and Shunsuke Kamijo: "Positioning of Road Users by RSSI with Road Surface Reflection Model", International Conference on ITSC 2012, 2012. 【査読有】

Toshimitsu Takahashi, HyungKwan Kim and Shunsuke Kamijo: "Urban Road User Classification Framework using Local Feature Descriptors and HMM", International Conference on ITSC2012, 2012. 【査読有】

Daisuke USHIROGOHCHI, Yoshihiro SAKAMOTO, Koichiro KAJITAN, Takeshi NAITO, Shunsuke Kamijo: "Robust Vehicle Detector Using Spatio-Temporal MRF Model", 19th ITS World Congress, 2012. 【査読有】

Shoma Hisaka and Shunsuke Kamijo: "Road User Positioning by RSSI Combinations with Pavement Reflection at Real Intersection", International Conference on Intelligent Transport Systems Telecommunications (ITST), pp.29-34, 2012. 【査読有】

その他論文

高橋俊允, 上條俊介: 「マーケティング映像におけるパラメータ間関係を考慮した人物姿勢認識およびトラッキング」, 電子情報通信学会技術研究報告, PRMU2012-196, Vol.112, No.495, pp93-98, 2012 年.

日坂翔馬, 三浦俊祐, 上條俊介: 「実交差点における RSSI を用いた接近移動物体検知」, 電子情報通信学会技術研究報告, ITS 2012-62, Vol.112 No.470, pp55-58, 2012 年.

金亨官, 高橋俊允, 上條俊介: 「異種HOGカスケードと差分領域特徴を用いた歩行者クラス分類」, 自動車技術会 2012 春季大会, 2012 年. 【査読有】

日坂翔馬, 上條俊介: 「車両による遮蔽と路面反射を考慮したRSSIによる接近移動物体検知」, 自動車技術会 2012 春季大会, 2012 年. 【査読有】

高橋俊允, 金亨官, 上條俊介: 「画像局所特徴量と動作認識を用いた歩行者種別認識フレームワーク」, 第 11 回 ITS シンポジウム(ITS Japan), 2012 年. 【査読有】

新見洋正, 上條俊介: 「ネットワーク交通信号における青時間重複を最大化するオフセット制御」, 第 11 回 ITS シンポジウム(ITS Japan), 2012 年. 【査読有】

松沼毅, 田中 淳, 後藤秀典, 上條俊介: 「既設カメラの画像センサ化と実フィールドへの展開」, 第 11 回 ITS シンポジウム 2012, 2012 年. 【査読有】

上條俊介: 「駅構内における姿勢・位置情報に基づいた行動把握フレームワーク」, 画像ラボ, Vol.24 No.3, pp51-59, 2013 年.

受賞

Shoma Hisaka and Shunsuke Kamijo: Best Paper Award「Road User Positioning by RSSI Combinations with Pavement Reflection at Real Intersection」, International Conference on Intelligent Transport Systems Telecommunications (ITST), 2012 年.

北田 暁大・准教授

研究テーマ(主たるもの)

日本メディア史の実証的研究

広告、映画、新聞など近代のコミュニケーション文化において重要な役割を果たしてきたメディアを、歴史社会学的な手法で分析している。その成果を公刊したのものとして、『広告の誕生』(2000 年、岩波書店)、『<意味>への抗い』(2004 年、せりか書房)などがある。

若者のコミュニケーション研究

現代若者たちのコミュニケーションの変容を、「保守化」傾向や「バックラッシュ」などの現象とあわせ、メディアの果たす役割に着目しつつ分析している。その成果を公刊したのものとして、『広告都市・東京』(2002年、廣済堂出版)、『嗟う日本の「ナショナリズム」』(2005年、NHK出版)などがある。

理論社会学、コミュニケーション理論についての基礎的研究

「行為の同定問題」、「行為(者)責任の生成メカニズム」など社会学基礎論にかかわるテーマについて、政治哲学、倫理的行為論なども射程に入れつつ、考察を加えている。その成果を公刊したのものとして『責任と正義』(2003年勁草書房)がある。

研究業績(2012年度)

清水 晶子・准教授

研究テーマ(主たるもの)

クィア／ディサビリティ

クィア・スタディーズとディサビリティ・スタディーズとを交錯させつつ、とりわけ前者における越境可能性／変容可能性への理論的傾きと柔軟な可塑性へのネオリベラルな要請との親和性への批判的な検討を通じて、身体とアイデンティティとの政治を再考する。

ポスト 3.11 と再生産の政治

現代日本におけるジェンダーとセクシュアリティの政治をとりわけ国家による再生産の要請という視点から再考する。3.11 以後の「国家の復興」言説、同性間の婚姻と戸籍制度、グローバルなピンク・ウォッシュの政治の日本国内における援用などを、国家によるセクシュアリティ統制と再生産要請という観点から考える。

研究業績(2012年度)

分担著書

清水晶子(共著):「愛の技法—クィア・リーディングとは何か」, 中央大学人文科学研究所 編, 中央大学出版, 2013年.

清水晶子:「ジェンダーと〈自由〉—理論、リベラリズム、クィア」, 三浦玲一 編, 彩流社, 2013年.

講演・口頭発表

SHIMIZU, Akiko: “‘Queer as Critique in Post-3.11 Japan’ ”, Crossroads2012, 2012.

清水晶子: 「〈日本〉を読む⇔クエア理論を読む—現代日本におけるクエア・ペダゴジー」, 日本語教育国際研究大会, 2012.

Jordan Alexander Sand・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012年度)

中尾 彰宏・准教授

研究テーマ(主たるもの)

ネットワーク仮想化・オーバーレイネットワーク基盤構築技術の研究

オーバーレイネットワークの研究分野では、現在そして新しい将来のインターネットを支える様々なネットワークサービスやネットワークの仕組みを、インターネット内に埋め込まれた実験基盤(オーバーレイネットワークテストベッド)を用いることで実証実験し、性能評価や問題発見などを行うことを目的とする。本研究テーマでは、このような実証実験を広域で可能にする実験基盤の構築やノードの高度化技術の研究を目的とする。

ネットワーク仮想化・オーバーレイネットワークを用いた経路制御技術の研究

オーバーレイルーティング(Overlay Routing)と呼ばれる、インターネットの可用性を向上したり様々なデータ通信の特性(QoS)を最適化する技術の研究を進めている。

サステナブル・ネットワーク・サービス基盤技術の研究

インターネット上に実装されたネットワークサービスへの DoS アタックや DDoS アタックなどの脅威に対し、サーバの仮想化とプロセスのマイグレーションを利用してサステナブルなサービスを実現するための基盤技術を研究開発し可用性を向上する研究を進めている。

研究業績(2012年度)

中野 公彦・准教授

研究テーマ(主たるもの)

独立成分分析法(ICA)の車両振動解析への適用

独立成分分析(ICA)は混合された多チャンネルの計測情報から信号源を同定する方法です。主に生物物理学の領域で用いられていますが、故障検知、状態監視、振動源特定などの機械系分野でも有用な方法と考えられています。このICAを自動車や鉄道の状態監視に利用することを提案し、実験や数値計算を通じて、その有効性を検討しています。

筋電位測定による自動車の乗り心地評価

自動車の乗り心地などの評価には、車体の加速度が用いられることもありますが、多くは、テストドライバーなどの官能評価によって調べますが、主観が入ることは否定できません。そこで、乗り心地の新しい評価指標の可能性として、運転中における乗員の筋電位を検討しています。実車試験などを通じて、その有効性を検討しています。

パーソナルモビリティビークル

近年になり、並行二輪車などの電子制御の存在を前提とした新しい小形の個人用の車両が登場してきました。これらをパーソナルモビリティビークルと呼んでおります。歩行者との親和性評価など、これらの車両を実際に都市に取り込むための研究を行っております。

研究業績(2012年度)

雑誌論文

中野公彦, 大橋壘, 岡部洋二, 嶋崎守, 中村弘毅, 渡辺尚子: 「パラレルファクタ分析法を用いた光ファイバセンサ出力の検出」, 日本機械学会論文集(C編), Vol.78, No.789, pp.1410-1419, 2012年。【査読有】

中村弘毅, 中野公彦, 鄭仁成, 大堀真敬: 「ステアリングアドミタンス計測による運転者緊張度の推定」, 自動車技術会論文集, Vol.44, No.2, pp.659-664, 2013年。【査読有】

国際会議等

Honggang Hu, Kimihiko Nakano, Matthew P. Cartmell, Rencheng Zheng and Masanori Ohori: "An experimental study of stochastic resonance in a bistable mechanical system", Proc. of Modern Practice in Stress and Vibration Analysis 2012 (MPSVA2012), 2012。【査読有】

Shu Wakabayashi, Kimihiko Nakano and Hiroo Yamazaki: "Suppression of Longitudinal Vibration of a Freight Car with an Electric Motor on a Wheelset", The International Symposium on Speed-up, Safety and Service Technology of Railway and Maglev Systems, 2012。

Hiroki Nakamura, Kimihiko Nakano, Rui Oohashi, Honggang Hu, Yasuhiro Uchiyama, Shoji Kakihara: "Road profile estimation from car body vibration using independent component analysis", ASME2012 5th Annual Dynamic Systems and Control Conference joint with the JSME 2012 11th Motion and Vibration Conference DSCG2012-MOVIC2012, 2012。【査読有】

Kimihiko Nakano, Daiki Nakamori, Masanori Ohori, Rencheng Zheng, Yoshihiro Suda: "Evaluation of stability of a two-wheeled inverted pendulum vehicle using rider-vehicle modeling", ASME2012 5th Annual Dynamic Systems and Control Conference joint with the JSME 2012 11th Motion and Vibration Conference DSCG2012-MOVIC2012, 2012。【査読有】

Masahiko Aki, Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Shigeyuki Yamabe, Seung-Yong Lee, Yoshihiro Suda, Yoshitada Suzuki, Hiroyuki Ishizaka: "Evaluation of safety of automatic platoon-driving with improved brake system", 19th ITS World Congress, 2012.

Shigeyuki Yamabe, Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Yoshihiro Suda, Takafumi Takada, Sadahiro Kawahara: "Analysis on behaviors of a driver in the system failure in forming automatic platooning of trucks from manual driving", 19th ITS World Congress, 2012.

その他論文

山邊茂之, 鄭仁成, 中野公彦, 須田義大: 「トラックドライビングシミュレータを活用した隊列走行時のドライバ行動に関する研究」, 生産研究, 2013 年.

安藝雅彦, 中野公彦, 須田義大: 「自動隊列走行における保安ブレーキシステムの開発」, 生産研究, 2013 年.

安藝雅彦, 中野公彦, 須田義大, 岸波友紀, 高須賀直一, 磯貝俊樹, 川合健夫, 小野ロー則, 青木啓二: 「トレーラ型トラックの専用道路における自動運転に向けた長期計測試験」, 生産研究, 2013 年.

中野公彦, 朴啓彰, 鄭仁成, 方芳, 大堀真敬, 中村弘毅, 熊谷靖彦, 岡田浩, 寺村一彦, 中山哲, 入交昭典, 田岡浩, 岡田訓: 「実車試験による白質病変を持つ高齢者の運転能力の評価」, 生産研究, 2013 年.

中村弘毅, 中野公彦, 萩原武司, 大石秀雄, 大堀真敬, 佐久間皓平: 「高速道路合流支援装置利用時の運転者緊張度評価」, 生産研究, 2013 年.

佐久間皓平, 中野公彦, 鄭仁成, 大堀真敬, 折原清, 坪内 崇: 「ドライビングシミュレータを用いたトラックドライバのエコドライブ手法解析」, 生産研究, 2013 年.

鄭仁成, 小野晋太郎, 洪性俊, 中野公彦, 山邊茂之, 平沢隆之, 須田義大, 牧野浩志, 池内克史, 大口敬: 「道路基盤地図情報を利用したドライビングシミュレータによる道路交通安全対策の事前評価」, 生産研究, 2013 年.

講演・口頭発表

鄭仁成: 「トラック自動隊列走行を模擬するドライビングシミュレータシステムの構築」, 自動車技術会 2012 年春季大会, 2012.

安藝雅彦: 「自動隊列走行制御に向けた大型トラックの急制動試験による安全性評価」, 自動車技術会 2012 年春季大会, 2012.

李昇勇: 「自動隊列走行制御に向けたトラックの重量および重心位置推定」, 自動車技術会 2012 年春季大会, 2012.

中村弘毅: 「力覚支援操舵システムを用いた運転精度の向上に関する考察」, 自動車技術会 2012 年春季大会, 2012.

櫻井俊彰: 「快適性向上レイアウトと前面衝突安全性の両立に関する検討(第一報)」, 自動車技術会 2012 年春季大会, 2012.

安藝雅彦: 「自動隊列走行車両の安全性向上のためのブレーキ開発」, 日本機械学会年次大会, 2012.

鄭仁成:「人間の動きを考慮した倒立振子型パーソナルモビリティビークルの安定性解析」, 日本機械学会 Dynamic and Design Conference 2012, 2012.

中野公彦:「自動運転を行うパーソナルモビリティビークルを用いた輸送システム」, 日本機械学会 Dynamic and Design Conference, 2012.

李昇勇:「隊列走行車両の状態とヨー慣性モーメント推定」, 日本機械学会 Dynamic and Design Conference 2012, 2012.

胡紅鋼:「双安定非線形機械振動系における確率共振」, 日本機械学会 Dynamic and Design Conference 2012, 2012.

中野公彦:「胸鎖乳突筋筋電位による車体剛性が運転特性に与える影響の評価(ロッカーフレームの溶接スポット点数と運転特性の関係)」, 日本機械学会年次大会, 2012.

中村弘毅:「路面状態推定のための独立成分分析の応用」, 日本機械学会 Dynamic and Design Conference 2012, 2012.

東山傑:「横方向加速度に対する胸鎖乳突筋筋電位の応答—ドライビングシュミレータを用いた実験による検討—」, 自動車技術会 2012 年秋季大会, 2012.

安藝雅彦:「自動隊列走行制御におけるトラック積載量混在条件下の安全性評価」, 自動車技術会 2012 年秋季大会, 2012.

李昇勇:「走行車両のヨー慣性モーメントの同定と車両状態量の推定」, 自動車技術会 2012 年秋季大会, 2012.

中野公彦:「白質病変を持つ高齢者の運転能力の解析」, 自動車技術会 2012 年秋季大会, 2012.

山邊茂之:「トラック自動隊列走行形成時の危機事象に対するドライバの回避行動分析」, 自動車技術会 2012 年秋季大会, 2012.

中村弘毅:「ステアリングアドミタンス計測による運転者緊張度の推定」, 自動車技術会 2012 年秋季大会, 2012.

鄭仁成:「トラックドライビングシュミレータを用いたオーバーライドによるドライバの緊急回避行動分析—エネルギーITS推進事業の開発—」, 自動車技術会 2012 年秋季大会, 2012.

鄭仁成:「道路基盤地図情報を利用したドライビングシュミレータによる道路交通安全対策の事前評価」, 第 11 回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

佐久間皓平:「ドライビングシュミレータを用いたトラックドライバのエコドライブ手法解析」, 第 11 回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

中村弘毅:「高速道路合流支援装置利用時の運転者緊張度評価」, 第 11 回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

中野公彦:「実車試験による白質病変を持つ高齢者の運転能力の評価」, 第 11 回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

安藝雅彦:「トレーラ型トラックの専用道路における自動運転に向けた長期計測試験」, 第 11 回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

安藝雅彦:「自動隊列走行における保安ブレーキシステムの開発」, 第 11 回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

山邊茂之:「トラックドライビングシュミレータを活用した隊列走行時のドライバ行動に関する研究」, 第 11 回 ITS シンポジウム 2012, 2012.

須田義大:「公共交通への通信型ASV車載器搭載による交差点走行安心感向上サービスの実証検討構想」, 日本機械学会第 19 回鉄道技術連合シンポジウム, 2012.

若林 秀:「鉄道車両における追従制御の可能性検討」, 日本機械学会第 19 回鉄道技術連合シンポジウム, 2012.

李昇勇:「絶対速度を利用した大型車両のヨー慣性モーメントの推定」, 日本機械学会第 21 回交通・物流部門大会, 2012.

山邊茂之:「キャンバ制御による操縦安定性向上に関する研究」, 日本機械学会第 21 回交通・物流部門大会, 2012.

安藝雅彦:「トレーラ型トラックの自動運転に向けた計測環境構築と長期計測試験」, 日本機械学会第 21 回交通・物流部門大会, 2012.

小川大策:「タイヤ-路面状態接地状態のひずみ計測」, 日本機械学会第 21 回交通・物流部門大会, 2012.

佐久間皓平:「大型トラック運転者のエコドライブに起因するドライバストレスの計測」, 日本機械学会第 21 回交通・物流部門大会, 2012.

東山傑:「自動車用シートの剛性分布が横方向加速度に対する乗り心地に及ぼす影響」, 日本機械学会第 21 回交通・物流部門大会, 2012.

中村弘毅:「ステアリング操作量を用いた運転者の状態推定」, 日本機械学会第 21 回交通・物流部門大会, 2012.

山邊茂之:「トラック自動運転隊列走行のためのドライビングシュミレータ構築に関する研究」, 日本機械学会第 21 回交通・物流部門大会, 2012.

大内宏晃:「快適性向上レイアウト自動車における品質工学を用いた前面衝突安全性に関する検討」, 日本機械学会第 25 回バイオエンジニアリング講演会, 2013.

特許

熊谷義彦, 朴慶彰, 中野公彦:「自動車安全運転能力測定システム」, 特願特願 2013-48506, 2013 年 03 月.

中村 周吾・准教授

研究テーマ(主たるもの)

コンピュータによる生体分子の立体構造および機能の解析・予測

コンピュータを用いて、タンパク質や核酸などの生体分子の立体構造あるいは生体機能を、アミノ酸・塩基配列データから予測する。また、それらの分子の立体構造データをもとに、タンパク質同士、タンパク質と核酸あるいはタンパク質と低分子リガンドの複合体の構造の予測と、分子シミュレーションによるダイナミクス解析を行う。これらにより、それらの分子の機能発現のメカニズムを解明する。

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

S. Yamasaki, S. Nakamura, K. Fukui: "Prospects for tertiary structure prediction of RNA based on secondary structure information", J. Chem. Inf. Model., Vol.52, No.2, pp.557-567, 2012 年. 【査読有】

M. Morita, M. Kakuta, K. Shimizu, S. Nakamura: "Blind prediction of quaternary structures of homo-oligomeric proteins from amino acid sequences based on templates", J. Proteome Sci. Comput. Biol., Vol.1, pp.1, 2012 年. 【査読有】

S. Inoue-Ito, S. Yajima, S. Fushinobu, S. Nakamura, T. Ogawa, M. Hidaka, H. Masaki: "Identification of the catalytic residues of sequence-specific and histidine-free ribonuclease colicin E5", J. Biochem., Vol.152, No.4, pp.365-372, 2012 年. 【査読有】

講演・口頭発表

中村周吾: 「配列からのタンパク質3次・4次構造予測」, CPS 研究会, 2012.

丹羽 美之・准教授

研究テーマ(主たるもの)

メディア研究

テレビやラジオ、映画や写真、新聞や雑誌、広告やマンガ、携帯やインターネットなど、様々なメディアと社会の関係について、歴史的、社会的、実践的に研究を行っている。

ジャーナリズム研究

激変する情報環境において現代のジャーナリズムが直面する課題や困難について研究している。またドキュメンタリーの制作や批評を中心に、次世代のジャーナリストの教育と養成にも取り組んでいる。

ポピュラー文化研究

現代のポピュラー文化が作り出す様々な文化や社会意識について、社会学的な観点から研究している。テレビ番組や映画など、ポピュラー文化のアーカイブにも取り組んでいる。

研究業績(2012 年度)

著書

丹羽美之・吉見俊哉:「記録映画アーカイブ 1 岩波映画の 1 億フレーム」, 東京大学出版会, 2012 年.

雑誌論文

丹羽美之・吉見俊哉:「制作者研究<テレビ・ドキュメンタリーを創った人びと>第 6 回 木村栄文(RKB 毎日放送)ードキュメンタリーは創作である」, 放送研究と調査, Vol.62, No.9, pp.46-59, 2012 年.

その他論文

丹羽美之:「東大教師が新生にすすめる本」, UP, 2012 年. 【一般向け】

丹羽美之:「メディアは東日本大震災をどう伝えたか～臨時災害放送局の調査から～」, 放送文化基金報(第 76 号), 2012 年.

丹羽美之:「放送番組で読み解く社会的記憶」, GALAC(2012 年 10 月号), 書評, 2012 年. 【一般向け】

丹羽美之:「オキナワとハワイ～島が問うアジア・太平洋の未来」, GALAC(2012 年 11 月号), 番組批評, 2012 年. 【一般向け】

丹羽美之:「ゴールデンアワー」, GALAC(2012 年 12 月号), 番組批評, 2012 年. 【一般向け】

丹羽美之:「テレビ」, 現代社会学事典, 事典項目, 2012 年.

丹羽美之:「ドキュメンタリー」, 現代社会学事典, 事典項目, 2012 年.

丹羽美之:「ゴーイングマイホーム」, GALAC(2013 年 3 月号), 番組批評, 2012 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

丹羽美之:「戦後記録映画のなかの女性たち」, 京都大学グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」コアプロジェクト成果公開セミナー, 2012. 【招待講演】

丹羽美之:「敗者たちの想像力ーいま山田太一ドラマを再発見する」, 『敗者たちの想像力』刊行記念シンポジウム(主催:早稲田大学文化構想学部表象・メディア論系、早稲田大学文化社会研究所), 2012. 【招待講演】

丹羽美之:「テレビ番組の保存と価値」, シンポジウム「テレビ文化の再発見」(主催:川崎市市民ミュージアム), 2012. 【招待講演】【一般向け】

丹羽美之:「蓄積から“創造”へ～放送文化アーカイブ構想の可能性～」, NHK 放送文化研究所 2013 年春の研究発表とシンポジウム(主催:NHK 放送文化研究所), 2012. 【招待講演】

新聞・報道

丹羽美之:「<こちら特報部>NHK と東電の蜜月」, 「東京新聞」2012 年 5 月 19 日朝刊(コメント), 2012.

丹羽美之:「番組選択!視聴者を動かす新しい波」,東京放送「TBSレビュー」2012年7月1日放送(コメント),2012.

丹羽美之:「<本の舞台裏>よみがえる岩波映画」,「朝日新聞」2012年8月19日朝刊文化面(コメント),2012.

丹羽美之:「TV番組を論評する」,「日本経済新聞」2012年11月3日朝刊文化面(コメント),2012.

丹羽美之:「<回顧2012>放送・私の3点」,「朝日新聞」2012年12月15日夕刊文化面(寄稿),2012.

丹羽美之:「還暦のテレビー顔が見える作り手を」,「毎日新聞」2013年2月19日朝刊社説(コメント),2012.

原田 至郎・准教授

研究テーマ(主たるもの)

情報社会のガバナンスに関する研究

ICTに依存する情報社会のガバナンスについて、特に技術的側面とそれを支える制度および専門家に着目した研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ処理に関する技術的・制度的研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ上での利用に関する技術的研究開発、およびその標準化をめぐる制度的研究

アジアにおける政治システムや価値観・政治意識に関する研究

カンボジアを中心とする、文献調査やフィールドワーク、アジア・バロメーター・プロジェクトの調査結果などに基づいた分析

研究業績(2012年度)

分担著書

原田至郎:「現代社会学事典」,見田宗介・大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一 編,弘文堂,2012年.

広田 光一・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012年度)

堀 里子・准教授

研究テーマ(主たるもの)

医薬品・健康食品の有用性・安全性情報ネットワークの構築

- * 臨床事例を活用した医療従事者間情報交換・研修システムの構築と展開
- * 健康食品の有用性・安全性情報ネットワークの構築と展開

新規医薬品情報を創製するための研究

- * ヒト胎盤組織を用いた薬物の胎児移行性及び胎児毒性の定量的評価
- * 薬物輸送担体や代謝酵素の阻害を介した消化管における薬物間相互作用の検討

薬物動態・薬力学理論に基づくテーラーメイド・処方設計システムの開発

研究業績(2012 年度)

分担著書

堀 里子、澤田康文他:「処方変更で迷わない! 循環器治療薬の使い分けと代替薬の選び方」, 澤田康文 編, 羊土社, 2012 年.

澤田康文、三木晶子、堀 里子、佐藤宏樹:「処方せんチェック・ヒヤリハット事例解析 第 2 集 調剤事故防止のためのヒント 50」, 澤田康文、三木晶子、堀 里子、佐藤宏樹 編, じほう社, 2012 年.

澤田康文、大谷壽一、三木晶子、堀 里子、佐藤宏樹:「育薬セミナー-BASIC 学び直したい薬剤師のための研修教材」, 澤田康文監修 編, 日経 BP 社, 2012 年.

雑誌論文

玉木 啓文、佐藤 宏樹、堀 里子、澤田 康文:「薬名類似度指標 vwhtfrag の有用性評価及び改良:主観的類似度及び心理学実験における取り違え率との関係」, 薬学雑誌, Vol.132, No.4, pp.525-529, 2012 年. 【査読有】

泉 太郎、堀 里子、佐藤宏樹、三木晶子、澤田康文.:「ツロブテロールテープ製剤の銘柄間切り替えに伴う喘息症状、副作用、製剤使用感の変化に関する実態調査」, 薬学雑誌, Vol.132, No.5, pp.617-627, 2012 年. 【査読有】

藤田優美子、吉見隆宏、堀 里子、佐藤宏樹、三木晶子、森 和明、澤田康文:「病院における抗癌剤の注射剤混合業務環境の実態調査」, 医療薬学, Vol.38, No.7, pp.449-460, 2012 年. 【査読有】

松岡紗代、三木晶子、佐藤宏樹、堀里子、澤田康文:「NSAIDs 貼付剤の処方に対する患者意識と自宅残薬の取り扱い実態」, 医療薬学, Vol.38, No.7, pp.592-598, 2012 年. 【査読有】

Mikami A, Ohtani H, Hori S, Sawada Y: "Pharmacokinetic model incorporating mechanism-based inactivation of CYP2D6 can explain both non-linear kinetics and drug interactions of paroxetine", *Int J Clin Pharmacol Ther*, Vol.51, No.5, pp.374-382, 2012 年. 【査読有】

Tsuda A, Miki A, Togawa T, Satoh H, Hori S, Sawada Y: "Sequential interaction of phenytoin and phenobarbital with fluorouracil", *Int J Clin Pharmacol Ther*, Vol.50, No.12, pp.862-866, 2012 年. 【査読有】

Asahina Y, Hori S, Sawada Y: "Community pharmacists' attitudes relating to patients' use of health products in Japan", *Int J Clin Pharm*, Vol.34, No.4, pp.529-537, 2012 年. 【査読有】

堀 里子, 澤田康文: 「徹底理解! 添付文書にある情報 日本人におけるカルバマゼピンによる重症皮膚障害発症とヒト白血球 HLA 遺伝子多型の関係」, *薬局*, Vol.63, No.5, pp.2237-2240, 2012 年.

堀 里子, 澤田康文: 「徹底理解! 添付文書にある情報 レバグリニドとシクロスポリンの相互作用と個人差の要因」, *薬局*, Vol.63, No.6, pp.2380-2383, 2012 年.

堀 里子, 澤田康文: 「徹底理解! 添付文書にある情報 ボセンタンによる胆汁うっ滞性肝障害の発現とそのメカニズム」, *薬局*, Vol.63, No.8, pp.2783-2787, 2012 年.

堀 里子, 澤田康文: 「徹底理解! 添付文書にある情報 メマンチンと尿アルカリ化剤との相互作用」, *薬局*, Vol.63, No.9, pp.3017-3020, 2012 年.

堀 里子, 澤田康文: 「徹底理解! 添付文書にある情報 UGT1A1 の遺伝子多型とイリノテカンの重篤な副作用発現との関係」, *薬局*, Vol.63, No.10, pp.3155-3159, 2012 年.

堀 里子, 澤田康文: 「徹底理解! 添付文書にある情報 アリスキレンと P-糖タンパク質阻害薬の相互作用」, *薬局*, Vol.64, No.2, pp.381-383, 2012 年.

堀 里子, 澤田康文: 「徹底理解! 添付文書にある情報 リトナビルによる血中ポリコナゾール濃度の低下と上昇～薬物相互作用の個人差の要因～」, *薬局*, Vol.63, No.7, pp.2587-2591, 2012 年.

堀 里子, 澤田康文: 「徹底理解! 添付文書にある情報 リスペリドンとパロキセチンの相互作用」, *薬局*, Vol.63, No.11, pp.3349-3352, 2012 年.

堀 里子, 澤田康文: 「徹底理解! 添付文書にある情報 ガバペンチンエナカルビルとガバペンチンの消化管吸収の違い」, *薬局*, Vol.64, No.1, pp.193-196, 2012 年.

堀 里子, 澤田康文: 「徹底理解! 添付文書にある情報 CYP2C9 の遺伝子多型にもとづくセレコキシブの体内動態の個人差」, *薬局*, Vol.63, No.13, pp.3750-3754, 2012 年.

堀 里子, 澤田康文: 「徹底理解! 添付文書にある情報 長期間持続するテルビナフィンとノルトリプチリン、アミトリプチリンとの相互作用」, *薬局*, Vol.63, No.12, pp.3572-3575, 2012 年.

森本 一夫・准教授

研究テーマ(主たるもの)

ムスリム諸社会におけるムハンマド一族の地位・役割

ペルシア語文化圏研究

イスラーム思想史

研究業績(2012 年度)

著書

Kazuo Morimoto ed.: "Sayyids and Sharifs in Muslim Societies: The Living Links to the Prophet", London and New York: Routledge, 2012 年.

分担著書

Kazuo Morimoto: "How to Behave toward Sayyids and Sharīfs: A Trans-sectarian Tradition of Dream Accounts", Morimoto Kazuo ed., Sayyids and Sharifs in Muslim Societies: The Living Links to the Prophet 編, London and New York: Routledge, 2012 年.

Kazuo Morimoto: "Introduction", Kazuo Morimoto ed., Sayyids and Sharifs in Muslim Societies: The Living Links to the Prophet 編, London and New York: Routledge, 2012 年.

森本一夫: 「「イスラームを知る」という隘路」, 福井憲彦、田尻信壹編『歴史的思考力を伸ばす世界史授業デザイン: 思考力・判断力・表現力の育て方』編, 明治図書出版, 2012 年.

雑誌論文

中西竜也、森本一夫、黒岩高: 「17・18 世紀交替期の中国古行派イスラーム: 開封・朱仙鎮のアラビア語碑文の検討から」, 東洋文化研究所紀要, Vol.162, pp.120 (223)-55 (288), 2012 年. 【査読有】

講演・口頭発表

Kazuo Morimoto: "A Thirsty Market in the East: Ibn `Inaba and His Sayyid Genealogies", 9th International Conference on Iranian Studies (Istanbul, Turkey), 2012.

山内 祐平・准教授

研究テーマ(主たるもの)

情報通信技術を利用した学習環境のデザイン

教育の情報化が急速な勢いで進んでいるが、学習は空間／活動／共同体／人工物の微妙なバランスの中で発生する複雑な事象である。インターネットなどの情報通信技術を学びの場に導入する際に、様々な要因をどうデザインすれば適切な学習環境を構成できるかを、実践研究の中で明らかにする。

研究業績(2012 年度)

分担著書

永岡慶三, 植野真臣, 山内祐平: 「教育工学選書 8 教育工学における学習評価」, 日本教育工学会監修(編著:永岡慶三, 植野真臣, 山内祐平) 編, ミネルヴァ書房, 2012 年.

国際会議等

Yamauchi, Y., Fujimoto, T., Takahashi, K., Araki, J., Otuji, Y., and Suzuki, H.: "Impact of Using Facebook as a Social Learning Platform to Connect High School", E-LEARN2012, pp.465-472, 2012. 【査読有】

Fujimoto, T., Misono, T., Takahashi, K., Otuji, Y., Suzuki, H., and Yamauchi, Y.: "Designing a Game-based Social Application for Mathematics Education", Meaningful Play 2012, 2012. 【査読有】

その他論文

山内祐平, 高橋薫, 藤本徹, 荒木淳子, 大辻雄介, 鈴木久: 「Facebook を利用したキャリア学習環境」, 日本教育工学会第 28 回全国大会講演論文集, 2012 年.

高橋 薫, 藤本 徹, 野口 雅乃, 鈴木 久, 大辻 雄介, 山内 祐平: 「Facebook グループを活用した高校生小論文作成コミュニティの実践」, 日本教育工学会第 28 回全国大会講演論文集, 2012 年.

高橋 薫, 荒木淳子, 藤本徹, 野口雅乃, 鈴木 久, 大辻雄介, 山内祐平: 「Facebook を活用したキャリア教育支援プロジェクトを通しての高校生のキャリア観の変容」, 日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集, 2012 年.

講演・口頭発表

山内祐平: 「ソーシャルメディアを利用したキャリア学習の支援」, 電子情報通信学会「教育と ICT 利用」, 2012. 【招待講演】

山内祐平: 「ソーシャルメディアを利用したキャリア学習の支援」, e ラーニングアワード 2012, 2012. 【招待講演】

山内祐平: 「“ゆとり教育世代”のグローバル人材育成 ～「21 世紀型スキル」「教えない”研修”などキーワードで読み解く新人／若手育成の新潮流～」, 日経ビジネス主催「人材開発のプロ養成講座」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

新聞・報道

山内祐平: 「時間割は「プレイリスト」——IT が支える 1 人 1 人に合わせた学習」, PC Online(教育と ICT)「10 年後の教室」第 1 回, 2012.

山内祐平:「今は存在しない職業への準備——「21世紀型スキル」, PC Online(教育とICT)「10年後の教室」第2回, 2012.

山内祐平:「講義が宿題になる——「反転授業」, PC Online(教育とICT)「10年後の教室」第3回, 2012.

山内祐平:「世界最良の授業はWebから来る——「オープン教育」, PC Online(教育とICT)「10年後の教室」第4回, 2012.

山内祐平:「教壇がない教室——「ラーニングスタジオ」, PC Online(教育とICT)「10年後の教室」第5回, 2012.

山内祐平:「学習を支援する図書館——「ラーニングcommons」, PC Online(教育とICT)「10年後の教室」第6回, 2012.

山内祐平:「Facebookが入試に使われる時代——「デジタルポートフォリオ」, PC Online(教育とICT)「10年後の教室」第7回, 2012.

山内祐平:「学習者と社会がつながる——「ソーシャルラーニング」, PC Online(教育とICT)「10年後の教室」第8回, 2012.

山内祐平:「ネットでつながる教員たち——「専門職学習ネットワーク」, PC Online(教育とICT)「10年後の教室」第9回, 2012.

山内祐平:「国境を越える家庭教師——「グローバルラーニング」, PC Online(教育とICT)「10年後の教室」第10回, 2012.

山内祐平:「「学びとデジタルの融合」第2回識者インタビュー:未来のデジタル社会を生き抜く子どもたちを育てるために」, ベネッセ教育研究開発センター(BERD)ウェブサイト, 2012.

山内祐平:「2030年たくましくニッポン—驚愕の技術で世界を制覇!!—((教育)オンライン学習で世界に学ぶ)」, 週刊朝日, 2013.

江川雅子, 吉見俊哉, 山内祐平:「東大:登録者270万人 米の無料オンライン講座サービスに参加」, 毎日jp, 2013.

江川雅子, 吉見俊哉, 山内祐平:「東大がネットで公開講座 無料で受講、履修証も」, 日本経済新聞(ウェブサイト), 2013.

江川雅子, 吉見俊哉, 山内祐平:「東大がネットで公開講座 無料で受講、履修証も」, 日刊スポーツ, 2013.

江川雅子, 吉見俊哉, 山内祐平:「東大、授業をネット配信 9月から2コース、履修証も」, 朝日新聞デジタル, 2013.

江川雅子, 吉見俊哉, 山内祐平:「東大と米コーセラ、オンライン講座で協定—英語講義を世界配信」, 日刊工業新聞, 2013.

江川雅子, 吉見俊哉, 山内祐平:「東京大学が無料の大規模公開オンライン講座(MOOC)を9月開講「単位」は提供しないが、一定の基準を満たせば「履修証」を発行」, PC Online(日経パソコン), 2013.

江川雅子, 吉見俊哉, 山内祐平:「東京大学とコーセラが大規模公開オンライン講座配信に関する協定を締結 9月から2講座を配信へ」, WirelessWire News, 2013.

江川雅子, 吉見俊哉, 山内祐平: 「東大が大規模公開オンライン講座で授業を無償公開、履修証も発行」, リセマム, 2013.

江川雅子, 吉見俊哉, 山内祐平: 「東京大学、英語での公開オンライン講座を配信する実証実験を 2013 年秋に実施」, MDN Design, 2013.

江川雅子, 吉見俊哉, 山内祐平: 「Online university giant gets bigger」, BBC, 2013.

江川雅子, 吉見俊哉, 山内祐平: 「Mooc providers expand」, Times Higher Education, 2013.

江川雅子, 吉見俊哉, 山内祐平: 「University of Tokyo to begin free online courses」, The Hindu, 2013.

受賞

ミサワホーム株式会社(山内祐平監修): 第 6 回キッズデザイン賞「ホーム commons 設計」, 2012 年.

Yamauchi, Y., Fujimoto, T., Takahashi, K., Araki, J., Otuji, Y., and Suzuki, H.: Outstanding Paper Award「Impact of Using Facebook as a Social Learning Platform to Connect High School Students with Working Adults」, E-Learn(AACE), 2012 年.

山田 育穂・准教授

研究テーマ(主たるもの)

空間情報科学および地理情報システム(GIS)

空間統計学および計量的解析法

都市環境と健康

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

Yamada, I., B.B. Brown, K.R. Smith, C.D. Zick, L. Kowaleski-Jones, and J.X. Fan: "Mixed Land Use and Obesity: An Empirical Comparison of Alternative Land Use Measures and Geographic Scales", The Professional Geographer, Vol.64, No.2, pp.157-177, 2012 年. 【査読有】

講演・口頭発表

加藤寛泰, 山田育穂, 浅見泰司: 「駅周辺居住高齢者の歩行環境評価構造に関する研究」, 日本地理学会 2012 年秋季学術大会, 2012.

山田育穂, 岡部篤行: 「Moran の I 統計量を用いた空間自己相関の検定に関する一提案」, 日本地理学会 2013 年 春季学術大会, 2012.

山本 隆一・准教授

研究テーマ(主たるもの)

医療情報の安全性確保とプライバシー保護に関する研究

医療情報の可用性、完全性、機密性の適切な確保と、情報主権者の権利としてのプライバシーと教育・研修・研究・公益目的の利用を調和させるための技術的課題および制度や運用を中心とする人的要素の課題についての研究。

広域分散診療情報データベースへの知識発見手法の応用

電子カルテが普及した際に構成されると予想される広域分散診療情報データベースをモデル化し、随時蓄積される診療情報に対して動的な知識発見手法の適応についての研究

医療における公開鍵基盤の応用に関する研究

公開鍵基盤を医療ドメインに応用するにあつての、資格属性の取り扱いなどの問題の解決と国際的な調和に関する研究

研究業績(2012 年度)

分担著書

山本隆一: 「看護実践を証明するフォーカスチャーティング」, 川上千英子 編, 医歯薬出版, 2012 年.

朝倉 敬子・助教

研究テーマ(主たるもの)

日本人の食塩摂取量の推定

栄養に関する知識と栄養摂取の関連

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

Kuwahara E, Asakura K, Nishiwaki Y, Inoue N, Watanabe M, Hibi T, Takebayashi T: "Effects of family history on inflammatory bowel disease characteristics in Japanese patients", J Gastroenterol, Vol.47, No.9, pp.961-8, 2012 年. 【査読有】

Ueda T, Iino R, Yokoyama K, Okamoto S, Asakura K, Tsukada Y, Ishizawa J, Matsuki E, Ikeda Y, Hattori Y: "Post-transplant consolidation therapy using thalidomide alone for the patients with multiple myeloma: a feasibility study in Japanese population", Int J Hematol, Vol.96, No.4, pp.477-84, 2012 年. 【査読有】

Oguro S, Hashimoto S, Tanaka T, Inoue M, Nakatsuka S, Kuribayashi S, Asakura K, Kawachi S, Tanabe M, Kitagawa Y, Ebinuma H, Saito H, Hibi T: "Short-term therapeutic effects of transcatheter arterial chemoembolization using miriplatin-lipiodol suspension for hepatocellular carcinoma", Jpn J Radiol, Vol.30, No.9, pp.735-42, 2012 年. 【査読有】

Takahashi M, Jinno H, Hayashida T, Sakata M, Asakura K, Kitagawa Y: "Correlation between clinical nodal status and sentinel lymph node biopsy false negative rate after neoadjuvant chemotherapy", World J Surg, Vol.36, No.12, pp.2847-52, 2012 年. 【査読有】

Michikawa T, Nishiwaki Y, Asakura K, Hillebrand G, Miyamoto K, Ono M, Kinjo Y, Akiba S, Takebayashi T: "Sunlight exposure may be a risk factor of hearing impairment: A community-based study in Japanese older men and women", J Gerontol A Biol Sci Med Sci, Vol.68, No.1, pp.96-103, 2013 年. 【査読有】

石井 健太郎・助教

研究テーマ(主たるもの)

インタラクティブシステム

ロボットやCGエージェントといった自律システム・人間同士のコミュニケーションを支援するシステムについて研究している。これまでに、自律ロボットや自律エージェントの話しかけ手法やふるまいの生成手法を提案している。また、アバターを利用した遠隔コミュニケーションシステムを提案している。

ユーザインタフェース

ユーザの指示や好みをコンピュータシステムに伝える技術・コンピュータシステムが持つ情報をユーザにとって自然な形態で提示する技術について研究している。これまでに、レーザポインタ・タッチ操作でロボットを操作するインタフェースを提案している。また、任意の壁・床・天井から音が聞こえる特殊なスピーカを用いて音で位置を提示するシステムを提案している。

センサネットワーク

人間の動作を認識して集約・解析するための技術について研究している。これまでに、異なるセンサ環境においても自律ロボットが同様に動作するためのセンサネットワークフレームワークを提案している。また、認識した動作から人

間の状況を推定して、ロボット・エージェント・コンピュータサービスが状況に適した動作を行うシステムを提案している。

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

Kentaro Ishii and Michita Imai: "Collaborative Task Casting: A Task Selection Technique for Multi-Task Autonomous Robots", SICE Journal of Control, Measurement, and System Integration, Vol.6, No.2, pp.157-165, 2012 年. 【査読有】

国際会議等

Haipeng Mi, Kentaro Ishii, Lei Ma, Natsuda Laokulrat, Masahiko Inami, and Takeo Igarashi: "Pebbles: An Interactive Configuration Tool for Indoor Robot Navigation", The 25th ACM Symposium on User Interface Software and Technology, Demonstrations, pp.11-12, 2012. 【査読有】

その他論文

石井健太郎, Haipeng Mi, Lei Ma, 稲見昌彦, 五十嵐健夫: 「ロボットナビゲーションのためのユーザが設置可能なビーコンネットワーク」, 日本機械学会ロボティクス・メカトロニクス講演会 2012, 2P1-Q02, 2012 年.

石井健太郎, 石黒浩: 「自律ロボットへの教示とユーザの気づきを促すインタラクション」, 2012 年度人工知能学会全国大会(第 26 回)論文集, 3K1-R-11-9, 2012 年.

石井健太郎, 米海鵬, 馬雷, Natsuda Laokulrat, 稲見昌彦, 五十嵐健夫: 「Pebbles: 自律ロボットの移動経路をデザインするタンジブルデバイス」, 第 20 回インタラクティブシステムとソフトウェアに関するワークショップ, pp.37-42, 2012 年. 【査読有】

加藤 綾子・助教

研究テーマ(主たるもの)

技術変化とレコード産業の進化・変動に関する研究

本研究では、従来成立していたアナログ録音技術を基軸としたレコード産業システムが、デジタル化という技術変化を受けて大きく変動することを、デジタル録音技術が形成する 2 つの道筋と進化モデルの「第四段階」として提示している(加藤, 2012b)。音声のデジタル化は、(1)既存のレコード産業を補強して市場の最盛期を形成し、一部の企業組織で制作・管理機能の統合化を促す(加藤, 2012a)が、他方で、(2)1990 年代中葉に伸展する情報通信技術と結びついて生産消費者の顕在化を招き、一般消費者が生産する制作物が従来型の管理機構を必ずしも必要とせずに流通小売プラットフォーム上に登場し得る状況を招くと考えられる。また、一般的にデジタル化の影響が表れ始めるのは 2000 年代以降であると思われるが、本研究によるとレコード産業では 1990 年代中頃からシステム全体の変更が始まっていると捉えられる。本研究は平成 23-24 年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)若手研究(B)の支援を受けた。

生産手段のデジタル化と自生的な生産活動—生産消費者に関する定量分析

技術変化を受けて顕在化すると推察される消費者の生産活動について、先行研究に基づき構成概念や測定項目を再考し、定量的な調査・分析を実施している。

技術と社会・経済の変動に関するイノベーション論的考察

ドミナントであった技術が新技術に取って代わり、それに伴いシステム全体が変動して遷移することに着目し、経済・経営学的な観点からこうした変化を捉える研究を試みている。これまで対象としてきたコンテンツ産業分野から着手し、今後は他領域も視野に入れて行く予定である。

研究業績(2012年度)

雑誌論文

加藤綾子:「デジタル録音技術が形成する2つの道筋とレコード産業の進化の第四段階」, 社会・経済システム, No.33号, pp.47-54, 2012年.【査読有】

講演・口頭発表

加藤綾子:「コンテンツ産業の進化理論に関する検討—レコード産業の進化モデルの第四段階仮説」, 2012年社会情報学会(SSI)学会大会(於 群馬大学), 2012.

加藤綾子:「生産手段のデジタル化と生産消費者—構成概念と測定項目の再考」, 情報文化学会第20回全国大会(於 東京大学), 2012.

加藤綾子:「コンテンツの生産消費者に関する考察」, 社会・経済システム学会第31回大会(於 静岡県立大学), 2012.

加藤綾子・須藤修:「技術変化と自生的な生産活動の顕在化—音楽の生産消費に関するアンケート調査」, 情報処理学会第75回全国大会(於 東北大学), 2013.

金 暲和・助教

研究テーマ(主たるもの)

モバイル文化に関するエスノグラフィー

(1)パフォーマンス・エスノグラフィー(performance ethnography)と呼ばれる文化人類学の技法を使ったモバイル文化について考察を行う。身体や口述を使ったパフォーマンスを持って普通の人々のモバイル・メディアの使い方を明らかにする。その結果を分析し、モバイル・メディアを中心に再編される社会空間のあり方について考察を行う。
(2)普段は気づきにくいモバイル・メディアの文化的なあり方についてエスノグラフィー記述を行う。創造的なメディア表現を通して、モバイル・メディアについての理解を増進するワークショップ技法を使った実践的なアプローチを積極的に活用している。

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

Kyoung-hwa Yonnie KIM: "The landscape of keitai shōsetsu: Mobile phones as a literary medium among Japanese youth", *Continuum: Journal of Media & Cultural Studies*, Vol. 26, No. Issue 3, pp. 475-485, 2012 年. 【査読有】

講演・口頭発表

金暲和(金ヨニ): 「災害とニューメディアの歴史社会学—タイタニック号、関東大震災から 3.11 まで」, 新潟デジタル・メディア研究会, 2012. 【一般向け】

Kyoung-hwa Yonnie KIM: "Mourning after: A case study on affective uses of social media after 3.11", *East Asian Sociologists Network 2012*, 2012.

Kyoung-hwa Yonnie KIM: "An insider's view in media studies: Performance ethnography on mobile media", *SNU-III UT International Academic Symposium 2012*, 2012.

佐藤 朝美・助教

研究テーマ(主たるもの)

知性を育む保育環境デザインに関する研究

東京大学情報学環とミサワホームとのプロジェクトにおいて、より良い保育環境デザインについて共同研究(研究代表者: 東京大学大学院情報学環 山内 祐平 准教授)を行っております。3 年間かけて、保育における学びを指向した空間を提案すべく個々研究を行う予定です。社会性を育む遊具の提案・開発・評価を行います。

家族内コミュニケーションを支援するデジタルストーリーテリングシステムの開発研究

家族内コミュニケーションを支援するオンライン環境として、デジタルストーリーテリングシステムの開発研究を行っております。科学研究費補助金(基盤 C)の交付により、3 年間かけて成果を出していく予定です。

小論文作成のためのソーシャルリーディングシステム SCSS (Structured Chat & Social Stamp) の開発

近年、大学入試の形態が多様化し、AO 入試や、大学の二次試験で小論文入試が行われ、そのスタイルの多くは、課題の読解を踏まえて小論文を書くというものです。そうした背景を踏まえ、本研究では、ストラクチャードチャットとそれを促すソーシャルスタンプの機能を備えたソーシャルリーディングシステムを開発しました。

研究業績(2012 年度)

国際会議等

高橋薫(東京大学)・柴田アドリアーナ(東京大学大学院学際情報学府修士)・佐藤朝美(東京大学)・山内祐平(東京大学):「在日ブラジル人児童を対象としたインフォーマルラーニング教材の開発」, 2012 年日本語教育国際研究大会, 2012. 【査読有】

講演・口頭発表

佐藤朝美・高橋薫・藤本徹(東京大学)・高橋淳・谷内 正裕(ベネッセコーポレーション)・山内祐平(東京大学):「ソーシャルリーディングを支援する Facebook アプリの開発 ～高校生小論文作成時の読みフェーズに着目して～」, 日本教育メディア学会 2012 年度 第 1 回研究会, 2012.

佐藤朝美(東京大学), 佐藤桃子(ベネッセコーポレーション):「紙絵本とデジタル絵本による読み聞かせの比較」, 第 28 回日本教育工学会全国大会, 2012.

佐藤朝美(東京大学), 朝倉民枝(グッド・グリーン), 椿本弥生(公立はこだて未来大学):「幼児の Narrative Skill 発達につながる家族 Narrative 支援～未来の君に贈るビデオレター～の活動デザインと実践」, 第 28 回日本教育工学会全国大会, 2012.

土居由布子(ニトリ), 佐藤朝美, 山内祐平(東京大学):「NHK クリエイティブライブラリー投稿者の映像制作活動と付随する学習に関する調査研究」, 第 28 回日本教育工学会全国大会, 2012.

堀田博史(園田学園女子大学), 深見俊崇(島根大学), 松河秀哉(大阪大学), 松山由美子(四天王寺大学短期大学部), 森田健宏(関西外国語大学短期大学部), 中村恵(奈良佐保短期大学), 奥林泰一郎(大阪大学), 佐藤朝美(東京大学), 吉崎弘一(秋田大学):「保育でのメディア活用に注目した情報処理テキスト開発の試み」, 第 28 回日本教育工学会全国大会, 2012.

佐藤朝美, 星野俊樹, 星野裕之, 春日亀美智雄, 山内祐平:「ごっこ遊び遊具～まち遊びキット～の導入による社会的相互作用の評価」, 第 9 回こども環境学会 2012 年大会, 2012.

佐藤朝美:「2012 年度 第 1 回 BEAT [セミナー: 子どもとデジタル絵本」, 東京大学大学院情報学環ベネッセ先端教育技術学講座 (BEAT), 2012. 【一般向け】

佐藤朝美(東京大学)・星野俊樹(ミサワホーム総合研究所)・星野裕之(ミサワホーム株式会社)・春日亀美智雄(春日亀意匠)・山内祐平(東京大学):「保育士による「まち遊びキット」の評価 —導入後のインタビューを通して—」, 第 9 回子ども学会議学術集会, 2012.

佐藤朝美:「社会性を育むごっこ遊び遊具」, こども環境学会・東海研究会, 2012. 【一般向け】

新聞・報道

一般:「親子で楽しむタブレット」, 日経新聞夕刊, 2012.

受賞

佐藤朝美, 星野俊樹, 星野裕之, 春日亀美智雄, 山内祐平: 第 9 回こども環境学会優秀ポスター発表賞「ごっこ遊び遊具～まち遊びキット～の導入による社会的相互作用の評価」, こども環境学会, 2012 年.

篠崎 智大・助教

研究テーマ(主たるもの)

統計的因果推論

臨床試験データの解析

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

Iijima, K., Iimuro, S., Shinozaki, T., Ohashi, Y., Sakurai, T., Umegaki, H., Araki, A., Ouchi, Y., Ito, H. and the Japanese Elderly Diabetes Intervention Trial Investigator Group : "Lower physical activity is a strong predictor of cardiovascular events in elderly patients with type 2 diabetes mellitus beyond traditional risk factors: the Japanese elderly diabetes intervention trial", *Geriatrics and Gerontology International*, Vol.12, No.Suppl. 1, pp.77-87, 2012 年. 【査読有】

Shinozaki, T., Matsuyama, Y., Iimuro, S., Umegaki, H., Sakurai, T., Araki, A., Ohashi, Y., Ito, H. and the Japanese Elderly Diabetes Intervention Trial Research Group : "Effective prevention of cardiovascular disease and diabetes-related events with atorvastatin in Japanese elderly patients with type 2 diabetes mellitus: adjusting for treatment changes using a marginal structural proportional hazards model and a rank-preserving structural failure time model", *Geriatrics and Gerontology International*, Vol.12, No.Suppl. 1, pp.88-102, 2012 年. 【査読有】

Umegaki, H., Iimuro, S., Shinozaki, T., Araki, A., Sakurai, T., Iijima, K., Ohashi, Y., Ito, H. and the Japanese Elderly Diabetes Intervention Trial Study Group : "Risk factors associated with cognitive decline in the elderly with type 2 diabetes: baseline data analysis of the Japanese elderly diabetes intervention trial", *Geriatrics and Gerontology International*, Vol.12, No.Suppl. 1, pp.103-109, 2012 年. 【査読有】

Umegaki, H., Iimuro, S., Shinozaki, T., Araki, A., Sakurai, T., Iijima, K., Ohashi, Y., Ito, H. and the Japanese Elderly Diabetes Intervention Trial Study Group : "Risk factors associated with cognitive decline in the elderly with type 2 diabetes: pooled logistic analysis of a 6-year observation in the Japanese elderly diabetes intervention trial", *Geriatrics and Gerontology International*, Vol.12, No.Suppl. 1, pp.110-116, 2012 年. 【査読有】

Manabe, S., Kasegawa, H., Fukui, T., Tabata, M., Shinozaki, T., Shimokawa, T. and Takanashi, S. : "Influence of left ventricular function on development of systolic anterior motion after mitral valve repair", *The Journal of Thoracic and Cardiovascular Surgery*, pp.in press , 2012 年. 【査読有】

Nishizaki, Y., Yamagami, S., Suzuki, H., Joki, Y., Takahashi, S., Sesoko, M., Yamashita, H., Kuremoto, K., Shinozaki, T. and Daida, H. : "Red blood cell distribution width as an effective tool for detecting fatal heart failure in super-elderly patients", *Internal Medicine*, Vol.51, pp.2271-2276, 2012 年. 【査読有】

Nishizaki, Y., Daimon, M., Miyazaki, S., Suzuki, H., Kawata, T., Miyauchi, K., Chiang, S. J., Makinae, H., Shinozaki, T. and Daida, H. : "Clinical factors associated with classical symptoms of aortic valve stenosis", *The Journal of Heart Valve Disease*, pp.in press, 2012 年. 【査読有】

篠崎 智大, 松山 裕: 「混合モデル(mixed models)」, 動脈硬化予防, Vol.11 , No.2, pp.93-95, 2012 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

Shinozaki, T., Matsuyama, Y., Iimuro, S., Ohashi, Y. and Ito, H. : "Estimation of controlled direct effects for dynamic treatment regimes", 2012 Joint Statistical Meetings, San Diego, 2012.

Shinozaki, T., Matsuyama, Y., Iimuro, S., Ohashi, Y. and Ito, H. : "Estimating causal effects of atorvastatin in elderly diabetics", The XXVIth International Biometric Conference, Kobe, Japan, 2012.

竹内 文乃・助教

研究テーマ(主たるもの)

疫学研究(大気汚染)

微粒子状物質(PM)による大気汚染が心筋梗塞や脳梗塞といった動脈硬化性疾患に影響するかどうか、大規模な疫学研究データを解析することで検討している(統計解析を担当)

疫学研究(循環器疾患)

日本の成人を対象に、健康診断ベースに動脈硬化性疾患発症リスクの探索および定量をする疫学研究に対して、統計解析手法の適用を試みる

疫学研究(小児の環境と健康)

妊婦および小児の環境ホルモンや化学物質への曝露が妊娠や性比の決定、精神・身体発達などにどのように影響するか、全国 6 万人の妊婦を登録して追跡することで検討を行う(統計解析を担当)

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

前田晋至, 原直彦, 竹内文乃, 松山裕: 「「患者の求める医療連携」を推進・形成させる潜在的な因子の特定」, 日本プライマリ・ケア連合学会誌, Vol.35, No.4, pp.291-8, 2012 年. 【査読有】

竹内由則, 藤野泰人, 渡邊学, 中川貴之, 高橋雅, 竹内文乃, 盆子原誠, 小林哲也, 大野耕一, 内田和幸, 浅野和之, 菅野純夫, 西村亮平, 大橋靖雄, 辻本元: 「イヌの肥満細胞腫における KIT 遺伝子変異および病理組織学的分類の予後への影響」, Journal of Small Animal Medicine., Vol.18, No.3, pp.78-9, 2012 年. 【査読有】

吉村健佑, 川上憲人, 堤明純, 井上彰臣, 小林由佳, 竹内文乃, 福田敬: 「日本における職場でのメンタルヘルスの第一次予防対策に関する費用便益分析」, 産業衛生学, Vol.55, No.1, pp.11-24, 2012 年. 【査読有】

Igarashi T, Finet JE, Takeuchi A, Fujino Y, Strom M, Greener ID, Rosenbaum DS, Donahue JK: "Connexin Gene Transfer Preserves Conduction Velocity and Prevents Atrial Fibrillation", *Circulation.*, Vol.125, pp.216-25, 2012 年. 【査読有】

Ohsumi S, Shimozuma K, Ohashi Y, Takeuchi A, Suemasu K, Kuranami M, Ohno S, Watanabe T: "Subjective and Objective Assessment of Edema during Adjuvant Chemotherapy for Breast Cancer Using Taxane-Containing Regimens in a Randomized Controlled Trial: The National Surgical Adjuvant Study of Breast Cancer 02", *Oncology*, Vol.82, No.3, pp.131-8, 2012 年. 【査読有】

Shimozuma K, Ohashi Y, Takeuchi A, Aranishi T, Morita A, Kuroi K, Ohsumi S, Makino H, Katsumata N, Kuranami M, Suemasu K, Watanabe T, Hausheer HF.: "Taxane-induced peripheral neuropathy and health-related quality-of-life in post-operative breast cancer patients undergoing adjuvant chemotherapy: N-SAS BC 02, a randomized clinical trial", *Supportive Care in Cancer.*, Vol.20, No.12, pp.3355-64, 2012 年. 【査読有】

Nakajima M, Ohno K, Takeuchi Y, Takeuchi A, Nakashima K, Fujino Y, Tsujimoto H: "Usefulness of plasma transferrin levels as dynamic assessment of protein nutrition in dog", *Journal of Pet Animal Nutrition*, Vol.15, No.2, pp.65-71, 2012 年. 【査読有】

Takeuchi Y, Fujino Y, Watanabe M, Takahashi M, Nakagawa T, Takeuchi A, Bonkobara M, Kobayashi T, Ohno K, Uchida K, Asano K, Nishimura R, Nakayama H, Sugano S, Ohashi Y and Tsujimoto H: "Validation of the prognostic value of histopathological grading or c-kit mutation in canine cutaneous mast cell tumours: A retrospective cohort study", *The Veterinary Journal*, 2012 年. 【査読有】

竹内文乃: 「統計の基礎-p 値と 95%信頼区間をどう解釈するの?」, *月刊薬事*, Vol.54, No.12, pp.35-41, 2012 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

Ng C.F.S, Ueda K, Nitta H, Takeuchi A: "Acute effects of tropospheric ozone on mortality in Japan.", 第 22 回日本疫学会学術総会, 2012.

Takeuchi A: "On the Use of Fractional Polynomial Models in Time-Series Studies of Particulate Matter and Mortality", 2012 Joint Statistical Meetings, 2012.

Ng Chris-Fook-Sheng, Ueda K, Nitta N, Takeuchi A.: "Effect modification by summer heat on the association between short-term ozone exposure and mortality in 9 Japanese cities.", *European Congress of Epidemiology*, 2012.

Takagi M, Takeuchi A, Tanaka A, Nitta H, Nakayama S.F.: "Estimating population exposure to ionizing radiation caused by the Fukushima Daiichi nuclear disaster.", *Society of Environmental Toxicology and Chemistry North America 33rd Annual Meeting*, 2012.

竹内文乃, 新田裕史: 「大規模コホート研究における化学物質曝露測定のための試料サンプリング手法.」, *環境ホルモン学会第 15 回研究発表会*, 2012.

竹内由則, 藤野泰人, 渡邊学, 中川貴之, 高橋雅, 竹内文乃, 盆子原誠, 小林哲也, 大野耕一, 内田和幸, 浅野和之, 菅野純夫, 西村亮平, 大橋靖雄, 辻本元: 「イヌの肥満細胞腫における KIT 遺伝子変異および病理組織学的分類の予後への影響」, *日本獣医内科学アカデミー/日本獣医臨床病理学会 2012 年大会*, 2012.

受賞

竹内文乃: 優秀ポスター賞「3段階階層モデルで解析をする大気汚染コホート研究の例数設計と検出力計算」, 2012年.

成原 慧・助教

研究テーマ(主たるもの)

情報社会における規制理論

情報社会における法的規制と非法的規制の関係について、個人の自由を物理的・技術的に規制する「アーキテクチャ」と呼ばれる規制手法に着目して検討を進めている。

マスメディアおよびインターネットに関する表現の自由

マスメディアおよびインターネットに関する表現のあり方について、表現規制の主体および作用の多元化・重層化という現象に着目して検討を行っている。

ローレンス・レッシングの憲法理論についての研究

米国の憲法学者であり代表的なサイバー法の研究者として知られるローレンス・レッシングの初期の憲法理論の形成過程について研究を行うことにより、レッシングの憲法理論の基本構造を明らかにすることを試みている。

研究業績(2012年度)

その他論文

成原慧: 「マスコミ関連判例 2011年 10月～12月」, マスコミ倫理 No.633, 2012年. 【一般向け】

成原慧: 「マスコミ関連判例 2012年 4月～6月」, マスコミ倫理 No.637, 2012年. 【一般向け】

成原慧: 「マスコミ関連判例 2012年 7月～9月」, マスコミ倫理 No.641, 2013年. 【一般向け】

講演・口頭発表

成原慧: 「インターネット上の表現規制と透明性」, 抹茶の会, 2012. 【招待講演】【一般向け】

成原慧: 「アーキテクチャ、パブリック・フォーラム、表現の自由」, 憲法理論研究会 10月月例研究会, 2012. 【招待講演】

成原慧: 「初期ローレンス・レッシングにおける憲法理論と法哲学」, 東京法哲学研究会 1月例会, 2013. 【招待講演】

成原慧: 「誰が／何が表現の自由を規制するのか? : 表現の自由を規制する主体と作用についての再検討」, 情報法・政策研究会 in 京都, 2013. 【招待講演】

西川 麻樹・助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

分担著書

西川アサキ:「吉本隆明論集 ——初期・中期・後期を論じて」, 金子遊 編, アーツアンドクラフツ, 2012 年.

雑誌論文

西川アサキ:「形から逃げ出す生命、ガタリの夢、自身の死を悼むシステム」, 現代思想, No.8 月号, pp.144-170, 2012 年. 【一般向け】

西川アサキ:「マシン、パターン、テスト。幸せの定義」, 現代思想, No.総特集 チューリング, pp.102-116, 2012 年. 【一般向け】

西川麻樹:「不確実な環境で決断する組織のデザインフレームワーク — そのベンチマーク例としての「緩い対称性型組織モデル」 —」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究 学環, Vol.83, pp.51-67, 2012 年.

その他論文

西川アサキ:「陳腐な問い、神の笑い、着慣れぬ衣装」, 読書人の雑誌 本, エッセイ, 2012 年. 【一般向け】

西川アサキ:「左を向いた時の右側に気を」, 群像, エッセイ, 2012 年. 【一般向け】

西川アサキ:「宛先のない」, ユリイカ 7月号, エッセイ, 2012 年. 【一般向け】

西川アサキ:「神はいないが、花を着る」, ユリイカ 11月号, 批評, 2012 年.

西川アサキ:「私の死でいっぱい袋 クリムト的主体について」, ユリイカ 3月, 批評, 2012 年. 【一般向け】

講演・口頭発表

西川アサキ:「組織内観測者と組織設計、その幾つかの難しさ」, 第24回 計測自動制御学会 SI部門共創システム部会研究会 第7回 内部観測研究会, 2012.

松前 恵環・助教

研究テーマ(主たるもの)

情報と法を巡る現代的課題

デジタル化・ネットワーク化の進展による「情報」のあり方の変容がもたらす、「法」を巡る現代的な課題について、研究を行っている。具体的には、本来的に「情報」と密接な関わりを有するメディア法制、情報公開法制、プライバシー・個人情報保護法制、知的財産権法制等に加え、情報通信技術の発展に伴って新しく生じた、ISPの法的責任、コンピュータ犯罪、迷惑メール、違法・有害コンテンツの流通等の課題に対応するための法制を対象として、検討を進めている。

プライバシー・個人情報保護に関する法原理と制度

「プライバシー」や「プライバシー権」といった概念の意義やその価値、プライバシーの保護と個人情報の保護との関係あるいは個人情報保護制度の意義、個人情報保護制度の現状と課題等、プライバシー・個人情報保護に関する法原理の考察と制度の検討を行っている。この際、我が国のプライバシー・個人情報保護法制にとりわけ大きな影響を与えている米国、欧州の議論や制度に着目して、比較法的研究を行っている。

先端技術とプライバシー・個人情報保護

インターネットに続くユビキタス、そして、クラウドといった先端技術の進展に伴い、プライバシー・個人情報を巡る状況はどのように変容し、それによってプライバシーにはどのような脅威がもたらされているのか、そして、それに対してプライバシー・個人情報保護制度はどのようにあるべきなのか——情報通信技術の進展と情報のあり方の変容という視点から、プライバシー・個人情報保護についての研究を行い、新たな枠組みについて考察している。

研究業績(2012年度)

分担著書

松前恵環:「現代社会学事典」, 見田宗介・大澤真幸・吉見俊哉・鷲田清一 編, 弘文堂, 2012年。

雑誌論文

松前恵環:「個人によるカメラ監視と米国不法行為法上のプライバシー権の限界:「ポリオプティコン」の時代におけるプライバシー」, 社会情報学研究, Vol.16, No.2, pp.111-127, 2012年。【査読有】

ジェド・ルーベンフェルド:松前恵環訳:「デジタル革命における匿名性(シンポジウム ユビキタス時代の情報法における基底的価値とエンフォースメント)」, アメリカ法, No.2012-1, pp.1-20, 2012年。【査読有】

米 海鵬・助教

研究テーマ(主たるもの)

ヒューマンロボットインタラクション

人間とロボットの間、協調的な行動やスムーズなコミュニケーションなどのインタラクションを目標として、色々な直感的な操作方法やインタラクションスタイルを研究している。ロボットの応用分野が広がっているため、産業用と家庭用のロボットの限界を超え、教育や、エンターテインメントや、芸術などの目的とするロボットも増やしている。それぞれの目的の違いのロボットに対し、ユニークなインタフェースやインタラクションも研究している。

自然なユーザーインタフェース

次世代のインタフェースを創出するため、より直感的な、より自然なインタフェースを研究している。例え、タッチ操作よりのインタラクションや、実際の物体を掴んで操作ができるタンジブルユーザーインタフェースなど、物理世界のやり方と同じな操作方法を情報世界にもたらすと、斬新なアプリケーションやシステムを創出する可能性もある。スペシャルニーズ(ゲームや教育支援など)に応じたインタラクティブなアプリケーションも研究している。

研究業績(2012年度)

国際会議等

Mi, H., Ishii, K., Ma, L., Laokulrat, N., Inami, M., Igarashi, T.: "Pebbles: An Interactive Configuration Tool for Indoor Robot Navigation", UIST 2012, 2012. 【査読有】

Mi, H., Kawaguchi, Y.: "JECCO: A Creature-Like Tentacle Robot", ACE 2012, pp.537-540, 2012. 【査読有】

受賞

東京大学河口研究室: Innovative Technologies「宇宙海月」:触手ロボット, 経済産業省, 2012年.

石川 雄章・特任教授

研究テーマ(主たるもの)

新技術の社会への実装(イノベーション・モデル)

ITをはじめとする新しい技術を社会に実装する際には、多くの場合、技術というよりはむしろ、多様なステークホルダーとの調整や既存の社会システムの見直し等が課題となる。こうした課題に対応しつつイノベーションを実現するためには、ステークホルダーの把握、共通目標の設定、コアメンバーの任命とチームの結成、権利と責任の適正な分担、検討プロセス及び場の設計、といった幅広い領域にわたる戦略的な取り組みが必要となる。21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」では、ユビキタス技術の現場への適用をテーマに、政府、自治体などの取り組みを通じて、実証的にこのテーマにアプローチしている。

ITガバナンス(公的セクターにおける枠組みとCIOの役割)

ITガバナンスとは「企業が競争優位構築を目的に、IT戦略の策定・実行をコントロールし、あるべき方向へ導く組織能力」(「企業のITガバナンス向上に向けて」(通商産業省 1999)とされているが、公的セクターにおいてもIT戦略の策定・実行をコントロールすることは重要な課題である。特に、公的セクターは民間セクターとは異なる評価基準、行動制約があり、また社会的な制度設計という特別な機能を有する。こうしたことを前提に、COBITなどの標準的なITガバナンスのフレームワークを参考に、自らの県でのCIOの経験などを踏まえて、公的セクターにおけるITガバナンスの枠組みとCIOの役割について研究している。

社会的合意形成

新しい技術・制度の社会への導入など、社会的に大きな影響をあたえる行為を行う際には、事前に関係者の合意を得たうえで進めることが望ましく、こうした活動を怠った場合には、最悪の場合、社会的な反発を招く恐れもある。その一方で、こうした活動を行う組織は社会的に確立しておらず、また方法論も制度として十分ではない。このため、社会的合意形成を支援するNPO法人PI-Forum(ピー・アイ・フォーラム)の活動を通じて、実証的に社会的合意形成の意義、方法、知恵、事例などを研究している。

研究業績(2012年度)

雑誌論文

石川雄章:「インフラにおけるICTイノベーションの視点」, コンクリート工学会, 2012年。【一般向け】

講演・口頭発表

石川雄章:「ソーシャルキャピタルとICT利活用」, オープンイノベーションフォーラム, 2012。【招待講演】【一般向け】

石川雄章:「ICTによる地域活動支援と価値創造」, 九州 ITS 利活用研究会, 2012。【招待講演】【一般向け】

石川雄章:「IT融合による被災インフラの復旧とメンテナンスの支援」, モノづくりフェア 2012, 2012。【招待講演】【一般向け】

石川雄章:「社会インフラ・イノベーションとユビキタス技術」, TRON SHOW, 2012。【一般向け】

石川雄章:「ICTによる建設行政の質の向上」, 東京都, 2012。【招待講演】【一般向け】

石川雄章:「情報技術によるインフラ高度化」, 下水道におけるICT活用に関する検討会, 2012。【招待講演】【一般向け】

石川雄章:「ICT活用によるインフラの管理」, 電子自治体戦略会議, 2012。【招待講演】【一般向け】

瀧浪 佑紀・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

小津安二郎作品研究

日本を代表する映画監督・小津安二郎のサイレント作品を、ハリウッド映画の影響に焦点を絞りながら、戦間期日本の文化的状況を見据えて、ショットや編集などの次元で詳細に分析する。

サイレント映画美学

1920年代のハリウッド映画の話法や技術をその歴史の変遷のもとで捉え、さらにはヨーロッパで発展させられた前衛映画美学や批判理論(ジャン・エプスタイン、ルネ・クレール、セルゲイ・エイゼンシュタイン、ジークフリート・クラカウアーなど)を検証する。さらには、こうした映画理論の同時代日本における受容を精査する(岩崎昶など)。

デジタル・ヒューマニティーズと映像分析

とりわけアーカイビングと分析という観点から、デジタル技術を介した人文学の可能性を模索し、その知見を映画・映像分析へと応用する。

研究業績(2012年度)

雑誌論文

滝浪佑紀:「『動き』の美学——小津安二郎に対するエルンスト・ルビッチの影響」,『表象』, No.7号, pp.168—186頁, 2012年。【査読有】

諏訪敦彦、五十嵐太郎、滝浪佑紀、谷島貫太、難波阿丹、松山秀明、渡邊宏樹:「シンポジウム報告『映画、建築、記憶』——東日本大震災以降の表象可能性を考える——」,『東京大学情報学環紀要 情報学研究 調査研究編』, No.29号, pp.177—220頁, 2012年。

滝浪佑紀:「小津安二郎の小市民映画再考——同時代的批判」,『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』, No.83号, pp.31—50頁, 2012年。

クリストファー・ノーラン, ジェフリー・レスナー; 滝浪佑紀(翻訳):「伝統主義者」,『ユリイカ』, Vol. 44, No.No. 9, pp.72—85頁, 2012年。【一般向け】

その他論文

ジェフリー・ロックウェル; 滝浪佑紀, 永崎研宣(翻訳):「MLA2013」,『人文情報学月報』18号, 2012年。

エスペン・オレ; 滝浪佑紀, 永崎研宣(翻訳):「JADH2012報告」,『人文情報学月報』16号, 2012年。

滝浪佑紀:「表象文化論学会第7回大会報告」研究発表パネル 8:Imagination of Disaster 3」,『Repre』16号, 2012年。

Yuki Takinami: "Report of the Annual Conference of the Association for Studies of Culture and Representation "Panel 8: Imagination of Disaster 3"" , 『Repre』16号, 2012年。

滝浪佑紀:「研究ノート、『動き』と『明るさ』の美学——小津安二郎の初期サイレント作品の地平と可能性」, 『Repre』15号, 2012年.

滝浪佑紀:「書評「杉野健太郎編『映画とネイション』」, 『映像学』88号, 2012年.

田中 克直・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012年度)

別所 正博・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

ユビキタス・コンピューティング技術を活用した位置情報サービスに関する研究

ユビキタス・コンピューティング技術に基づく環境センシングインフラや測位インフラを活用し、都市環境の状況をきめ細かに反映することが可能な、位置情報サービス・フレームワークの構築を目指した研究を行っている。特に、多目的に拡張可能で、近年の多様なスマートフォン・プラットフォーム上でサービス提供が可能なソフトウェア・アーキテクチャの構築と、障害者等の交通弱者への移動支援という具体的な応用サービスの構築に関して、研究を進めている。

研究業績(2012年度)

雑誌論文

Lee Fueng Yap, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "User-Generated Content for Location-Based Services: A Review", the Annals of Information Systems Series special issue on Virtual Communities, Social Networks and Collaboration, Vol.15, No.9, 2012年. 【査読有】

門間 正拳・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012年度)

阿部 卓也・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

大井 奈美・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

大谷 智子・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

金ジョンヒョン, 橋田朋子, 大谷智子, 苗村健: 「筆記音のフィードバックが筆記作業に及ぼす影響の検討」, 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, Vol.17, No.3, pp.289-292, 2012 年. 【査読有】

国際会議等

Junghyun Kim, Tomoko Hashida, Tomoko Ohtani, and Takeshi Naemura: "3. Effects of Auditory Feedback for Augmenting the Act of Writing.", the 3rd Augmented Human International Conference, 2012. 【査読有】

Souichiro Kawamura, Tomoko Ohtani, and Kiyoharu Aizawa: "4. Navilog: A Museum Guide and Location Logging System Based on Image Recognition", 19th International Conference on Multimedia Modeling, 2012. 【査読有】

講演・口頭発表

大谷智子, 丸谷和史: 「18. 立体デザインの作成イメージと作成物の差分についての定量的評価方法の開発」, 日本図学会 2012 年度秋季大会, 2012.

橋田朋子, 野村浩気, 武井祥平, 大谷 智子, 畑中元秀, 笈康明, 飯田誠, 苗村健: 「PC を利用したグループワーク 講義における 対面的画面共有の実践」, 日本教育工学会第 28 回全国大会, 2012.

河村聡一郎, 大谷智子, 相澤清晴: 「ナビログ 画像認識を用いた博物館ガイドと行動記録」, 第 17 回日本バーチャルリアリティ学会大会, 2012.

河村聡一郎, 大谷智子, 相澤清晴: 「ナビログ 画像認識を用いた博物館ガイドと行動記録」, 画像の認識, 理解シンポジウム (MIRU), 2012.

新聞・報道

CHORDxxCODE: 「東大発、女性研究者集団「おしゃべり」がアイデアの源泉」, 日経パソコン, 2012.

木下 裕美子・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

Motomura-Kinoshita, Yumiko: "The Growth of Service Economy: The Impacts of Information Technology (IT) and Knowledge-Intensive Services (KIS) on Productivity in Japan's Service Sector", Journal of Socio-Informatics, Vol.5, No.1, pp.47-60, 2012 年. 【査読有】

金 伯柱・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

朝鮮半島の現状維持と多国間関係

研究業績(2012 年度)

分担著書

金伯柱: 「日朝国交正常化と日韓協力: 朝鮮半島の緊張緩和に向けて」, 姜尚中、木宮正史 編, 新幹社, 2013 年.

地引 泰人・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

鄭 鎬碩・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

高橋 薫・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

国際会議等

Yamauchi, Y., Fujimoto, T., Takahashi, K., Araki, J., Otsuji, Y., and Suzuki, H.: "Impact of Using Facebook as a Social Learning Platform to Connect High School Students with Working Adults. ", E-LEARN 2012 – World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare & Higher Education, Montréal, Québec , 2012. 【査読有】

講演・口頭発表

高橋薫・藤本徹・野口雅乃・鈴木 久・大辻雄介・山内祐平: 「Facebook グループを活用した高校生小論文作成コミュニティの実践」, 日本教育工学会第 28 回全国大会, 2012.

高橋薫・柴田アドリアーナ・佐藤朝美・山内祐平: 「在日ブラジル人児童を対象としたインフォーマルラーニング教材の開発 – デジタル日本語教材「にほんごまなぼう！」–」, International Conference on Japanese Language Education, 2012.

高橋薫・荒木淳子・藤本徹・野口雅乃・鈴木 久・大辻雄介・山内祐平: 「Facebook を活用したキャリア教育支援プロジェクトを通しての高校生のキャリア観の変容」, 日本教育心理学会 54 回総会, 2012.

受賞

Yuhei Yamauchi, Toru Fujimoto, Kaoru Takahashi, Junko Araki, Yusuke Otsuji, Hisashi Suzuki: Outstanding Paper Award「Impact of Using Facebook as a Social Learning Platform to Connect High School Students with Working Adults.」, E-LEARN 2012, 2012 年.

等々力 賢・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

防災・減災に資する地球変動予測の研究

主にスーパーコンピューターを用いて、地震動、津波の伝播挙動のシミュレーションを行い、地殻変動や津波の波高等、日本列島に及ぼす様々な影響を調べる。それらの結果を踏まえ、防災・減災に資する地球変動予測の可能性について調べている。

複雑挙動を示す非線形現象へのノイズの影響解析

複雑挙動を示す非線形現象、特にカオス力学系を対象として、これらの系に及ぼすノイズの影響を解析する。特に、系に内在し、システムの崩壊をもたらし可能性のあるダイナミカルノイズの影響を調べる。同期や確率的な共鳴現象と云った、ダイナミカルノイズに依る秩序現象の出現の可能性についても調べ、その応用を試みる。

研究業績(2012 年度)

講演・口頭発表

等々力賢, 前田拓人, 古村孝志, 森太志: 「京」コンピュータを用いた超大規模並列地震動シミュレーション, 日本地震学会 2012 年度秋季大会, 2012.

Masaru Todoriki, Takuto Maeda, Takashi Furumura, and Futoshi Mori: "Peta-scale parallel computation of seismic wave propagation using the K computer", ACES Workshop, 2012.

藤本 徹・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

ソーシャルメディアを利用した学習環境デザイン

ベネッセ先端教育技術学講座において、Facebook を利用した高校生向けのプロジェクト学習や基礎学習支援環境のデザインを行い、ソーシャルメディア環境における学びの場のあり方を研究している。また、ソーシャルメディアを利

用した思考図解化支援ツールの開発を通して、時間的・空間的制約に縛られずに知的生産活動を促進・共有できる思考活動支援環境の提供に取り組んでいる。

デジタルゲームの教育利用

教育をはじめとする社会の諸領域の問題解決のために開発、利用されるデジタルゲーム「シリアスゲーム」の研究動向を調査し、教育現場やインフォーマルな学習の場で利用されるゲームのあり方や効果的な利用方法の開発について研究している。

ゲームフルデザイン方法論の研究

ゲームデザインの手法を取り入れて教育・学習活動をデザインするアプローチを「ゲームフルデザイン」と捉え、デザイン方法論の体系化とモデルカリキュラムの開発に取り組んでいる。米国を中心に開発が進んでいる「クエスト型カリキュラム」や「マルチプレイヤークラスルーム」などの手法を研究し、国内の大学において「クエスト型授業」アプローチの開発と実践を進めている。

研究業績(2012 年度)

雑誌論文

藤本徹: 「サービスとしてのゲーム」, 情報の科学と技術, Vol.62, No.12, pp.502-507, 2012 年.

国際会議等

Yamauchi, Y., Fujimoto, T., Takahashi, K., Araki, J., Otuji, Y., and Suzuki, H.: "Impact of Using Facebook as a Social Learning Platform to Connect High School Students with Working Adults", E-Learning, 2012. 【査読有】

Fujimoto, T., Misono, T., Takahashi, K., Otuji, Y., Suzuki, H., and Yamauchi, Y.: "Designing a Game-based Social Application for Mathematics Education", Meaningful Play 2012, 2012. 【査読有】

講演・口頭発表

藤本徹: 「ゲーミフィケーションの姿をこうつかめ」, 日経 BP 社主催「最前線ゼロから学ぶゲーミフィケーション最新活用セミナー」, 2012. 【招待講演】【一般向け】

北村士朗, 藤本徹, 妹尾堅一郎: 「知財人財育成のための講師養成手法の開発と実践」, PC カンファレンス 2012, 2012.

藤本徹: 「海外の健康福祉分野におけるゲーム利用研究の動向」, 第 26 回 wellbeing 研究会, 2012. 【招待講演】【一般向け】

藤本徹, 山田 政寛: 「ゲームを利用した学習の効果とその評価方法に関する検討」, 日本教育工学会第 28 回全国大会(長崎大学), 2012.

山内祐平, 高橋薫, 藤本徹, 荒木淳子, 大辻雄介, 鈴木 久: 「Facebook を利用したキャリア学習環境」, 日本教育工学会第 28 回全国大会(長崎大学), 2012.

高橋 薫, 藤本 徹, 野口 雅乃, 鈴木 久, 大辻 雄介, 山内 祐平: 「Facebookグループを活用した高校生小論文作成コミュニティの実践」, 日本教育工学会第 28 回全国大会(長崎大学), 2012.

藤本徹: 「ゲーミフィケーションの捉え方」, TGS フォーラム 2012, 2012. 【招待講演】【一般向け】

高橋 薫, 荒木 淳子, 藤本徹, 野口雅乃, 鈴木 久, 大辻雄介, 山内祐平: 「Facebook を活用したキャリア教育支援プロジェクトを通しての高校生のキャリア観の変容」, 日本教育心理学会第 54 回総会, 2012.

藤本徹: 「ゲームプレイヤーのスキル習得に関する調査」, 日本デジタルゲーム学会 2013 年次大会(九州大学), 2013.

藤本徹: 「ゲームを授業へ取り入れる意味とその可能性」, 日本心理学会心理学教育研究会, 2013. 【招待講演】

藤本徹: 「教育サービスにおけるゲーミフィケーション」, 日本イーラーニングコンソシアム, 2013. 【招待講演】【一般向け】

受賞

藤本徹: 研究奨励賞「ゲームを利用した学習の効果とその評価方法に関する検討」, 日本教育工学会, 2012 年.

Yamauchi, Y., Fujimoto, T., Takahashi, K., Araki, J., Otuji, Y., and Suzuki, H.: Outstanding Paper Award「Impact of Using Facebook as a Social Learning Platform to Connect High School Students with Working Adults」, E-Learn, 2012 年.

水島 希・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

放射線リスクコミュニケーションに関する通時的・共時的文脈の解明

文部科学省・原子力イニシアティブ「原子力と地域住民のリスクコミュニケーションにおける人文・社会・医学による学際的研究」において「放射線リスクコミュニケーションに関する通時的・共時的文脈の解明」研究の一部を担当。科学技術社会論の視点から、放射線に対する一般市民の認識、態度、防護活動の地域差研究、および、福島県飯館村、福島県郡山市、東京都江東区をフィールドとした放射線リスクコミュニケーションの場の分析、放射線に関する科学知と一般市民との相互作用を研究。

原子力災害後の女性運動と科学技術——放射性物質をめぐる女性たちの経験・実践の記録と分析

震災後、関東地域の母親たちの懸念を発端に立ち上げられた放射性物質に関する実践活動の詳細を記録し、使用されている「科学」の内容、活動を行った女性たちの経験や科学技術に関する認識を調査する。また、過去の参照点として、チェルノブイリ原発事故を契機として放射性物質測定活動を行ってきた女性たちへの聞き取り調査を行い、現在の動きと共通する理念や質的差異を検討する。

科学技術と女性

女性と科学技術はどのような関わりを持っているのだろうか。フェミニズムや女性運動は科学知をどのように利用できるのだろうか。現在の日本で生じている、女性と科学技術との相互作用の場、たとえば医療技術(出生前診断、中絶技法)、放射線防護と母親運動、アンチエイジングと先端科学技術、電化製品と家事労働の省力化、などの具体例を取り上げ、現在の女性と科学技術の相互作用を論じる。

研究業績(2012年度)

分担著書

水島希:「よくわかるジェンダー・スタディーズ: 人文社会科学から自然科学まで(「進化生物学」の項)」、木村 涼子、熊安貴美江、伊田久美子 編、ミネルヴァ書房、2013年。

雑誌論文

Nozomi Mizushima and Osamu Sakura: "A Practical Approach to Identify Ethical and Social Problems during Research and Development: A Model for a National Research Project of Brain-Machine Interface", *East Asian Science, Technology and Society: An International Journal*, Vol.6, pp.1-11, 2012年。【査読有】

その他論文

水島希:「新しいエコフェミ!? 節電と家事労働の隠れたカンケイ」、『インパクション』vol.184, pp.180-181, 2012, 2012年。【一般向け】

講演・口頭発表

Nozomi Mizushima, Ikuko Kase, and Osamu Sakura: "“Misunderstood Misunderstanding” Again: A mothers’ movement against radiation contamination emerged after the Fukushima Nuclear Incident in Japan.", 12th International Public Communication of Science and Technology Conference, Firenze, Italy, 2012.

水島希:「放射性物質に対する『母親運動』を読み解く—首都圏における母親たちの動きと科学技術知の再編成」, 日本女性学会・大会シンポジウム, 2012。【招待講演】

水島希:「ワークショップ「原子力事故後を考える—計測運動、フェミニズム、テクノロジー」(松本麻里、水島希、矢部史郎、森元斎)」, カルチュラルタイフーン 2012(カルチュラル・スタディーズ学会大会), 2012。

受賞

水島希: 柿内賢信記念賞研究助成金・奨励賞「原子力災害後の女性運動と科学技術:放射性物質をめぐる女性たちの経験・実践の記録と分析」, 公益財団法人俱進会, 2012年。

村館 靖之・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

鳥取県の産業連関分析

鳥取県の資本マトリックスを計測し、各産業間の投資の連関、最適な産業シェアの分析、ターンパイクの分析などを行っている。

オンライン家計簿ココマネの経済分析

オンライン家計簿ココマネに関して、所得を中心とするユーザー属性をもとに、鳥取県を中心とした消費行動の分析を行っている。

研究業績(2012年度)

講演・口頭発表

村舘靖之 須藤修:「オンライン家計簿ココマネの経済分析-ユーザーの世帯所得とパレート分布の関係について-」, 情報処理学会 第75回全国大会, 2013.

森川 茶民・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

食事に関わるライフログ共有技術基盤

食事画像の処理、分類

User Interaction Techniques for Multimedia Retrieval

We investigate novel user interaction techniques for fast and efficient multimedia querying and retrieval. Three new types of visual queries are proposed for retrieving different types of multimedia. Iconic queries facilitate editorial image retrieval and social multimedia retrieval. Simple sketches on a map form spatial queries for retrieving location-based multimedia. Sketches on an interactive calendar form queries for temporal multimedia retrieval. We also propose an interactive querying strategy that combines multiple search dimensions, to facilitate easier refinement of searches. We design and develop prototype applications that use the proposed interaction techniques and querying strategy, for evaluation of the proposed techniques.

研究業績(2012年度)

山田 歩・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

和嶋 雄一郎・特任助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

梅田 雅之・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

尾崎 亮太・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

鎌田 貢・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

Simanchal Padhy・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

杜 平・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

傳法 春樹・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

新世代ネットワークを支えるネットワーク仮想化基盤技術の研究開発

統合管理型ネットワーク仮想化基盤技術の研究開発
進化可能なネットワーク仮想化アーキテクチャ
エッジ仮想化技術(Network Edge Technologies)

研究業績(2012 年度)

中路 武士・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

映画と技術

情報記号論やメディア論を背景に、映画の表象文化と視聴覚技術の関係を研究する。映像アーカイブを構築しながら、デジタル・テクノロジーを「批評の道具」として映像解析に活用し、アルケオロジーやグラマトロジーの観点から、メディア・テキストの読解、イメージの分析を批判的に行う。映画史・視覚文化史におけるテクノロジーの変遷(特にデジタル化)を追いながら、運動と時間のイメージ論を技術論的観点から再構築することを目指す。

研究業績(2012 年度)

二宮 利江・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

行動観察手法を用いた社会インフラ施設の維持管理業務の効率化

行動観察手法等の質的研究法を用いて維持管理業務の分析と業務成果の活用度向上に向けた仕組みを検討している。維持管理業務に関して参与観察や構造化したインタビューを行って関連するデータを収集し、これらのデータから維持管理業務の課題を抽出している。例えば前の業務の成果が次の業務へ十分に活用されていないことなどが分かる。抽出された課題に対処するために必要な技術を定義し、技術者育成プログラムなどを開発している。

暗黙知抽出のための方法論構築

深い知識と豊富な経験で高度な知的処理を行う専門家が持つ暗黙知を抽出し、可視化する方法論を検討している。データ収集には、インタビュー(エスノグラフィックインタビュー、問題中心インタビュー、半標準化インタビューなど)、観察(参与観察、エスノグラフィーなど)、資料(視覚データ(写真など)、テキストデータ(技術資料など))を用い、データ分析には、カテゴリー分析(グラウンデッド・セオリーなど)やシーケンス分析(会話分析など)を用いる。

インストラクショナルデザインを用いた教育プログラムの開発

インストラクショナルデザイン(ID)の手法を用いて、各種専門家の教育プログラムを開発している。ゴール設定、教育ダイアグラム作成、学習者およびコンテキスト分析、学習目標設定、評価基準開発、教授方略開発、教材開発、プログラムの試行と評価、改訂、総合的評価の手順で行う。

研究業績(2012 年度)

講演・口頭発表

二宮利江、石川雄章、市川暢之、星一郎、木村泰、竹谷昇二、尾形圭一、土岐雅巳:「行動観察手法を用いた点検業務の効率化」, 土木学会全国大会, 2012.

新聞・報道

東日本高速道路会社、東京大学大学院情報学環:「特集:さらば「評論家上司」人材育成虎の巻事例4何を教えるかをマニュアル化」, 日経コンストラクション, 2012.

古橋 亮慈・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

宮垣 英司・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

無線端末の仮想化

仮想ネットワーク構築時に端末上において仮想化端末を構築する。また、ユーザー端末自体を仮想ネットワークに参加させることを用意なものとするために、特に無線端末上に置ける仮想化・仮想ネットワークへの参加を容易にする技術の研究開発

研究業績(2012 年度)

森 太志・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

山本 周・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2012 年度)

IV. 外部資金獲得状況

平成 25（2013）年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人が関係する外部資金の状況を、情報学環研究協力系のデータをもとに、収録しています。

1. 科学研究費補助金交付一覧
2. 寄付講座
3. 受託研究受入一覧
4. 奨学寄附金受入
5. 共同研究受入一覧
6. その他外部資金

1. 科学研究費補助金交付一覧

研究種目	研究課題	研究代表者	直接経費	間接経費	計
研究成果公開促進費	文部省往復を基幹とした近代日本大学史データベース	吉見 俊哉	7,700,000	0	7,700,000
基盤研究 (A)	デジタル茶室の花鳥風月のな時空間創出技術	河口 洋一郎	7,500,000	2,250,000	9,750,000
基盤研究 (A)	視聴覚を利用した見まね学習によるアクティブな動的動作生成に関する研究	池内 克史	6,600,000	1,980,000	8,580,000
基盤研究 (A)	法令・人事から見た近世政策決定システムの研究	山本 博文	4,000,000	1,200,000	5,200,000
基盤研究 (A)	学習者の状況および知識構造に対応したシナリオ型防災教育教材の開発	山内 祐平	12,400,000	3,720,000	16,120,000
基盤研究 (B)	脳神経科学と社会の相互作用——事例研究と枠組み構築——	佐倉 統	2,800,000	840,000	3,640,000
基盤研究 (B)	「中国」と向き合って：日韓対中進出企業の現地化プロセスに関する比較社会学的研究	園田 茂人	1,500,000	450,000	1,950,000
基盤研究 (B)	立体顔情報表示による遠隔実在感の創出	暦本 純一	1,200,000	360,000	1,560,000
基盤研究 (B)	繁栄と自立のディレンマーポスト民主化台湾の国際政治経済学—	松田 康博	3,000,000	900,000	3,900,000
基盤研究 (B)	記録映画アーカイブに見る戦後日本イメージの形成と変容	丹羽 美之	3,100,000	930,000	4,030,000
基盤研究 (B)	西欧教会ならびにオペラ劇場の動学的音場解析とその比較	伊東 乾	3,700,000	1,110,000	4,810,000
基盤研究 (B)	路車異種センサー融合による衝突防止システムの統合的研究	上條 俊介	5,600,000	1,680,000	7,280,000
基盤研究 (B)	培養神経回路と人工神経回路の身体化によるホメオダイナミクスの研究	池上 高志	5,000,000	1,500,000	6,500,000
基盤研究 (B)	血管内治療のための in vivo 流体構造連成解析システムの開発	大島 まり	7,900,000	2,370,000	10,270,000
基盤研究 (B)	メディア産業構造変動から見る報道職とジャーナリズムの将来：東アジア国際比較研究	林 香里	4,200,000	1,260,000	5,460,000
基盤研究 (B)	【薬と健康食品】適正使用のためのリスクコミュニケーションの場とネットワーク創製	堀 里子	4,000,000	1,200,000	5,200,000
基盤研究 (C)	ユビキタス時代の情報法における基底的価値とエンフォースメントに関する比較制度研究	山口 いつ子	800,000	240,000	1,040,000
基盤研究 (C)	現代の生政治学的視座から見た生命倫理学の政治的・哲学的射程をめぐる研究	金森 修	700,000	210,000	910,000
基盤研究 (C)	【新冷戦】期東アジア国際関係の展開：韓国の北方外交と対日米外交に焦点を当てて	木宮 正史	500,000	150,000	650,000
基盤研究 (C)	家族内コミュニケーションを支援するデジタルストーリーテリングシステムの開発研究	佐藤 朝美	700,000	210,000	910,000

基盤研究 (C)	イスラーム法から見たムハンマド一族	森本 一夫	2,200,000	660,000	2,860,000
基盤研究 (C)	外国人患者と日本人医療者間の医療コミュニケーション適切化のための社会言語学的研究	辛 昭静	3,800,000	1,140,000	4,940,000
基盤研究 (C)	准環型メディア共同体の形成を支援する文化プログラムと技術基盤の統合的デザイン	水越 伸	4,200,000	1,260,000	5,460,000
基盤研究 (C)	医療コミュニケーションにおける共同移送	石崎 雅人	4,200,000	1,260,000	5,460,000
基盤研究 (C)	メカニカルな可動部を持たない注目点移動可能な広角中心窩センサーに関する研究	清水 創太	4,200,000	1,260,000	5,460,000
基盤研究 (C)	組織の境界を越えた情報セキュリティのガバナンスに関する研究	田中 秀幸	1,400,000	420,000	1,820,000
基盤研究 (C)	高密度地震観測データ解析と大規模数値計算に基づくフィリピン海プレートモデルの構築	古村 孝志	1,200,000	360,000	1,560,000
挑戦的萌芽研究	仮想現実システムを用いた認知的時間と空間の多様性に関する理論構築	池上 高志	3,000,000	900,000	3,900,000
挑戦的萌芽研究	イノベーションのための効果的なアイデア生成に関する行動経済学的分析	植田 一博	1,000,000	300,000	1,300,000
挑戦的萌芽研究	高齢者運動能力判断用ドライビングシミュレータの現実感の評価	中野 公彦	1,100,000	330,000	1,430,000
挑戦的萌芽研究	「国家的危機」における身体の柔軟性と差別に関する分析：3. 1 1後のナショナリズム	清水 晶子	2,000,000	600,000	2,600,000
挑戦的萌芽研究	色収差を利用した3次元共焦点マイクロPIVシステムの開発	大島 まり	3,100,000	930,000	4,030,000
挑戦的萌芽研究	後発医薬品評価支援のための市販後情報収集・解析システムの構築	堀 里子	3,000,000	900,000	3,900,000
挑戦的萌芽研究	エネルギー蓄積型力覚提示機構	広田 光一	3,000,000	900,000	3,900,000
若手研究 (B)	ソーシャルメディアを利用した思考図解化支援ツールの開発	藤本 徹	3,400,000	1,020,000	4,420,000
若手研究 (B)	教員のモニタリング能力向上を支援するセルフフレクション支援システムの開発と評価	荒 優	2,100,000	630,000	2,730,000
若手研究 (B)	超高齢社会を支える健康基盤としての都市ウォーカービリティの研究	山田 育穂	3,400,000	1,020,000	4,420,000
若手研究 (B)	言語コーパスを用いた「確率的規則からの逸脱予測システム」の構築	和嶋 雄一郎	2,100,000	630,000	2,730,000
若手研究 (B)	情報メディア技術の変化と音楽産業の変容に関する実証的研究	加藤 綾子	600,000	180,000	780,000
若手研究 (B)	地震動と津波の3次元動的統合シミュレーション	前田 拓人	1,000,000	300,000	1,300,000
若手研究 (B)	クラウドソーシングが育てる高速な実環境対話型概念獲得	湧田 雄基	1,700,000	510,000	2,210,000
新学術領域研究	インターネットの構造をもとにした脳のモデルの提案とコミュニケーションの実験	池上 高志	5,000,000	1,500,000	6,500,000
特別研究員奨励費	オンラインゲーム体験を用いた小学校における情報モラル教育の実践	鎌倉 哲史	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	リアルタイム・シミュレーションを用いたインタラクティブな設計インターフェース	梅谷 信行	600,000	0	600,000

特別研究員奨励費	P2Pネットワークにおける汎用性を高めたボイズニング方式の開発	吉田 雅裕	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	13-14世紀ペルシア語文化圏における時間計測の精密化について	諫早 庸一	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	移動する身体の管理—生体認証技術の需要と受容をめぐって—	高野 麻子	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	人と機械の統合的な状態監視に関する研究	中村 弘毅	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	日用品を利用した高齢者向けヘルスケアシステムの開発	辻田(齋藤) 眸	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	江戸幕府大目付の政治史的研究	山本 英貴	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	家庭用ロボットアプリケーションのプロトタイプング用ツールキットの開発	加藤 淳	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	高密度地震観測データ解析に基づく、伝播・増幅特性の定量化と強震動予測の応用	竹本 帝人	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	ブレイン・マシン・インターフェイスへの市民認識反映コミュニケーションモデルの構築	磯部 太一	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	科学知・科学技術の生産過程に社会的マイノリティが参加するための方法の検討	渡部 麻衣子	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	6次元ラベルに基づく個人フォトコレクションの分析と可視化	呉 志鵬	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	複数台手持ちカメラを用いた3次元コンテンツ生成に関する研究	池畑 諭	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	15・16世紀オスマン朝の歴史叙述に見られる「興隆」と「没落」の解釈と評価	山下 真吾	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	「植民地朝鮮」の映像と歴史の記憶—ポストアーカイブの構築—	丁 智恵	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	テレビ・アーカイブを活用したテレビ番組研究—日米安保事例として	松山 秀明	700,000	0	700,000
特別研究員奨励費	自由視点映像による体験拡張コンテンツ創成に関する研究	樋口 啓太	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	ロボットのモデリングを用いた、認識における社会的相互作用の役割	池上 高志	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	自律ロボットを用いたカオスの遍歴現象の研究	池上 高志	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	ネットワークパフォーマンスに基づくP2Pトラヒック制御の研究開発	中尾 彰宏	1,200,000	0	1,200,000
特別研究員奨励費	日韓の市民社会ネットワーク構築を通じた地域共同体の可能性の模索	木宮 正史	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	楽曲データを自由に編集するためのインターフェース	五十嵐 健夫	400,000	0	400,000
特別研究員奨励費	「帝国」日本と戦後におけるラジオ放送及び主体のせい	吉見 俊哉	600,000	0	600,000
特別研究員奨励費	物理化学システムにおける自律運動と複雑さの起源の理解を目指して	池上 高志	200,000	0	200,000
合計	67件		157,000,000	39,570,000	196,570,000

IV. 外部資金獲得状況

2. 寄付講座

寄附講座名称	寄附者	担当教員等	寄附金額計	備 考
ベネッセ先端教育技術学	(株)ベネッセホールディングス	山内裕平(兼務)	90,000,000	(設置期間 H19.4.1～H25.3.31)
合計	1 件		90,000,000	

3. 受託研究受入一覧

研究課題名	委託者名	研究代表者氏名	研究期間			24 度受入額			
						直接経費	間接経費	一般管理費等	計
差分法に基づくポストベタスケールアプリケーション開発環境	(独) 科学技術振興機構	古村 孝志	H24.4.1	～	H25.3.31	8,000,000	2,400,000	0	10,404,000
食、健康に関わるライフログ取得とコミュニティ創成	(独) 科学技術振興機構	相澤 清晴	H24.4.1	～	H25.3.31	12,500,000	3,750,000	0	16,250,000
甘檜丘地区における歴史的体験施設整備に関する研究開発	近畿地方整備局 国営飛鳥歴史公園事務所	池内 克史	H24.4.1	～	H25.2.28	21,818,182	0	2,181,818	24,000,000
連動性を考慮した強震動・津波予測及び地震・津波被害予測研究	文部科学省	古村 孝志	H24.4.6	～	H25.3.31	54,922,038	0	1,227,962	56,150,000
キャッシュ指向ネットワークアーキテクチャ (CONA:Cache-Oriented Network-Architecture) の研究開発	総務省	中尾 彰宏	H24.4.1	～	H25.3.31	13,030,000	0	3,909,000	16,939,000
市民の交通行動変容を促進する持続可能な生活交通情報 フィードバックシステムの研究開発	総務省	池内 克史	H24.4.1	～	H25.3.31	10,800,000	0	3,240,000	14,040,000
3DVideoのモデリング、符号化に関する研究	ルネサスエレクトロニクス(株)	相澤 清晴	H24.4.1	～	H25.3.31	1,500,000	450,000	0	1,950,000
エネルギーITS 推進事業／協調走行 (自動運転) に向けた研究開発	(独) 新エネルギー・産業技術総合開発機構	池内 克史	H24.4.1	～	H25.3.31	9,565,217	0	1,434,783	1,100,000
新世代ネットワークを支えるネットワーク仮想化基盤技術の研究開発 課題ア「総合管理型ネットワーク仮想化基盤技術の研究開発」	(独) 情報通信研究機構	中尾 彰宏	H24.4.1	～	H25.3.31	100,000,000	0	10,000,000	110,000,000

新世代ネットワークを支えるネットワーク仮想化基盤技術の研究開発 課題イ「サービス合成可能なネットワークプラットフォームの研究開発」	(独) 情報通信研究機構	中尾 彰宏	H24.4.1	~	H25.3.31	13,636,364	0	1,363,636	15,000,000
トッパーセンサー技術の有用性、市場性、活用についての検討	日本システムサイエンス株式会社	山本 隆一	H24.7.2	~	H24.9.30	2,100,000	525,000	0	2,625,000
マルチコアネットワークプロセッサ上の仮想化技術の調査検討	アラクサラネットワークス株式会社	中尾 彰宏	H24.7.1	~	H25.3.1	400,000	120,000	0	520,000
メディア文献の収集・分析	株式会社ベネッセコーポレーション	山内 祐平	H24.9.1	~	H25.1.31	500,000	150,000	0	650,000
道路維持管理業務の効率化に関する業務	国土交通省関東地方整備局	石川 雄章	H24.10.19	~	H25.3.25	5,360,769	0	1,599,231	6,960,000
地震の予測精度の高度化に関する研究	(独) 海洋研究開発機構	古村 孝志	H24.4.1	~	H25.3.31	24,180,841	0	2,418,084	26,598,925
超巨大データベース時代に向けた最高速データベースエンジンの開発と当該エンジンを核とする戦略的サービスの実証・評価	大学共同利用機関法人情報・システム研究機構	須藤 修	H24.4.1	~	H25.3.31	16,500,000	0	660,000	17,160,000
合計			16 件			294,813,411	7,395,000	28,034,514	330,249,925

4. 奨学寄附金受入

34 件、合計 45,640,437 円の奨学寄附金を受け入れた。

5. 共同研究受入一覧

研究課題名	相手方	研究代表者	研究期間			24年度受入額		
						直接経費	研究支援経費	計
情報技術によるインフラ高度化	株式会社日立製作所	坂村 健	H21.4.1	~	H26.3.31	19,230,000	5,770,000	25,000,000
情報技術によるインフラ高度化	東京地下鉄株式会社	坂村 健	H21.4.1	~	H26.3.31	19,230,000	5,770,000	25,000,000

情報技術によるインフラ高度化	首都高速道路株式会社	坂村 健	H21.4.1	～	H26.3.31	19,230,000	5,770,000	25,000,000
情報技術によるインフラ高度化	東日本旅客鉄道株式会社	坂村 健	H21.4.1	～	H26.3.31	19,230,000	5,770,000	25,000,000
インナーパワーの臨床的効果の検証	株式会社大塚製薬工場	佐倉 統	H22.5.1	～	H25.4.30	40,000,000	4,000,000	44,000,000
情報技術によるインフラ高度化	アビームコンサルティング株式会社	石川 雄章	H22.4.1	～	H26.3.31	18,182,000	1,818,000	20,000,000
複合現実感の研究開発	株式会社アスカラボ	池内 克史	H21.10.1	～	H26.9.30	500,000	50,000	550,000
物理特性モデル化手法に基づく文化財のデジタル化に関する研究	凸版印刷株式会社	池内 克史	H22.10.1	～	H25.9.30	8,182,000	818,000	9,000,000
高度情報社会における有益な橋梁管理・道路施設情報提供技術等の研究「情報通信技術を活用した都民参加型道路保全支援システムの研究」	(財)東京都道路整備保全公社	坂村 健	H22.11.1	～	H25.3.31	22,727,273	2,272,727	25,000,000
情報技術を活用した点検業務の改善	東日本高速道路(株)	坂村 健	H23.3.1	～	H26.3.31	13,636,000	1,364,000	15,000,000
無線システムを利用した交差点安全運転支援技術の開発	株式会社半導体理工学研究所	上條 俊介	H23.8.1	～	H24.7.31	1,818,000	182,000	2,000,000
移動型2次元レンジセンサを用いた形状計測技術の開発	株式会社IHI	池内 克史	H23.10.1	～	H25.3.31	0	0	0
	独立行政法人産業技術総合研究所		H23.10.1	～	H25.3.31	0	0	0
路面情報の推定に関する研究	IMV株式会社	中野 公彦	H23.11.1	～	H24.9.30	500,000	50,000	550,000
IT耐震計に関する研究	株式会社aLab	鷹野 澄	H23.9.1	～	H24.8.31	182,000	18,000	200,000
IT耐震計に関する研究	百年住宅株式会社	鷹野 澄	H23.9.1	～	H24.8.31	182,000	18,000	200,000
IT耐震計に関する研究	オムロン株式会社	鷹野 澄	H23.12.1	～	H24.11.30	182,000	18,000	200,000
IT耐震計に関する研究	IMV株式会社	鷹野 澄	H23.10.1	～	H25.9.30	364,000	36,000	400,000
情報技術を活用したスマートシティに係るビジネスモデルの研究	アビームコンサルティング株式会社	石川 雄章	H24.2.1	～	H26.1.31	4,545,000	455,000	5,000,000

高速道路合流部の交通円滑化におけるステアリンググリップとの相関に関する研究	財団法人阪神高速道路管理技術センター	中野 公彦	H24.1.4	～	H24.5.15	900,000	90,000	990,000
インフラ維持管理分野におけるICTの適用性の研究	株式会社パスコ	石川 雄章	H24.3.1	～	H25.3.31	2,272,000	228,000	2,500,000
無線LANのピーコンを用いたデータ伝送に関する検証	NTTコミュニケーションズ株式会社	中尾 彰宏	H24.3.19	～	H24.4.27	3,579,600	620,400	4,200,000
広告・ブランドと企業価値の実証研究	株式会社電通	田中 秀幸	H24.3.1	～	H25.2.28	472,500	52,500	525,000
企業価値形成におけるブランド評価の関わりについての研究	株式会社ビレイオン	田中 秀幸	H24.4.1	～	H25.3.31	472,500	52,500	525,000
未来洞察のためのワークショップならびに知識マイニングの手法開発	日本たばこ産業株式会社	植田 一博	H24.4.1	～	H25.3.31	3,150,000	1,350,000	4,500,000
	株式会社日立ソリューションズ		H24.4.1	～	H25.3.31	3,150,000	1,350,000	4,500,000
オープンプラットフォームを用いた人材育成に関する研究	株式会社ソーシャル・キャピタル・デザイン	石川 雄章	H24.4.1	～	H26.3.31	1,770,000	1,230,000	3,000,000
テイスティングにかかわる人の行動分析とそのマーケティングへの応用	アサヒビール株式会社	植田 一博	H24.4.2	～	H25.3.29	1,360,000	136,000	1,496,000
食事ログのための大規模ログ収集システム	foo.log 株式会社	相澤 清晴	H24.4.1	～	H25.3.31	0	0	0
こどもたちの共に創る力を育むワークショップデザインとファシリテーション	S C S K株式会社	山内 祐平	H24.4.1	～	H27.3.31	8,182,000	818,000	9,000,000
Big Data (メディア・コンテンツ)における知識創造	株式会社日立ソリューションズ	吉見 俊哉	H24.4.1	～	H25.3.31	2,700,000	300,000	3,000,000
首都直下型地震における高速道路の津波被害の影響把握に関する研究	中日本高速道路株式会社	古村 孝志	H24.5.1	～	H25.3.31	1,818,182	181,818	2,000,000
ブレイクの心理学的効果に関する研究	ジェイ・ウォルター・トンブソン・ジャパン合同会社	植田 一博	H24.6.1	～	H25.9.30	5,000,000	500,000	5,500,000
IT 耐震計に関する研究	テクニカルリンク株式会社	鷹野 澄	H24.5.1	～	H25.4.30	182,000	18,000	200,000
セキュア計算技術の次世代ネットワーク応用研究	株式会社 KDDI 研究所	中尾 彰宏	H24.6.1	～	H25.3.31	1,363,636	136,364	1,500,000

IV. 外部資金獲得状況

インフラ維持管理分野におけるICTの適用性の研究	株式会社パスコ	石川 雄章	H24.3.1	～	H25.3.31	3,637,000	363,000	4,000,000
高精細な人体メッシュモデルの生成における研究	株式会社 KDDI 研究所	相澤 清晴	H24.7.1	～	H25.3.31	909,090	90,910	1,000,000
近未来社会・生活研究	株式会社ヒューマンルネッサンス研究所	佐倉 統	H24.7.1	～	H25.3.31	3,630,000	370,000	4,000,000
青少年によるインターネット上の有害情報閲覧対策の調査研究	日本電信電話株式会社 NTT セキュアプラットフォームフォーム研究所	橋元 良明	H24.8.2	～	H25.2.28	546,000	54,000	600,000
情報技術によるインフラ高度化	日本電信電話株式会社	坂村 健	H24.4.1	～	H25.3.31	4,545,454	454,546	5,000,000
HDRのための画像処理に関する研究	オムロン株式会社	相澤 清晴	H24.6.1	～	H25.3.31	1,500,000	150,000	1,650,000
高校生の基礎学習やプロジェクト学習の支援を行うことが可能なソーシャルメディアシステムの研究	株式会社ベネッセコーポレーション	山内 祐平	H24.4.1	～	H25.3.31	9,091,000	909,000	10,000,000
共焦点マイクロPIVによる流体内部流動の可視化	富士ゼロックス株式会社	大島 まり	H24.7.1	～	H25.3.31	954,545	95,455	1,050,000
次世代デジタルアーカイブのための画像処理技術の研究	株式会社富士通研究所	池内 克史	H24.7.4	～	H25.3.31	910,000	90,000	1,000,000
東京大学との共同実施による鳥取県経済成長戦略の改訂作業等に関する実証研究	鳥取県庁	須藤 修	H24.8.9	～	H25.3.31	0	0	0
大画面ディスプレイの応用アプリケーションとUIに関する研究	シャープ株式会社	相澤 清晴	H24.12.7	～	H25.3.31	500,000	50,000	550,000
学内文化資源の横断的アーカイブに関する基盤研究	凸版印刷株式会社	吉見 俊哉	H24.8.1	～	H25.3.31	2,710,000	270,000	2,980,000
IT耐震計に関する研究	百年住宅株式会社	鷹野 澄	H24.9.1	～	H25.8.31	182,000	18,000	200,000
IT耐震計に関する研究	株式会社ソフトテックス	鷹野 澄	H24.9.1	～	H25.8.31	182,000	18,000	200,000
IT耐震計に関する研究	株式会社 aLab	鷹野 澄	H24.9.1	～	H25.8.31	182,000	18,000	200,000
DNPを用いた革新的なネットワークサービスの創成に関する共同研究	日本電信電話株式会社 NTT 未来ネット研究所	中尾 彰宏	H24.9.21	～	H25.2.28	2,700,000	270,000	2,970,000

学習を指向した保育傾向デザインに関する研究	株式会社ミサワホーム総合研究所	山内 祐平	H24.6.20	～	H25.3.31	810,000	81,000	891,000
	ミサワホーム株式会社		H24.6.20	～	H25.3.31	0	0	0
現場点検業務最適化基盤の研究開発	東日本高速道路株式会社 関東支社	石川 雄章	H24.12.1	～	H26.3.31	7,450,000	750,000	8,200,000
医療等分野における情報の取扱いのためのプライバシー保護技術適用検討	日本電信電話株式会社	山本 隆一	H24.12.1	～	H26.3.31	445,000	55,000	500,000
霊長類動物を用いた神経細胞学的な分析及び実験研究と理論研究の統合によるダイナミックネットワークの持つ、記憶構造や適応性等の現象論と理論の構築	独立行政法人理化学研究所	池上 高志	H24.11.5	～	H26.3.31	1,363,636	136,364	1,500,000
多頻度災害ならびに激甚災害における災害情報の効果的な達に関する研究	財団法人道路交通情報通信システムセンター	大原 美保	H25.1.7	～	H26.3.31	4,550,000	450,000	5,000,000
キャラクターUIの受容性に関する研究	株式会社 KDDI 研究所	相澤 清晴	H24.12.1	～	H25.3.31	910,000	90,000	1,000,000
HDR に最適なコンピュータビジョンカメラ設計に関する実験的研究	オムロン株式会社	相澤 清晴	H25.3.1	～	H26.3.31	1,500,000	150,000	1,650,000
車載カメラと歩車間通信による対歩行者衝突回避支援技術の研究	株式会社半導体理工学研究センター	上條 俊介	H25.3.1	～	H26.3.31	5,909,000	591,000	6,500,000
合計			60 件			279,409,416	46,767,584	326,177,000

6. その他外部資金

プログラム名	課題名	金額 (円)
研究者海外派遣基金助成金 (組織的な若手研究者等海外派遣プログラム)	「アジア・グローバルゼーション・スタディズ」若手研究者育成プログラム	13,900,000
震災復興・日本再生支援事業	放射性物質への不安を抱える住民へのメンタルヘルスケア	158,000
イノベーションシステム整備事業 大学発新産業創出拠点プロジェクト(プロジェクト支援型)	無線アクセスポイント仮想化による情報通信サービスの高度化	41,330,000
産業創造技術開発費補助金(IT融合による新産業創出のための研究開発事業)	IT融合による被災地のインフラ復旧支援とメンテナンス技術拠点の形成・展開	4,497,066

厚生労働科学研究費補助金 地域医療基盤開発推進研究事業	医療機関における患者個人への安全な情報提供に関する 研究	15,210,000
自転車等機械工業振興事業に関する補助事業	広角中心窩望遠鏡の開発補助事業	3,000,000
合計	6 件	78,095,066

東京大学 大学院情報学環・学際情報学府 年報

平成26年3月 発行

編集兼発行者 東京大学大学院情報学環・学際情報学府
〒113-0033
東京都文京区本郷7丁目3番1号

表紙CG画像提供 角田哲也